

壊れたココロを埋めるヒト

アライグマ318号

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

完全に深夜テンションで書いたバンドリの2次創作です！不足している知識が多いため、不快に思う方もいるかもしれませんが、何卒ご容赦下さい！！

これはココロが壊れた少年の物語。喜怒哀楽を見失い、仮面のように貼り付けた笑顔をするだけの少年を

笑顔に溢れ、世界の笑顔を願う少女が

救うまでの日常を示す物語。

Twitterやっているのでよろしければフォローお願いします
!↓@Zoemaru0318

主人公の挿絵を作りました！よろしければアドバイスをお願いします！

10月17日、タイトルを変更しました。

目次

オリキヤラ紹介 ※追加あり	1
番外編&リクエスト編	
番外編 松原花音誕生日会 前編	5
番外編 松原花音誕生日会 後編	16
番外編 弦巻こころ誕生日会	36
番外編 妨害せよ！創也×美咲のデート回!?!前編	47
番外編 妨害せよ！創也×美咲のデート回!?! 中編	55
番外編 妨害せよ！創也×美咲のデート回!?!後編	69
リクエスト編 ハーレム？水族館デート!!!	80
リクエスト編 男子1人のお泊まりは辛い	98
リクエスト編 とあるハロハピの1日	118
リクエスト編 動物園に行こう！	134
リクエスト編 デート見守り大作戦 前編	151
リクエスト編 デート見守り大作戦 後編	166
番外編 もしも創也が幼児化したら？その1	184
番外編 もしも創也が幼児化したら？その2	196
コラボ編 ヤンデレハザード	207
コラボ編 解毒剤を入手せよ！	217
コラボ編 グループと別れるのは死亡フラグ	224
コラボ編 相手を無駄に煽る奴は何か企んでる	233
コラボ編 最終到達目標地点	241
コラボ編 ヤンデレvsタク&創也	248
出会い	

プロローグ ココロの壊れた少年 | 261

第1話 弦巻ころと // 楽しいこと探し | 266

第2話 目を離せば... | 270

第3話 生徒会室に呼ばれた時の嫌な予感は凄い | 277

第4話 バイト開始、そして結成? | 284

第5話 第一回! バンド作戦会議... だと思おう。 | 292

第6話 氷川先輩地獄 | 299

第7話 会合! Roselia!! そして、にゃんこ | 321

野外教室編

第1話 班を決める時はだいたいジャンケン | 334

第2話 ナンパは慎重にやらないとフラグになる。 | 339

第3話 計画を立てる時は慎重に | 354

第4話 野外教室1日目 出発 | 362

第5話 野外教室1日目 ハイキング | 373

第6話 野外教室1日目 夕飯及び入浴 | 385

第7話 野外教室1日目 社長と罰 | 399

第8話 野外教室2日目 討伐 | 416

第9話 野外教室2日目 川遊び | 427

第10話 野外教室2日目 迷走肝試し | 442

第11話 野外教室2日目 星空の告白 | 454

第12話 野外教室2日目 ライブだ! ソイヤー! | 467

エピローグ 野外教室編 最後にやる事は意外とない | 483

逃亡せよ! ヤンデレ逃走劇! ~ ヤンデレ達との3日間 ~

プロローグ 崩れ始めた日常と資材 | 498

第1話 また生徒会室に呼ばれちゃった | 508

第2話	脱出せよ！創也 v s 紗夜！	521
第3話	ココロノコエ。創也&こころ	535
第4話	S・O・I・Y・A	548
第5話	解毒作戦開始、そして警告。	556
第6話	ヤンデレ吸血鬼？創也 v s 美咲	569
第7話	これで解決？	580
第8話	絶体絶命！創也 v s 花音	590
第9話	失敗	602
第10話	ヤンデレ騒動 閉幕	614
	エピソード 変わらない関係	629
	壮絶！文化祭奔走編！	
	プロローグ 文化祭に向けて。	637
第1話	弟子入り？	645
第2話	凶演!？ロミオとジュリエット+α	651
第3話	癒しの過剰摂取	658
第4話	文化祭スタート！	665
第5話	走れ！創那ちゃん!!!	671
第6話	究極人体破壊暗黒物質（アルティメットダークマター）	680
第7話	女の子同士のデートはもはや百合	692

オリキャラ紹介 ※追加あり

【名前】 卯月 創也

【性別】 男

【クラス】 1年C組

【身長】 167cm

【好きなもの】 子供が好きな食べ物（子供舌）

【嫌いなもの】 割と多い

【趣味】 家事 読書 ゲーム 音楽

【初登場】 プロローグ ココロの壊れた少年

【詳細】

主人公。基本的に無表情で、笑うことが本編でもかなり少ない。ただし、怒るときは怒るし、泣くときは泣く。

一人暮らしのため、他の人よりは生活技術が高い。料理の腕前なら、今井リサを上回る。ただし、お菓子類では未だに敵わない。

ゴキ〇リが大の苦手で、ガチ泣きしながら外に逃げるくらいには苦手。ちなみに、家に出没した時は、飼猫のここあが仕留める。

筋力が平均的な女子以下で、腕相撲は作中でも最弱クラス。ただし、それ以外の身体能力では弦巻こころレベルの高さを有しており、もちろん、3〜4階から飛び降りても真顔で移動を続ける事が可能。

特技が声帯模写で、基本誰の声でも出すことができる。

ホラーや心霊現象などの耐性が紙レベルで、怖い話を聞いたその日は眠れなくなるタイプ。怯えた時の状態はもはやただの乙女。

中学時代の部活の関係や、趣味の関係で、ギター、ベース、ドラム、キーボードは人並み以上にできる。歌唱力も割と高い。

【名前】 矢坂 勇人

【性別】 男

【クラス】 1年C組

【身長】 173cm

【好きなもの】女の子 カブトムシ

【嫌いなもの】チャラ男

【趣味】ナンパ 昆虫採集

【初登場】第1話 班を決める時はだいたいジャンケン

【詳細】

変態。この作品で変態といえば、まずこの人。1年生でありながら、1〜3年のすべての学年（+その他の学校）の変態達をまとめ上げる謎のカリスマ？があるやべー奴。

基本、学校に薄い本を持ってきては紗夜の説教を食らう毎日。

所属は弓道部で、普段のふざけた態度からは考えられないほど、実力は高い。

ナンパを何百と繰り返し、全てを失敗する。もはやナンパの失敗回数だけなら世界記録。その事もあってか、精神的耐久力メンタルと肉体的耐久力ディフェンスがカンスト状態。

【名前】生咲 幸

【性別】男

【クラス】1年A組

【身長】172cm

【好きなもの】焼き肉

【嫌いなもの】勇人の作る料理（暗黒物質）

【趣味】筋トレ

【初登場】第2話 凶演!?!ロミオとジュリエット+α

【詳細】

基本的に、穏やかで優しい人物なのだが、作中でも屈指の怪力の持ち主。体格的には創也達と同じで普通の男子高校生レベルの癖に、素手でコンクリ粉砕が可能。それと同時に、極度の機械音痴である意味、大和麻弥とは正反対の人物とも言える。

赤点ギリギリのおバカで、知らない内に勇人の策略に協力させられ

ていることが多い。

一人称が僕だが、そんなおとなしそうな口調とは裏腹に、身体能力が創也、勇人、こころ、はぐみに匹敵するほど高い。

ちなみに、創也、勇人、幸の3人でパンチングマシンによる測定を行うところなる。

創也↓20kg

勇人↓130kg

幸↓600kg over

【名前】 こころあ

【性別】 メス

【種族】 猫

【好きなもの】 キャットフード 刺身 機嫌がいい時の創也と友希那

【嫌いなもの】 風呂、ガチ泣きしてる時の創也

【趣味】 昼寝、友希那の家に遊びに行く事

【初登場】 第7話 会合！Roselia!!そして、にゃんこ

【詳細】

猫。創也の飼い猫。他の猫よりちよつと……いや、ちよつとどころかずば抜けて頭がいいと思われる猫。

創也の家の守護神的な存在。ゴキ〇リが家に出た時は真つ先に対峙する為、創也からは大体甘やかされる。

友希那の家と創也の家を自由に行き来する。創也が家にいない日は友希那の家に向かい、創也が家にいる日は遊んでいる。

実は創也と友希那限定で意思疎通が可能。

【オリジナルアイテム】

【名称】 SOIYA

【詳細】 見た目はリンゴジュース。中身は狂気と欲望を含んだヤンデ

レ変身アイテム。

このジュースを飲んだ女性は強制的にその近くにいる男性に対し、ヤンデレとなる。

【名称】 SOIYAウイルスバージョン

【詳細】 狂気と欲望を孕んだヤンデレ変身アイテム。

このウイルスに感染した女性は強制的に特定の男性に対し、ヤンデレとなる。上記の『SOIYA』のウイルス型である

番外編&リクエスト編
番外編 松原花音誕生日会 前編

「現在時刻5月10日深夜3時…もうこんな時間か…」

思っていたよりも眠くない。未だに意識がはつきりとした状態で、キッチンに置いてあるノートパソコンと向かい合う。

「えつと…『誕生日にオススメの料理 女子ウケ』で検索…あった。」

とてもカラフルなケーキが画面に色とりどりのケーキが表示される。

「そういえば先輩って、水族館でクラゲばかり見てるな…よし、『クラゲケーキ』つと…」

クラゲをモチーフとしたケーキの画像が大量に映し出される。

「…よし、これなら1人でも作れそうだ。っち、レシピがないな…しようがない、買いに行くか。」

それから数時間後…

「よし、行くか。」

俺は予算5万円を財布に入れてデパートに向けて足を進めた。

「えーと、これでフェルトに使う材料は全部かな…って、あれは創也？」

あたしは現在、デパートに来ていた。明日の5月11日は花音さんの誕生日だ。花音さんはたしかクラゲが好きって、前に言っていたからクラゲをモチーフにした羊毛フェルトを作るために、デパートに買い物に来ていたのだが…

「あの荷物…大変そうだなあ」

創也は左右両方に大きなビニール袋を下げ、さらに大型のダンボールを両手で2つも抱えていた。以前、創也と腕相撲をやった事で、創也の筋力は女子以下ということが知られている。にもかかわらずあの量の荷物は大変だ。

「しょうがない…手伝うとしますか…」

あたしは創也のもとに駆け寄った。

「すまん美咲、助かった。」

「女子並みの筋力しかないのにそんなに持つ抱えてたら不安にもなるよ…」

デパートで出会った美咲のおかげで、大幅に時間が短縮できそう
だ。

「それで、この大量の荷物は？」

「花音先輩の誕生日会用の料理だ。」

「え!?これ全部!」

「ああ…ところがね…」

〜数日前〜

『ソウヤ!5月11日は花音の誕生日よ!何か花音が笑顔になれることをしたいのだけど、何が良いかしら?』

『ん〜、友達誘って誕生日会とかかな?やったことのない俺がいうのもなんだが。』

『誕生日会!良いわね!……誕生日会って何をすれば良いのかしら?』

『んー、そうだな…ハツ!』

豪華客船でのハチャメチャな行動、ライブでの無茶振り…校庭で始めようとしたイルミネーションショー…

『こころは…どこか落ち着ける会場を用意してくれ…俺は…花音先輩が好きそうなものを作ってくるよ…』 ※死んだ瞳

『?…分かったわ!』

〜現在〜

「ということがあって…」

「うわぁ…」

「それで、女子ウケしそうなものを作るために、こうやって、色々なものを作ってるんだよ。」

「…何か手伝おうか？」

「ありがとう。恩に着る。」

美咲が仲間に加わった！

【5月10日午前11時30分】

「やっと着いた〜」

「おじやましまーす。」

とりあえず、美咲を自宅であるマンションに招き入れ、準備を開始する。ちなみに、ここに来るまでに一度美咲の家により、美咲も羊毛フェルトを作るのに必要な材料を家に取りに行ったようだ。…心なしか荷物が多いが。

「それで、あたしはまず何を手伝えばいいの？」

「ん〜、まずは下準備からだな。」

こうして、俺達は準備に取り掛かる。

「よし、まず作るものは…ってどうした？そんな意外そうな顔して」

「…なんか…エプロンが無駄に似合ってるんだけど…」

「…話を戻すぞ」

(あ、照れてる)

「えーと、まず作るのはケーキだな。土台となるケーキの生地だけど、まずはこつちから作る。装飾に関しては、午後から強力な助っ人が来るからそれまでに仕上げる。」

「はい。」

こうして、ケーキづくりが始まった。

「よし、生地はできたから後は焼くだけ。冷却時間も考えていいタイミングだ。」

「な、なんか本格的なんだけど…」

「初めて祝う誕生日なんだからな。生半可な出来は俺が許さない。」

台所には、明らかに通常のケーキよりも圧倒的に多いケーキの生地だ。

「ケーキの型にするための道具も溶鉄して直接製鉄所で作ったし、装飾用のクリームも作った。まあ、今はこんなところだろ。」

「創也…製鉄所とか聞こえたんだけど…アタシの気のせい？」

「気のせいだ。さてと、そろそろお昼だし、冷蔵庫にあるもの適当に食ってくれ。今からはぐみの家で肉買ってくる。」

そう言っつて創也は、出かけていった。

「大変だなあ…つて、ノートパソコンの電源入れっぱなしじゃん。……普段何見てるんだろ。」

ふとした好奇心から美咲は電源が入ったままの創也のPCの検索履歴を見る。

「……………え？嘘でしょ!？」

そこで美咲が見たものは…大量の料理やプレゼントに関する履歴だった。

「この時間って…………」

そう、この検索履歴を見る限り、パソコンを使っていない時間が、今日を除いて約5日一切ないのだ。そして、これが表す事実は…

「創也は6日間まともに寝てないってこと?」

美咲がその結論に至った瞬間、玄関から声が聞こえる。

「ただいまー」

「やばっ」

急いでパソコンを閉じる。

「お、おかえり！」

「おう…：なんか、誰かにおかえりって言われると新鮮な気持ちだな。さて、助っ人だが、もうすぐ来れるらしい。」

「う、うん…」

「どうした？」

「えつと…：創也って頑張りすぎてない？ちよつとは休んだら？」

「？…まあ、時間があつたらな。」

（あ、嘘だ。）

直感的にだが、美咲は創也が一切休むつもりがないことを悟った。

「ダメ、今すぐ休んで！」

「うお!?!引つ張るなって！」

（こうなったら意地でも休ませなきゃ、誕生日会どころじゃない！）

「おいっ!?!待て、なんで押し倒す必要がある！はくなくれくろく！」

「あんたじゃ力で私には勝てないでしょ！いいから休む！」

美咲が創也を押し倒すように強引に休憩させようとするが、創也は抵抗を続ける。まあ、普通に負けてるのだが。そのまま、寝技に持ち込まれる。

「っ!?おいつマジで離れる!今の状態が誰か見たらどうすんだ!」

「創也の休息のほうが大事!」

「頼むから体勢だけでもどうにかしてくれ!胸が当たってんだよ!!」

「くくっ／＼／」

「聞ってる!?当たってるから離れろって!!」

「いやだ!」

「いやだ!じゃねえよ!このタイミングでキャラ崩壊を起こしてんじゃねえ!!」

そんな時だった。

「おじやましまーした…」

「あ」

玄関から入ってきた助っ人……そう、創也のコンビニの先輩である今井リサが玄関を開け、現在の創也達の状態を見て即座に帰ったのだ。

「リサ先輩!!待って、俺は無実だ!」

「リサさん!!お願い、話だけでも聞いて!!」

「いや、アタシは創也が誰と付き合っても弄れるから良いと思うよ?でもさ、玄関でそういうのはちよつとなく☆」

「だから違う!!」

結局、創也は美咲と事情を説明されたりサに強制的に約2時間の休憩を入れられるのだった。

「よし、完全復活!」

「じゃ、創也も完全復活したし、お菓子作りを始めるよ☆」

「あの、今更なんですが、なんでリサさんが助っ人に?」

「まあ、パーティー用のおかずとかなら全然問題ないんだけど、お菓子作りってなると勝手が違ってくるから、その道のプロを呼んだ。」

「納得。」

リサ先輩が仲間に加わった!

「それで、アタシは何を作ればいいの?」

「そうっすね、とりあえずケーキの装飾に使えるクッキーなんですけど、このクツキーをクラゲの形にしたくて…」

「オツケー、まかせて!」

こうして、俺、美咲、リサ先輩の3人で調理に取り掛かった。

【5月10日午後6時30分】

「そろそろ遅くなってきたし、2人共何時頃帰るんですかい？」

「アタシはもう帰るよ。創也は教えた部分をすぐに身につけるから、もう教えられないことはないし。」

「了解です。わざわざすみません。」

「いやいや、気にしないでいいよ。まあ、貸し一つってことで☆」

小さくウインクをするリサ先輩。

「ははは…了解つす。」

そういうとリサ先輩は荷物をまとめ、帰っていった。

「それで、美咲は何時頃に帰るんだ？」

「…つてく…」

「ん？」

「泊まってくつて言ったの！」

「はあ!？」

「創也が無茶して倒れば、花音さんの誕生日会だって台無しになるんだよ!?!このまま創也は作業を続けるつもりなんですよ?だったら、あたしが泊まって、無理矢理にでも休ませる！」

「別に倒れたりなんかしないっての！」

「5徹もしてた人に言われたくないんですけど？」

「なっ、なんでそれ知ってるんだよ！」

「パソコンの検索履歴見てすぐにわかった。」

それから小一時間ほど創也と美咲は言い争い、結果は……

「だあ〜!!もう分かったよ、俺の負けだ！勝手に泊まってけ!!」

「よし」

小さくガッツポーズをする美咲。

「まさか、ここまで心配されるなんてな……」

結局、俺は11時位まで明日の準備をし、美咲に強制的（物理）に眠らされるのだった。

【松原花音誕生日会開始まで残り12時間30分】

番外編 松原花音誕生日会 後編

【5月11日午前5時30分】 松原花音誕生日会当日

「うう…いい匂い…」

強く、甘い匂いが美咲の鼻を刺激する。

「なんだ、もう起きたのか？」

台所から声が聞こえる。

「あれ…創也…いま何時？」

「5時30分。9割程度なら料理は作り終わったから、もう少しで作業は終わるぞ。」

「そっか……って、いつから作業してたの!？」

時間を見るとたしかに午前5時を指していた。昨日眠ったのが1時だったことから、また創也がロクに眠らなかったのが分かる。

「ん？たしか…3時ぐらい？」

「あんだけ休んでって言ったのに…」

「まあ、眠れなかったっていうのもあるけど、明日になれば肩の荷も下りるし、ちゃんと休むからさ。」

「うう…」

「ま、そう怒ってないで朝飯でも食ってろ。」

そう言って創也が机の上に置いたのはフレンチトーストだ。

「昨日のケーキ作りで余った卵、牛乳、はちみつを使って作った簡易版だ。」

「…美味しそう…」

「さ、9時までには全部終わらせたいし、それ食べたらず伝ってくれ。」

「わかった。」

こうして、創也と美咲は再び作業を開始するのだった。

【5月11日午前10時00分】

俺達は無事に誕生日会用の料理を作り終え、現在バイクに乗って移動していた。

「それにしても、創也が自分用のバイクを持っていたことに驚きを隠せないんだけど…」

「まあ、こつちに來たばっかの時、商店街の福引で偶然単発で当たったんだよ。まあ、前は免許なんて持ってなかったから、使い道がなくて困ってたけどね。」

「それでも格納庫付き2人乗り大型バイクって…」

「運ぶ分には楽だから良いだろ…つと、着いたぞ」

「……ねえ、会場はここで合ってるの？」

「そのはずだ…というか、俺に聞かないでくれ…自信がなくなるから…」

俺達は現地に到着した…はずなのだが…

「落ち着ける場所って俺言ったよな!?!これ絶対遊園地だよね!?!」

俺達の目の前には巨大な会場が広がっていた。遠目からでも分かる巨大なペンギンのオブジェクトが特徴的だ。

「ソウヤ！美咲！こつちよー!!」

会場の奥からこころの声が聞こえる。ひとまず、俺達は会場に足を踏み入れるのだった。

〔5月11日午前11時00分〕

「わあ！とつても素敵な料理ね！」

「こころん！こつちにはお肉料理もあるよ！」

「ああ…なんとも香ばしい香りだ…これなら子猫ちゃんたちも喜ぶだろうさ…ああ…凄い…」

「たしかに…とても良い香りです…これを創也さんひとりで作ったんですか？…あ、ポテト…」

「これは…お店で出したとしても文句のない味付けね…」

なんだか、人が大量に寄ってきたな…。あ、最後の髪の毛クリーム色の人って確か…女優の白鷺千聖たっけ？花音先輩芸能人に知り合いが居たのか…すげえな。

「えっと、一応、美咲と一緒に作りました。ケーキの方はリサ先輩を助っ人として、合同で作りました。」

「ん〜っ!!とつても素敵な誕生日会になりそうね!」

うん、みんな楽しそうだ。不安があるとすればあの巨大ペンギンのオブジェクトを見て、花音先輩が「ふええ」って、ならないかだな。まあ、ほぼ間違いなくなるんだろうけど…

「それじゃ、俺は1回目で運びきれなかった料理を持ってきますね。」

「わかったわ!!」

こうして、俺はもう一度料理を取りに、自宅へと向かうのだった。

「あの…奥沢さん…こころなしか創也さんの顔色が優れなかったようですが…?」

「え!?!…さあ?気のせいじゃないですか?」

「なら良いのですが……」

(まさか、氷川さんに感づかれているとは思わなかった…。創也…

やっぱり無茶し過ぎなんじゃ…。(

美咲の脳裏には、今朝の出来事が思い浮かぶ。

「今から約3時間前」

「創也、唐揚げ用の調味料って何処に…創也？」

調理中に美咲が調味料の場所を尋ねるが、創也からの返事がない。

「創也!?大丈夫!？」

美咲は台所から離れた位置で、創也が倒れている状態で発見した。

「うう…ふらついた…だけ…大丈夫だ…」

「やっぱり大丈夫じゃないじゃん！」

「…美咲…今俺がふらついたことを、誕生日会では誰にも言うなよ？たかが俺一人のせいで気分が損なわれたらひとたまりもない。わかったか？」

「…いいけど、しっかりと休んでよ？」

「…わかった。」

【現在】

(これ以上の無茶は本当に止めてよ…創也…)

「大変！」

突如、慌てたような声が響く。

「白鷺さん、どうかしたんですか？」

「花音が…会場の場所がわからないって…」

「ええ!?かのちゃん先輩、また道に迷っちゃったの!?!」

「そうみたい…」

(大丈夫かな…?)

この誕生日会が果たして成功するのか、不安を募らせる美咲であった。

【5月11日午前11時30分】 松原花音誕生日会まで、残り30分

「さてと、これでよし。」

自宅にて運び損ねた料理をバイクの格納庫に運び終え、俺はバイクに腰掛ける。

「流石に無茶しすぎたか…美咲に怒られる。」

昨日今日を除けば、まともに休んだ覚えがない。人の誕生日を祝った覚えも祝われた記憶もないのだ。ただ、純粹に親しくなった人に生まれた日を楽しんでもらいたい。それだけの想いで活動したのが仇になったようだ。

「ふい〜」

一息つく。身体は悲鳴を上げるが、苦痛ではない。

「よし、ラストスパート！」

自身をを鼓舞し、バイクに跨った瞬間だった。

ピロリン♪

「あ、このパターンあれだ。花音先輩が迷子になったパターンだ。」

なんとなくだが、直感的に悟ってしまう。

『招待された会場の場所がわからないよ〜（泣）』

うん。1人で行動させようとしたのが間違いだったな。俺は、改めてスマホに入力する。

『俺も今から会場に向かうところでしたので、よければお送りしますよ?』

『お願いします。』

『わかりました。そこを動かさないでくださいね。』

メッセージを確認し、スマホの電源を落とす。

「さてと、本日の主役の所に行きますか…」

バイクのエンジンを起動し、俺は花音先輩の元へと向かった。

【5月11日11時40分】松原花音誕生日会まで残り20分

「はあ…花音は大丈夫かしら…?」

「かのちゃん先輩…」

「奥沢さん、たしか創也さんが向かうのですよね?」

「はい…一応、メールが来ました。」

「え!？」

突然、千聖が大きな声を上げる。

「白鷺さん?どうかしたのですか?」

「花音から…知らない人たちに絡まれたって…」

「大変!直ぐに助けに行かなきゃいけないわ!」

「かのちゃん先輩の場所は何処なの!？」

「待って!!」

「み、みーくん?」

「今…創也から…連絡が来ました。」

そう言って、美咲が自分のスマホのトークを見せる。

『俺が助けに行く。みんなは、祝う準備をしてくれ。12時までには必ず戻る。』

「ここは…創也にまかせましょう」

【松原花音誕生日会開始まで残り15分】

「ふええ〜っ…会場の位置がわからないよ〜。」

創也くん私に私の位置を教えて、その場から動かないように務める。

「あはは〜、それでさ〜。」

「はあ!?!お前それはないだろ〜」

「あはは!!」

大学生くらいの人たちが大きく騒ぎながら、近くを歩いている。

「あれ?君1人なの?」

「え!?!…いえ…人を待っているの…」

集団の1人が私に声をかけてくる。

「つてか、この子結構可愛くね?」

「たしかに」

「ねえ、君さちよつと俺らと遊ばない？」

「いつ、いえ、友達がもうすぐ来るので…」

雲行きが怪しくなってきた。とても嫌な予感がする。

「ええ、いいじゃん。俺等といたほうが絶対楽しいよ？」

「いつ、いやっ！離してください！」

腕を掴まれる。しかし、次の瞬間

「何してるんですか？」

少年の声が不自然なほど周辺に響く。近くを見れば、同じバンドメンバーでもある、創也が近くまで来ていた。

「あ？何君？」

「あんたが今腕を掴んでる女性の友達ですが何か？」

双方、険悪な雰囲気の流れる。そして、状況が動き出す。

「きゃーっ!!!この人たち、痴漢です！助けてください!!!」

『え!?!』

当然、周囲に甲高い少女の音が響く。

「助けてくださいー！この変態！スケベー！エッチー！」

声を出しているのは創也自身だ。だが、その声はまったく違う、少女のものだ。だが、道端でこんなことを叫べば、どうなるかは明白である。

「まあ…なんて酷い…」

「おいっ！誰か警察呼べ！」

「ブーブー！」

さらに、現在時刻は昼に近い。人通りが多いこの場所では、周りの人間が彼等の敵になるのは時間の問題だ。

「あれ、逃げなくて良いんですか？」

「てめえ!!!」

1人がこちらに拳を振り上げる。だが、

「こらー！その君たち！何をしているー！」

どうやら、警察が到着したようだ。

「おいっ！逃げるぞー！」

「待ちなさい!!」

こうして、目の前の大学生くらいの集団は退散していった。

「さてと、大丈夫ですか、花音先輩？」

「ふ、ふええく。」

腰が抜けたのか、花音先輩は地面にへたり込む。

「先輩、すみませんが休んでる時間はないですよ。」

「え？」

「パーティーの開始時刻まで…あと10分です。」

【松原花音誕生日会開始まで残り10分】

「そ、創也くん…このバイクは？」

「偶然手に入れた一品です。」

俺達は現在、バイクに乗って大急ぎで会場に向かっている。

【残り 8分】

「思ったよりも会場が近いので、このまま直行します。」

「ふ、ふええくっ…」

「舌噛みますよっ！注意してください！」

「ふええく!?」

残り 5分

「美咲、ソウヤと花音はあとどれくらいでくるのかしら?」

「わからないけど…多分もうすぐ来ると思う。」

「花音…」

残り 3分

「っしやあ！到着!!!花音先輩！急いで会場に!!!」

交通違反ギリギリの速度で飛ばしたため、何とか間に合いそうだ。

「う、うん!!」

「ここから走って2分です！走って！」

「う、うん!!」

花音先輩が全力で会場の入り口まで走る。

残り 1分

「はあ…はあ…」

会場の入り口に到着する。

そして…

パァン!!!!

クラツカーの音が花音に向けて鳴る。

『花音（松原）先輩）さん!!!誕生日おめでとう!!!』

残り 0秒

【松原花音誕生日会 スタート】

「花音！誕生日おめでとう!!」

「ありがとう、こころちゃん。」

「誕生日プレゼントに、おっきなペンギンさんを用意したわ!!」

『え…』

会場に居る花音を祝っている人間の殆どが驚愕の声上げる。

((（あの巨大ペンギンのオブジェクトって…誕生日プレゼントだったの…？)(（))

「う、うん…ありがとう…使い終わったら何処かに寄付しようね？」

流石にこれを家で使うことは出来ないだろう。

「あたしからはこれ。」

そういつて、美咲が渡したのは

「わあ、クラゲだ〜」

クラゲの羊毛フェルトだった。

「かわいい〜」

〜満悦のようである。

そして、その後も様々な人が花音に誕生日プレゼントを渡し、食事へと移った。

「わあ〜、クラゲのケーキだ〜!」

「とっても美味しそうね!」

「改めて思ったけど、リサさんの技術も合わさってすつごく美味しくなってる…」

「これは…ああ、とても儂い…」

「これ、とってもおいしいよ!みんな!!」

「ええ…確かにとても美味しいです…これ、料金を取っても問題のない味なのでは?」

「たしかに…そこら辺のお店の味を軽く凌駕してるわ…」

そこら辺で打っているケーキよりも明らかに巨大なサイズのクラゲケーキ。さらにそれだけでなく、唐揚げ、フライドポテト、ビーフシチュー、スパゲッティ、ハンバーグ…etc
大量の料理がとてつもない勢いで減っていく。

「ま、これだけ好評なら、俺も頑張ったかいがあるかな。」

みんなが笑顔の中、創也は呟くのだった。

【5月11日午後7時00分】

あの後、会場に居るみんなで巨大ペンギンで遊んだり、創也が作った料理を堪能し、会場が遊園地？ということもあり、アトラクションで遊び、時間は過ぎていく。そして、夕方。

「ふええく、ここのどこお…？」

案の定、会場が広いためみんなとはぐれてしまった花音。

「あ、あれって…創也くん？」

迷ってから数分後、アトラクションの付近に設置されているベンチに座る創也を発見した。

「そ、創也くん…あれ、寝てるの…かな？」

近づくことでわかったが、創也は座ってはいるのだが目を閉じ、下を向いて眠っているのだった。

「そういえば、駐車場で創也くんと別れてから、会場で見ないと思っただら、こんな所に…」

顔を覗き込み、深く眠っていることが分かる。

「そういえば美咲ちゃんが…」

先ほど美咲に言われたことを思い出す。

～1時間前～

「今回の花音さんの誕生日、多分創也が一番張り切ってたんですよ。」

「どういうこと？」

「どうすれば花音さんが喜ぶか、みんなが笑顔になるのかって、ずっと考えてたんですよ。なんでも、初めて人を祝うから中途半端は俺が許さないって…」

「そうなんだ…後でお礼言わないと…」

「そうしてあげてください。多分創也も喜ぶですよ。」

～現在～

(ちよっとくらい…いいよね…?)

花音は創也の隣りに座り、創也の頭を自分の膝に近づける。所謂、
“膝枕”というやつである。

「すうー…すうー…」

規則正しい寝息を立てる。

「今日はありがと…創也くん…あれ？なんだか私も…眠くなって…」

創也の寝顔を見ている内にだんだんと花音に睡魔が襲ってくる。

「すうー…すうー…」

「えーと…どうすれば良いのかしら…？今すぐ起こすべきか…花音に春が来たと喜ぶべきか…」

「とつても、幸せそうな寝顔ね！」

「ちよつ、こころ、静かに！」

「これは…起こすべきなのでしょうか？」

「ああ…なんとも可憐で儂い…」

「かのちゃん先輩もそーくんも、ぐっすりだよ！」

千聖、こころ、美咲、紗夜、薫、はぐみ達の目の前には、創也を膝

枕した状態で眠っている花音と、落ち着いた様子で眠っている創也がいた。

「そっとしておきましようか。」

千聖の一言に全員が賛同し、少しの間、花音と創也は2人で過ごすのだった。

くおまけく

【5月12日】 学校 1年C組

「美咲さん!?!ちよつとその画像消してもらえませんかね!?!後生ですから!!」

「大丈夫だよ、誰にも公開したりしないからさ。ただ、あたしが創也を弄る用に持つてるだけだから。」

「この悪魔!・鬼!・暴君!」

創也が花音に膝枕されている画像が知らぬ内に美咲に撮られていたため、創也がその画像を消すべく、孤軍奮闘する姿があったとかなかったとか…

そして、同時刻

2年A組

「それで花音：彼とは何処まで進んだのかしら？」

「ふええ、そ、そんなんじゃないよっ！」

千聖に質問攻めされている花音の姿があつたとかなかつたとか：

番外編 弦巻こころ誕生日会

「あら？まだ誰もいないのかしら？私が一番乗りね！」

こころがcircleのラウンジに入ると、普段はついていないはずの電気が消されており、ラウンジの中の様子が分からないようになっていた。

「あ、あったわ！」

しばらく壁にあるスイッチを手探りで探すと手応えがあったのか、そのスイッチを勢いよく押した。

『『『『パンツ！』』』』』

「『『『ハッピーバースデー!!!お誕生日おめでとう！こころ(こころん) (こころちゃん)!!!』』』」

次の瞬間、明かりがついたかと思えば、5つのクラッカーの音が聞こえ、こころを祝う、仲間の声がラウンジに響く。

「ありがとう！みんな!!」

8月8日……そう、今日は弦巻こころの誕生日なのだ。

「いやあ、こころが無事に誕生日を迎えてくれて俺は嬉しい限りだよ。」

「あんたそれ完全に保護者目線の話になってるって…」

いやね、そんな事言ったてき、俺がみんなの知らないところで今までどんな事してきたと思う？

「だって紐無しバンジーしたり、深海まで潜ったり、地底人探しに地中まで潜ったり……」

他にも数えるとキリがない。あ、ちなみにこれ、全部ところが発端でやったことね。

「え、それはあたしでも知らないんだけどっ!？」

美咲が驚いた顔をする。

「まあ、だいたい俺とこのころの『楽しいこと探し』の時にこのころが始めた事だからな。」

思えば、このなかで一番付き合いが長いのは間違いなくこのころだ。ところが入学式のあの日に俺に声を掛けてくれなかったら、今この場所に俺はいないのだと思う。

「ソウヤー……こっちに来て一緒に食べましょう!」

そんな過去の思い出を振り返っていると、このころがいつもの笑顔で俺の元へ駆け寄ってきて、俺の手をぐいぐいと引っ張ってくる。

「ほら、行ってきなよ。」

「ああ、そうするよ」

「ソウヤー・速く行きませうー!」

「ちよっ、速いっつて！」

そういって、俺はこころになされるがままに、大量の食事（メイドイン俺）の置いてある机に向かうのだった。

「こころんっ！こつちにコロツケがあるよっ！」

「ああ、雑煮もあるじゃないか…ああ、儂い…」

「このケーキも生地がふわふわしてて美味しい…あ、この紅茶と凄く合ってる。」

「ん〜っ！どれも美味しいものばかりね！やっぱりソウヤは料理の天才よっ！」

創也お手製の料理を口にしたはぐみ、薫先輩、花音先輩、こころが口々に感想を言う。

「ま、頑張った甲斐があつたな。」

若干照れくさそうに頭をかく創也。

「ねえ、ちよっつと」

しばらくしたところで、美咲が創也が着ているパーカーの裾を引っ張り、創也を呼び込む。

「ん、どうした？」

「創也あんた、また徹夜して無茶したりしてないよね？」

「……………さあ？」

あからさまに目を逸らす創也。冷や汗もダラダラである。

「隠せてると思ってるの？」

「……………何が？」

「目の下、薄く隈くまができてるよっ。」

そういって、美咲は俺の顔を突っついてくる。

「寝てれば治る。」

「じゃ、今寝て？」

「はい？」

創也が美咲にどういうことか聞き出す前に、美咲が動き出す。

「ごころ！創也がごころに膝枕をして欲しいってさー！」

「What!?!？」

「あら、そんなのソウヤ？私は良いわよー！」

そう言うのと、ごころがこちらに寄ってくる。

「い、いや、俺は大丈夫だから…」

ジリジリと後ろに後退する創也

ガシツ！

「……………おい美咲、なんだその腕は…なんで俺の胴体をしっかりと固定してんだ？…ん？」

「徹夜明けの創也にはちゃんと休憩をとってもらわないとね。」

「おい、離せ。こんな大勢がいる場所で主役に膝枕メイされている脇役サブがいてたまるか…この後勇人や香澄達が来るんだぞ…さらに言えばリサ先輩とかまで来るんだぞ…」

「さあソウヤ、こっちにいらつしやい！」

ラウンジのソファに座ったところが、自身の膝をポンポンと叩く。

「おい、マジで離せ。こんなところ他の連中に見られでもしたらっ！」

「諦めて…こころろ！やっちゃって！」

ジタバタ暴れるが、創也と美咲では、力の差がありすぎた…

「やつほーこころんっ！誕生日おめでとう！プレゼントにキラキラドキドキするものを…っつて、何してるの？」

「うつつ創也！弦巻さんの誕生日ということで、俺達も祝いにきた
……は？」

「……、誕生日おめでとー！クッキー持って来た……ふっ！」

扉が空いたかと思えば、香澄や勇人、リサたちが入ってくるのだが
……

「おい、何だその反応は？喧嘩売ってるのかあ？そしてリサ先輩、ア
ンタなんで秒でスマホ構えて写真撮ってるんですか？え？スマホぶっ
壊しますよ？ん？」

……ここに現在進行系で膝枕をされている創也の様子が香澄達の視
界に映る。

「ぶふっ……膝枕されてる状態で喧嘩売ってる創也とか……威圧感が
ねえ……ぶふっ!!」

自分の腹をつねって笑いを堪えようとする勇人。

「あ、ごめん、今の写真ロゼリアのグループに送っちゃった☆」

テヘペロっ！といった擬音が聞こえそうな程のウインクを決め、下
をペロツつと出すリサ。

「……先輩、覚悟してくださいね？あと勇人、お前は後でぶっ潰
す。」

「げっ」

2人から、苦虫を噛み潰したような悲鳴が聞こえる。

「わあ……こころん、すつごく幸せそうだよ?」

香澄の指摘でラウンジに到着したメンバー達がいつせいに創也から視線を外し、こころを見る。

「ふふっ、ソウヤ♪」

これ異常ないほどの満面の笑みで膝下の創也の頭を撫で、愛おしそうに創也の名前を呼ぶこころがそこに居た。

「なんか……邪魔するのも悪いっすね……」

「そうだね……とりあえずこの場所はおとなしく、こころを祝っておこっか。」

突然、おとなしくし始める勇人とりサ。

「俺はまだ許しませんよ……」

グレた子供のような表情をする創也を無視して勇人達は荷物を置きにその場を一旦離れるのだった。

「さあ、プレゼント渡しの間だーっ!!」

『いえーい!!』

何故か、突然勇人が司会を始める形で誕生日プレゼントを渡すこと

となった。一応、勇人はマイクを使っているが、ここはライブハウスのラウンジ。当然、防音加工はされているので問題ない。

「はいっ！…ころん！」

「さあころろ、ぜひとも受け取ってくれ。」

「どうぞ、ころろちゃん。」

「はい、ころろ、大切にしてね。」

「ころんどうぞっ！」

「はいころろ、大切にするんだぞ☆」

「ほいつ！俺からはこれだっ！」

次々とプレゼントを渡す会場のメンバーたち。

「え、あと俺だけなの!？」

俺がプレゼントを用意しようとしている内に、まるで全員が打ち合わせたかのように次々とプレゼントを渡し、俺が最後に渡す番となっていた。

『さあ、本日の主役に最後にプレゼントを渡す勇者は誰だあ！』

勇人がマイクを使って、俺を見てニヤニヤしながら会場を盛り上げる。

「て、てめえ…謀ったな…」

勇人の胸ぐらを掴み、詰め寄る。

「大丈夫だって、お前が選んだプレゼントは確かに他より劣るかもしれないけど、プレゼントの意味で言えば、弦卷さんはこれ異常ないほど喜ぶと思うぞ?」

「いや…で、でも…ちよつとシヨボいっていか…気持ち伝わることか…」

『??』

俺と勇人のやり取りを見て、会場の何人かが首を傾げる。

「ああもうじれってえな!!とつとと行ってこいっ!!そして爆発しやがれこの野郎!!」

「うわあ!」

次の瞬間、俺は誕生日プレゼントを持ったまま、こころの前に蹴り飛ばされる。

「ソウヤ?どうしたの?」

「あ、えつと…」

持っていた誕生日プレゼントを後ろに隠す創也。

「えつと…こ、これっ!」

そう言つて、俺はこころに誕生日プレゼントを渡し、ラウンジから

恥ずかしさのあまり、逃げるようにラウンジから出ていった……………

「ごころちゃん、創也くんから何を渡されたの？」

「なにかしら？これは…………箱？」

そういつて、ごころは創也から渡された縦長の箱を開ける。

『わあ……！』

開けた瞬間、箱の中から鮮やかなまでの花の香りがラウンジに広がる。

「沢山お花が入ってるわ!!どれもとっても綺麗で素敵ね！」

箱の中には、綺麗な花と、簡単な小物が入っていた。

「わあ、たしかに綺麗だね。えつと、これは蓮華だよね？」

「ごうちにはサンタンカの花もありますよ…………しかもどれもすつごく綺麗……」

「えつと、これは確かペチュニアの花だっけ？」

花音、美咲、リサの3人が箱の中の花を見て、名前を言い当ててく。

「ん？蓮華とサンタンカ、ペチュニアの花？…………ああ、そういう事か……創也もなかなか面白いことをするじゃないか。」

その花の名前を聞いて、薫が何か納得した様子になる。

「薫なにか分かったの？」

その様子を見て、こころが薫に尋ねる。

「ああ、今3人が言った花にはある花言葉があるのさ。」

『花言葉？』

「それぞれの花言葉は………」

くおまけく

創也「はあ…恥ずかしかった…」

まりな「でも、こころちゃん喜んでいると思うよ？」

創也「まりなさんアンタ、何気にこの小説初登場ですけど、最初のセリフがそれで良いんですか？」

まりな「もうっ！気にしてること言わないでよ！」

受付の方で、恥ずかしさを紛らわせる為、まりなに八つ当たりをする創也であった。

現在、こころは花音のいる2年生の階へと走り、花音を探す。

「それよりも！大変な事が起こったのよ！」

「そ、そんなに……!？」

今まで見たことのない程のこころの慌てぶりに、動揺が移る花音。

「ソウヤと美咲が……今週の日曜日にデートに行っちゃうのよ!!!」

「ふえ?……ふええええええええええ!!?!?!?!」

↳数分前↳

(ソウヤは美咲のことが好きって事だったのかしら?)

あの後、創也は美咲に教室だと居心地が悪かったのか、学校の屋上に連行されていった。こころはその後が気になり、こつそり後を付けていた。

「はあ……そう言うことなら早く言ってよ……あたしは別にいつでも良かったんだし……」

屋上のドアに耳をつけ、会話を聞き取る。

「いや……何度も考えてやっぱり美咲しか考えられなかったからさ。ま、それじゃあ日曜日にな。」

「はいはい。日曜日のデートに備えてあたしは準備でもしてます

よー。」

(デート?.....デートって.....あのデート
!?!?!?!?!?)

く現在く

「創也くんと美咲ちゃんの2人がそんな事になってるなんて.....」

「ええそうよー!こうなったら、当日あたし達で2人がどんなデートをするのか、確かめにいくわよー!」

こころが花音に尾行宣言をした時だった。

「その話!聞かせてもらった!!!」

こころの後ろから声がかかる。

「あなたは.....えつと.....勇人!」

「今の無駄に長い間は置いておくとして.....話は聞かせてもらった!あの2人のデートを妨害するのなら、俺に.....いや、俺達に任せてもらおう!」

勇人の背後には数人ほどの男子が揃っている。

「では竹田君、あの2人のデート先の調査を頼む。田中君はあの2人を今日一日尾行して移動ルート及び予定を確認してくれ。俺は創也の知り合いにこのデートの事を密告してくる。他のメンバーも.....」

次々と配下と思われる男子達に指示を出す勇人。

「ふ、ふええ……なんだか凄いことになっちゃった……」

創也と美咲のデートにより、ここまで大事になる事を誰が予想していただろうか？

花音は2人のデートに不安を覚えるのだった。

その日、創也のバイト先のコンビニでは……

「いやー、まさか、創也が、女の子と、デートに、行くなんて、驚き、だなー」

そんなわざとらしい棒読みの勇人の声がコンビニ内に響く。

普通の客なら意味が分からず、聞き流すだろうが、その日はモカとリサの2人がバイトをしている。当然……

「ちよっとその話〜」

「アタシ達に詳しく教えて欲しいかな☆」

口元を2人に見えないように吊り上げる勇人。

「ええ、良いですよ。」

また、その数時間後。羽沢つぐみの家でもある、
羽沢コーヒー店
“では……”

「ふっふっふ。モカちゃんはとっても面白そうな情報を入手したのだ」

丁度、日曜日に暇を持て余してた“after grow”の幼馴染み達にモカが情報をリークしている姿を見たとか見てないとか……

そして、運命の日曜日……

「お待ちせ。待った？」

「いや、そんなに待ってないから大丈夫。」

待ち合わせの駅にて出会う創也と美咲。

「それじゃ、行こっか？」

「おうー！」

駅のホームへと入り、目的の場所へ向かうために創也と美咲は電車に乗るのだった。

『おおおのおおおれえええ』

その背後には、呪詛を撒き散らす男子の集団が確認された。そして、そのさらに後方には……

「いやあく、創也もすみに置けないね。教室で告白したって聞いて来てみれば、案外順調そうじゃん♪」

「あのそー君にも春が来たなんてーおよよー。モカちゃん達はとっても嬉しい限りだよー」

「モカが日曜日に全員分のチケットをもってきた時は何事かと思ったけど……これ、あたし達必要くない?」

「そういえば、〃人の恋路を邪魔するやつは馬に蹴られる〃って言うよな。」

「巴ちゃん……それ、今言うこと?」

「でも、せっかくモカがチケット用意してくれたんだし、楽しまなきや損だよみんな!」

「花音……これは一体どういうことかしら?」

「あ、あのね……こころちゃんがね……」

「そーくんがみーくんとデート!?!」

「ふふ……これはなんとも儂いデートになりそうだ。」

「ええそうよ！あたし達で2人のデートを……何すれば良いのかしら？」

「ところで、花園さんは何故ここに？」

「創也は『花園ランド』の住民だから…見届けようかと思ったので。」

そして、創也本人が見れば目を見開いて驚くくらいの少女たちが居た。

コンビニバイトから、『今井リサ』 『青葉モカ』

そしてその幼馴染の『美竹蘭』 『宇田川巴』 『羽沢つぐみ』 『上

原ひまり』

さらハロハピから『弦巻こころ』 『北沢はぐみ』 『瀬田薫』 『松

原花音』

そしてその友人の『白鷺千聖』

花咲川関連で『氷川紗夜』

花園ランド？関連から『花園たえ』

計13人の少女達が創也と美咲のデートを付け回しているのだ。

きつと本人がデート中にこの現場を見たのなら、白眼になった後、割とマジでキレルだろう。主に主犯の勇人にだが

「それじゃあみんな！追跡開始よ！」

『おー!!!』

ここからの宣言を合図に、創也と美咲のデート妨害作戦が始動した。

くおまけく

駅のホームにて

創也「!?」

美咲「どうしたの？」

創也「いや：なんだか視線を感じて：」

美咲「？」

創也と美咲の右斜め後方数十メートルでは：

「2人とも順調そうね！」ハイライトoff

花音「2人ともいったい何をする気なのかな？」ハイライトoff

じつは普通にハイライトが消え、普通に嫉妬をしていた2人でした。

番外編 妨害せよ！創也×美咲のデート回！？ 中編

【side 創也&美咲】

「お、電車が来たみたいだな…」

「早く乗ろ？」

「そうだな」

創也達の目の前には、日曜日ということもあってか、人口密度の高い電車が停まった。2人は大して気にする様子もなく、電車に乗り込んだ。

その後ろを密かに追跡する集団がいるとも知らずに……

【side 妨害班】

『あー、あー、こちら勇人…ターゲットの動きはどうだ？』

『こちら竹田…ターゲットが電車に乗り込みました。追跡を開始する。』

『こちら田中…ターゲットと同じ車両に乗り込みました…映像を送ります。』

勇人のスマホには、美咲と創也の2人が映っている。

「矢坂さん…あなた達がやっているのはストーカー行為ではないのですか？」

「氷川先輩…俺達は創也と奥沢さんのデートを妨が…サポートしたいだけですよ。」

「今、おもいつきり妨害と聞こえたのですが？」

「気のせいです」

「ごころん！そーくんたちは何処に行くのかな？」

「たしかに、私たちは何も聞いていないが…花音は2人が何処に行くのか聞いていないのかい？」

「わからないわ！でも、デートなのだから、きつととても楽しい場所に行くのよ！」ハイライトoff

「ごころちゃんの言う通りだよ…美咲ちゃん…羨ましいなあ」ハイライトoff

「か、花音…？目が怖いわよ？」

とてつもない人数である。

「ん？ターゲットに動きがあったみたいだな…」

勇人達の視線が一つのスマホに集中する。

【side 創也&美咲】

「結構混んでるな…座る場所もないし…目的地までこの体勢は…きつい…」

「たしかに凄い人混みだけど…わっ!?!」

突然電車が大きく揺れ、バランスを崩した美咲が創也の身体にゼロ距離まで密着してしまう。

「つと…大丈夫か?」

「う…うん…//」

顔を真っ赤にしながら創也に顔を見られないよう、帽子を深く被る。

「はあ…こっち来い…危ねえから…」

「そ、そうする…//」

そういうと、創也は美咲を自分のそばへ寄せる。身長差が10cm程の違いしか無いせいで、美咲が創也に抱きつくような形になっている。

この時、美咲の顔は真っ赤なのだが、創也の顔も僅かにだが赤くなっていた…

【side 妨害班】

「ねえ…あたし達は何を見せられてるの?」

「お熱いですなあ〜」

「二人共…顔の色が凄いいことになってるな…」

「あ…スマホの撮影してる人の手がすつごく揺れてる…」

「あつ…もうっ！ちゃんとしっかり映してよ！」

「おい、田中、画面がぶれてる。怒りを抑えろ」

『無理だよ…口の中が甘ったるくてしようがないんだ…』

「俺が目的地でコーヒー奢ってやる。それまで耐えろ」

『砂糖抜きブラックをお願いします。』

付き合いたてのカップルのようなやり取りに、after gro
wの面々はそれぞれコメントを出し、男子組は怒りを抑えていた。

それから約1時間後、創也と美咲（+妨害班）は目的地への最寄り
駅へと到着した。

【side 創也&美咲】

「やっと着いたな…」

「まあ、これで創也の目的が叶うんでしょ？そっちもあたしとの約束
守ってよ？」

「ああ…“2人で遊園地を楽しむ”…だろ？分かってるさ。」

俺達の目の前には、“○○○遊園地”という、この辺りで有名な遊園地だ。施設が充実していて、最近のものが多く取り入れられたりする。

「じゃいこっか」

そういうと、美咲は俺に向けて手を差し伸べてきた。

「はいはい、どこまでもお付き合いますよっ」と

俺はそれに答えるように美咲の手を取り、目的地へと進み出す。

【side妨害班】

「2人共楽しそうだね。私、オツちゃん連れてくればよかったかも」

「私からは、風紀を乱すようなことがなければ言うことはありませんが…今井さん…あなたスマホを構えてなにをしているんですか？」

「いやあー、2人のイチヤイチャを今度ロゼリアの練習の時に公開しようかなあーってね☆」

(すこし…どんな反応をするのか気になってしまいました…)

「あ、2人が進み始めたわよ！」

「千聖ちゃん！追いかけてよう！」

「花音!? そっちは出入り禁止の場所よ!?!」

妨害班もそれに合わせて〃〇〇〇遊園地〃に入っていくのだった。

【side創也&美咲】

「それじゃあ、まずはこれに乗ろ？」

「ジェットコースターか…俺乗った事ないんだよなあ…」

そんな事を言いながらも、俺と美咲はジェットコースターに乗るために、移動を開始する。

そして、順番が来た。

「……」

「さつきから黙ってるけど、大丈夫？」

「なんていうか…お化け屋敷とはまた違った恐怖がある……」

「あ、そういえばこの遊園地、お化け屋敷があるよね……後で一緒にいっしょ。」

「はあ!?ふざけんなよ!なんで俺がわざわざお化け屋敷なんかに」

『ジェットコースター、発射しまーす!』

ガタッ!

俺が美咲に抗議を始めようとした瞬間、ジェットコースターが突然動き出した。

「わっ、思ったよりも急に動き出すんだね……っつて創也？」

ジェットコースターが動き出した瞬間、創也が黙り、下を向いて蹲っている。

「っ……………！舌ひたはんだ…いひゃい…」

「ぶっ……………くふふ……………」

なんとも締まりのない形で創也と美咲はジェットコースターを乗り終え、次のアトラクションに向かうのだった。

「思ったよりもスリルがあって面白かったな。」

「まあ、でも11回も回転したのには驚きだけだね。」

「まあ…俺もアレは流石にやり過ぎだと思う…ま、そんなことよりも、次は何処に行くんだ？」

「お化け屋敷」

「絶対に嫌だ!!」

ちなみに、この後創也は美咲によって強制的にお化け屋敷に連行されるのだが、それはまた別の話。

(そういえば後ろの座席で勇人の叫び声が聞こえたような……気のせいかな?)

わずかな疑心を抱きながら、創也達は移動するのだった。

【side妨害班】

「こちら勇人、なんとかバレずに2人の背後を取ることに成功した。これより作戦を開始する。」

『こちら竹田、了解…リーダー、ご武運を』

耳に取り付けたインカムから情報をリークし、誰にも気づかれない事なく、創也と美咲の背後を取る人物が1人……そう、我らが変態代表、矢坂勇人である。

「矢坂さん……あの2人に一体何をするつもりなんですか？」

隣の席から紗夜が勇人に質問を飛ばす。ちなみに、紗夜は風紀委員として、勇人が暴走しないためのストッパーである。

「氷川先輩は創也の苦手なものって知ってますか？」

「いえ、知りません」

「創也って、意外と女みたいなのところがあるんですよ…」

『た、確かに創也くんの作る料理ってとっても美味しいし、この前趣味で作ったクラゲの人形くれたり、幼稚園とかでライブした時もちっちゃい子にすごく人気だよね……』

耳に付けたインカムから紗夜の耳にも情報が入る。

『確かに、ソウヤと幼稚園のライブに行くと、みんなソウヤのところに

寄っていくわね!」

『そーくん、とつても面倒見がいいからあかりも懐いてるよ!』

『創也には、どうも家庭的な才能があるみたいだからね。もはや彼は主夫とでも言えるレベルだ…なんとも儂い…』

『あれ?リサさーん、そんな地面に膝ついて何してるんですかー?』

『モカあ…創也にアタシの属性取られちゃったよ…』

「ハロハピの皆さん、創也の惚気のろけはいいので話し続けていいですか?」

『』『』『』『』

「俺もつい最近知ったんですけど、あいつの得意分野が女っぽい事もあつて苦手なものも大体女子と同じなんすよ。」

『まさか矢坂さん…あなた…』

「そう…女子の天敵もとい家庭に生きる者達の天敵、ゴキ〇リ…通称『G』です。」

「な、なんて恐ろしい…っ!」

ちなみに、勇人の狙い通り創也はGの事が大嫌いである。家にGが出た時は悲鳴を上げ、ガチギレする程ゴキブリが苦手だ。

一応、Gが出た時は飼い猫であるここあが忍び寄り、ペシっ!と一撃で外に捨ててくれるので、基本見かける事はない。

「これを創也の服の中に仕込み、2人のデートを創也の情けない悲鳴

で台無しにするのさ！ふはははははは
!!!!!!!」

これから起こるであろう出来事に勇人は高笑いをしている。

「さあ、準備は整った……」

勇人の手には大量のG（本物そっくりの玩具）が大量に入った瓶が握られている。これを一つでも創也の服の中に入れてればある意味彼の勝利だろう。

「さあ、創也…覚悟!!」

後ろの席から勇人が創也の服にGを入れようとしたその時だった。

『ジェットコースター、発射しまーす!』

ガタツ!

ジェットコースターが突然動き出し、勇人の手からGがこぼれ落ちた。

「あ!?!俺のゴキ丸8号が!?!」

「ゴキ〇りにどんな名前つけているんですか貴方は!?!」

「ちっ…こうなったら創也の去り際に仕込むしかないか……」

そんなことを口走りながらも、ジェットコースターは高く登り続ける。

（はあ…でも、創也さんも奥沢さんも順調そうね。後は矢坂さん達の

暴走を食い止めれば、2人のデートも無事終わりそうね。）

「ねえ、氷川先輩」

（それにしても、このジェットコースター、結構上まで登るのね…）

「ねえ、氷川先輩ってば」

（そういえば、前にここの遊園地の料理が凄く良いと今井さんが言っていたような…ポテトはあるのかしら？）

「紗夜先輩!!!」

「もう！人が考えているときくらい静かにしてくださいー！」

思考中に話しかけられ、地味にキレながら隣を向く紗夜

「この安全レバー……俺だけ解除されちゃってるんですけど……」

「……………」

勇人の安全を確保するために装着されていたはずの安全レバーはしつかりと上を向いていた。

そして、勇人にとっての悪夢が始まる。

ジェットコースターが降下を開始した。

『わあああああああ
!!!!!!』

「ぎやあああああああああああ
!?!?!?!?!」

一般の客の声に混じり、一名、命がけの悲鳴が聞こえる。

「え!?嘘だろ!?これ回るやつなの!?回るやつなのか!?ふざけないでくださいませぎます!?!」※勇人は混乱状態です。

地上まで近づき、速度が落ちると思いきや、速度がさらに上がり、上昇を開始する。

「いいいいいいあああああああ
!!!!!!」

「い、生きてますか矢坂さん!?!」

思ったよりも風圧が強く、目を瞑っていた紗夜が隣の勇人の生存を確認する。

「大丈夫な訳ねえでしょうが!?!危うく転落死するところで……え、ちよつと待つてこれまだ回るの!?!あと何回転するの!?!え、ホント待つてムリムギやあああああああ
!!!!!!」

その後、だいたい10回転くらいした。

そしてジェットコースターが終わる頃には……

「お……おのれ創也め……なんて卑劣な手を……おぶっ……」

勇人は完全にグロッキー状態となっていた。

「お、覚えている……ゴキ丸8号の仇……」

「いやどう考えてもあなたの自業自得では!?!」

紗夜のツツコミはもつともである。

【第1回・デート妨害作戦】失敗

後編へ続く

くおまけく

ある日の創也の家

創也「や、やめろっ……来るんじゃねえ!!!!!!」

創也はアサルトライフル（エアガン）を構え、1匹の獲物と対峙している。だが、圧倒的なまでの体格差があるにもかかわらず創也の顔から恐怖の色が消えることはない。

ガサガサ

創也「ひっ!?!」

黒光するその生物は、臆することなく創也に向かって進み始める。

創也「いやあああ!!!」

手に握られたアサルトライフル（エアガン）をその生き物に向けて乱射するが、一発も擦りもしない。

創也「くっ……ここまでか……」

創也の顔にあきらめの表情が浮かび上がったその時だった。

ここあ「にやん!!!」

近くの棚に潜んでいた飼い猫のここあが一撃で黒光するその生物を仕留めた!

ここあ「にやん!!」（訳……どうだ、まいったか!）

創也「ここあ!!!ありがとう!!!」

危機から脱し、ここあに抱きつく創也。まるで魔王の手から開放さ

れたお姫様のな表情をしている。

ここあ「にやあくく、にやあ！」（訳：ご褒美にご飯ほしいなく、美味しいやつ！）

創也「ほら、ご褒美のキャットフード（1缶3000円くらい）だぞく」

ここあ「みやあく」（訳：さつつすがご主人！話が分かる！）

創也「いやいや、そんなこと無いって。ま、次も頼むぞ！」

ここあ「にやあ！」（訳：まかせて！）

こうして、創也の家の平和は飼い猫であるここあによって守られているのだった。

番外編 妨害せよ！創也×美咲のデート回！？後編

（創也&美咲 side）

「うっ…ひっぐ……」

「ほら、もう大丈夫だって…だからそんなに泣かなくても……」

現在、創也は美咲の腕に抱きつく形で泣いている。

実はジェットコースターの他にも様々なアトラクションを満喫した後、この2人はマジでお化け屋敷に行ったのだ。

結果は見ての通り、目を潤ませ、必死に美咲の腕にしがみつく創也の完成だ。

「だって…こころみたいなのゾンビとか、薫先輩みたいな儂そうな吸血鬼とか、はぐみみたいなの狼男とか、他にもすっごくマイペースそうなパンの妖怪とか、いかにもその幼馴染みみたいなお化けとか、ほかにもウサギのお化けとかギャルっぽいお化けとかすっごく腹黒そうな金髪の悪魔とか出てくるんだもん……」

「おい、普通にバレてねえか!?というか何でここまでの確に当てていて分からねえんだ2人共!?!」

「おかしいわね、完璧にゾンビに変装したつもりなのだけけれど。」

「腹黒そうな金髪の悪魔って私の事よね?…ちよつと創也くんと汚破那死オハナシをしてくるわ。」

「ちよつ?!?白鷺さん落ち着いて！指をパキパキ鳴らしながら殺意を滾らせて2人の元に向かおうとしないてください!!!」

近くの草むらから何か聞こえるが、心が折れている創也とそれを慰めるのに夢中の美咲は気付かない。

「でも、元気だしなよ。そろそろ時間帶的にも空いてきたでしょ？創也の目的の場所」

怯える創也の頭を撫でながら、美咲がエスコートをする形で、2人はお化け屋敷の前から去っていった……

〈妨害班 side〉

「おい、俺はあの2人の仲を恐怖で破茶滅茶にろとは言ったが、なんであんなイチャイチャ空間の出来上がりになってんだよ……」

「いやあ、お化け屋敷に入るって言われた時はどうかと思ったけど、創也のあんな表情を見れたなら得したかな☆」

「さすが創也、的確に誰がどんな仮装してたかを当ててるね。」

勇人、リサ、たえの3人がそれぞれ感想を述べる。

「し、白鷺さんっ！落ち着いてっ！」

「私は落ち着いているわよ紗夜ちゃん？でもね、彼とはお互いの認識について話し合うべきだと思うのよ？」

なお、創也に地味に切れている千聖を背後から 羽交い締めをする形で押さえつける紗夜の構図も同時に出来上がっていた。

「とっころでとっころ、一つ聞いていいかな？」

「あら薫、なにかしら?」

「一緒にお化け屋敷に入ったはずの花音が見当たらないのだけれど、ここは何処にいるか知らないかい?」

『あ』

薫の一言で、その場が凍りつく。

「か、かのちゃん先輩がまた迷子になったーっ!」

これにより、花音の搜索班が急遽作られたのは言うまでもない。

〈side花音〉

「ふええ〜つ、みんなどこにいるの〜っ!」

一緒に来ていたメンバーと離れ離れになってしまった花音はお化け屋敷から何故か遠く離れたスイーツ店などが並ぶエリアに迷い込んでいた。

「うう…スマホも着替えの時に服に入れたままだし、どうしよう…」

ちなみに、今の花音は、雪女のコスプレ…もとい変装をしている。もともと、勇人発案のお化け屋敷で2人を驚かせようという作戦だったのだが、途中でグループと離れてしまい、出口を見つけたら違うエリアにつながっていて、もと来た道を戻ろうとする頃には、自分がどこにいるのかすら分からなくなっていた。

「はあ…どうしよう…」

メンバーと合流するには、この敷地内は余りにも広い。下手をすれば、このまま合流できない可能性だってある。

そんな事を考えていたときだった。

「ん？なあ美咲、もしかして花音先輩かな？」

「え、そんなわけ……本当だ。なんで白い着物着てるんだろ。」

ふと、背後から聞き覚えのある声が聞こえる。

「あ、創也くんに美咲ちゃん!？」

後ろを振り向くと予想通り、創也と美咲の2人が居た。

「よ、よかったあ……」

ぺたりと、雪女衣装のまま床に座り込んでしまう花音。

「あの…何があつたんですか？」

〈side 創也&美咲〉

「な、なるほど…千聖先輩達と遊びに来て迷子になったと…」

俺達は偶然発見した花音先輩から事情を聞いた。もちろん、勇人達妨害班のことも聞いた。

「はあ…どうする？チケツトの内容だと一応人数的な問題はなかったけど…」

「私はみんなが居てもいいと思うよ？」

「なら決まりだな。」

美咲と話し合い、この後どうするかを決める。

「そ、そういえば創也くんと美咲ちゃんはなんでここの遊園地に来たの？」

花音先輩が突然質問を飛ばしてくる。

「あー、そのことですか…実は…」

俺はここに来た目的を話しはじめる……

↳side妨害班もとい捜索班↳

「あ」

「白鷺さん？どうしたんですか？」

「花音は今、創也君と美咲ちゃんと一緒にいるみたいね…」

『え!?!』

千聖の発言を聞き、周りから大きな声上がる。

『おたくの花音先輩預かったんで返してほしかったらとりあえずコーラ持つてスイーツ店が多くならんでるエリアまで来てください。あ、コーラ代は会ったら返します。』って、LONEが送られてきて…」

「書いてる内容が完全に誘拐犯のセリフですよね!？」

「強盗犯にしてはすげえ律儀だけだな。」

紗夜とつぐみが思わずツツコミを入れ、勇人がボソツツとツツコミを入れる。

「あともう一つ送られてきたわ……」

「こ、今度は何が送られてきたの…?」

リサが若干笑いをこらえながら千聖に聞く。創世のLONEがツボに入ったらしい。

『あ、それと先輩たちがこっちに来た理由も花音先輩から聞いたんでその場にいるであろう勇人にこう伝えてください……今すぐ謝罪に来て地面に物理的に沈むのと、逃げて逃げて逃げまくって三途の川に沈むの、どっちが良い?』って書いてあるわ…」

「……………」

千聖からの連絡を聞いて、顔から尋常じゃない量の汗が出始める勇人。

「い、急げーっつっ?!?!」

妨害に来た罰なのか、勇人は全力で創也のもとに向かって走り去っていった…

「これは…どうすればいいのかな…」

「とりあえずー。追いかけますー?」

「そうだね…」

モカの発言により、結果的に妨害版の全員が創也と美咲の元に向かうのだった…

↳side 創也&美咲↳

「ソウヤーっ!」

千聖先輩にLONEを送ってから数分後、適当に美咲と花音先輩と話していると、どこからかこのころの達の声が聞こえる。

え、勇人はどうしたのかって?沈めた(意味深)。

「おーい、こころーっ!ここちこっちー!」

俺の方も声を出してこころたちを呼ぶ。

「って、話には聞いてたけどすげえ人数だな…」

こころ、薫先輩、はぐみ、リサ先輩、紗夜先輩、千聖先輩、おたえ、アフターグロウと……うん、普通に多い……

「ところで、ソウヤはどうして美咲とデートをしていたの？」

全員が集まったところで、さつそくこころが本題に入った。こころのストレートな質問内容にその場にいる全員が耳を澄ませる。

「あはは……デートっていうか……なんというか……」

創也が苦笑いを浮かべながら口を濁す。

『?』

その反応に思わず全員が首を傾げる。

「別に恥ずかしがるようなことじゃないでしょ……ま、実は……」

美咲が若干呆れたように説明を始める。

↳数日前↳

「なっ!?!こ、これはっ!?!」

創也がネットで記事を漁っていると、とある記事が目に入る。

『あの、超一流パティシエのスイーツバイキング、○○○遊園地にて開催。』

創世の頭からは、その記事の内容が頭から離れない。どれだけ煩惱を消そうとしても、離れないのだ。

「ん？『抽選で1名様に超豪華！食べ放題のチケツト3組5名をプレゼント！』…なん…だと…っ？」

もちろん、限界を軽く超えた速度で抽選に応募したのは言うまでもない。

そして結果は……

「あ、当たった!？」

見事当選した。

次の日。

(どうしよう……当たったのは良いけど、あの類の店ってだいたい客の99%が女性なんだよなあ……あ、でも誰かに付き合ってもらおう形で来てもらえれば、遠慮なく食えるじゃん……)

そんな事を考えながら学校に登校する。

(あ、でも誰を連れてくかなんだよなあ……こころとはぐみは……店に辿り着く前にどっかに行っちゃいそうだし…薫先輩は付いてきても人混みが発生してスイーツどころじゃなくなるし……花音先輩は迷子になったら怖いし……美咲しかないよなあ…頼んでみるか……)

そんな結論に至る頃には教室に到着する。

(でも万が一断られたらどうすれば良いんだっ!?)

いざ頼み込むとなると、断られた場合が怖すぎるため、創也は思わず主語を抜かして美咲に要件を伝える。

「頼む美咲!! (スイーツを食べに行くのに) 付き合ってくれ!!!」

〜現在〜

「これが真相。」

「たしかに、ここにあるスイーツはどれも美味しそうなものばかりだわ!」

美咲が今回の件の真相をみんなに伝え、俺は抽選で当たった食べ放題のチケットを使って全員で大きな可愛らしい装飾がされたレストランに入っていた。

こころの言うとおり、和菓子から洋菓子…とにかく様々な種類のスイーツが机に並べられていた。

「それじゃ、みんなで食べましょう!」

こころの声を合図に、その場にいたみんながスイーツを食べ始める。

「ところで、創也、今日のデートは楽しかった?」

美咲がケーキを食べている俺に突然聞いてくる。

「…まあ、楽しかったと思うぞ。さすがに最後のお化け屋敷は滅べと

しか思えないけど…」

「あはは…ま、あたしは創也が満足してくれて良かったよ。」

「なんだそりや…つて、速く食べないと無くなっちゃうぞ。ひまりとかすげえ勢いで食ってるし。」

「あ、ほんとうだ。」

そう言つて、美咲はスイーツが並べられた机に向かっていく。

「ま、また機会があったらスイーツを食べたいもんだな。」

そんな事をつぶやきながら、俺は小皿の上に乗ったケーキを食べるのだった。

ちなみに、千聖先輩を俺が腹黒悪魔呼ばわりした事については、花音先輩を発見した事でチャラになった。

リクエスト編 ハーレム?水族館デート!!!

これは…とある休日に起きた1人の少年の災難である。

く弦巻家く

とある日の金曜日

『今日の誕生日占い!!今日最も運の良い誕生日の人は…:8月8日生
まれの貴方!好きな異性と、急接近できるかも!』

「好きな異性?」

朝食を食べていたところは、偶然テレビで誕生日占いのコーナーを
見ていた。

「好きな異性…:」

そう言われてこころの脳裏に浮かび上がるのはあの男だろう。

「つゝゝ／＼／＼」

彼の顔が頭に思い浮かんだ瞬間、顔に熱が灯るのが分かる。

「あら?これは何かしら?」

顔が熱くなるが、余り気にしないように朝食に向き合っていると、いつの
間に用意されたのか、机の上に水族館のチケットが用意されていた。

『カップル用♡水族館入場券 2人1組』?」

先程まで机の上になかったはずのチケット：間違いなく黒服の作業だろう。

「そうだわ！創也を誘って一緒に水族館に言ったら創也も笑顔になるわよねっ！」

こうして、こころの次の日の予定が決まった。

く松原家く

同時刻。

「ええ!?!千聖ちゃん、行けなくなっちゃったの!?!」

『ええ…ごめんなさいね、花音。突然、隣の県でのロケが入ってしまったて…とてもじゃないけど、一緒に水族館に行けそうにないわ…』

「ふ、ふええ〜っ…」

現在、千聖からの電話で花音はショックを受けていた。

以前、両親から偶然手に入れた2人1組のチケットで自分と千聖で〇〇〇水族館に行く予定だったのだが、千聖に予定が入ってしまい、水族館に行けなくなってしまったのだ。

『あ！それなら彼を誘えばいいじゃない。』

「か、彼？」

『卯月創也君よ。彼ならきつと花音に付き合ってくれるし、ちょっと災難体質なところはあるけれど、安心して彼を任せられるわ♪』

「そ、創也くんをつ?! ふええ〜っ! む、無理だよお〜っ!」

『はあ…そんな事を言っていると、創也君を誰かに取られちゃうかも知れないわよ?』

「うっ」

『それに、私なんかより好きな男の子と一緒にいったほうが花音も楽しいでしょ? それじゃあ、私の方もロケを頑張るから、頑張って彼のハートを射止めてきなさい。』

「ち、千聖ちゃん! ……あ、切れちゃった…」

恥ずかしくなり、言い返そうとするが、いつの間にか電話を切られていた。

「明日着てく服……選ばなきゃ…」

こうして、花音の次の日の予定が決まった。

〜奥沢家〜

「これって……何?」

「何って…水族館のチケットよ。」

朝の朝食の時間、美咲は母親から何故か水族館のチケットを渡されていた。

「それで明日の土曜日に彼氏と一緒にデートに行ってください。」

「はあ!?!ちよつと待って、あたし彼氏とかいないよっ!?!」

「えー?でもお姉ちゃんいっつも、バンドの話か同じバンドの男の人の話しかしないじゃん。」

「えっ!?!」

「そういう事よ。明日はその彼氏と一緒にデートに行つてきなさい。私たちは3人で一緒にご飯を食べに行つてくるから。」

「だから違うって言ってるじゃん!」

こうして?美咲の次の日の予定が決まった。

〳〵その後の花咲川学園〳〵

「ふあゝ」

「寝不足なの?」

「ああ…昨日燐子先輩とあこからNFOに誘われて…ちよつと夢中になりすぎて…」

「あはは、大変だね。」

昼休み、俺は幸と一緒に屋上でご飯を食べていた。

「明日から土曜日かあ…そー君なにか予定決まった?」

「いや、特に決まってるはないな…」

「あ、それならさ、この前イヴちゃんがパスパレのライブのチケットくれたから一緒にー」

幸が一緒に行こうと言いかけたその瞬間だった。

バンツ!!!

「っ!?!」

突然、屋上の扉が勢い良く音を建てて開かれた。

「ソウヤ!!」「創也くん!!」「創也!!」

「な、なにっ!?!」

慌てた様子の3人に不安を覚える創也。

「明日、あたし（私）と2人で水族館に………え?」

「おお……すごいシンクロ率……」

「えっと………何で水族館?」

こうして、創也の次の日の予定が決まった。

〜次の日〜

「えっと……時間は……合ってるよな?」

俺は腕時計で現在時刻を確認し、水族館の入り口付近で待機している。

「ソウヤー!!!」

「ぐえっ!?!」

聞き覚えのある声が聞こえたかと思えば、突然背後から衝撃を感じ、押し倒される。

「いつてえ……少し落ち着いてくれ……こころ……」

「だって、今日はあたし達4人でデートなのよっ!とつてもワクワクするじゃない!!」

「こころちやくん、速すぎるよおっ!」

「はぁ…はぁ…速い…」

まだまだ元気なこころに続くように花音先輩と美咲がやってきた。

「それじゃあ、速く行きましょう!」

「待て待て、少し2人を休ませてやれ。」

こうして、デートが始まった。

ちなみに、どうしてこうなったかと言うと……

〜1日前〜

「す、水族館？」

「そうよ！このカップルチケット？があるから私と一緒に行きましよう！」

「待って！私も千聖ちゃんと一緒に行くはずだった水族館の親友料金のチケットがあるから、私と一緒に行こうよ！」

「あ、アタシは家族料金のチケットがあるから一緒に行こうよ！」

なぜか、俺はこの3人から水族館に行こうと誘われているのだが……なぜ3人同時に？

「ソウヤ！あたしと一緒に行きましょう！」

「創也くん！私と一緒に行こうよ！」

「創也！あたしと行こう!!」

「いやいやちよつと待て！3人共圧！圧が強い!!」

なぜか、3人から圧力を感じる……というか、マジで何でこうなった？

「ねえ、それって別に3人だけの必要なくない？」

「」「え？」「」

幸の発言に場が静かになる。

「3人でいけば解決でしょ？チケットは1枚無駄になっちゃうけど……それでも、結局4人で水族館にはいけるでしょ？」

「た、確かに……」

「え、そっち方面で纏まるもんなの？」

「あ、そういえば明後日、イヴちゃんが暇だって言ってたから、良かったら1枚ちよーだいっ♪」

「えっと……じゃあこれ……」

そう言うと、花音先輩は持っていた親友割引きのチケットを幸に渡す。

「これで決まりね！3人で水族館に行くわよーっ！」

「おーっ!!!」

「……………はい？」

こうして、俺の意見をよそに決定するのだった……

　水族館内のレストラン

「はあ〜っ、生き返る〜っ！」

「おっさんみたいになってるぞ〜美咲。」

「うるさいやい。」

俺達は、水族館内のレストランで食事をしている。だって、こころが先に2人を連れ回して体力を消耗させちゃったし、先に休憩がてら食事をする事になったのだ。

「このケーキ、すつごく可愛いね。クラゲが乗ってる♪」

「このカレーもとっても美味しいわ！ソウヤも一口食べてみて！」

そういうと、こころは俺に向けてカレーを差し出してくる。

「あーん♪」

「あーん」

「「っ!」」

「おお…確かに美味しいな…」

何故かこころが凄くご機嫌な様子で「あーん」と言つてカレーを差し出してくるから俺も釣られてカレーを食べる。てかこのカレーめちゃくちゃ美味しい!!

「そ、創也君!!」

「は、はいっ!?!」

いきなり花音先輩に名前を呼ばれ、ビックリしてしまう。

「あ、あーん／＼／＼」

「はい?」

なぜか、今度は花音先輩が顔を真っ赤にしながらケーキを目の前に差し出してくる。

「あ、あーん?」

俺はそのまま花音先輩のケーキをパクリと食べる。あ、このケーキも生地がフワフワして美味しい……

「ふ、ふええ〜／＼／＼」

これは……恥ずかしくてんのか?それとも喜んでんのか?

「創也!!!」

「はいっ!」

今度は美咲が呼んでくる。と言うかいきなり大きな声で名前を呼ぶなよ……びつくりするからさあ……

「あ、あー、あー／＼／＼!!」

「あ、あー?」

な、何をしてるんだ?美咲は?

「やっぱり無理っ!」

「ぐえっ!」

次の瞬間、美咲がハンバーグの乗ったスプーンを突き出してくるが

何を血迷ったのか、俺の喉にブチ込むようにスプーンを突き出してきたため、俺は椅子ごと後ろに倒れてしまう。

「そ、ソウヤーっ!？」

「な、なぜ…?」

く海月エリアく

「わあ、すつごく綺麗だね!」

「すげえ…どれだけいるんだ…?」

時は経ち、俺達は海月が遊覧できる場所に来ていた………はずなんだけど…

「結局、迷子になっちゃいましたね…」

「い、ごめん…」

そう、案の定やらかしたのだ。花音先輩の方向音痴。

「きやつ!？」

海月のエリアは人気があるのか、人が多い。そのため、花音先輩が人にぶつかり、倒れそうになってしまう。

「おっと…また迷子になったら危ないですし手、掴まってください。」

とりあえず、本当に花音先輩と離れると危ないので手を差し出す。いやね?また方向音痴が作動して行方不明になったら本当に怖いし

…

「え、えっと…あ、ありがとう／＼／」

花音先輩は、小さく礼を述べると俺の手を掴んだ。俺の手を掴んだその手は、ドラムをやっている手にしては、随分と柔らかく、そして暖かく感じた。

〜イルカの公演〜

「ソウヤ!!」一緒に見に行きましょう!」

「うわっ!?!ちよつと、速いって!!」

あの後、海月エリアをひと通り満喫した俺と花音先輩は、無事にこころと美咲と合流したかと思えば、次の瞬間、こころに手を引かれてイルカの公演まで連れて行かれたのだ。

「こころが良いわね!」

そう言つて、こころが俺を運んできたのは最前列の席だ。

「なあこころ…こころって1番水の被害がヤバい場所なんじゃ…」

『さあ!只今からイルカのショーが始まります!!』

そう言つてる間に、イルカのショーが始まった。

そして案の定…

『さあ、続いてはイルカ達のジャンプです!最前列の皆さんは水にご注意を〜♪』

「やっぱりそうじゃねえか!!」

「わ〜っ♪」

次の瞬間、俺達の目の前でイルカが跳ね、大量の水が俺達にぶつかった。

「うわあ…：ビチャビチャになっちゃったよ…：大丈夫か、ここ…：ろ…：っ!?!…：なっ／／／」

「?どうしたの?ソウヤ?顔が赤いわよ?」

「い、いや…：その…：ふ、服が…」

「服?」

ここで、現在の俺達の服装について説明しよう!!

俺は何時も通り、適当な薄手のシャツにジーパン、半袖のパーカーを着込んでいる。一応、パーカーは暑いから鞆にしまつてあるのだが…：今日のこのころの服装はワンピースなのだ。

つまり、思いつきり透けているのだ。それはもう、こころが現在着ていると思われる下着も盛大に。

「た、頼むからこれ着てくれ…」

俺は、鞆の中にしまつてあつたパーカーをこころに渡した。

「なんだかこのパーカーいい匂いがするわ!ありがとう、ソウヤ!!」

「だあああ!!!抱きつくなあああ!!!」

そして時は流れ……

「あ、花音さん！2人がいました！」

「え!?!あ、本当だ！」

イルカのショーを終え、俺達は無事……じゃねえな。まあ、合流をした。

「なんで……2人共濡れてるの？」

「イルカ、水、ヤバイ、最前列」

「うん……だいたい分かった。」

「あ、こころちゃんの今着てるパーカーって、創也くんだよね？」

「ええ、そうよ！なんだかポカポカして、とってもいい匂いがするの！」

「……………そうか……」

照れくさそうに頭を掻く創也。

「すみません、花音先輩、ちよつとこころの服をお願いしていいですか？」

「うん！こころちゃん、行こ？」

「わかったわ！」

そう言つて、こころは花音先輩に連行されていった。あ、俺のパーカー……ま、いつか。

「それじゃ、あたし達も行こつか？」

「行かつて……どこに？」

「……………」

「決まってるないんだな……」

　　～お土産コーナーの場所～

「わあ……このキーホルダー、ミッシェルと水族館のコラボなんだ……え!!？」

結局、俺達は向かう先が決まらず、お土産コーナーに来ていた。

「弦巻家の力を感じるな……」

「あ、でもこの置物はちよつと可愛いかも……あ、羊毛フェルトもある！」

「……………」

ワクワクした笑顔で色々な物を物色する美咲。

「なんか、珍しいな。」

「え？」

「いや…なんていうか…いつつ美咲は我慢をする癖があるって、こころも言ってたしさ…なんかそうやってやりたい事やって笑顔になってる美咲を見ると、なんか良いなあって思えてさ。」

「それって、どういう事？」

「あー、その…あんな気にすんな。」

「？」

「あ、そうだ…せつかくだからこれやるよ。」

そう言っつて、俺はポケットからイルカのアクリルキーホルダーを渡す。

「え？これを私に？」

「ああ、日頃のお礼とでも思っつてくれ。」

「可愛い…」

「気に入ってくれたなら、良かったよ。」

「ありがとう、大切にするね。」

「お、おう／＼／＼」

思わず、その純粋な笑顔にドキツツとしてしまう。

「あーソウヤー!!!」

「うげえ!？」

次の瞬間、今度は真横から衝撃を感じる。

「こ、こころ……次はもっと加減を……ガクツ」

「『そ、ソウヤーツ（創也くん）（創也）!?!』」

俺はそのまま気を失うのだった。

〜その後〜

「はあ……疲れた……」

「あはは、お疲れ様。」

横から花音先輩がジュースを渡してくる。

「あ、すみません。」

こころからの攻撃で気絶したあの後、俺は気が付いたら水族館のそばの公演に運ばれていた。まあ、時間が夕方という事もあったから、丁度いいんだけどね。

「ねえ、創也くん？」

「ん？何ですか？」

「今日は楽しかった?」

花音先輩が、俺の顔を覗き込むように聞いてくる。

「ええ、楽しかったですよ。」

「創也が楽しんでくれて良かったわ!」

「ま、創也も満足してくれたし、良かったかな。」

「うわあ!? 2人ともいたのか!」

いきなり後ろから声がかかり、驚いてしまう。

「ソウヤ! 次はハロハピのみんなで遊園地よっ!」

「あはは…早いな…ま、その時は、お手柔らかな。」

こうして、俺達の波乱万丈の水族館デートは無事に終了したのだった。

リクエスト編 男子1人のお泊まりは辛い

くある日の昼休みく

「お泊りがしたい?」

「ええ、そうよ!あたし、ソウヤの家に泊まっていたいわ!」

「別に:明日土曜日だから良いけど:1人で泊まるのか?」

「あら?なにか問題あるかしら?」

「いや:そうでもないけど:」

俺は現在、屋上で勇人と幸を待っていた。昼飯を食べる予定だったのだが、幸は課題、勇人は今日持ってきたエ〇本について紗夜先輩からの説教で昼飯の集合は2人とも遅れているのだ。

そして暇を持て余し、適当に昼寝をしながら2人を待っていたところ、こころが屋上に来て今に至るのだ。

「それで、いつ泊まりたいんだ?」

「うくん:そうね:今日が良いわ!」

「今日!?突然すぎるだろ:まあ、いいや。それなら夕飯は何食べたい?」

「ソウヤが作るものなら何でも良いわ!」

「それ1番面倒なやつ:ま、いつか。じゃあハンバーグとかでいいか?」

「ええ！」

「じゃ、俺は放課後に買い物に行くから、一緒に行くか？」

「わかったわ！」

俺とこころはそんな事を考えながら急遽開催する事になったお泊り会について話し合うのだった。

その近くで、怪しげな笑みを浮かべながらスマホを構える男がいるとも知らずに…

〜放課後〜

「あ、美咲ちゃん！良かったらこの後、駅前のカフェに一緒にいかない？」

「あ、いいですね。丁度あたしもひまだったから、一緒に行きますか。」

「うん！」

放課後…花音と美咲は店へと向かって歩いていた。

バイトも練習もない放課後、自分が方向音痴だと理解している花音は美咲を誘い、駅前の喫茶店へと向かっていた。

ピロリン♪

「あれ？矢坂さんからだ。」

「矢坂くんから？」

美咲がスマホのロックを解除して、勇人から送られてきたメールの内容を確認する。

「……………」

メールの内容を見た瞬間、美咲の表情が凍りつく。

「えっと……………どうしたの美咲ちゃん…?」

恐る恐る、花音が美咲に問いかける。

「花音さん……………これ…」

そうやって美咲が見せてきたメールの内容は……

『やつほく、勇人だよ☆突然だけど、弦巻さんが創也の家と同棲……じゃなくしてお泊まりに行けらしいぜ♪いやあくナニするんだろぅねあの2人wwwどこまでいくのかなあの2人ww付き合ってるのかなあの2人www』

p s, あの2人多分今ごろ創也の家の一番近くのスーパーにいるぜ。』

といった内容のメールだった。

「美咲ちゃん……いまから創也くんの家に遊びに行こっか?」

「そうですね……せつかくならお泊り位はしまししょうか。」

く創也の家の近くのスーパーく

「ま、これで材料は全部かな？」

「沢山あるわね！どれくらい作れるのかしら？」

「んー、はぐみの家で買った肉がまだ結構余ってるから4人分は作れると思うぞ……せっかくだからお菓子とか買うか？」

「んくくっ！とつても楽しみだわ！」

「こころとそんな話を話しながらレジで会計を済ませ、家に向かっているとだった時だった。」

「創也（くん）!!」

「っ!？」

突然、背後から大きな声で俺を呼ぶ声が出て、思わず驚いてしまう。

「み、美咲？それに花音先輩？」

後ろからは、大きな荷物を持った美咲と花音先輩が、息を切らしながら立っていた。

「はあ……はあ……あたしと花音さんも……はあ……創也の家に泊まって良い……よね……はあ……」

「に、荷物なら……はあ……私も美咲ちゃんも……荷物ならあるから……」

「……………はいっ？」

こうして、どっかの馬鹿野郎の陰謀により、お泊り会が開催されるのだった。

「じゃあ、荷物はそこに置いてくれ。」

「はい」

こうして俺たちは無事に家に当直した。

「にやあく（訳：あれ？ハーレム作ってんの主？）」

帰宅すると、帰って来て早々にここあが何か言ってくる。

「なーにがハーレムだよ。どうせ、あの馬鹿野郎が勝手に仕組んだ事だけ。」

「にやあく（訳：あ、それじゃあ私はお邪魔虫だからユキナの家に行ってくるね。）」

「あ、ちよつと…行っちゃまった…」

ここあは空いている窓から友希那先輩の家に向かって行った。

「創也くん、今日の夕飯は何にするの？」

「えーと…とりあえずハンバーグですね。一応簡単な野菜なら今朝作ったのが余ってますから作るのはお米とハンバーグです。」

「か、家庭力が凄い…」

「一人暮らし歴が長いですからね。勝手に身につくもんですよ。」

花音先輩が驚くがそこまで凄いことではない。

「ソウヤー！あたし、ハンバーグと一緒に作ってみたいわ！」

「おっけー。俺がサポートするから頼むぞ。」

「分かったわ！」

そう言つてこころと一緒にハンバーグ作りに取り掛かろうとした時だった。

ガシツ！

突然、美咲と花音先輩に肩を掴まれる。

「創也、せっかくだからあたしも手伝うよ。」

「美咲ちゃんの言うとおり、私たちも泊めてもらうんだし手伝うよ、創也くん。」

何故だろう…断つてはいけない気がする…2人から強烈なまでの圧を感じる。

「えっと…じゃあ…お願いします？」

こうして、3人と夕飯を作ることになるのだった。

「これで完成ね！」

「わあ…思ってたよりもすつごく綺麗に出来た…」

「うん、そうだけど…創也くんが…」

調理が終わり、誰が見ても上出来なハンバーグが出来上がったのだが…

「もう…疲れた…はあ…」

こころが料理をした時、色々な事故が発生したのだ…鍋が何故か暴発したり、肉が何故か一瞬で黒焦げになったり…こころって勇人ほどではないけど料理下手だった…俺への負担が大きく、盛り付け辺りから俺はテレビの前の床で完全に沈んでいた。

まあ、最終的に俺が用意した量の調味料を混ぜるだけという簡単なソース作りに切り替えってもらったけど。

「早く!!みんなで食べましょう!」

「ああ、分かったから…ちよつと待っててくれ…」

俺は調理でボロボロになった身体を無理やり起こし、食卓へと着くのだった。

「どっつっても美味しいわ!ソウヤ!このハンバーグ本当に美味しいわよ!」

満面の笑みでこころが口元にソースを付けながらはしゃいでいる。

「はいはい、口にソースがついてるからジツとしてろ。」

「んっ」

俺は指でそのままこころの口元に付着したソースを拭って、ぺろりと口に含む。

「っ!」

「おお…確かに美味しいな。こころがソース作ったんだっけ?やるじゃん。」

「ふふっ、ありがとう♪」

笑顔で喜ぶこころ。犬かな?猫派から犬派に寝返りたくなってきた……あ、やべっ、友希那先輩とここあから殺意みたいなのを感じる……

「た、確かにみんなで作った料理だから美味しいよねっ!創也くん!」

「創也は教えるのも上手だもんね!」

「あはは…といっても、誰かと料理作るなんて結構久しぶり……って、何してんの2人共!」

花音先輩と美咲の方を見ると、どんな食べ方をしたのか、ハンバーグのソースが口元にすごい量が付着していた。

「あー…とりあえずタオル取ってきます…」

「あつ…」

一体どんな食べ方をすればあんなにソースが着くんだ…？というか、2人が残念な表情をしてたような…：気のせいかな？

「つ、付け過ぎちゃった…」

「完全に焦りすぎましたね…」

「2人共とっても面白い顔になってるわ！」

俺が洗面所からタオルを持って持つてくる間に、女子組が何かを離していた。あ、そうだ忘れてた…

「二応、風呂はもう沸かしてあるから入りたい人が入っていいよ」

「「お風呂？」」

洗面所にタオルを取りに行った時に思い出したことを3人に伝える。

「ふあ〜」

思わず大きなあくびが口から溢れる。

「随分と大きなあくびするね。」

「まあ、最近あまり休めてなかったですからね。」

後ろを向くと、風呂から上がったのか、若干髪が濡れた花音先輩がいた。

今はこころと美咲が入っているのだろう。こころを風呂に1人で入れるのは流石に怖いし……一回家に泊まったことのある美咲と一緒に入ってもらっているのだ。

「また無茶してるの?」

「またって何ですかまたって……まあ、適度に休憩はしてますよ。」

最近、美咲とか花音先輩が俺の健康をよく気遣ってくるんだよなあ……別に倒れるまで動く訳でもないのになあ

「ねえ……創也くんはさ……好きな人とかいるの?」

「好きな人ですか?」

体調の次は恋愛関連について気を使い始めたのかな?

「まあ……今はいませんね。」

「そっか」

何故か若干嬉しそうな顔をする花音先輩。

「というか、そういった感じの恋バナは女子同士でやってくださいよ……俺完全に専門外ですよ?」

「でも、男の子から見た恋愛とか私はちよつと興味あるかな?」

「いや…まともな恋愛経験なんて無い俺には話せることなんてありませんって…」

そんな感じで、花音先輩に俺の恋愛経験について問い詰められている時だった。

「ソウヤー！見て見て！お風呂にビー玉があつたわ！」

そんな興奮した声と共に、背後からびちゃびちゃと水音が混じった足音が聞こえる。

「あれ？…こころもう風呂から上がつ……なっ!？」

後ろを見ると、こころがバスタオル一枚だけを身体に巻いた状態でこちらに来ていたのだ。

「こころ、髪ちゃんと乾かさないと……あ」

「あ」

そして、そんなこころに続くように美咲もこころと同じ格好で目の前に現れる。

「見るな変態!!」

ヒュン!!

そんな理不尽な美咲の叫び声と同時にドライヤーの空を切る凶悪な音が耳に届く。

「理不尽だっ!？」

ゴンツ!!

そして、そんな俺のセリフを無視するかのようには、美咲が投げたドライヤーは俺の頭に直撃し、俺はそのまま倒れるのだった。

「ねえ創也くん、なんでお風呂にビー玉があるの?」

「ああ……ここあがビー玉みたいなキラキラ光るものが好きなんですよ。あいつ風呂嫌いなんで入れやすくする為に風呂場にいつも常備しててんですけど……回収するの忘れてた……」

「あはは……どんまい。」

花音先輩の治療を受けながら、俺は明日の美咲の朝食にパクチーを混ぜてやろうと、ささやかな復讐を誓うのだった……

あ、よくよく考えたら俺の家の冷蔵庫にパクチーなかったやん……

さて、その後も色々あったが、ついに就寝の時間となった。

「それじゃあ、俺はリビングで寝るから3人共俺の布団を使ってくれ。無駄にサイズだけはあるから3人で眠っても問題はないはずだし。」

そう言っつて、俺はリビングに向おうとするが……

「いや、創也くん私たちが泊めてもらう側なんだし、流石に創也くんが1人でリビングで寝るのは駄目だと思うよ?」

いきなり花音先輩に肩を掴まれ、リビングに行くのを阻まれる。

「いや……流石に布団が1枚しかないから俺と一緒に寝ることなんて出来ないし……それに俺男ですし、普段からその布団、干すだけ干してあんまり使ってないから俺リビングのソファで寝ますって!!」

俺が再びリビングに逃げようとした時だった。

ピンポーン

「あれ?こんな時間に人?」

突然、玄関でチャイムがなりそのまま玄関に向かう。

「はい、どちら様で……って、誰もいない?」

玄関を開けると、外には誰もいなかった。そしてまるで代わりの様に何やら大きな荷物が、玄関先に置かれている。

「何だこれ……あ、手紙だ。」

大きな荷物の上には小さな手紙が1つ置かれていた。

「えーと……『ごころ様が どうせならみんなで一緒に寝たいわ!』と言っていたので、全員分の布団を用意したのでお使いください。一度洗濯もしてあるので何の問題もありません。』…嘘やろ……」

「ソウヤー!どうせならみんなで一緒に寝ましよ!」

来たな黒幕め。

「はあ…それなら、布団を敷くの手伝ってくれ…」

結局、いろいろと諦めて俺は心の要望通り、荷物を運び始めるのだった。

時刻は深夜1時00分…基本的にはほとんどの人が眠っている時間帯だろう。創也も例外ではなく、意識の8割程は既に飛んでおり、後少しで眠りにつくという時だった…

「ん？何だこれ…」

ふと、布団に違和感を感じたのだ。まるで俺以外の誰かが布団に潜り込んでいるかのような…

「まさかつ!？」

そんな考えに至り、慌てて自分の布団をめくる。

「んう……そうやあ…」

そこには、案の定と言うべきか、こころが俺の背中にガツチリと手を回し、よだれを俺の着ているパジャマに染み込ませながら幸せそうに眠っていた。

「はあ…どうしよう…動けない…」

こころの拘束から抜け出そうと試みるが、抱きしめる力が強いのか、抜け出せそうになかった。

「あれ…そうやくん？なにしてるの？」

そして、そんなこころに頭を悩ませていると、眠たげな声が耳に届く。

「か、花音先輩っ!?ち、違うんです！気が付いたらこころが居たってだけで俺は何もしてないですよっ!？」

変な誤解をされては困ると思い、慌てて弁明をするが花音先輩から帰ってきたのは意外な答えだった。

「わあ、こころちゃん良いなあ…」

「…はい？」

そして、花音先輩は何を血迷ったのか俺の布団の中に潜り込んできた。

「ちよっ、何してるんですか花音先輩!？」

「えへへえ…そうやくんの匂いだあ…」

前からはこころ、後ろからは花音先輩に抱き着かれている状態となっていた。

「そうやあ…あつたかい…」

「ちよつ、こころ少し離れて…」

こころは俺の身体に顔を押し付け、抱き枕のように扱ってくる。

「そうやくん……美味しそう……食べても……いい？」

「良いわけ無いないでしょ!？」

「いただきまあす……」

「ひゃっ!？」

そういうと、花音先輩は背後から抱きついた状態で俺の耳に顔を近づけ、パクリと啜え、チロチロと舐め始める。

「何してるの?」

「み、美咲!？」

少し顔を動かすと、美咲が何故かハイライトの消えた瞳でこちらを見据えていた。

「ち、違うんだ! 誤解だ! 俺は無実だ!」

既に涙目になりながらも訴える俺。

「でも、随分とお楽しみなんだね、創也。」

「頼むから話を聞いてくれっ!!」

俺と美咲がそんな言い合い？をしていた時だった。

「んう…美咲も…一緒に…寝ましょう…その方がきつと…楽しいわ…」

「ふあく…美咲ちゃんも…一緒に…寝よ？」

「え、つちよつと2人共っ!？」

そういうと、こころと花音先輩が美咲の両手を引っ張り、俺の方向に向けて倒してきた。

「きゃっ!？」

「ぐえっ!？」

美咲が小さい悲鳴をあげて、俺にのしかかる。

「ちよつ、花音さん、こころ！流石にこの体勢は不味いつて！」

腕をそのまま掴まれているのか、美咲が移動する気配はない。慌てた声で美咲が2人を呼ぶが…

「すう…すう…」

「ね、寝た!？」

こころと花音先輩は既に眠りについちゃらしい。

「ちよつ、美咲、流石におも…痛っ!？」

思った事が一部口から漏れてしまい、美咲に強めに頭突きをされてしまう。

「あんたそれ、女子に言っている言葉じゃないよね？」

「はい…すみません…」

「それで、この状況…どうすればいいの？」

「俺に聞かれても…流石にこの状況だと、同仕様もなくね？」

「…寝る？」

「え、マジで？」

結局同仕様もなく、俺達はこの状態のまま眠ることになるのだった

……

「ふあ〜…もう朝なの？」

微妙に重い身体を無理やり動かしながら、美咲は意識を取り戻す。

「あっ」

美咲が目を開けると、左には花音、右には、こころ、そして正面には創世の顔があったのだ。

「け、結局本当に寝ちゃった……うう……／＼／＼」

顔を真っ赤にしながらも、代わりとなる枕がないため、寝ている創也の身体に顔を埋める美咲。

「でも……無駄に落ち着くし……もう……ばか……／＼／＼」

そんな事を呟きながら、美咲はもう一度眠りにつくのだった。

くおまけ1く

友希那「なにかしら……裏切りの予感がするわね。」

ここあ「にやあ?」(訳……どうするの?)

友希那「そうね……殺意くらいは送っておきましょう。」

無駄に勘の鋭い、友希那とここあであった。

くおまけ2く

勇人「おっ!創也じゃん、昨晚はお楽しみでしたかー? (笑)」

創也「……………」

創也は無言で勇人のエ○口本を取り出した!

勇人「あつ!それ俺が昨日氷川先輩に没収されたやつ!」

創也「滅べ」

勇人「やめろおおお!!!」

創也は勇人のエ○口本を目の前でビリビリに破り捨てた!

勇人「がふっ!?!」

勇人は吐血して倒れてしまった!

くおまけ3く

こころ「ソウヤの身体、とっても温かかったわ！」
満面の笑みを浮かべるこころ。

花音「ふええく…私…なんてことを…ふええくっ！」

顔を真っ赤にしながら部屋の隅で蹲る花音

美咲「すう…すう…」

何故かいつもより安眠が出来ている美咲

創也「反応に困らねえなこの3人。」

3人の様子を見て不思議に思う創也であった。

リクエスト編 とあるハロハピの1日

「ソウヤー!」

「ぐえっ!?!」

俺の名前を呼ぶ声と同時にもはや慣れつつある衝撃に小さな悲鳴が口から漏れる。

「今日はライブよ!とっつても楽しみだわ!」

「分かったから落ち着けて。他のみんなはcircleに行つたみたいだし、俺達も行くぞ。」

そう……今日はcircleでハロハピのライブがあるのだ。演劇やらソフトボールやら迷子やらバイトやらで練習漬けという訳では無いが、1人1人が楽しんで笑顔で練習をしている為、技術的には問題はないと思う。

「ソウヤー!早くcircleに行きましょう!」

「分かったから落ち着けて。」

「でも!今すぐにでも走り出したい気分よ!…そうだわ!circleにどっちが先に着くか、競争しましょう!」

「え、走るの!?!ここからcircleまでどんだけ距離があると思つて…:「さあ、出発よ!」あれ!?!俺の意見無視…って速っ!」

俺がこころにツツコミを入れようとする頃には既にこころが走り出していた。

「だあっ！やってやるよもうっ！！」

こうして、俺はここらとcircleまで競争をすることになるのだった。

「よっしや追い抜いた！」

「負けないわっ！」

それから約数分後、創也がこころを追い抜き、優勢となっていた。単純な走るスピードならこころより創也の方が上なのだ。

「よしっ！次はこの角を曲がって……っであれは？」

ふと、走っている最中にとある人物が視界に入る。

「花音じゃない！こんな所で何をしているの？」

そう…花音が道の途中でスマホを構えて涙ながらに彷徨っていたのだ。

「ふええくっ！…こころちゃん、創也くん、circleってどの道を行けば良いのか分からないよおっっ」

「やっぱり迷子ですか……」

「それなら、花音も一緒にcircleまで行きましょう！」

そう言うと、こころは再びサークルまで走って行った。

「えっ、ちよつと!？」

こちらが静止をかける間もないほど、トップスピードだ。

「ああもう！花音先輩っ！背中に乗ってくださいっ！」

「えっ、う、うん…」

創也の気迫に気圧されたのか、花音は素直に創也の前に手を回し、背中にしがみつく。

「舌嚙むので気を付けて下さいねっ！」

そう言うと、創也は花音を背負った状態で走り始めた。

「ふええっ!!速すぎるよおーっ!!」

現在順位 1位こころ 2位創也&花音ペア

「はあ…はあ…流石に…息が…はあ…」

「そ、創也くん？苦しかったからおろしても大丈夫だよ…？」

「じゃあ花音先輩ここからcircleまでの道わかりますか？」

「うっ」

そんな風に2人が会話していると、こころの背中が見えてきた。

「こころ！追いついたぞ！」

そして、隣まで追いつく。

「あらー！花音も一緒なのね！」

花音を背負った状態でこころに追いつくのだから、どれだけ創也の足が速いかが分かる。

そして、両者共に僅差の勝負だった時だった

「あー！こころんにかのちゃん先輩にそーくんだ!!はぐみも一緒に走るー!!」

突然、はぐみが乱入してきたのだ。

「はぐみ!?!何でここにつ!?!」

「ちようど良いわ！はぐみも一緒に走りましょ！」

「うん！はぐみ頑張る!!」

創也が驚いているが、はぐみはそれでも走る。

「circleまであと少しだああああ!!!」

現在順位 1位創也&花音ペア 2位こころ 3位はぐみ

「あ、創也だ、私も走ろうっと」

花園たえ、乱入

「お、何だ？競争か？」

宇田川巴、乱入

「るんっ♪って来た!!」

氷川日菜、乱入

「闇の世界へと招かれし我ら漆黒の…えーと…あこも走るー!!」

宇田川あこ、乱入

こうして、何故か増えたメンバー計8人でcircleまで走るのがあった。

そして、約10分後

「えっと……マラソン大会でもしてきたの？」

美咲……もといミツシエルが困惑した表情？で目の前の人物

……創也に問いかける。

「いつの間にか……なつてた……がくり……」

ミッシェルの前には燃え尽きて今にも灰になりそうな状態で倒れている創也と、今日他にも参加予定のバンドのメンバーが1人ずつ額に汗を浮かべていたのだ。

ちなみにマラソンの結果はこうだ。

- 1位 創也&花音
- 2位 はぐみ
- 3位 ころろ
- 4位 日菜
- 5位 巴
- 6位 たえ
- 7位 あこ

花音を背負った状態で1位を取る事からも、創也の足がどれだけ速いのが分かる。

「は、速く……俺を置いて先に行け……ここは……任せろ……がくつ」

「ネタに走ってないでとりあえずゆっくり休んでて。」

こうして、創也は力尽きるのだった。

〈数30分後〉

「よっしや復活！」

無事に復活を果たした俺は腕時計で時刻を確認する。

「ライブ開始10分前か…」

そんな事を口にしながら身体をソファから起こす。どうやら、倒れたあの後にcircleのラウンジのソファに寝かされていたようだ。

「どうやら起きたようだね、創也。」

「あ、薫先輩。」

ふと、付近から声が掛かり、隣を見ると薫先輩がライブ衣装でギターを軽く弾きながら座っていた。

「花音をここまで運んでくれて、感謝するよ。」

「いえ、そんな大した事じゃ無いですよ。俺は出来る事をやってるだけだから。」

「だが、こころや花音、美咲からの話しだと常日頃から随分と走り回っているようだけれど、どうなんだい？」

「え……そんなに走り回ってますかね？」

「自分が思っている以上に、人は他人の事をみているものさ。大丈夫だと思っけていても、周りから見たら不安しかないといった場合もあるからね。」

「そんなもんですか…」

薫先輩の言葉に、ここ最近の自分の行動を振り返ってみる。

こころからの提案でスカイダイビングしてパラシュートが開かないで危うく死にかけて…

カフェに千聖先輩と行ったつきり行方不明の花音先輩を探して（何故か3駅先のカフェに行ったはずが、千聖先輩と2人でせいはいはんたいの隣の県まで行つた。）

勇人が女子更衣室に侵入した時に巻き込まれて美咲に殺され掛け…

ここあのキャットフードをいつもより安いやつにしたら友希那先輩とここあにバレて命がけの鬼ごっこになったり…

「あ、確かにこりや無茶してるな…」

自分で振り返つておいてマジで無茶をしていた。

「確かに私たちは創也に支えてもらっている部分もある。けれど、創也が倒れたらこころやはぐみ、花音に美咲、もちろん私も悲しむ。創也が思っている以上に心配されているんだよ。だから、ちゃんと周りを頼って少しは自分を労つてみたらどうだい？」

「薫先輩…」

やばい…薫先輩が超絶イケメンに見えてきた…普通に惚れそうなんやけど。

「それじゃあ、私はそろそろ行つてくるよ。」

そう言うと、薫先輩はギターを肩に掛け、ソファから立つ。

「創也は私たちのライブをしっかりと見ていてくれ。儂い演奏を約束しよう。」

そう言っつて、薫先輩はラウンジから出ていった。

…ただ気になることがあるとすれば、薫先輩が扉を出ていった時に女の人たちが凄いい声あげて一瞬で薫先輩が見えなくなった事くらいだ。

「さてと、それじゃあ俺も行くとしますか。」

こうして、俺は薫先輩の後に続くようにラウンジを後にするのだつた。

「お、いたいた。おーい。創也ー！」

「そーくん！席とつておいたよー！」

ライブ会場に入ると、勇人と幸の2人が3人分の席を確保して1番前の席に座っていた。

「おう、悪いな、席取らせちまって。」

「いいっていいって、ライブ会場に来れるだけでも得だからな。」

実を言うと、勇人と幸はライブハウスによく入り浸っているのだ。

勇人はガールズバンドの多いこの時代で、可愛い子目的のためにライブハウスに通い始めたのだ。楽器が出来るかは知らんけど。

幸の方は勇人に巻き込まれるか、パスパレのイヴと仲が良いからチケットを貰ってライブに行くことが多い、ここによく来るのだ。

「にしても、今日は5バンドがメインなんだな。」

「そうだな。」

「ハロハピは何番目？」

「5番目…トリだな。」

「ふっふっふっ、中でも今日のオススメはポピパの市ヶ谷有咲、アフグロの上原ひまり、パスパレの若宮イヴ、ロゼリアの白金燐子先輩、ハロハピの弦巻こころがぐべっ!？」

勇人がカメラを鞆から取り出した瞬間、俺が勇人を蹴り飛ばし、その際、勇人の手からカメラが零れ落ち、それを幸がギリギリでキャッチし、握力でバキバキに握りつぶし、破壊する。

「おい、てめえ、喧嘩売ってんのか？うちのところにそんな眼向けるってことは戦争でもお望みか？」

「ゆーくん、イヴちゃんをそんな眼で見ると…エ○本全部ミキサーにかけて豚の餌にしてあげるよ♪」

俺と幸が地面を這っている勇人を足蹴に、罵倒の言葉を浴びせる。

「じよ、冗談ですよお2人共…あ、アメリカンジョークだつてアメリカンジョーク…」

冗談抜きで青ざめる勇人。

「ま、そろそろライブが始まるから、おとなしく席につこうぜ。」

「そうだね。カメラは完全に破壊したからもう大丈夫だしね。」

「ああ！新品のカメラが！」

「SDカードは粉碎してないから大丈夫だよ。」

「随分と器用な壊し方をするな。」

3人でそんな会話を会話していると、ふと、ライブ会場の証明が落ちる。

「あ、始まったね。」

後ろの方の証明から、赤い光がステージ全体を照らす。そして、その光の中央には、見知った5人組がいる。

『Afterglow！いくよっ！』

マイクを構えた蘭の声で、会場は盛り上がる。

『まずは一曲目：Y・O・L・O！！！！』

そして、Afterglowの演奏が終わり、次のバンドが登場する。

『Poppin' Partyです！それじゃあ！ときめきエクスペリ

エンス!!!』

今度は香澄が満面の笑顔で会場に立ち、会場を盛り上げる。

『Roseliaです。』

そして、今度は友希那先輩達がステージ立つ。そして、会場全体が歓声で震える。まだ演奏をしていないにも関わらず、この声援がどれだけ期待値が高いかを表しているだろう。

『BLACK SHOUT!』

そして、曲が流れる。

『Pastel*Palettesです!』

今度はPastel*Palettesのボーカル、彩先輩の声で会場が盛り上がる。

やはり、現役のアイドルバンドという事で、人気もかなり高いらしい。

「イヴちゃん!!ファイトー!」

「ちよつ、幸落ち着けっ!ライブ中は静かに!」

幸が大きな声でイヴを応援する、が、もちろん勇人が静かにするよ
うに抑える。

「ふふっ」

イヴの方は小さな笑みを零して、幸の方に小さく手を降っている。
みんな信じられるか？この2人まだ付き合っていないんだぜ。

『それじゃあみんな！いくよっ！もういちどルミナス!!』

そして、パスパレの演奏が始まる。

『ハッピー！ラッキー！スマイルー！』

『イエーイ!!!』

そして、我らがボーカル、こころが会場に現れた。

『あ、ソウヤー！起きたのね！嬉しいわっ！』

そう言うと、こころはステージから勢いを付けて、観客席……もとい俺の方にジャンプして、抱きついてきた。

「ちよっ、こころ！戻れっ！ライブ中だぞ！」

「あら、そうだったわ！それならライブが終わったら今日のバンドのみんなで打ち上げよっ！」

「分かったから速くいけっ！」

「わっ」

こころを強制的ステージへと戻し、俺も観客席へと戻る。戻る時に、周りの観客から生暖かい視線やら嫉妬を含んだ視線がとても恥ずかしい。

『それじゃあいつくわよーっ！えがおのオーケストラっ！』

そして、こころが会場に歌声を響かせる。

〜ライブ終了後〜

「ほい、おつかれ。」

エプロンを身にまといながら、グラタンを机の上に置く創也。

「わあ！とっても美味しそうだわっ！」

「うわマジか…お前料理もできたんだな…」

「このプリン！コンビニのものよりも美味しいんだけどっ!？」

「まさにブシドーです！」

「わあ…この料理、すっごく美味しい…」

色々な人から料理の意見がだされる。どれも好評のようで安心

した。

「よしっ！ここで俺様の特製華羅惡下を…」

「今すぐ捨てろそれをつ！」

勇人の持った唐揚げもどきの暗黒物質を見た瞬間、俺と幸は勇人に全力で蹴りを入れる。

その後、俺はまりなさんに頼んで出演したバンドのみんなに料理を提供していた。ちなみに、俺はカフェの方のキッチンを借りている。

「それにしても、創也は毎回ライブをすることになって倒れているけれど、大丈夫なの？」

美咲がジュースを片手に問いかける。

「ああ、それ薫先輩にも似たようなこと言われたよ。」

「けどま、毎回そうやって倒れて心配することうちの身にもなってよ。」

愚痴を零す美咲。

「俺も楽しいからさ、そこまで心配するなよ。」

そんな事をつぶやき、いつものように、ジュースを口に含む。

「ちゃんと気をつけてよ。」

「はい。」

俺は、そのまま美咲の返事を軽く受け流し、自分が作った料理を改

めて食べるのだった。

リクエスト編 動物園に行こう！

「その猿止まりやがれえええ!!!」

「もう逃さないわよ！お猿さん！」

「かのちゃん先輩のお財布！見つけたよ！」

現在…俺、こころ、はぐみはとある猿と対峙していた。

時は遡る事数分前。

俺はハロハピのみんなと一緒に動物園に来ていた。はぐみのお父さんが何でも動物園のチケットを6枚入手したらしく、バンドのみんなで行ってきなさいとの事で、俺達は動物園に来ていたのだ。

「にしても、たくさん動物がいるな……」

「まあ、動物園だからね。」

俺の一言に、美咲が答える。

「夏の日仲間と共に動物園で過ごす……ああ、なんて偉いんだ……！」

薫先輩、アンタそれ言いたいだけだろ。

「あつちにキリンがいるわ！とつても首が長いわね！」

こころは案の定、楽しんでる。

「見て見て！あつちにはゴリラがいるよ！」

もちろん、今回の計画の発案者であるはぐみも、すごく楽しんでる。

「えーと……マウンテンゴリラの幸くん6才……うん、見なかったことにしよう。」

なんか知り合いと同じ名前のゴリラがいたが、気にしたら負けだ。怪力のゴリラ。幸なんて図式を思い浮かべてはいけない。

あいつゴリラ以上の筋力がありそうだけど。このゴリラと同じ種族なんて考えてはいけない。いいね？（圧）

「それにしても、これだけ広いと迷子になっちゃいそうだよね。」

花音先輩がポツリと呟く。

「……………」

俺は無言で花音先輩の前に手を差し伸べる。

「えつと……創也くん？」

困惑した様子で俺を見る花音先輩。

「割とマジで洒落にならないと思ったので、嫌かと思いますが、手を掴んで下さい。いやほんとマジで洒落にならないので。」

「うっ……いつもごめんね……?」

一瞬狼狽えるが、その後すぐに申し訳なさそうに俺の手を掴む花音先輩。

「ほら、行きますよ。」

「おや、2人ともどうしたんだい?」

「むう……」

ちなみに、その傍らで頬を膨らませてこちらを見ている女子2名がいたとかいないとか、そんな感じの事を薫先輩に聞くのだった。

そして、事件は起こった。

「あれっ!!私の財布がない!?!」

花音先輩が何やら慌ただしく鞆の中を探っているが、どうしたのだろうか。

「花音、一体どうしたんだい?..」

その様子を同じようにみていた薫先輩が花音先輩に問いかける。

「私のお財布がないの…さっきまで鞆の中に入れてたのに…」

目に涙を浮かべる花音先輩。

「みんなで探してみよっか。」

美咲の一言で、周囲を探し回る。

「うくん…見つからねえな…」

「花音さんの失くした財布ってどんな形ですか？」

「えーと、全体的に水色でクラゲのアクセサリが付いてて…あ、そうそう、あんな形だよ。」

花音先輩が指を指した方向には、少し小柄なニホンザルが長方形の革製の財布と思わしき物を振り回して遊んでいた。ちょうど、先ほどまで先輩の言っていた特徴と一致する。

「あれじゃね？」

「「「「……………」」」」

5人が思わずジッと財布を持ったニホンザルを注視する。

「ウキッ！」

その視線に気がついたのか、猿は財布を持って逃走を開始した。

「あ、私のお財布……………」

俺、こころ、はぐみの目が合う。

「その首置いてけ猿野郎おお!!!」

「花音のお財布を取り返すわよっ！」

「かのちゃん先輩のクラゲー!!!」

く現在く

「そーくん！そっちにお猿さんが行ったよ!!」

「任せろー！」

財布を持った猿は、それを抱えたままマウンテンゴリラ（幸くん6歳）のいるゲージまで行き、ゲージの鍵を開ける。

「やべえ!?あの猿ゴリラのゲージを開けやがったぞ!!!」

そして、ゴリラが動き出す。

「みなさん！落ち着いて避難くださいっ!!」

付近の飼育員の人が異常を察したのか、周りの客を避難誘導している。

「ウホッ!!ウホウホッ!」

元気よく自分の胸を叩き、雄叫びをあげる幸くん（ゴリラ）。

「やべえ!?!こっちに突進してきやがった!?!」

地面を揺らしながら俺の方に突進してくる幸くん（ゴリラ）。横を見るどころかやはぐみは猿を追いかけてどこかに行ってしまった。

「って俺だけでこのゴリラ相手にするのか!?!」

「ウホッ!!」

ゴリラが腕を振り上げ殴りかかってくる。

「危ねえ!?!」

なんとか余裕を持って避けられるが、コイツを無視して猿を追いかけると、周りに被害が及ぶ。

「ウツホウ!!」

声を上げながら右ストレートを放ってくるゴリラ。

「クソッ!」

ゴリラの右ストレートを踏み台に上に跳び、そのまま頭を蹴るが、

一瞬よろめいただけで直ぐに反撃をしてくる。

「うおっ!？」

今度は左ストレートで殴ってくるため、空中で殴ってきた腕を軸にゴリラの後側に避ける。

「はあ…はあ…幸よりも性格荒いじゃねえかこのゴリラ…っ!」

俺のほうが決定打に欠けるため、決着が付かない勝負が数分ほど続いている。

そんな時だった。

「あれ、創也君?何やってるの?」

ふと、聞き覚えのある声が耳に届き、声の方向を見る。

「あれ!?!さつき颯樹先輩っ!?!どうしてここに!?!」

声が出た方向には、花咲川学園の先輩である盛谷もりや 颯樹さつき先輩がいたのだ。

「あ、僕はちーちゃんに誘か…デートに連れてこられたんだよ。」

今、誘拐とかいう不穏な単語が聞こえたが、それどころではない。さつきから気になっていたのだが、先程から颯樹先輩の腕に幸せそうに抱きついている人物が1名。

「誰だこの千聖先輩。」

そう：颯樹先輩の腕にまるでマーキングをするかのように千聖先輩が抱きついているのだ。アンタそんなキャラだったか!?

「あら、誰だこの千聖先輩。だなんて随分な言いようじゃない創也君?」

「げっ」

先輩の腕にしっかりと抱きつきながら笑顔でこちらを睨む千聖先輩。やべっ、ゴリラより怖いよこの人：っ!!

「って、そんな事より颯樹先輩!ちよつとこのゴリラ仕留めるの手伝って下さい!!」

「え!?なんでゴリラがゲージから出てるの!?!」

驚いた様子を見せるがそんなのかまっている暇はない。

「今からそっち連れて行くんでトドメお願いしますっ!!」

そして、ゴリラの攻撃を避けながら俺は颯樹先輩の元へ突進する。

「え、ちよつとホント待ってなんでそんな事につ!?!」

先輩の目の前まで来た辺りで俺は上へ跳躍し、颯樹先輩と千聖先輩を飛び越える形でゴリラを颯樹先輩の元へ誘導する。

「ウホツツツツ!!!」

そしてゴリラはそのまま俺を追いかけて颯樹先輩の眼の前まで迫る。

だがゴリラよ、相手が悪かったな。その先輩はただの先輩じゃない。どんな事でも簡単にこなすチート先輩なのだ。いかに名前が幸と同じのマウンテンゴリラとはいえ、そんな考えなしに突進すれば……

「せいっ!!」

「ぐほおっ?!?!」

颯樹先輩はゴリラの顎に綺麗に一発分の拳を入れ、ゴリラを気絶させる。強っ。

「先輩助かりました!!それじゃあお礼は後日するので!!デートの邪魔してすみませんでした!!」

そして俺は猿を探しに再び走り始めるのだった。

「行っちゃった……これからどうする?……ってちーちゃん?」

「さっきのとってもカッコ良かったわよ♡ダーリン♡」

「ありがとう、ちーちゃん♪」

その場には、甘い空気を纏うカップルが居たとかいないとか。

「あんのクソ猿がああああああ
!!!!!!」

ゴリラ事件から約1時間、俺達は未だに猿を追いかけていた。

あれから、キリンの柵の中に猿が侵入して、俺がそれに続く形で追いかけたら、キリンに蹴り飛ばされ、その後もライオンに食われそうになったり、ホツキョクグマにボディブローを喰らいそうになったりと、未だに決着が付かないでいた。

「ふええ〜っ！創也くん落ち着いてっ！」

ずっと追いかけているはずなのに、あの猿は逃げるのが相当うまいのか、人が通れない場所を通ったり動物のいる場所に誘導するなどして完全に追い付くことができないのだ。

それにより、俺のストレスも相当溜まっていた。花音先輩がそんなキレイてる俺を見て慌てている。

「それにしても、あのお猿さんとっても速いわね！」

「はぐみ、追いかけてっこ得意だけど全然追いつかなかった！」

「こころとはぐみは危険を避けながら猿を追いかけていた為、俺よりは被害が少ない。」

「それにしても、こころとはぐみどころか、創也でさえ捕まえられないなんてすごい猿だね……」

美咲が呆れたような声をあげながらボロボロになった俺を見る。

「あの猿は許さねえ……絶対とっ捕まえてあのゴリラ(幸くん6歳)と同じゲージにぶち込んでやる……っ！」

完全に殺意を含んだ瞳で数十メートル先にいる猿を睨みつける創也。

「でも、あの猿は一体どこに向おうとしているんだろ。」

美咲がそんな事を呟く。

「そういえば、あの猿のことについて詳しく聞きまわったのだけれど……少し良いかな?」

「「「「?」」」」

「どうやらあの猿は、この動物園では飼育されていないらしいんだ」

「え!?あのお猿さんこの動物園の子じゃなかったの!?!」

「それなら、あのお猿さんは一体どこから来たのかしら?」

「まさか野生?」

「いや、流石にそれはないでしょ……誰かが飼育してたってことじゃないの?」

各々が考察を述べるが……美咲の一言で創也が反応する。

「つまりあのクソ猿の裏に黒幕がいるってことなんだな……」

「そ、創也くん?」

「黒幕ごと葬ってやるから覚悟しろよクソ野郎オオオオ!!!」

俺はそのまま猿を最後に目撃した場所へと突撃を開始するのだった。

「私達も追いかけてよう！」

「う、うんっ!!」

↳ 動物園内の廃倉庫↳

「へへっ、どいつもこいつもちよろい奴ばかりだな…」

動物園の近くの物置で、男は猿の持って来た水色の財布を受け取る。

「気を隠すなら森の中…まさか動物園の猿に紛れて猿が盗みを働くとは思わないだろうなあ…くっくっく」

実はこの男、1匹の猿を飼いならしては動物園を訪れる客たちの財布を狙って、盗みを繰り返す泥棒だったのだ。

「さてと、今日の収穫は10万ちよつとか…潮時だな。」

男がそう呟き、荷物を纏めて立ち上がった瞬間だった。

ドンツツ!!!

「な、なんだ!？」

突然、廃倉庫の入り口の錆びたドアが音を立てて吹き飛ぶ。

「テメエがああクソ猿の飼主だな…?」

「な、何だお前っ!」

男の目の前には、阿修羅の如き形相の創也が立っていた。

ちなみに、猿は扉が吹き飛ばされた際に、どこかに逃げたようだ。

「有り金置いて死ぬかゴリラの檻に入れられて死ぬか…:選べ」

「いや死ぬしか選択肢が無いじゃん!？」

男のツツコミは最もである。

「くっ、こんなところで捕まってたまるか…:っ!!どけガキ!!」

そう言っつて、男がポケットからナイフを取り出して創也に襲いかかるが……

「ぎゃっ!？」

創也は落ち着いてナイフを持った男の手首を蹴り飛ばし、ナイフを吹き飛ばした瞬間、男の顎にもう片方の足で蹴りを入れた。

「ま、待ってくれっ!!金なら分けてやる!!だからこれ以上は勘弁してくれっ!!」

蹴られた顎を抑え、必死に命乞いをする男。

「知ってる？ゴリラの握力は成人男性の約10倍なんだってさ…」

「…え？…まさか…っ!!!」

「ゴリラと戯れてきやがれえええええ!!!」

「いやあああああ!!!」

その後、動物園全体に響き渡るほどの男の断末魔が響いたとか響いてないとか。

〈倉庫の外〉

「うわあ…凄い声が聞こえる…」

「扉も壊れてるし…創也くんって私より腕相撲とか弱いけど…蹴る力はこんなに強かったんだ…」

「？美咲、これじゃ何も見えないわ!」

「かのちゃん先輩、なんで私とこころんは目を隠されてるの？」

ちなみに、こころとはぐみはそれぞれ美咲と花音によって手で目を隠されている。

「見ちゃ駄目だから。」

「えー!!」

不満そうな声を上げるころとはぐみ

「来たようだね」

そして、薫の声で全員が倉庫の入り口を見る。

「♪」

入り口の奥からは、少し嬉しそうな表情をした創也が小さくスキップをしながら歩いてきた。

「ちよつと動物園の園長の所に行くから5人で先に楽しんで。後から追いつくから。あ、それとこれ財布ね。」

「え？あ、う、うん……」

そう言うと、創也は水色の財布を去り際に花音に渡し、美咲に要件を伝えた後に動物園の事務所へ向かって歩いていくのだった。

「…今度から創也に下手にストレスは貯めさせないようにしましょうか……」

「うん……爆発したら本当にどうなるか分からないもんね……」

創也を怒らせてはいけないと、密かに誓う美咲と花音であった。

く帰り道く

「あはは…なんか凄い事になっちゃってたね。」

「まあ、動物園に泥棒が居たってなると大事ですからね。」

俺が事務所に行ってから数時間後：俺達はそれぞれが家に帰るために帰宅路を辿っていた。

「そういうえば、あの泥棒はどうなったんだい？」

「ああ：なんかそのまま逮捕されてましたね。前々から似たような事件があつたから凄く大手柄だつて言っていました。」

「そういうえば、ソウヤは野外教室の時にはイノシシを倒していたわね！」

「まあな………ん？なんでこころがそれ知ってんの？」

こころの発言に思考が停止する。

「おたえが言つてたよ!!」

「おたええええええええ!!!
!!!」

はぐみから教えられたまさかの真犯人に思わず叫ぶ。

「野外教室でもそんな事に……創也くんつてもしかして結構不幸体質？」

「そうとしか思えませんね………だいたい行く先々で起きる事件に巻き込まれるのって創也が中心だし……」

「それは言わないでくれよ………俺は過激な日々よりも平和な日々の方が好きなんだし。」

俺は、ふと目の前を駆け回るところを見る。

「はぐみ！あっちの公園まで競争しましょうよ！」

「うん！はぐみ負けないよっ！」

こころとはぐみは何故か競争を始めていた。

「まあ、確かにこんな風にみんなで過ごせたほうが良いもんね。」

「そうですよ。まあ、流石に今回みたいな事件はもう起こらないと思いますし、また今度みんなで機会があったらききましょうか。」

「あ、フラグ？」

「なんでだよっ！」

美咲の一言に突っ込みながらも、俺達は平和な帰路を進むのだった。

リクエスト編 デート見守り大作戦 前編

「皆さん！私、明日男の子とデートに行つてきます！」

「……………え？」

「ええええええええええ
!!!??」

イヴの一言に、機材を弄っていた麻弥の手が止まり、雑誌を読んでいた千聖の手から雑誌が落下し、スマホを弄っていた彩と、それを眺めていた日菜が悲鳴を上げる。

まあ、日菜の場合、面白そうなものを見つけたという目をしているが。

「イヴちゃん！相手は誰なの!？」

「るんっ♪つてする！どんな人なの？」

彩と日菜がイヴに詰め寄る。

「同じクラスの友達のコウさんです！優しくてカッコ良くてとってもブシドーな人なんです！」

（あ…これっでもしかして……）

（イヴちゃん絶対そのコウつて人に惚れてるよね…）

イヴの表情などを見て、彩と日菜の2人は確信する。

「イヴさん、明日はその人とどこに行くんですか？」

「デートです！そこで一緒に買い物をする約束なので、明日がとっても楽しみです！」

麻弥の質問に答えるイヴ。

「イヴちゃん、仮にも私たちはアイドルなのよ。デートをするなどは言わないけれど、落ち着いた行動を……」

「あ、入り口にさつくん（颯樹）がいるよ。」

「今すぐデートに行きましようダーリン♪……はっ!？」

日菜の言葉にありえない速度で反応した千聖が入り口を向くが、そこには誰もいなかった。

「日菜ちゃん……謀ったわね……」

「あははっ、千聖ちゃん全然人の事言えないじゃん♪」

日菜の言葉に全力で目を逸らす千聖

（思い出したわ……確か良く創也君と一緒にいる子よね……イヴちゃんのデートの相手って……この事を彼は把握してるのかしら……？）

ふと、イヴのデート相手について思い出した千聖はスマホを起動し、創也に連絡を入れるのだった。

そして、同時刻

「そーくん！ゆーくん！明日デートに行くから計画立てるの手伝って！」

「ぶふおっ!?!」

「うおっ!?!危なっ!?!」

放課後、近くのファミレスで平和的に休んでいた創也、勇人、幸の3人だが、幸の突然の発言に、その平和は終わりを告げた。

勇人は幸の一言に口に含んでいたサイダーを吹き出し、あと少しで創也に掛かる所だったが、ギリギリで創也はそれを回避する。

「幸…もう一度言ってくれ…」

「明日デートに行くから計画立てるの手伝って!」

「同じ事言えば許されると思うなよこの野郎っ!!!」

「えっ!?!なんでゆーくん怒ってるの!?!」

勇人は目を開いて大声で全力で幸に問い詰める。

「テメエ！相手は誰だっ！女か！女なんだなっ!?!ボンツ！キュツ！ボンツか!?!そうなんだなっ!?!俺より先に彼女作るなんて不埒な真似は許さんっ！今からお前の目を覚まさせてやるっ!?!」

勇人はここがファミレスの店内という事も忘れて全力で叫ぶ。

「ちよっと黙ってゆーくんっ!」

「ぐべっ!?!」

流石の幸も不味いと判断したのか、勇人の顔面に拳を入れて黙らせる。

↳数分後↳

「さあ、お前の罪を教えてもらおうか。」

「いや罪って大げさな……」

「諦める幸、勇人だぞ。」

勇人は幸の目の前にカツ丼を起き、手を顎の前で組み、ゲ○ドウポーズで幸を問い詰めている。

「もぐ……く……まあ、明日イヴちゃんとデートだから何しようか悩んで……なにか良い案ないかな？」

「うーん……俺は遊園地とか水族館とか動物園に行っただけど……相手はイヴだろ？アイドルだから人目につく場所は不味いよなあ……」

幸の質問には俺が答える。え、勇人？今俺の足元で踏み付けて地面に押さえつけてるよ？だって他人の色恋沙汰になるとうるさいじゃん。

「まあ、この事を千聖先輩が把握してないとは思えないし……とりあえず千聖先輩にでも聞いていおくか。」

そして、俺はスマホを起動して千聖先輩に電話を掛けるが……全く繋がらねえ……

千聖先輩に電話が掛かったのは、それから10分後だった。
どうやら千聖先輩の方も同じように俺に電話を掛けていたらしく、
お互いが通話中と表示されていたのだ。

〜次の日〜

「イヴちゃん、今日はいっぱい楽しもうね！」

「私も、とっても楽しみです！」

2人はデートの目的地……『トコナツツパーク』というプールに来ていた。

「それじゃ、行こっか？」

「はいー！」

こうして、2人はプールの中に入っていった。

「さて、裏切り者の排除に向かうとするか……」

その後ろをこっそりと尾行している馬鹿者がいるとも知らずに
……

「コウさんってかなり筋肉があるんですね！」

「毎日修行（筋トレ）してるからね。」

「さすがコウさん、ブシドーです！」

2人はそれぞれが水着に着替えて何やら会話をしている。

「くっくくく…この射程10メートル、アンモニア水入りの水鉄砲を幸の野郎に思いっきりぶっ掛けて台無しにしてやる…っ!!」

私服でプール上に潜入していた勇人が幸に向けて水鉄砲の引き金を引こうとしたその瞬間だった。

「落ちろこのボケナスっ!!」

「ぐべっ!?!」

突然背後から感じた衝撃に、勇人は水しぶきを上げて、プールの中に落ちる。

「げほっ、ごほっ…何なんだよもう…げっ、創也!?!それに颯樹先輩!?!」

勇人の背後には、同じく私服の創也と、その先輩である颯樹が居ただのだ。

「まったく…これネットのオークションで2万円くらいで売ってたやつだよね?」

勇人の水鉄砲を持った颯樹が呆れながら水鉄砲を創也に渡す。

「な、なんで2人がここに…っ!？」

「幸とイヴの2人がデートに行くって言った時点でお前が妨害に出ることは俺の時（番外編）で分かってんだよ。」

「まあ、流石に見逃せないからね。」

そんな事を言いながら創也と颯樹は勇人を踏みつける。

「うわあ…そーくんもさつくくんも容赦ない…」

水に浸かった状態の勇人を2人がかりで足で踏みつけている創也と颯樹を見て、日菜が呆れた声をあげる。

「見て麻弥ちゃん！イヴちゃんとっても幸せそうな表情してるよ！」

「わあ…ジブンもあんなイヴさん始めて見ました…」

そして、そんな日菜とは真逆に興味深そうに幸とイヴを観察する人物が2人いる。

「そういえば颯樹先輩、今現在幸とイヴを観察してるあの2人は？」

「ああ、ちーちゃんや日菜、イヴとは面識があっても彩と麻弥は面識なかったっけ、創也くんは？」

「はい。」

「この2人はちーちゃん達と同じPastel*Palettesのメンバーだよ。こっちのピンクが丸山彩で、こっちの茶髪が大和麻弥。」

「へえ、やっぱりアイドルだったんですか。」

少し驚いた様子で言葉を漏らす創也

「まん丸お山に彩りを！丸山彩です！私達アイドルなんだよ？驚いた？」

若干ドヤ顔をする彩。

「あ、どうも、上から呼んでも下から読んでも『やまとまや』、大和麻弥です。」

「あ、本当に上から読んでも下から読んでも『やまとまや』だ。あ、卯月創也です。はじめまして。」

「え、反応してくれたの麻弥ちゃんだけ!？」

彩は創也に対して酷いとても良いたげな表情で見る。

「まあ、そんな事よりもです」

「そんな事よりも!？」

「問題はどうかやってあの2人をサポートするか…:でしよう?」

背後から、常識人である白鷺千聖先輩が来た。

「そうだよね…イヴと幸の天然純粹コンビの事だし…どんな厄介事に
見舞われるか…」

颯樹が足元で踏んづけている勇人を見ながらコメントをする。

「それじゃあ、みんなで着替えてお2人を追跡しながら見守るとい
うのはどうでしょう?」

「るんっ♪ってきた!それにしよう!」

「え!?!日菜ちゃん待つてよおっ!」

日菜は麻弥の一言で走り出し、彩もそれに続く形でそのまま更衣室
へと向かっていった。

「全く落ち着きがないわね…」

「まあ、俺達も行きますか。それじゃあ、とつとと行くぞ勇人。」

「た、頼む…このまま俺を捨てるなら…女子更衣室に…」

「お前いい加減黙れっ!」

「ぎゃっ!?!」

勇人はそのまま俺達に腹に蹴りを入れられ、颯樹先輩に引きずられ
る形で男子更衣室に向かうのだった……

「意外と様になってますね颯樹先輩。」

「まあ、この前ちーちゃんにデパートに連れてかれた時に一緒に水着を選んだからね。」

「男の水着を見て何になるってんだよ…はあ…」

男子全員は衣服を全て脱いで1枚着るだけなので、女子よりも速く着替えが終了し、既に俺達は外で待機をしていた。

それから数分後…

「お待ちせー!」

「よしっ!2人を追いかけるよっ!」

「彩ちゃん、日菜ちゃん、2人共もうちよつと落ち着いたらどうかしら?」

「うう…水着なんて久しぶりです…」

彩先輩、日菜先輩、千聖先輩、麻弥先輩の順で女子組は全員集合した。

「……………」

「?どうしたのちーちゃん?」

ふと、千聖先輩が颯樹先輩を見ていたのだが、その視線に気が付いた颯樹先輩が千聖先輩に近づいた瞬間だった。

「かふっ!?」：()?、」：()：」

「千聖先輩!」

突然、千聖先輩が鼻を抑え、地面に倒れ込む。よく見るとポタポタと大量の鼻血が手から漏れ出ている。

「だ、ダーリンの水着姿……とつても……良い……」

そう言つて、千聖先輩はそのまま地面に倒れ込み動かなくなった。

「何なんだよそのくっだらねえ理由は!!アンタいつからギャグ路線に走り出したんだよおお!!!」
!!!」

思わずそんな事を叫んでしまう。だってあの千聖先輩が鼻血出して倒れてるんだよ!?!意味分かんねえよ!!

「えつと……と、とりあえず僕はちーちゃんを日陰に連れて行くね?」

そう言つと、颯樹先輩は瀕死の千聖先輩に近づき、お姫様抱っこをする形でどこかへ連れて行った。ただ気になることがあるとすれば、颯樹先輩が千聖先輩をお姫様抱っこした瞬間、千聖先輩の目が妖しく光ったことくらいだが……まあ、大丈夫だろ。

ちなみに、その後全員で帰宅する際、何故か颯樹先輩はやつれていて、千聖先輩は妙にツヤツヤしていたのだが、まあ、それはまた別の話とでも言うやつだ。

「まあ良い……何とか2人に気が付かないように追跡を開始する。行

くぞ 勇人……勇人？」

さつきまで横に居た勇人から返事がないことに気が付き、勇人のいた位置を見ると……

「げ、現役アイドルの生水着姿……我が生涯……一片の……悔い……なし……ごふっ……」

勇人は地面に蹲り、大量の鼻血を地面に広げながらその言葉を最後に倒れた。

「お前もかあああああ
!!!!!!!」

【残り4人】

「あれ!?!もしかしてこれって次々と脱落していくパターンですか!?!」

「コウさん! あちらのウォータースライダーに行くのはどうでしょう?」

「わあ、すっごく楽しそう!」

イヴと幸はプール場の丁度中央に設置されているウォータースライダーに行くようだ。

「よしっ、追いかけてよう！」

彩先輩の一言で俺、日菜先輩、麻弥先輩は幸とイヴのペアから数組ほど離れた位置にうまい具合に陣取り、2人の追跡を続けていた。

「あの…創也さん。」

「ん？何ですか麻弥先輩？」

「幸さんって、どんな人なんですか？」

麻弥先輩の突然の質問に幸について考える。

「まあ一言で言うなら、勇人とは別ジャンルのバカですね。」

「随分とハッキリ言いますね…」

「まあ、でも悪い奴ではないですよ。勇人に騙されて勇人の悪事に加担することも偶にありますけど…基本的に優しくて頼りがいのある奴ですね。」

俺が幸に対して思ってるのはそんなところだろう。

「なるほど、だからイヴさんは幸さんに惚れたんですかね？」

ふと、イヴと幸の2人に目を向ける。

「コウさん…あの…私、ウォータースライダーって初めて乗るので…ふ、不安なので手を握ってもらってもいいですか…？」

「う、うん、良いよ…！」

さすがの幸でも少し照れているのか、若干顔を赤くしながらイヴの手を優しく握る。

「うわあ〜っ、すっごいイチャイチャしてる〜っ!」

「見てて口が甘くなるけど、なんだかるんっ♪ってする!」

そんな2人の様子を見てか、彩と日菜はニヤニヤ騒いでいる。別に騒ぐなどとは言わないけど、幸達に気付かれたり…しないよね?

「なるほど、たしかにいい人そうですね。」

そんな感じで話していると、幸とイヴは2人同時にウォータースライダーで下っていった……ん? 2人で?

「それじゃあ日菜ちゃん、私達もいこっか!」

「うん!」

そして、俺達の番が回ってくると、彩先輩と日菜先輩はやはり2人同時に下っていった。

「まさかコレって…っ!?!」

近くに看板などが無いか探していると、とある看板が目に入る。

『ドキドキ☆カップル用ウォータースライダー♡』

「ええええええええ???
!!!?!!」

どうすんだよ俺今日その日に会ったばかりの人とカップル用のウォーターライダーに乗らないといけないのか!?

「ど、どうするんですか!?!後ろは凄い詰まっていますよ!?!これって1人ずつ下ることって…」

麻弥先輩が近くの監視員に聞くが…

「できません♡」

「嘘だろっ!?!」

「どうかお客様、速く降りていただかないと他のお客様にもご迷惑が…」

「うっ…」

こうして…俺達の波乱万丈のデート見守り大作戦が幕を開けるのだった…

リクエスト編 デート見守り大作戦 後編

〜ある日の羽丘学園〜

「卯月創也さん……ですか？」

「ああ、ハロハピのみんなを支えてくれるとても頼もしく偉い後輩さ……」

「なるほど。」

その日、麻弥と薫の2人は偶然にも、お互いのバンドメンバーの事について話し合っていた。

そして、ハロハピのメンバーの事について話していると、偶然にも創也の名前が挙がったのだ。

「彼はハロハピではいつも裏方にばかり回っているからメンバーとしての知名度は低いからね。見えない場所でみんなを支えているんだ。みんなを支えるという点ではドラムと似たようなものだから、もしかしたら創也と麻弥は意外と気が合うかもしれないね。」

「薫さんがそこまで言うなら、ジブンも機会があつたらお話ししてみたいですね。」

〜現在〜

「これはもう……乗るしかないっすね……」

「そうですね……対して看板を見なかった俺達も悪いですし……何より目を離すと日菜先輩や幸が何をするかわからないのが怖い……」

俺と麻弥先輩の目の前には『ドキドキ☆カップル用ウォータースライダー♡』と、何とも殺意の湧くキラキラに装飾された看板がある。『カップル用』と書かれてはいるものの、先ほど、彩先輩と日菜先輩が2人で下に降りていたという事は、おそらく2人組なら何でも良いのだろう。違ったら別の意味でヤバイ。

「それじゃあ……行きますよ……」

麻弥先輩は俺の肩に手を置き、構える。

「はいっ！ジブンも頑張るっすー！」

そして、俺と麻弥先輩は俺が前方、麻弥先輩が後方という形でウォータースライダーの入り口に座る……ってか、このウォータースライダーかなり水圧が強い……入り口から手を離したらすぐに流されそう。

「それでは、いってらっしやくい♪」

そして、監視員さんの声を合図に俺たちは、流れに身を任せて、そのまま超スピードで下へと降っていく。

「うわっ!?!思ったよりもずっと速いっ！」

「あばばばばばっ!?!」

なんか麻弥先輩が変な声を出してる気がするが気のせいだろう。それよりも速く幸達に追いつかないと……っ！

そして、スライダーに流さられて2分近くが経過した時だった。ってか、このスライダー長いな……あと少して出口なんだろうけど。

「そ、創也さんっ！ジブン、一つだけ言い忘れていた事がありましたっ！」

突然、強い水音に紛れて麻弥先輩が叫ぶ。

「ど、どうしたんですか……！」

そして、何を血迷ったのか麻弥先輩は俺の肩から手を離して、俺の胸元辺りまで手を回し、後ろから抱きつく形になった………はあ!?

「ちよっ!?!麻弥先輩っ!?!な、なにしてるんですかっ!?!思いっきり当たってるんですけど!?!」

お互いを隔てるものが麻弥先輩の水着1着だけという事もあり、背中にダイレクトに2つの大きな柔らかい感触が伝わる。

麻弥先輩が何を考えているか分からず、後ろを見ると……

「本当にすみません……ジブン……かなりの運動音痴で……さらに言えば……カナヅチなんです……っ!」

「……………え?」

目に涙を浮かべ、顔を真っ赤にした麻弥先輩がそう言い切ると同時にスライダー内の密閉空間からは考えられない程の明るい光が見え始めた。

「そーくと麻弥ちゃん、多分もうすぐ降りてくるよね?」

「そうなんじゃないかな？」

ウォータースライダーの出口で、日菜と彩の2人は待機していた。思っていた以上にスライダーが長く、速く追跡を開始しないと幸とイヴを見失いそうなのだ。

「あ、来たみたいだよ」

うつすらと、ウォータースライダーの内部に映ったシルエットで、創也と麻弥が到着したと確信するが……」

「いやあああああ!!!」

ズボン!!!

「きやつ!?!」

大きな叫び声と巨大な水しぶきを撒き散らしながら現れた2人に彩と日菜は小さく悲鳴を上げる。

「びっくりしたあ……って、あれ?麻弥ちゃんと創也くんは？」

顔に飛び散った水を拭って周囲を見渡すが、2人の姿は何処にも見当たらない。

「あつ、2人とも水底でなんかジタバタしてるけど……何してるんだろ?」

日菜が指を刺した方向……ウォータースライダーの着水先であるプールの底では、麻弥が創也の背中にしがみつく形で暴れており、

それに合わせて同じように全力で暴れている創也の姿が写っていたのだ。

「これ絶対溺れてるよね!?速く助けないと大変だよっ!!」

そんな風に彩が暴れていると、創也が息絶え絶えの状態で水上に這い上がってきたのだ。髪が濡れて目元を覆い、まるでシヨートヘアの貞子の様になっているが、決して死んではいない。

「ふ……ふへへえ……川の向こうに……隙間と……機材が……」

「麻弥ちゃん!それ三途の川だから!渡つちやダメな奴だからっ!!」

創也の背中の上で安らかな表情を浮かべながら三途の川の先にある機材を幻視する麻弥に彩が前略のツツコミを入れる。

「はあ……はあ……川の向こう側で……勇人と颯樹先輩がさっさとあつちに行行って……蹴り飛ばしてきて……けほっ……」

「颯樹くんも勇人くんも死んでないよ!」

「あははっ♪そーくんも麻弥ちゃんも面白〜いっ♪」

「日菜ちゃん!遊んでないで手伝ってよおっつ!!」

結局、その場が無事に収まるのは幸とイヴを見失って数分後のことだった……

「この屋台の料理ってどれも美味しいね！」

「はい！職人さんのワザを感じます！」

時刻は早い事に、既に昼となっていた。

幸とイヴの2人は近くにあった屋台からフライドポテト、焼きそば、たこ焼きなど、施設内に設置された屋台で購入したものを近くで設置された机で昼食を取っていた。お互いが笑顔で食事を取る姿はどこからどう見ても仲の良いカップルだろう……

「なんとか順調みたいだな……」

幸とイヴの2人が幸せそうにイチヤイチャしているのを眺めながら、俺は口の中にフランクフルトを運ぶ。うん、美味しい。

「お二人とも、とても楽しそうですね。イヴさんも凄くはしゃいでますし。」

その横では、麻弥先輩が野菜スティックを摘みながら保護者のような目線で2人を見守っている。

「えっと、『現在、パスパレの何人かのメンバーと友達でプールに来ます♪この料理がすごく美味しい♪』っと……よしっ！」

よしっ！……じゃねえよ。彩先輩、アンタ本来の目的忘れてませんか、俺を映さないで、ファンに何か文句言われるから。え？顔をぼかしたって？ならいいや。

「このポテトるんっ♪ってする！もういくらでも食べられちゃう♪」

そして、その隣には絶対に2人の事なんて眼中に無いであろう日菜先輩がフライドポテトを食べていた……っつて日菜先輩！俺のフライドポテトにまで手を伸ばさなくてももらえます!?!自分の分は自分で買おうよ!?!ね!?!

「少しくらいポテトいいじゃん!」

「少しと言いつつ俺のポテトをもう半分以上食べましたよね!?!ぐっ…力が強い…っ！させるか…っ!」

「ぽ、ポテトお……っ!」

日菜先輩が買ったポテトは、既に残りカスすら余さず食べられており、その後の標的が俺の購入したフライドポテトに切り替わっていたのだ。

一方その頃、イヴ&幸ペア

「コウさん！この焼きそば、とっても美味しいです!」

そう言うと、イヴは手に持った箸で焼きそばを辛く摘み、幸の目の前……というより口元に運ぶ。

「あくん……わあ、確かにソースが効いててすっごく美味しい!」

「良かったです!」

「あ、じゃあ……はい、これどうぞ!」

そう言うと、幸はたこ焼きをつまようじで刺し、同じようにイヴの口元へ運ぶ。

「あくん…これもやっぱりとつても美味しいです！」

「うん！もういくらでも食べられちゃいそうだよ。」

創也&麻弥&彩&日菜サイド

「あ、店員さんですか？ブラックコーヒーお願いします。それとフライドポテト追加をお願いします。俺の分なくなっちゃったので。」

「あれ？そーくんブラック飲めたっけ？それとまだポテト食べるの？」

「アンタが全部食べちゃったからだよっ!？」

「2人とも思いっきり間接キスしてるけど…あれ、気付いてないよね？」

「イヴさんも幸さんも全く邪念なく純粹な気持ちでお互い接してますからね。単純に食べ物あげたかっただけでしょうし。あ、すみません、コーヒー追加をお願いします。」

俺と日菜先輩のバトルが勃発している間にも、幸とイヴのイチヤイチャは加速していた。

そして、その後も観察を続ける。

「あ、そろそろイヴちゃんと幸くんのご飯がなくなりそうだよ。」

彩先輩が指摘した通り、2人の皿は空になりつつあった。

「そろそろまた泳ぎにいく?」

「そうですね、食後の運動というやつです!」

聞こえた会話からも、そろそろ2人が移動することが分かった。

「あつ、2人が移動を始めました!」

「追いかけてよう!」

麻弥先輩と彩先輩が立ち上がり、俺もそれに続く形で2人を追いかけてようとするが……

「あれ、日菜先輩?来ないんですか?」

ふと、先程から日菜先輩が大人しく、移動しようという時に全く席を離れる気配がないことに気付いた。

「うつ……そ、そーくん……あたしの事は良いから……あたしを置いて……先に行つて……」

日菜先輩はお腹を押さえながら、椅子から動こうとしなかった……

「日菜先輩……まさか……」

俺は一つの結論に至り、それを口にする。

「フライドポテト……食べすぎちゃったんですか?」

「ぎくつ！」

小さな呻き声を漏らし、汗がダラダラと垂れ始める日菜先輩。おい、目を逸らすんじゃないよ。

「俺あんだけ言いましたよね!?自分で食べきれぬ量を買って!!」

「だって!ここのポテトるんっ♪ってするんだもん!!手が止まらなかったんだもん!!」

駄々っ子の様に騒ぐ日菜先輩

「あたし悪くないもん!るんっ♪ってさせたここのポテトが悪いもん!」

うわっ!これだけ理不尽な責任転嫁初めて見たよ!

「ああもう!!どうするんですか!このままだと幸とイヴを見失っちゃいますよ!?!」

メンバーの1人の脱落が確定した瞬間である。

「創也くん!日菜ちゃんは私が見ておくから!安心して2人を追いかけて!」

【残り2人】

「わわっ?!人が多くて迷子になりそう?!」

「コウさん!こういう時は手を繋ぐのが良いかと!」

「分かった!」

現在位置は、流れるプール…大勢の人が流れに身を任せてプールを泳いでいた。

そんな中、イヴと幸はお互いが手をつなぎ、お互いが離れないように行動をしていた。

「今の所問題はなさそうですね。」

「そうですね…というか麻弥先輩、浮輪から絶対に手を放さないでくださいね?」

もちろん、俺達も陰ながら同行している。ちなみに、麻弥先輩には貸出用の浮輪を使ってもらっている。だって、ウォータースライダーの時みたいなことになったら嫌だし。

「というか、これってジブン達がお2人を追跡する意味ってありましたか?」

「……………それ言わないでくださいよ…………」

いや、俺だつて何気に気にしてたんだよ?だって2人共すつごく順調にイチヤイチャしてるし…俺らがいる意味はたしかに無いんだけどさあ…………

「あ、イヴさん達が上がりましたよ。」

「追っかけますか？」

「そうですね。」

麻弥先輩の言うとおりに、幸とイヴの2人は既に流れるプールから上がって、別の場所へ向かっていた。俺と麻弥先輩も上がり、再び追跡を開始しようとしたところで事件は起こった。

「あの…創也さん、アレってなんか不味くないですか？」

「え？」

麻弥先輩が指をさした方向には、幸とイヴ…だけでなく、大学生くらいの大柄な男の3人組が2人を囲っていた。距離があるため、あまり上手く会話は聞き取れないが、明らかに険悪な雰囲気であることは分かる。

「へえ、この子結構可愛いじゃん…なあ坊主、その女の子を俺らに渡してくんね？」

「……」

柄の悪い男の一人が、幸相手にふざけた様子で近づくと、イヴはとうとうと、怯えた様子で幸の背中にしがみついていた。

「あれは……ナンパですね…それもかなりタチが悪い場合の。」

「え!?!それってやっぱり不味くないですか!?!」

「というか、思っている以上にヤバイと思います…」

周りの泳いでいる客は、その様子をニヤニヤと眺めている人が殆ど
：おそらく、柄の悪い3人組と同じサークルの仲間などなのだろう。
その数、12人。

「この数相手だと…ヤバイですね…」

「か、監視員さんに連絡してきます！」

そう言つて麻弥先輩が慌てて監視員のいる場所に向おうとするが

…

「待つて下さい先輩…呼ぶべきなのは監視員じゃなくて、担架と医療
スタッフです。」

「……え？」

「そつちの子もこんなひよろいガキよりも俺等といたほうが面白いと
思うぜ？」

そう言つて、集団の一人が、幸の背中に隠れるイヴに手を伸ばした
瞬間だった。

ガシッ！

伸ばされた手を幸は片手で掴み、そのまま力を込める。

「いだだだだだっつ
!?!?!?!?!」

幸の握る力が強いせいで、男は悲鳴をあげる。

「帰って！」

幸はそのまま手に更に力を込め、男を近くに居た仲間と激突させる。

「なっ!?!このガキ!!!」

一瞬で2人を戦闘不能に追い込まれたことに一瞬動揺を見せるが、喧嘩馴れしているのか、すぐにもう1人の男が幸に殴りかかる。

「幸!しやがめっ!!」

「っ!?!」

突然後ろから聞こえた声に幸は反射的にイヴを守るようにしゃがむ。

「ぎやっ!?!」

次の瞬間、目の前から男が小さく悲鳴を漏らし、吹き飛ぶ。

「あれ!?!そーくん!?!なんで此処に!?!」

幸の目の前には、自分たちと同じように水着に着替えた創也が居ただのだ。

「話は後だ!お前がこの人数相手に人1人守りながら挑んだら間違いなくて加減できないだろ!全員病院送りを防ぐから手伝え!」

半ギレの様子で幸に助太刀をする創也。

「う、うん！分かった！」

そして、創也が男を1人ダウンさせると同時に、プールでその様子を眺めていた男の仲間の12人も上がり、こちらを囲って来たのだ。

「それじゃ、お前絶対イヴを守れよ？」

「分かってる！そーくんこそ…えつと…うーんと…とにかく頑張つて！」

「いい言葉が見つからなかったんだな……」

そして、男たちが一斉に幸と創也に襲いかかる

「創也さん！言われた通り担架と医療スタッフの人達を…つてえええつ!!??」

麻弥が現場に到着すると、そこには混沌カオスが広がっていた。

「ぐっ…な、なんなんだ…こいつら…つ、強すぎる…」

まずは、合計15人の死屍累々で地面に伏す男たちと…

「コウさんくっつ!!」

創也に麻弥が尋ねる。

「ん？ああ、なんか18禁の方で俺のM疑惑が湧いたらしいのでSっぽい事をしておこうかなと思ひまして…倒した連中の上に座ってます。」

「そつちじゃなくて…」

「ん？……あ、実はあの後、勇人が戦闘に乱入してきて、その後に千聖先輩と日菜先輩と彩先輩が騒ぎを聞きつけてこつちに来て、流れるプールから干からびた颯樹先輩が漂流してきた感じですよ。」

「な、なるほど……なるほど？」

麻弥が困惑した表情を浮かべる。

「つていうか、なんとなくそーくん達の声が聞こえるな…つて思ってたけど、まさか本当にいたなんてね。」

「やっぱり気が付いてやがったか野生児。」

呆れたような、納得したような表情を浮かべる創也。

「それで、どうするんだ？お前らは引き続きデートか？」

「うーん…どうする、イヴちゃん？」

「私は、みなさんと遊んでも楽しいと思います！」

「だね！」

笑顔で創也達の方を見る幸とイヴ。

「決まりだな。」

こうして、幸とイヴのデート見守り大作戦は幕を閉じ、創也達はその後、満足するまで遊ぶのだった。

くおまけく

創也「つて事があったんだよ…プールつて初めて行ったけど、案外物騒な場所だったんだな。ま、楽しかったけど。」

「こころ」とつても楽しそうだわ！ソウヤ！次はあたしと一緒に行きましょう！あ、そのウォータースライダーにも乗ってみたいわ！」

創也「スライダーは承服しかねるけど…ま、良いかも知れないな。」

美咲（…麻弥さんとカップルスライダーに乗ったんだ…へえ…）ハイライトoff

花音（いいなあ…ずるいなあ…麻弥ちゃんが羨ましい…）ハイライトoff

創也「っ!?!殺気!?!」

くおまけ2く

医療スタッフ「あれ…我々の出番は？」

勇人「俺らの出番なんて、今回全然ないっすよ。」

颯樹「僕なんて色々あって干からびて漂流してただけだよ？」

勇人「あっ（察し）」

医療スタッフ「医務室…来ます？」

思わぬところで友情が深まっていた。

番外編 もしも創也が幼児化したら？その1

くある日の休日く

「それじゃあ創也君、これ飲んで。」

コトンと、俺の前に紫？緑？赤？……とにかくやべえ色の飲み物らしき物が俺の目の前に置かれる。

「いや、これ飲んで……じゃなくてですね？」

普通に考えてだれが飲むんだよこんなやべえ飲み物。俺に死ねってことつすか？まりなさんや。何ですか？今まで散々小説に出れなかった嫌がらせつすか？

「明らかに死ぬかもって顔しないでいいよ。安全な飲み物だから………多分。」

「多分!?多分って何ですか!?多分で俺死ぬんすか!？」

まりなに渡された飲み物を全力で拒絶する創也。

「いいから飲んでっ!!!」

そう言うつまりなさんは俺の両手を掴み、全力で押さえつけ、口元に謎の液体を運んでくる。

「離せ!!嫌だ…嫌だ!死にたくない!死にたく…いやあ”あ”あ”
”ーッ!!!」

「ソウヤったら遅いわね……何かあったのかしら？」

「確かに、創也くんが遅れるのって珍しいよね。」

「まさかどこか途中で事故にあったんじゃ……」

「こころ、花音、美咲の3人は現在、circleのラウンジにて創也を待っていた。今日は花音の発案で4人でカフェに行く事になっていたのだが、創也がいつまで経っても来ないのだ。

時間も経ち、3人がだんだんと退屈になって来たその時だった。

「こころちゃん、花音ちゃん、美咲ちゃん、ちよつと良いかな？」

しばらくすると、ラウンジの方からまりながやって来た。

「あれ、まりなさんどうしたんですか？」

「いや、なんて言うか……ちよつとした事故で……創也君が大変な事に……」

「？」「？」

まりなが言葉を濁しながら視線を逸らす。

「えっと、とりあえず事務室に来て！」

言われるがままにこころ達はcircleの事務室に入る。

「あらっ、こころにもソウヤはいないのね。」

「あ、でも創也くんは事務室に来てみたいだよ。ほら、創也くんがいつも着てるパーカーが置いてあるし。」

花音が指を指した方向には黒いパーカーが机の上に雑に置かれていた。

「それでまりなさん、その創也はどこにいるんですか?」

「その……驚かないでね?……あのソファにいるの。」

まりなが指を指した方向には一つの赤いソファが置いてあり、一部だけ白い布が掛けられており、さらに不自然な膨らみがあった。

「あら?…これは何かしら?」

こころが近づき、布をめくる。

「!!!?!?」

次の瞬間、こころは声にならない声を漏らしながらその場でフリーズした。

「え!!?!こころちゃん!!?!どうしたの?……えええ!!?!」

普段見た事のないこころの様子に驚いた花音がこころの方へと駆け寄り、こころの方に駆け寄った花音がソファの方を見ると驚愕の声を漏らす。

「え、花音さんまで!?!一体何を見たって……っ?!?!」

そして、美咲も花音と同じように駆け寄った瞬間、声にならない声

を漏らしながらその場でフリーズをした。

「ふあああ〜…あれ…たしか俺は…変な飲み物を飲ませられて…」

3人を一瞬でフリーズさせた元凶…ソファの上には、ブカブカの明らかにサイズの合っていない見覚えのある服を着た小学生くらいの少年がいたのだ。

「その…3人とも信じられないかもしれないけど、その子は「ソウヤが子供になってるわ!!」うん、そうなんだよ、創也君が子供に…え、なんで分かったの!？」

まりなの言葉を遮り、正解を口に出したところに驚きの声をあげるまりな。

「待って、え、本当に創也なの!?!なんで子供になってるの!?!え、ホントに待って、可愛すぎるんだけど!？」

美咲が困惑と喜びの混じった声を上げて自分の頬をつねる。

「そ、創也くんが…子供に…ふえええ〜っ!可愛すぎるよお〜っ!」

花音は顔を真っ赤にしながら慌てふためいている。

「ソウヤ〜どうやって子供になったの?」

「こころは興味津々な様子で創也(子供)に話しかける。

「はあ?俺が子供になった?そんな事あるわけねえだろ。」

未だに自分の状況が把握できていないのか、創也（子供）は呆れたような顔をしていた。

「でも創也くん、これを見て。」

すると花音が創也の目の前に一つの手鏡を持ってくる。

「なんで鏡を……？」

そんな事をつぶやきながら創也は鏡を受け取り、自分の顔を見る。

「……あ？誰だこの子供……え……」

ここでようやく嫌な予感がしたのか、そうやが鏡を見て言葉を詰まらせる。

「えつと……創也、なにか感想は？」

美咲が何うように創也に尋ねる。そして、創也の反応はと言うと……

「キヤアアアアッシャベッタアアアアアーツ!?」

自分が幼児化していることを理解し、悲鳴を上げるのだった。

〈数日前〉

「それで、私に何の用なの矢坂君？」

まりなの目の前には、何故かサングラスを掛けて顎の下に手を組ん

だげ〇ドウポーズをとる我らが変態、矢坂勇人がいた。

「……作者からアンタに依頼があつたんですよ。」

「い、依頼?」

「……作者からアポ〇キシンなるものを預かっている。」

「あ、アポ〇キシン!?!」

そう言うと、勇人はヤバイ色をした飲み物を机の上に置く。

「ああ……これを受け取り、あの憎き『卯月創也』に飲ませてくれれば、アンタに……100万円……だそうだ。」

「ひゃ、100万円!?!いい、いやでもそんなザ・毒薬みたいのを人に飲ませるなんて……」

まりなが驚きの声を上げるが、即座に断ろうとする。

「……それと、アンタに作者からもう一つ伝言がある。」

「で、伝言?」

「ああ……もし引き受けてくれたら、小説での出番増やしますよ(絶対とは言っていない)……だそうです。」

「喜んでお受けします。」

まりなは妙に分厚い封筒とヤバイ色の飲み物を受け取り、その場を後にするのだった。

「では、これをあの野郎に飲ませると言う事で……契約成立ですね
……お願いします。」

その場所には、邪悪な笑みを浮かべる勇人がいたとかなんとか。

〜現在〜

「あんのクソ野郎共があああああつっ!!!」

幼い見た目に反して汚い言葉高いで叫びを声を上げてしまう。
だつて仕方ねえじゃん!? なんなんだよアポ○キシンつて何なんだよ
!どつからそんなもん用意したんだよあの変態とクソ作者ア!!!

ちなみに、まりなさんは内容を全て話した後、『アメリカに国外逃亡
します。探さないでください』といった内容の置き手紙を用意して即
座に消えた。おのれ、逃げたな奴め……

「こらー！ 暴れちゃダメー！」

「嫌だ！ 離して下さい花音先輩っ！ そんな格好なんてしたくないっ
！」

そして現在……俺は花音先輩に後ろから拘束され、着替えを強要さ
れていた。というか胸！ 当てないでください！ というかそれよりも
問題がある……

着替えを強要される分にはまだいい……だがっ!!

「なんでこころがちつつちやい頃の服しかねえんだよ!! そんな格好する
くらいなら今の服でいいよ!!」

そう……現在俺の服は現在、サイズが合わないため、あまりにも不

格好なのだ。

そして、現在用意のできた服が昔のころの服だけだったのだ……
こんなガキの格好で女装するなんてどんな罰ゲームだよ……

「創也くんは男の子の顔っていうより、女の子みたいな顔なんだから
こっちの服の方が似合うよ!」

こころみたいにキラキラと目を輝かせながら花音先輩は笑顔でこ
ころの服を構え、俺の服を脱がせようと迫ってくる。

「ぐっ! 普段から筋力ないけど子供になったせいで全く抵抗できねえ
……っ!」

「え、でも創也くん抵抗してるけど、高校生の時とあんまり力が変わら
ないよ?」

「……………ぐすっ」

あれ、なんでだろ……なんか目に涙が溜まって……

「はあはあ♡泣いてる創也くんも可愛い……ほら、早く脱いで♡」

花音先輩は目をギラギラと妖しく光らせながらブカブカの俺の服
に手をかける。

「え、ちよっ待って! 本当に待って!?! R18展開になるの!?! 嫌だっ!!
死にたくないっ!! 嫌だああああ!!」

俺が花音先輩から逃げようと全力で抵抗するが、花音先輩はそんな
事はお構いなしに俺の服の中にゆっくりと手を入れ、下着ごと脱がせ
ようとしてくる。

「襲われてたまるかっ！」

「あっ……」

なんとかギリギリの所で拘束を抜け出す。身体が小さくて良かったあ……

花音先輩は名残惜しそうに手を伸ばす。すみません、花音先輩、今の状態で花音先輩の元には行きたくないっす……

「わっ!？」

移動を始めた瞬間、突然謎の浮遊感により、移動を阻まれる。

「もう、花音さん……創也が怖がってるじゃないですか。こんな子供を泣かせちゃって、大人げないですよ。」

「美咲、俺、子供違う、高校生。」

謎の浮遊感の正体……それは美咲が走っている俺を後ろから突然持ち上げたのだ。

「まったく、創也はこれから私がお世話するんですよ。これからずっと、私が可愛がるんです」

「み、美咲さん？」

あれ、なんだか美咲の様子が変だ……

「もうズット離さないよ創也♡あたしの弟としてズットズット可愛がってあげるカラ♡朝から晩まで、付きつきりで面倒を見てあげるカ

ラネ♡」

「こ、コイツ……ヤンデレになってやがるっ!？」

「はあはあ♡もう逃ガサナイ♡あたしと一緒に暮らソウネ♡創也♡」

「嫌だああああ!!!」

再び、俺の全力の悲鳴が事務室内に響き渡るのだった。

〜数分後〜

「それで、ソウヤはどうしたいの？」

「うくん……とりあえず勇人の野郎から解毒薬を奪い取らないとな……」

俺は現在、こころの膝に乗り、後ろから抱きつかれる形で会議をしていた。いつもよりこころが甘えてくるが、気のせいだと思いたい。あ、こら！ほっぺを弄るな！揉むんじやねえ！

「まりなさんの話だと、矢坂さんがそのアポ○キシンを、まりなさんに渡したのは数日前なんですよ？どうするの？」

「美咲ちゃんのいう通り、矢坂くんの居場所が分からないと、どうしようもないよね？」

そして、首から『あたしはヤンデレです』と書かれた看板を掛けて正座をしている美咲と、首から『私はシヨタコンです』と書かれた看板を掛けて正座をしている花音先輩がそれぞれ疑問を投げつける。

「それに関しては問題ない……えつと、とりあえずこれを見て。」

俺はブカブカの服のポケットからスマホを取り出し、「Twitter er」を開く。

「えつと……投稿者は " arrow slope" ……『またナンパ失敗した！現在戦績は75193戦0勝75193敗！ある仮面ラ○ダーの語呂合わせみたいになった！次は成功させる！』……このツイートと言い、アカウント名と言い……まさかこの人って……」

「ああ、勇人だ。」

「ええ……」

あ、花音さんがドン引きしてる。

「あ、でもこのツイートと一緒に投稿されてる写真、駅前の辺りだよな？それにこれが投稿されたのって5分前だ……」

「あら、本当だわ！」

「まあ、あの野郎の所在地はご覧の通りTwitterで丸わかり……」

そして、俺はこころの膝から降り……ようとしたけど、強く抱きしめられて降りられなかったから、こころに抱きつかれた状態で言葉を繋げる。

「勇人がこうやって動くのは、確実に何か悪巧みをしてる時……勇人を止めて、解毒薬を奪い取るぞ。」

こうして、俺は勇人から解毒薬を入手するべく、行動を開始するのだった。

くおまけく

創也「そういえば3人とも、何で幼児化したのに俺だって分かったんだ？」

3人「「え、匂いで簡単に……」」

創也「……聞かなかったことにする……」

3人のヤバい瞬間を垣間見た創也であった。

番外編 もしも創也が幼児化したら？その2

「創也くーん♡どこに行ったの♡怖くないから出ておいで♡」

「創也♡あたしと一緒に笑顔になれる場所に行こうよ♡」

「……………」

俺たちは現在、駅に向かうために通過点である公園にいる。否、俺たちと言うよりは、俺と美咲と花音先輩と言うべきだろう。

(まさかこんな事になるなんて…………)

俺、こころ、花音先輩、美咲の4人でcircleを出発するまでは良かったのだが……………

実はあの後、俺が野鳥や野犬に襲われたり、こころが「あつちに面白そうな物がある気がするわっ！」って言ってどっかに失踪した。つまり、俺は必然的に俺と花音先輩と美咲の3人になる訳である。

俺が野生動物に襲われたおかげで逃げる口実ができたのは良かったが…………これ、見つかったら2人に襲われるやつだよな？

(クソっ！草むらに隠れてるけどその内見つかる…………誰か援軍を呼ぶしか無いよな…………呼べるとしたら幸とか颯樹先輩あたりか?)

そう思ってスマホを取り出した瞬間だった。

ピロロロロ!!

(なっ!?着信が!?)

大音量でスマホが鳴ってしまい、慌てて着信拒否を押すが時すでに遅し。

「みくつけた♡」

「っ!？」

頭上からかけられた声に反応して上を見る。上を見れば、ギラギラと獲物を狙うような目とハイライトの消えた目がよく見える。

「に、逃げろおおおお!!」

こうして、俺vs花音先輩&美咲の闘争劇が幕を開けた。

「くそっ!!脚が短いせいで速く動けねえ!!」

俺の身体能力はアポ○キシンで子供になっている為、せいぜい普通の高校生程度に低下していた。いやね、それだけ身体能力があれば問題ないってみんな思うじゃん？

「創也っ!!今すぐ止まって!!」

「だああああ!!!しつけえ!!!」

何か変な作用でも働いているのかと思う程の速度で美咲は俺を追跡してくるのだ。

だが、体が小さいこともあり、穴の開いたフェンスや小さな路地裏の隙間など、潜ることで何度か追跡を撒いたのだが……

「よし、ここまで来れば流石に……」

「あ♡創也くんみくつけた♡」

「いやああああ!!!」

いつの間にか方向音痴により迷子になっていた花音先輩と何故かバツタリと遭遇し、再び逃げた先で美咲に遭遇するという負のループに陥っていた。

「はあ…はあ…はあ…なんなんだよ…もう…」

子供になっているせいで体力も低下したのか、俺は徐々に疲労を蓄積していった。ちなみに、俺は現在道の途中で生えている木の上によじ登り、道を歩く人からは絶対に見えない場所に隠れている。

「美咲ちゃん、そっちに創也くんいた？」

「いえ、見てないです…早くあたし達で創也を保護しないと…」

ある程度は追跡を撒くことができたのだが、やはりと言うべきか、2人が何故か近くにいる。

「あっちの方をさがしてみよ？」

「そうですね…」

木の一番上…よって2人から距離があるため、あまり上手く聞き取れないが、2人は少し話し合った後、どこかに移動を始めた。

(何処が行った…?)

2人が何処かに行った事を確認し、取り敢えず木の上から降りる。

「はあ……助かったあ……」

緊迫した状況からの脱出に、思わずその場にへたり込んでしまう。

「どうしよう……ここはどっか行っちゃったし、他に誰か頼れる人いないかな……？」

取り敢えずポケットから今の俺には大きすぎるスマホを取り出すが、まるで助けなど許さないとでも言うかのように充電切れを示している。

「はあ……どうしよう……」

どうしようもなく、その場で落ち込んでいたその時だった。

「あの……どうかしたんですか？」

頭上から聞き覚えのある声が響く。

「君、もしかして迷子ですか？」

その人物は、俺と同じ目線までしゃがむと、心配そうに問いかけてくる。

「うーん……なんかジブンの知り合いに似ているような……？」

「麻弥先輩いいつつつ!!!」

「うわっ!?!どうしたんですか!?!ってなんで自分の名前を知って……?」

俺に声をかけた人物……そして、この危機的状況で唯一見えた希望である、大和麻弥先輩の元に俺は泣きながら飛びつくのだった……。

「な、なるほど……薬で小さくなって、弦卷さんと離れて奥沢さんと松原さんに追われていると……」

「ぐすつ……そうなんです……あの変態のせいでこんな身体に……」

俺と麻弥先輩が遭遇してからしばらく……俺は、花音先輩や美咲に見つかることを恐れて麻弥先輩に頼み込んでパスパレの事務所に来ていた。だってここなら安全でしょ？

「それで服のことなんですけど……事務所でも子供用、幼稚園児サイズの服はありませんでした……」

「そうですか……」

服屋に買いに行くのは抵抗があるため無理を言っここに来たが、無駄足になったらしい。

「それにしても、本当に創也さんですね……」

麻弥先輩は不思議そうな表情で俺の頭を撫でてくる。

「ちよつ、子供じゃないんですから……っ！」

「あ、すみません。」

はあ……この姿になってから散々だな……

「あ、そうだ思い出した。」

そもそもここにはあの人がいるじゃないか。

「どうしたんですか？」

「麻弥先輩、ちよつと千聖先輩に連絡入れてもらっていいですか？」

「別にいいですけど……なんで千聖さんに？」

「だって、あの人なら颯樹先輩の子供の時の服とか保管してそうだし。」

「あ、それなら納得です。」

そういうと麻弥先輩は懐からスマホを取り出し、電話を掛ける。

「あ、もしもし千聖さんですか？ちよつとお願いがありました……この前千聖さんが皆さんに自慢してた子供の時の颯樹さんの服を何着か持ってきてもらえませんか？あ、自分が使うわけじゃないです、ちよつと知り合いの子に見せるだけです……え、性別？男の子ですけど……あ、それじゃあお願いします。」

「……………」

あらかじめ千聖先輩そんな事してたのか……そして会話が手に取るように分かるな……

「とりあえず、服の方は何とかかなりそうです。」

笑顔で電話を切り、報告をする麻弥先輩。けど、なんとというか……千聖先輩の見てはいけない暗黒面を垣間見たような気がする……

「さくっと、仕事終わったし休憩を……って、麻弥？何してるの？それにその子供は？」

そんな中、俺と麻弥先輩は適当に暇をつぶしながら事務所で待機している、入り口からとある人物が入ってくる。

「ああ、颯樹さん、えつとこの子は……えつと……」

入ってきたのは、先輩である盛谷颯樹先輩だった。

麻弥先輩の方は俺のことをどうやって説明するか迷っているらしい。けど、颯樹先輩なら事情を説明すれば納得してくれる……かな？

「大丈夫です麻弥先輩、俺が説明します。」

そう言っつて、俺は前に進む。

「先輩お久しぶりです……信じられないかもですけど、俺、卯月創也です。」

「え、創也君？あれ、でもなんかただでさえ小さい身長が余計に小さく……」

「おい！どういう意味だ颯樹先輩ゴルア！」

「あ、この反応間違いなく創也君だ。」

「それで理解できるんですね……」

麻弥先輩がなにか言っていたが、俺は気にせず説明を進める。

「まあ、こんな子供になってる理由としては……勇人がアポ○キシンを俺に盛ってきて……」

「またあのバカか……」

そんな感じで、俺、颯樹先輩、麻弥先輩の3人で事務所で待機していた時だった。

「これはドウイウ事なのカシラ?ダーリン?」

「「っ!?!」」

突如、その周囲を思わず息ができなくなるのではと思うほどの殺気が部屋を満たした。

「ち、ちーちゃん!?!どうしてここに!?!」

千聖先輩がここにいる理由など、颯樹先輩に説明してないから当然だ。だが、明らかに千聖先輩の様子がおかしい。

「その子供は誰ナノ?ホカのオンナとの子供ナノ?」

どうやら、俺を見てあるはずのない誤解をしているらしい。

「ど、どうするんですか創也さん!あの様子じゃ服を貰うどころかジ

ブン達の命を貰われちゃいますよ!？」

「誰が美味しいこと言えって言ったんですか!？」

俺と麻弥先輩は流れるような速度で颯樹先輩を盾にする

「ちよつと2人共!？」

「話は終わってないわよ?。」

「ひい!？」

(ま、不味い…このままだと颯樹先輩だけじゃなく俺や麻弥先輩まで…千聖先輩に…くっ、こうなったら仕方がない…っ!)

千聖先輩が颯樹先輩を追い詰めようとした瞬間を狙い、俺は全力で声を上げる。

「あー!ボク知ってる!颯樹おにーちゃんのお嫁さんの千聖さんだー!」

「そ、創也君!？」

その様子を見た颯樹先輩が驚愕の表情を浮かべる。そして、千聖先輩の方はと言うと……

「あらあら、こんな子供にまでダーリンのお嫁さん認定されてるんだったらもう結婚するしか無いわよね♡ダーリン♪」

これ以上無いほどの、それこそ先程の殺意を放っていたのが嘘だと思えるほどの満面の笑みで俺の頭を撫で始める。

(これで…いいんだ…大事を守るために小事を犠牲にする…俺がプライドを捨てて子供になりきって千聖先輩の思考を誘導すれば…この場は凌げるんだ…)

「あ、そーいえば、颯樹おにーちゃんが千聖さんと、遊園地に行きたいっていつてたよ!」

そういうと、俺はブカブカの服からグシャグシャになった遊園地のチケツト2人1組を渡す。え、なんでこんな物を持つてるのかつて? はぐみに貰ったんだよ。

「まあ、ありがとう坊や♡それじゃあ早速生きましょうダーリン♡」

「えっ、ちよつとちーちゃん!?ま、待ってよ〜っ!!」

そういうと、千聖先輩は近くに居た颯樹先輩の手を引っ張り、出口へと向かっていった。さらば颯樹先輩、達者でな。

「あ、でも服どうしよう…」

「あ、それなら大丈夫だと思いますよ。」

そういうと麻弥先輩は大きな紙袋を渡してくる。

「千聖さんが出ていく直前、投げ渡されました。」

「それで良いのか…まあ、なんにせよ、服は手に入ったから…良かったのか?」

こうして、俺は無事に美咲と花音先輩から逃げ切り、服を入手するのだった。

くおまけ・勇人の最新のT w i t t e r く

『駄だと成功する気がしないから次は遊園地に行つてナンパするぜ！』

いいね 753 リツイート 563

コメント

『お前またナンパかよスゲエなww』

『ボツチで遊園地とかもう大草原』

『駄でも遊園地でも変わらないだろw』

実は意外と反応は好評・

コラボ編 ヤンデレハザード

これは……あの創也にトラウマを植え付けたヤンデレ事件から多分1年後の平行世界的などこかで起きた物語。

「えーと、確か集合場所はcircleで良いんだよね？」

「ああ。なんか悪いな幸、お前まで巻き込まれて……」

「いいよ！遊び終わったからから丁度いいし！」

「何だっけ、タク達と親睦会的な何かをするんだろ？」

「まあな。」

現在、俺と勇人と幸は炎天下の中circleに向かって足を進めている。

今回の俺達の目的は『Beat the clock』というバンドを組んでいる学校の友人たちと話し合うためだ。

「「はあ…涼しい…」」

circleに到着し、自動ドアが開くと、エアコンが効いていたのか、爽やかな風が中から流れてくる。

「つて、こんなことしてる場合じゃなかった…」

外があまりにも暑いせいで、本来の目的が頭の中から飛びかけていたが、慌てて思考を戻し、防音性の高い練習室を受付の人に頼んで借りる。

え、なんで防音性の高い部屋を借りたのかって？なんかその方がカッコいいじゃん。

「失礼しまーす」

部屋の扉を開けると、1人の人物が部屋に置いてあるソファに座っていた。

「お、来たのはそっちが先か。」

「あ、亮くんだー！」

幸が笑顔で手を振る。

「あれ、来るのは創也だけだと思ったけど、勇人と幸も一緒なのか？」

「いや、ここに来る途中で勇人はナンパに失敗して道路でぶつ倒れている所を、幸は近所の小学生とダルマさんが転んだをやったところを俺が拾ってきた。」

「お前ら……一体何やってんだよ……」

若干、亮が呆れたような声を出す。

「ふっ……金髪の美女を見つけたと思っただらその人が千聖さんとは知らずにナンパして三途の川に海水浴に行つて来ただけさ……」

「いや、それカツコ良さそうに言ってるけど、実際は知り合いナンパして殺されかけるっていうクツソダサイやつだからな。」

おもわずツツコミを入れてしまう。

「ごっちはごっちで楽しかったよ！」

幸に至つては頭の中がお花畑のようだ。

「というか亮、いつここに来たんだ？」

「circleのバイト終わってから。」

「ああ……道理で早かつたわけだ……」

集合予定時刻よりかなり早く亮が来た理由が分かった。

「それじゃあ、beatのメンバーはいつ頃到着するんだ？」

勇人が亮に聞き出す。

「1万年と2千年前。」

「circleの歴史ってそんなに古かつたけ？」

「いやツツ」むとこそこじやないだろ…」

そんな会話をしながらも、待つこと1分20秒。

「こんちやっす」

「うーっす」

「失礼するでごわす」

「ういーっす」

「こんにちわー」

タク、はねしよー、カズ、隆盛、アオの5人が来た。

「とりあえず、beatのメンバーは全員揃ったな。」

ここで、改めて紹介しておこう。
タク、はねしよー、カズ、隆盛、アオ、亮の6人は『Beat
h e c l o c k』というここらでは有名なバンドを組んでいるの
だ。

ギター、池上拓也

ボーカル、羽田翔

ベース、蒲田和也

ドラム、馬込隆盛

キーボード、大森葵

DJ、石川亮

この6人のメンバーで構成されている。
いやあ、俺個人としては男の友達が少ないからこういう風に男同士の集まりってちょっと憧れてたんだよね。

「そういうえばタク、B組のりみのチョココロネにデスソース入れたってマジ?」

「ああ、あれな…面白かった。っていうかそういう創也だってこの前学校の中庭で勇人のエロ本燃やして焼きマシユマロ食ってたじゃん。」

「美味しかった。」

「ひっでえw」

そんな感じでお互いの最近を報告し合う。

「そういうえば、そのエロ本燃やされた勇人は何やってんだ?」

「今、はねしよーとそこで…」

部屋の隅では勇人とはねしよーの2人が何やら話し合っている。

「ふっ、甘いなはねしよー、女子更衣室を覗く時はこの場所が女子たちから見て死角になるから、ここにあるロッカーを使ってだな…」

「おっ！確かにこれなら前みたいに美咲にバレないで覗くこと出来るんじゃないか!?!」

「今度一緒に下見に行くかっ!!」

「いいねえ！」

碌でもない計画をしていた。

ピッ！

「あれ、今何したんだ？」

「鬼の風紀委員こと紗夜先輩とましろに『2人が女子更衣室覗こうとしてるお』って送った。」

「あ、あいつら終わったな。」

ちなみに、一方その頃、幸、カズ、隆盛、アオ、亮の5人は…

「ねえねえ、大腰ってどうやるの？たまに花咲川にで稽古に来てるけど、僕柔道見たこと無いからわかんないや。」

「興味があるでござわすか？」

「うん！…あ、そうだっ！カズ君もアオ君も亮君も一緒に隆盛君に柔道教えてもらおうよ！」

「え!?あ、俺はこの後亮と一緒に今度アオにするイタズラの内容考えないといけないから…って、ちよつと待て何で既に俺の服掴んでやがるっ！」

「あー、それじゃあカズ、達者でな…って、待ってくれ幸、なんで俺も一緒に連行されてんだってこいつ力強っ!？」

「どさくさに紛れてボクのイタズラ計画を立てるからですよ先輩……ってなんでボクも連れて行くんですか幸先輩っ!」

「さあ、始めるでござす。」

「はーい♪」

「二俺／ボクの意見は!」

何故か柔道の稽古が始まっていた。

「ってというか、創也って柔道経験者だっけ?」

「ああ、あつたなそんな死に設定。」

「死に設定なのかよ。」

「まあ、筋力が無さすぎて弱かったけどな。」

「やべえぞはねしょー!?!紗夜先輩に俺達の計画がバレてやがるっ!」

「俺の方もましろから『覚悟シテネ♡』って送られて来たぞっ!?!カタカナ表記でヤンデレみたいなのが余計怖い!!」

「やべえよやべえよ!?!どうする!?!国外逃亡するか!?!」

「いや、月の裏まで逃げるぞっ!」

なにやら変態とその協力者が喚いているが気にすることはない。

段々と混沌^{カオス}になりつつあるこの部屋。

「にしても、ヤンデレかあ…はあ、あ…」

そういえば、あの事件からもう1年経ったのか…

「ん？なんかヤンデレに嫌な思い出でもあるのか？」

「え、そんな分かりやすい顔してた？」

タクからの指摘に驚く。

「まあ、小さくため息付いてるし。」

「あはは…実を言うと、大体1年くらい前に女性を強制的にヤンデレに変貌させた上でドーピングをするっていう薬が一部で流出して…」

「なんだその漫画みたいな薬。」

「製作者は弦巻家だぞ。」

「納得した。」

「まあ、さすがに危険だから処分はされたいから、もう関係のない話だけどな。」

「うわあ…それさ、彼女持ちの奴とかがその薬の効果を受けたらやばくね？」

「あ、タクはモカと付き合ってるんだっけ？…食われるなよ…パン

みたいになくつと…」

「あはは…食われるって大ききな…」

「ま、もう終わったことだし、気にすることはないんだけどな。」

俺とタクがそんな俺のむ^トかし話^{ウマ}に関して話しているときだった…

「それは本当でござわすかつ!？」

『!？』

なにやら隆盛がスマホを片手に何やら 切迫した様子を見せている。

「おい隆盛、どうしたんだ隆盛?」

「どうしたんですか先輩?」

「た、大変でござわす……………」

「大変?何が大変なの?」

カズとアオ、幸が隆盛に尋ねる。

「今、この街全体に凶悪なウイルスが蔓延しているからそのウイルスの排除を頼みたいとバイト先から連絡が入ったでござわす……………」

『ウイルスっ!？』

なにそれ超怖いんだけどっ!?

「つて、隆盛のバイト先つて弦巻家の黒服と同じだよな……一体、どんなウイルスが蔓延してるんだ?」

タクが落ち着いた様子で確認をする。

「今、この街に蔓延しているウイルス…それは…」

『そ、それは…?』

「飲んだ相手を強制的にヤンデレに変貌させる凶悪極まりないウイルス、SOIYAウイルスバージョンがこの街に蔓延しているでござすっ!!」

『そ、SOIYAウイルスバージョン?』

俺と勇人意外の6人が隆盛の言った言葉を思わず聞き返す。

そして、俺と勇人はと言うと……

「な、なんだってええええ!!!???」

実際にその驚異を体験した身として、驚きの声をあげるのだった。

今この街で、1年前の悪夢がグレードアップして再現されようとしていた。

コラボ編 解毒剤を入手せよ!

皆さんこんにちは。創也です。

君たちは、バイオハザードってゲームを知ってるかな？

バイオハザードってのは、大量のゾンビが出てくるゲームなんだ。

あ、俺はホラーがあんまり好きじゃないからやった事はないよ？でもさ、俺たちの今の状況は、まさに「バイオハザード」って言葉がしつくりと来るんだよ……

「おいっ！向こうからスタンガン持った美咲が突撃して来てるぞっ!? 行けっ！亮！襲われて時間稼ぎをしてこいっ！」

「はあ!?タクお前それマジで言ってるのか!?みるよみーちゃんの目を！ハイライトがストライキした完全にヤバイ眼をしてんだぞっ!?俺に死ねっていつてんのか!?!」

「そんな事いつてる間に向こうから今度はなんかヤバイ薬品が入ってそんなビンを持った紗夜が来てるでござすっ！」

「待って!?完全に挟み討ちじゃないですか!どうするんですか創也先輩っ!?!」

「タク!『でら辛いソース』は持ってるか!」

「あるぜっ!」

「よしっ！ 勇人！ これ持って捨て身タツクルだ！」

「ならば亮！ お前もそれ持って捨て身タツクルだ！」

「『できるかあ!!!』」

「構うな！ 幸！ 今すぐ2人をぶん投げろ！」

「了解だよ！ カズ君！」

「『いやああああ!!!』」

そんなカオスな状況となっていた……

↳時は遡る事1時間前↳

「それで、俺とアオの2人は気がつくど盗聴器を仕掛けられていたわけだけど……どうする?」

俺たちは現在、部屋のカーテンを閉め、部屋の電気を消し、明るく光るスマホを中心に囲う形で作戦会議をしている。

「というかさ、2人はそもそも誰に盗聴器を仕掛けられたの?」

幸の疑問に、俺たちは考える。

「アオは……十中八九燐子先輩やろ……」

「ですよねえ……」

まあ、はねしよーの言う通り、アオの場合はそれで間違いはないだろう。

問題は俺の方だ。

「じゃあ、俺は誰に仕掛けられたと思う？」

『……………』

全員が一斉に黙る。

そう、俺が一体誰に狙われているのか分からないのだ。

「創也を狙いかねない人物……………こころとかのハロハピメンバーとかだよな？後はおたえとか意外と千聖先輩とか友希那先輩、リサ先輩、紗夜先輩とかじゃね？」

「タク…………俺さ、逃げ切れると思う？」

「お前逃げ足だけは国宝級だろ。」

ダメだ…………解決の糸口が見つからない…………

『……………』

再び訪れる沈黙。

「な、なら解毒の方法考えようよっ！」

「まあ、そうなるでござすな。」

また幸の案で会議が再開される。

「というか敦盛先輩、解毒薬ってどこにあるんですか？」

「たしかに…それは僕も気になってた。」

「電話で聞いた話だと、『SOIYA』に感染したヤンデレ達が『合法的に好きな人を襲えなくなるから』という理由で弦巻家に攻めてきたから解毒薬はショッピングモールの屋上にヘリで届けてあるらしいでござす。みんなには、そこで解毒薬を調達してほしいでござす。」

『何そのゲームの武器調達みたいな内容。』

ほぼ全員が思ったことを口にしてしまう。

「まあ、つまり俺達の目的はヤンデレ達から自分の身を守りつつ、ショッピングモールで解毒剤を入手して治療をしろってことだな！」

はねしよーが今の内容をまとめてその場から立ち上がる。

「よし、やる事が決まったんだったら、これはもう行くしかねえよな。」

それに続くように勇人も立ち上がる。

「なら、俺はいろいろと準備をしてくるよ。流石に日菜先輩や盗聴器を仕掛けた連中を見て、素手でヤンデレに挑むなんて無謀なマネはできいないな。」

そういって、タクが立ち上がり、『ルチャドール』の倉庫らしき場所に向かっていく。

それに続くように、次々とみんなが立ち上がっていく。

「よしっ！絶対生きて帰るぞっ！」

『おう!!!』

俺達は覚悟を決め、円陣を組みながら、ショッピングモールへと至る扉を開ける……

ガチャリ

『ア、ヤットデテキタネ♡』

『……………』

俺達が扉を開けると……目の前には目が暗く濁った大量のヤンデレと思わしき知り合い達が店を囲うように待機していた。

「に、逃げろおおおおお
!!!!!!!」

『うわあああああ
!!!!!!!』

〜現在〜

「おいっ！こっちの道ならヤンデレがない！こっちに逃げるぞ！」

「っ!?!カズ!!避けろっ！」

「!?」

次の瞬間、上空から何者かがカズに向かって突撃してくる。が一髪のところ、勇人が叫び、カズが反射的に避ける事で、衝突は防がれる。

『さつきは失敗したケド、もうニガサナイヨ、カズクン♡』

「げっ!? 日菜先輩もう回復したのっ!?」

タクが驚きの声をあげる。

「いけっ! 勇人! もう一度捨て身タツクルだ!」

「人をポ○モンみたいに扱ってんじやねえぞこの野郎!」

何やら勇人が文句を言っているが関係ない。

「「やれっ! 幸!!」」

「了解!」

「いやああああ!!!」

ふたたび、『でら辛いソース』を持たされた勇人が幸に胸ぐらをつかまれ、俺と、はねしょーと亮の合図でそのまま日菜先輩に向かってぶん投げられる。

「いやああああ!!! 辛い辛い辛いつつ!!!??」

もう一度、『でら辛いソース』を喰らい、水を求めて逃亡を開始する

日菜先輩

「この調子でショッピングモールに向かうでござす！」

「主に勇人先輩が肉壁になってくれてるおかげでボク達の被害は0……この調子なら誰一人欠けることなくショッピングモールに辿り着けますよー！」

アオの言うとおおり、主に勇人が強制的に肉壁の役割を果たしてくれているということもあり、俺達は無傷？でショッピングモールへの道を進む事が出来ていた。

そして、ついに……

『到着だーっ!!!』

誰一人欠けること無く、ショッピングモールへの道に辿り着くことが出来た。

「お、お前ら……後で覚えて……ろ……よ……グフツ……」

なお、勇人はまだまだ元気のようにだ※普通に限界です

「さあ、屋上に向かうぞっ！」

『おう!!!』

タクの掛け声を合図に、俺達は屋上へと向かうのだった。

コラボ編 グループと別れるのは死亡フラグ

く ショッピングモール 入り口く

「よし……ここまでは大丈夫だな……」

俺達は現在、再びショッピングモールへと向かっていた。最初にショッピングモールに到着した時は、ショッピングモール内に3桁に届くのでは？と思うほどの大量のヤンデレ達が居た。

タクの判断で一時撤退。そしてタクが呼んだ援軍の“RAISE A SUILEN”のレイヤ、マスキング、パレオ、チュチュの4人がマスク装備で『でら辛いソース』を届けてくれたのだ。

一応、あと1人バーサーカー？がいるらしいのだが、SOIYAに感染しているらしい。

「それで、一体どうやって解毒薬を取りに行くんだ？」

タクが質問を飛ばしてくる。

「まあ、入り口だけで分かる限り3桁はいるからなあ……あ、でも一応どうにかする作戦はあるよ。」

「おお、流石だな。それでその作戦内容は？」

はねしよーが作戦の内容を聞いてくる。

「まず作戦その1。 罠を使う。」

俺が囀発言をすると同時に、全員の視線がいつせいに勇人とチュチュに向く。

「What!?!」

2人そろって流暢な発音で返事が帰ってくる。

「おいおいおいおいおい、ちよつと待て、何で俺が囿になること確定してんだよっ!」

「そうよ!そんなCrazyな事出来るわけ無いでしょ!?!」

「そうです!チュチュ様ではほぼ間違いなくヤンデレ達に秒で掴まっ
てしまいます!絶対に無理です!」

「パレオ!?!」

「じゃあ、この案は勇人だけにやってもらおう。」

「はあ!?!ふぎけんなよ!いくら俺でもあんなヤンデレの群れの中に突
入したら死ぬぞ!?!」

「バーカ死ぬわけねえだろ。お前3日前の通学中に横断歩道の先に居
た女の人をナンパしようとして大型トラックに真正面から轢かれた
くせにダメージ0だっただろ。」

「何でその事お前が知ってたんだよ!」

『え!?!』

俺と勇人意外の人物が驚きの声をあげる。

「通学中にナンパしてたのかお前!?!」

カズ、驚くところ違う。通学中にナンパじゃなくてトラックの方。

「トラックに轢かれて生きてたの!?! ゆー君、トラックの人、大丈夫だった!?!」

幸、それも違う。トラックの運転手の安否でもない。

「トラックにぶつかってノーダメージってどんな防御力してるんですか!?!」

あ、良かった、アオが俺の言いたいこと指摘してくれた。

「ああ、トラックに正面からぶつかってトラックが陥没したくせに、こいつはノーダメージだ。トラックの運転手が驚いてたのをよく覚えてる。」

「それなら、囧は勇人で決定でござすな。」

『異議なし』

「異議大アリだクソツタレ!!!」

「異議があるうがなかるうが行ってこい! ナンパ成功の唯一チャンスだろ。」

勇人の囧作戦 開始。

『いやあああああああ!!!!!! おのれ創也アアアアア!!』

俺達は現在4階にいる。

「いやあ、勇人に拡声器を持たせて正解だったな。」

俺が考えた作戦……それは、勇人に拡声器を持たせ、大きな音でヤンデレ達を勇人の元へ1点に集める。そうする事でモール内のほとんどのヤンデレが集まるのだ。

「ああ、創也の言うとおり、ほとんどの階層のヤンデレ達が勇人めがけてまっしぐらだ。」

亮が感嘆した声をあげる。

「え、ちよつと待って、アレと同じことを私にやろうとした訳!？」

「ご安心ください！チュチュ様の身の回りの安全は、このパレオがお守りいたします!」

ビシツとチュチュに敬礼をするパレオ。今更ながらこの2人はどういう関係なのだろう？飼い主と飼い犬かな？※正解です。

「そういうえばタク、なんでそのSOIYA？が街中に蔓延することになったの?」

「さあ、俺には分からん。隆盛、なにか知ってるか?」

「分からないでござす。一応、スマホからは上司の黒服が蔓延したから解毒を頼むとだけ聞いているでござす。」

「あれ、というかなんで隆盛先輩のバイト先の黒服さんは隆盛さんに電話を出来たんですか?」

「多分、アレでござす。SOIYAウイルスの抗体を全員が身につけているんだと思うでござす。」

「だつてさ」

「抗体って……身につけられるものなの？」

「…俺、黒服に就職しようかな……」

割とマジで黒服さんに就職すれば強くなれる気がしてきた…

「まあ、そんな事より行くぞ。あいつがみんなを引き付けている間に、屋上を目指すんだ。」

カズの言葉を合図に俺達は屋上へと進んでいった。

「うう……」

「ん？どうしたんだ、アオ？」

先程からずっと、アオが身体をもじもじさせている。

「いや…その…や、やっぱり大丈夫です!!」

「いや大丈夫じゃねえだろ…顔が真っ青になって足ガツクガクじやねえか。」

はねしよーが指摘をする。

「あ、もしかしてトイレ？」

幸が予想をしてアオに聞き返す。

「えっ!? いや…その…」

(((((あ、これ絶対トイレだ))))))

「うう…本当に大丈夫ですから…」

アオは口では大丈夫と言いつつも、明らかに顔を青くしてプルプル震えている。

「流石に一人でトイレなんてありきたりな死亡フラグをアオに建てさせる訳にもいかないだろ…：はあ、タク、こちらへんで一番近いトイレはどこだ？」

「この階層はトイレがないから、下の階が一番近いな。」

「分かった。タク達は先に行つててくれ。俺がアオをトイレに連れていく。」

「え…い、良いんですか、創也先輩…？」

「こんな場所で漏らして痴態を晒すのと、その状態でヤンデレに襲われて痴態を晒すの、どっちが良い？」

「今すぐ行きましょう!!!」

即決だった。

「じゃ、後から追いつく。」

「分かった。ちゃんと戻ってこいよ。」

こうして、俺とアオは別行動を、タク達は本来の目的を達成するために、屋上に向かうのだった。

く別行動から約3分後く

それから俺とアオは何事もなく進み、男子トイレの前まで到着していた。

「よし、思ったよりも勇人が活躍しているおかげでこの場所に人の気配は無い……なるべく早めに用を済ませろよ?」

「すみません、ありがとうございます!!」

そういうと、アオは全速力で目の前の男子トイレに駆け込んでいった。

「さてと、その間俺は何をしよつかな…」

そんな事を呟いて適当に待っていた瞬間だった。

「あ、創也さん、こんなところで何をしてるんですか?」

「っ!？」

突然、後ろから声が聞こえ、声が出た方向を見る。

「り、燐子先輩っ!？」

後ろを振り向けば、ロゼリアのキーボード、白金燐子先輩が居た。

(ま、まずい…今この状態でアオが出てきたらまず間違いなく手遅れだぞ…そうでなくてもヤンデレの力は馬鹿に出来ない…リスクは高いけど、『でら辛いソース』を使うか?)

「あ、あの、創也さんはアオ君がどこにいるか知りませんか？」

燐子先輩は、やはりアオを狙っているようだ……

「さ、さあ、分かりませんね…家にでもいるんじゃないですか？」

「そんな事は無いと思います、だって、私が設置したアオ君の部屋の防犯カメラの映像には、だれも映っていませんし。」

「そ、そうですか…」

隠すつもりはないのか、堂々と盗撮宣言をする燐子先輩。

「あ、それじゃあ俺、今からトイレに行くつもりでしたので…」

とりあえず、アオが出てくる前に外に燐子先輩がいる事を伝えようと、トイレに向かって動き出したその時だった。

バチツ!!

「がつ!？」

突然、背後から身に覚えのある痛み……スタンガンの攻撃を喰らい、その場に崩れ落ちる。

(ク…クソツ…仲間がいたのか…)

目の前に突然現れた燐子先輩に気を取られすぎたせいで、後ろからの攻撃に対応できなかった。

「ふふっ…ありがとうね、燐子ちゃん。創也くんの注意を逸してくれて。」

「いえ、私もアオ君を手に入れるのに、創也さんは最大の障害でしたので、松原さんがどうにかしてくれて助かりました。」

そんな会話がなんとか耳から聞こえてくるが、既に限界が近かった俺は、そのまま意識を手放すのだった……………。

コラボ編 相手を無駄に煽る奴は何か企んでる

「……………」

背中あたりに鈍い痛みを感じながらも、俺は起き上がる。

「……………は……………」

目を覚ますと、どこかの部屋のような場所にいた。壁を見渡しても窓はなく、まるで監禁室のような印象だ。

「そうだ……………俺は確か燐子先輩に気を取られて……………後ろから……………」

だんだんと、ここに来る前の記憶が鮮明に蘇る。そして、移動しようと思ったのだが、いつの間に嵌められたのか、手足に手錠が取り付けられていた。

「うう……………」

「アオ！」

近くを見れば、アオが気絶して倒れていた。もちろん、手足を手錠のようなもので縛られている。

「あれ……………創也先輩？」

「良かった……………無事だったんだな……………」

「……………まさか……………」

「ああ、ほぼ間違い無くお前の燐子先輩の彼女さんの家だよ。」

「そうだ……あの時ボクはトイレを出たところを……スタンガンで……」

こうやってアオと今置かれている状況を確認し合っている時だった。

ガチャ

「あ、ヤット起きたんだね、2人とも」

「っ!?!」

突然、俺達を閉じ込めたはずの扉が開き、見知った人物が入ってくる。

「花音先輩……」

俺達の目の前には、燐子先輩の協力者と思われる人物……松原花音先輩が立っていた。

「何のつもりですか？俺らはデパートの屋上に行かないといけないんですけど?」

安全のため、身体をよじってアオの前に出る。

「ふふっ、二人共もうどこにも行かなくて良いんだよ♪」

こちらの話など聞いていないのか、花音先輩は一方的に離し続ける。

「アオくんは燐子ちゃんが、創也くんは私が守ってあげるからね♪」

「へえ…守るって言って俺らを手錠で拘束するのが先輩方のスタンスなんですか…」

「ちよつと先輩!?!煽るのは危険なんじゃ…」

「いや、このまま煽る。一応離れてろ。」

そう言つて、アオは俺から少し距離を取る。

「だって、2人を手錠で拘束しておかないと、いつどこで他の女に誑かされるかわカラナイもんね♡」

「へえ…じゃあ今のところ俺らはどこにも行かないのでこの手錠の鍵がどこにあるのか教えてくれませんか?」

「鍵はここにあるけど…開放するのはまだ駄目かな♡」

そう言つと、花音先輩はスカートの右ポケットから3つの鍵を取り出し、同じ場所にもう一度戻す。

「ですよねー…なら話を変えましょう…一体俺達をどうするつもりなんですか?俺一応この後人との約束があるんですけど?」

(人との約束?)

「へえ…ちなみに誰なの?」

「俺の質問に答えてないのに、俺は答えなきやいけないんですか? まあ、いいですけど。」

「ちよ、ちよつと創也先輩！本格的にヤバそうですよ!？」

アオの言うとおりに、花音先輩の眼から光が消え始め、嗜虐心が灯つた瞳となる。これは後ひと押しかな？

「実は今日の午後、こころとデートの約束があるんですよ。」

まあ、普通に嘘だけど。

「え!？」

アオが驚きの声を上げ、花音先輩の瞳から完全に光が消える。あ、やべ…煽りすぎた…

「ドウイウコトナノ？ナンデ創也クンノ口カラホカノオンナノ名前がデテクルドコロカ、デートノ約束ナンテシテルノ？」

我を忘れたような様子で花音先輩は俺の方に近づいて床に強く押し倒してくる。

「っ!？」

「嘘ダヨネ？ダツテ私ト創也クンハ相思相愛ダモンネ？ココロチャンジヤナクテ私ヲ選ブモンネ？」

そう言うと、花音先輩は俺にゆっくりと覆い被さり、唇を奪っていく。

「むぐっ!？」

「はあ…はあ…創也クン創也クン創也クン♡」

(やべえ!?舌まで入ってきた!?!いや…それでもチャンスだ…)

「あわわわわ…」

近くではアオが顔を真っ赤にして目を逸している。

ガチャ

「松原さん、準備が出来まし…あ、もう2人で楽しんでるみたいですね。」

しばらく、花音先輩にされるがままにされていると、扉が開き、燐子先輩が入ってきた。

「ぶはあ…準備できたの?」

「はい。ですので、松原さんにも来ていただけると良いのですが。」

「うん、分かったよ。今行くね。」

そう言うと花音先輩は俺から身体を離し、扉の方へ向かう。

「後でいっぱい楽しもうね♡創也クン／アオクン♡」

「ひっ!?!」

去り際に、花音先輩と燐子先輩がそんな事を呟く。その事もあって、アオが小さく悲鳴を漏らす。

ガチャリ

そう言い残し、2人は退出をしていった。

「ど、どうするんですか!?!このままだとボク達先輩に確実にやられま
すよっ!?!」

アオが慌てた様子で床に倒れた俺の方に寄ってくる。

「まあ、落ち着け。」

そう言っつて、俺はポケットから、3つの鍵を取り出す。

「え!?!なんで創也先輩がその鍵を持ってるんですか!?!」

「ふっ…何のために俺が花音先輩を煽りまくったと思う?しつかり
と、こつちに近づいてきた瞬間を狙って鍵を盗んでたんだよ。」

そして、鍵を使って、俺とアオの手錠を解除する。

「さてと…1つだけ鍵の形状が違うけど…まず間違いなく部屋の鍵
だろうな。」

床から起き上がり、試しに扉の鍵穴に差し込むと、扉が空き、進み
始める。

「す、すい…」

「まあ、普通に死ぬかと思っただけだな…」

いやあ、ホント危なかったよ…

「まあいい…逃げるぞ。」

「はいっ！」

こうして、俺達は監禁室から脱出を果たしたのだった。

くおまけく

side???

創也&アオ脱出から1時間後。

花音「いつの間に盗まれてたなんて…ナンデ逃ゲチャツタノカナア？」

燐子「アオクンガ逃ゲタ逃ゲタ逃ゲタ逃ゲタ逃ゲタ逃ゲタ…ナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデ？」

2人を取り逃がした事で、花音と燐子の心は乱れていた。

??「やつぱり、彼は油断ならないわね。2人だけでやろうとするからそうなるのよ。」

花音&燐子「だ、だれっ!?!」

突然、部屋に何者かの声が響く。声のした方を見ると、何人かのフードを被った人達が入り口に立っていた。

??「私たちと協力するのはどうかしら?花音?」

花音「その声って…まさかっ!?!」

??「私達で彼らを分け合おうですよ。私たち個人が争っても、彼らは逃げてしまいます。」

??「なら、私たちが協力すれば確実に、彼らを捕まえることが出来ます♡」

??「それで、2人の返事を聞かせてもらえるかしら?」

燐子「分かりました。みなさんの案に乗ります。」
花音「それで確実に創也くんが手に入るなら……」

ヤンデレから逃げる者たちに、再び魔の手が迫っていた。

コラボ編 最終到達目標地点

「悪い…手間かけさせたな」

「いや、大丈夫だ。」

俺とアオは隣子先輩の家を脱出し、亮の家へと到着したのだ。

「一応説明頼むぞタク。俺達が誘拐された後に何があった？」

「ああ、お前らが誘拐された後に俺とはねしよーとチュチュの3人でデパートの屋上に到着して解毒剤を入手したんだけど…チュチュは残って、モール内のヤンデレの治療だ。」

「おい…それじゃあRASの3人は？」

「それなら俺たちが感染の兆しを見つけたから帰らせたぞ。」

RASの3人については亮の方から説明があった。

「解毒剤の入手と入れ違いになっちまったんだ…」

「そして、3人を帰宅させた後に公園で香澄殿と沙綾殿が襲ってきたでござす。」

「なるほど。ちなみに勇人は？」

「お手上げだ。電話も繋がらないし、どこに言ったかも不明。」

カズが両手を上げ、降参のポーズを取る。本当にお手上げなのだろう。

「えっ!? 本当にどうするんですか!？」

「まあ、大丈夫でしょ。ゆー君を殺す方法なんて現状で核兵器くらいしか思い浮かばないし。」

アオの疑問には幸が応える。

「とりあえず、最終目標について話し合おうぞ。」

こうして、再び作戦会議が始められた。

「なあ、なんで会議はこのスタンスでやるんだ?」

俺達は今度は亮の家で作戦が始められた。

ちなみに、案の定スマホのライトを中心に囲っている。

「メンバーは俺、タク、はねしょー、カズ、幸、隆盛、アオ、亮か……
1人減って寂しくなるな。」

「いや、アイツまだ死んでねえだろ。」

何気に勇人が死亡判定を受けているがアイツ絶対生きてんだろ。

「まあ良い……とりあえず今後の作戦を立てるために、現状確認だ。」

俺達の現状

その1、戦力と肉壁が減った。
その2、解毒剤が手に入った。

「こんなところだよなあ……」

「良いニュースと悪いニュースの2つだな……」

思わずそんな事が思い浮かんでしまう。

「何か……現状を打破するアイデアがあれば……」

カズがそんな事を呟く。

「待ってたぜ！その一言をつ！！」

『だ、誰だっ!?!』

突然、扉が音を建てて吹っ飛び、何者かが会議室に突入してくる。

「ふっ、ピンチになって颯爽と現れる……矢坂勇人、ここに見参!!!」

扉を蹴破って入ってきたのは行方不明になっていた勇人だった。
まあ、全身ボロボロではあるが。

「扉弁償しやがれこの野郎っ!!!」

「うぎやあああ!!!?」

もちろん、亮の顔面ドロップキックというオマケ付きだが。

「いたた…首の骨にヒビが…」

「入ってねえから安心しろ。」

日曜大工のような格好をしながら自分で壊した扉を修理する勇人。

「まあ…今のはお前が悪い。」

『うんうん』

タクの一言に全員が頷く。

「それで、なんで人んちの扉蹴破ってまで突入してきたんだテメエ？」

「いや…このSOIYAウイルスによるパンデミックを終わらせる方法を見つけてきた。いてっ、指叩いまった。」

『え!?!マジで!?!』

俺らの耳がぶっ壊れてなければ勇人から衝撃的な言葉が聞こえたんだけどっ!?

「おいつ…このパンデミックを終わらせる方法ってマジか!?!」

はねしよーが勇人に迫る。

「ああマジだ。ま、その分危険度は跳ね上がるけどな。」

トントンと、釘をうちながら応える勇人。

「まあ、順を追って説明するからちよつと待ってろ。」

手を休めずに説明を始める勇人。

「まず、俺らが最初にヤンデレに遭遇した場所はどこだ？」

「circleだな。」

「そう、俺らが最初にヤンデレに遭遇したのはcircleだ。そこで氷川先輩に遭遇した。それで、次に遭遇した場所を言ってみろ。」

「タクの家、ショッピングモールでござす。」

「そうだ。そして、ヤンデレが一番多かった場所は？」

「ショッピングモールだ。」

「まあ、そうなるな。でも、それは弦巻家が開発した解毒薬がショッピングモールにあったからだ。それを抜けば一番多かったのは？」

「タクの家…」

「その通り。タクの家が一番ヤンデレが多かった。」

「そ、それが何だっというんだ？」

タクが緊迫した様子で尋ねる。

「じゃあ、なんでタクの家が1番ヤンデレが多かったと思う？実際に見に行ったから分かったよ……」

勇人の言葉に全員が息を呑む。

「タクの家がSOIYAウイルス発生の中心地だからだ。」

『なっ!?!』

その言葉に全員が驚く。

「じゃあここで、なんでタクの家が中心地なのかって事になる。」

そこまで言ったところで、勇人は扉の修理を止め、ポケットからスマホを取り出し、何枚かの写真を見せてくる。

「な、な、何ですかこれっ!?!」

勇人が見せた写真には、どこから撮ったのかタクの家を中心に大量のヤンデレが囲っている画像が映し出された。

「ああ…何故か俺らが居なくなっただけでもタクの家を守るようにヤンデレ達が待機…いや、配置されてるんだ。」

そう言うと、スマホをスライドして次の画像を映し出す。これは……タクの部屋？って、誰だ？このタクの家にいる女。

「このタクの部屋の中にいる人物…見覚えあるか？」

「こいつ…あかね…茜じゃねえかつ!？」

「へえ…茜って言うんだ。この子。まあ、良い…結論から言うぞ。」

「こいつが今回のSOIYAウイルスによるパンデミックの首謀者だ。」

こうして、俺達は再び、タクの家に向かう事になるのだった。

コラボ編 ヤンデレ VS タク&創也

「何考えてやがるこの脳内お花畑!!」

タクが目の中の女性……………茜さんに問いかける。

「ふふっ…そんなの決まってるじゃん♪…………たーくんを私が独り占めするためだよ♡」

息をするように、挨拶をするように答える。しかし、ならば可笑しい。

「ちよつと待て、それなら何故SOIYAをウイルスに改良してまでヤンデレを量産した…アレは女が面識のある男を襲うように魔改造する最悪の道具なんだぞ？アンタの愛しのタクだって襲われる危険だってあるはずだ。」

「そんなの心配する必要ないでしょ？だって、たーくと私は相思相愛なんだよ？ホカのオンナなんかたーくんが捕まるわけ無いじゃん♡」

笑顔で答える茜さん。瞳に光はなく、タクをしっかりとロックオンしていることは分かる。

「とっても便利だったよ♪前にたーくんを監禁した時はbeatのみんなに邪魔されたけど、みんなの彼女がヤンデレになって足止めしてくれたから、こうしてたーくんと出会えたんだし♡まあ、ひとり邪魔者はいるけどね…」

茜さんはギロリと俺を虚ろな瞳で睨みつける。

「っ!?!創也!!避ける!!」

タクが大声を出し、警告をする。俺は右へ、タクは左へと大きく飛ぶ。

「やっぱり速いわね、ソウヤ♡」

「タークン? ナンデ避けたの?」

背後からはいつの間に忍び寄ってきたのか、こころとモカの2人がいた。

「なあ、創也……お前、勝てると思う?」

「無理だな。蹴るところか殴ることだって出来ない。」

最悪の組み合わせだ。俺達は攻撃が出来ないのに相手は3人でしかも俺達に攻撃し放題。劣勢なのは誰が見ても明らかだった。

「くっ!」

状況を分析してる間にも、こころやモカが突進してくる。かろうじて避けられているが、ここは室内…避ける事が出来るにも限界がある。

「ネエソウヤ? ドウシテアタシカラ逃ゲルノ?」

「お、落ち着けっ! お前忘れたのか!?! 1年前のSOIYAの事件を! 今あそこでニヤニヤ傍観してる奴が同じことをしようとしてるんだぞ!」

「そんな事関係ないわっ! あたしは…今すぐソウヤを私だけのモノにしたいのよ…っ!」

そう言うと、こころは、体勢を低くかがめ、俺に体当たりするように突撃して来る。

ギリギリで避けようとするが、後一步で避け損ねてしまい、こころにガツシリと腰を掴まれ、そのまま床に押し倒される。

「創也っ!」

「気にするな! 茜さんの狙いはお前だ! 今すぐ逃げろっ!」

そうだ…黒幕である茜さんの狙いはタクなのだ…それならタクを茜さんから遠ざけ、その間に無力化すれば良いのだ。

「させると思う?」

「ちっ、駄目だ! 玄関を塞いでやがる!」

「ふふっ、ここであーくんを捕まえないと、逃げられちゃうもんね♡」

「クソッ!」

「ねえ、ソウヤ? どこを見ているの? ソウヤはあたし意外見る必要なんてナイでしょう?」

「お、落ち着、んぐっ!」

次の瞬間、こころは俺の唇を強引に奪い、物理的に黙らせてくる。

「どこにも行かせないわ♡」

これはヤバイ…本格的にピンチだ。タクは辛うじてモカから逃げ

切っているが、茜さんがいつ参戦するかも分からない……このままだと捕まるのは時間の問題だ。

そんな時だった。

「あはは♡創也♡今すぐ花園ランドに……ナニシテルノ？」

何故かおたえが玄関からではなく、窓から侵入してきた……って窓から!?

「おたえ!?!…って事は勇人は!?!」

「勇人ならここだよ♡」

おたえの片手には、吐血した状態で服を掴まれ、引きずられている勇人がいた。

「勇人の防御力を突破したのかっ!?!」

タクが驚いた声をあげる。

「あっ!馬鹿!」

「捕まえたよターくん♡」

勇人に気を取られたタクがモカから体当たりを受け、そのまま押し倒される。

「おい勇人!テメエなんで吐血して倒れてやがる!」

大型トラックに轢かれてかすり傷程度だった野郎が吐血…一体どんな攻撃を…

「おたえ……一体どんな方法で勇人を再起不能したんだ……」

「勇人が懐に隠し持ってたエ○本を奪って目の前でビリビリに破いたの♡」

「お前……なんで事を……っ！」

勇人のエ○本を目の前でビリビリに破くって事は勇人の生きる理由を潰す事なんだぞ！俺が目の前で燃やした時でさえ血反吐撒き散らして心臓麻痺を起こして入院したくらいなんだぞ!! 1日で退院してたけどさ！

「ねえ創也？そんな事より何でこころとくっ付いてるの？ダメデシヨ？今すぐ離れて？創也が他のオンナに穢されちゃう。」

「あたしと創也は相思相愛なのよ♪たえの方こそ、今すぐ離れた方がいいんじゃないかしら？」

両者共に火花が散る。これは本格的にヤバイんじゃないや……って、あれ？なんだ？あのおたえが入ってきた窓から見える猫耳……ヘッドフォン？

「mission completeよ！3人とも！」

そんな流暢な英語の発音と共に聞こえた誰かの声と共に、突然部屋に何か黒い物体が窓から入って来た。

窓から入って来た黒い物体は吸い込まれるように倒れている勇人の後頭部へと直撃し、俺の目の前に……と転がり、動きを止める。

「なんだこれ？」

「どっかで見た事あるような……あー！」

俺の目の前に転がって来たのは、荒〇行動などのゲームでよく見る煙幕を発生させる筒状の手榴弾みたいな奴だった。

プシュー!!

「うわっ!？」

次の瞬間、手榴弾から大量の煙が噴出され、俺、タク、こころ、モカ、おたえ、勇人の6人がもろにその煙を浴びる。一応、一番離れた位置にいた茜さんは口を押さえて煙を吸わないようにして、扉から離れる。

「けほっ……一体なんだよこの煙……あれ?」

大量の煙が部屋を満たし、一歩先すら見えない状況となると同時に、違和感を覚える。

俺を抑えるところの力が弱まっていたのだ。

「えへへ……そうやあ……すう……」

よく見ると、俺の身体に寄りかかるように眠っているのだ。

「わあ……オツちゃんがいっぱいだあ……」

おたえの方向をみると、こころと同じように床に倒れて眠っていた。

「タク!そっちはどうなってる!」

先ほどまでタクとモカがいた方向を見る。

「すやあ…たーくんが…パンに…なっちゃった…」

「大丈夫だ！モカの無力化に成功したぞ！」

まさか…この煙に解毒成分が？

「これは一体どういいうつもりなの？チュチュちゃん？」

茜さんが怒気を孕んだ声で窓から手榴弾を投げた張本人…チュチュに問いかける。

「チュチュ!?!お前…どうしてここに!?!」

タクが驚いた様子で問いかける。

「t w o t t e rでこの家のことが話題に上がってたわ。」

そう言うと、チュチュはスマホの画面に移されたとある記事を見せてくる。

『なんか友達の家がすげえ事になってんだけどw w』

チュチュが見せてきた記事には、こんな感じの微妙にウザい文章と共にタクの家を大量のヤンデレが囲っている画像が投稿されていた。

「この画像の投稿者は "a r r o w s l o p e" ……マンションに帰ってからこの画像を見つけて、今度はパレオたちに解毒薬を飲ませてくださいよ。」

「はいっ！パレオもいますよ！」

そして、チュチュの隣には大量の手榴弾を抱えたパレオがいつの間にか待機していた。

「これは弦巻家特製の、解毒手榴弾…これ以上の抵抗は無意味よ！潔く敗北を認めなさい！」

「す、すげえ…中の人は最近公式のライブ講習会で悪いお手本になってプロレス技受けてたのに…明日は隕石か!？」

「ちよつとタク！どういう意味よそれは！」

そんな感じでタクとチュチュが言い争っている…

「遅くなって悪い！救援に来たぞ！」

扉から、はねしよー達が入ってきた。これで、男子は全員集合となった。

「外のヤンデレ達は全員始末した！後はアンタだけだ！」

「いやボク達誰も殺してないですよね!？」

「幸、外はどうなったんだ？」

「外でなんか弦巻家のヘリコプターが変な煙を散布してそれを吸ったヤンデレのみんなが気を失ったの!？」

「そしたら突然現れたパレオ殿が手榴弾をいくつかこちらに渡してき

て、そのまま外に居たメンバーで室内に殴り込みでござす。」

「勇人がたえの攻撃？で血反吐撒き散らした時はもう駄目かと思つたぜ…。」

口々に感想を述べる。

「でも、みんなのおかげで形勢逆転だ…おとなしく投降しろ、茜。」

「…っ！」

悔しそうな声をあげる茜さん。

「……………それなら、私も手段を選んでられないね♡」

『あっ！』

すると、茜さんは近くで倒れている勇人の首元にカッターを当てる。どうやら手榴弾が投げ込まれた際、勇人を人質に取ることを視野に入れていたらしい。

「この倒れてる子とたーくんを交換しよっか♡」

「二か、完全に言ってることがテロリストだ…。」

幸とアオが戦慄した声をあげる。

「ど、どうするの!?!このままだとあの倒れてる男が殺されるわよっ!?!」

チュチュも戦慄した声をあげる。

勇人に至っては、よほどエ○本を破かれたことがショックだったの

か、起き上がる気配はない。

「ほら、速くたーくんこの子を交換しよ?」

俺達の答えは……

『どうぞどうぞ、煮るなり切り刻むなり好きにどうぞ。』

「「……え?」」

チュチュ、パレオ、茜さんの3人が驚いたような声を上げる。

「え?本当に待って?え、切り刻んじゃうよこの人、え?本当に良いの?」

確認をするように問い返してくる茜さん。

「別に…ゆるー君がその程度で死ぬとは思えないし…」

「なんならこの前台風の日に海水浴場が空いてるとか言って凄く荒れてた海に一人で突っ込んで無人島に遭難したのに生きて帰って来たでござす…」

「もつと言えばその無人島にへりで救助に行った時、無人島の動物全員ブチのめして生態系の頂点みたいのに君臨してたよな。」

「あれ？勇人先輩が遭難した無人島って、確か2〜3m位のヒグマとかメガロドンもどきがいまませんでしたっけ？」

※メガロドンとは、絶滅した10m位の超巨大サメの事である。映画とか見ると分かる。

「ああ、確かにヒグマいたね。なんか石の斧持った勇人が跨って金太郎のマネしてたから分かりづらかったけど。」

「メガロドンもどきに関しては勇人のやつ、海パン一丁で海に潜って狩ってたよな。焼くのめんどくさいとか言っただけで食って食中毒になっただけ。」

そんな感じで、つい最近の勇人のエピソードについて話し込む。

「「ええ…」」

3人が驚きを通り越して呆れたような顔をしている。茜さんも呆れているせいか、勇人の首に当てているカッターを握る力が弱まっている。

「お前ら…さつきから人が黙ってれば言いたいように言いやがって

……」

『あ』

「何が どうぞどうぞで、煮るなり切り刻むなりお好きにどうぞ」
「だこの野郎おおおおお！！！！」

そして、怒りと共に勇人が目覚める。

「きゃっ!?!」

目覚めた時の衝撃で近くにいた茜さんが吹き飛ばす。

「はい、確保。」

「はい」

もちろん、その隙を見逃す俺たちでは無く、タクの掛け声を合図に、幸が吹き飛んだ茜さんに飛びつき、腕を後ろに回す形で関節を決め、無力化する。

どれだけ強化されたヤンデレでも、流石に幸の馬鹿力を超える事は不可能だろう。

「くっ……あとちよつとだったのに!!」

……
こうして、俺たちは無事、この事件の首謀者を捕らえるのだった

「いい感じに終わらせようとしてるんじゃないやねえぞテメエら！」

「うわあ!? 飛び掛かって来るんじゃないやねえ!?」

「よく見ろ！地獄に行ってもこんなに面白い殺戮ショーは見られんぞおー！」

「明日まで、明日までお待ちください！」

「もうダメだあ…お終いだあ…っ！」

「さあ、死の恐怖を味わいながら俺に八つ裂きにされるがいい。腐☆腐」

「落ち着けえ!!!」

暴走した勇人を止める為、タクの部屋で暴れた俺達なのだが、結局、3時間近く続いた勇人の暴走は、隆盛の大越によって気絶するまで続くのだった。

何気に勇人を止める事の方がヤンデレ騒動を解決するより疲れた気がするが…何はともあれ、こうしてSOIYAウイルスによるパндеミックは、無事に終わったのだった。

出会い

プロローグ ココロの壊れた少年

「お前、いつも笑ってないよな。」

そんな事を言われたのを今でも覚えている。というか、それがたぶん今までで1番よく耳にした言葉だと思う。

俺だって笑いたく無いわけじゃ無い。みんなと笑顔を共有したいと思うし、喜びたいと思う。

でも、それは無理な話だ。俺には笑う気力なんざもう残ってない。

10年と少し生きた程度の子供が何を言っているのかと思われながらも、俺には喜怒哀楽の感情がどこかで抜け落ちていた。

いつからだったのかは覚えてないが、俺は度重なるストレスで喜ぶ事を忘れた。怒る気力をなくした。悲しむための涙は枯れ果てた。楽しむ余裕を失った。

人生なんて何が起こるのか分からない。俺はそれを齡8歳にして思い知った。

「お前が余計な事をしたからだろ!!」

「出来損ない!!」

「人殺し!!」

目を閉じれば今でも脳裏にこびりついたあの記憶が蘇る。その頃の記憶はもうあまり残ってはいないが、その記憶だけが心を抉るように俺をかき乱す。

確か喜怒哀楽は人間において大切な物だって前にテレビで言っただのを覚えてる。だとしたら、俺は人間として根本的な部分が壊れるのだろう。

これから生きてく上で、俺は無感情の自分の顔にニセモノの笑顔を貼り付けて生きるのだと思っていた。

もう2度と、心の底から笑う事はない。

もう2度とこの笑顔の仮面ニセモノが外れる事はないと。

そう思っていた。

彼女と出会うまでは。

「ふあゝ、眠い…」

十分な睡眠を取れなかったせい、足取りが重い。入学式以降に着る学生服はなんだか新品の私服とはまた違った独特の匂いがまだ残っていたりする。

向かう先は『花咲川学園』。

数年ほど前から共学となった高校だ。この高校を選んだ理由？そんなの家から一番近く、金もかからないからだ。

「念願の一人暮らし…っても、あんま変わらないのな。」

高校に入学すると同時に俺は、親元を離れ一人暮らしを選んだ。

幸いにも、一人暮らしに必要な技術は数年前から会得していた為、両親に一人暮らしを申し出たところ、了承してもらった。

その方が互いのためだからだ。

まあ、そんな事はどうでもいい。まだこの辺りの地理は把握できていないせいか、通学に若干の手間がかかった。

「お、着いたか…」

すこしだけ他の生徒より遅く到着したせい、思っていたよりも人数は少なかった。

「お、らっきー」

心にもない事を呟きながらクラス発表とデカデカと記されたホワイトボードの一年の項目に自分の名前があるか確認する。

「う…う…うはどこだ？あ、一年の」

「1年C組だわ!!!」

「!?」

あまりにも大きく、ハイテンションな声が真横から聞こえるものだから思わず驚き、隣の声の主を見る。

同じ花咲川の制服を身につけていることから、そして先ほどの発言から、同い年の人物だとわかる。

自分よりも小さく、若干小柄な体格、そしてキラキラとした長く、綺麗な金髪に金色の瞳。世間一般的に言う、美少女とでもいうやつだろう。

(こいつも同じクラスなのか…)

「あなたは何組なの？」

「え？」

じつと見ていたのがバレたのか、隣の金髪少女が突然、訪ねてくる。

「えつと…1年C組だけど…」

「まあ！同じなのね！なんだか面白そうね!!」

「は、はあ…」

ちよつとこの子、フレンドリーすぎないか？若干苦手かも…

「あなた、お名前は？」

すっごいキラキラとした瞳でこちらを見てくる。思わず目を晒しそうになってしまう。

うん、やっぱり苦手なタイプかも。

「えっと、卯月創也だけど…」

「卯月ソウヤ…ソウヤね！」

俺が自己紹介したのが嬉しかったのか、目の前の少女はとてもはしゃいでいる。

「あたしは…ころ！弦巻ころよ！よろしくね！ソウヤ！」

これが俺、卯月創也と弦巻ころの最初の出会いだった。

そして、改めて言っておこう。人生なんて何が起こるか分からない。彼女との出会いが俺に大きな変化をもたらすとは、この時の俺はまだ思いもなかった。

第1話 弦巻こころと 楽しいこと探し

教室に入るとすでに人が集まっていた。やはり、道に迷ったからだろう（弦巻は知らんが）、俺と弦巻が最後だ。

「まあ！ここがあたしたちのクラスね！」

「お、おう…そうだな…」

校舎に入って数分、俺は多少の疲れが出ていた。

なぜかって？今俺の隣にいる弦巻こころがここに来るまでとにかく子供のようにはいしゃいで何故か俺がそれをなだめる様な状態になっていたからだ。途中で弦巻と同じようにはしゃいでいるネコミミ？の女子もいたのだがこの高校テンション高いやつ多くね？といった若干の不安を覚えた。

「あら？どうしたのソウヤ？笑顔がないわよ？」

「いえいえ…お気になさらず…」

というか、よく会話？が続くなあと自分でも不思議に思った。こんなに人と話したのがかなり久しぶりだと思う。もう家族ともあまり話さなくなっていた俺だが、弦巻とは思っているよりも話が続いた。予想より苦手ではないのかもしれない。不思議なものだ。

話が逸れた。教室についた俺達は、教室の窓に入り口に貼られていた紙に書かれた席へと各々向かった。

（ふい〜）

こころの中で特大のため息をつき、机に突っ伏す。中学の時の机と違い、ゴツゴツとした手触りはなく、ツルツルとしたキレイな机だ。思わず眠ってしまいそうになる。しかし、ふと耳を向けると、弦巻が騒いでいることがわかる。

「うわあ〜」

後ろの席の黒髪の子が若干引いている。まあ、出会った初対面であのテンションじゃあついていくのは難しいのかもしれない。俺は不思議と最初よりも苦手意識はないがな。

「はいはい、皆さん席についてください。」

数分後に担任が教室に入ってきて、流石の弦巻も席についた。

「やっと終わった〜」

登校初日ということもあり、今回は授業ではなく今後の委員会決めと自己紹介、説明などだった。

ちなみに俺は風紀委員になった。なんでかって？半分居眠り状態だったから余ったところに入れられた。ただそれだけです。はい。

「さてと、さっさと帰る準備を…」

帰宅時間となったのでさっさと家に帰ろうとしたときだった。

「ソウヤ！放課後よ！」

「…そうだな……」

退路を塞がれました。

「今すぐ行きましょう！」

「いくつて…どこに？」

「楽しいこと探し！」

「はい？」

「楽しいこと探しよ！そうすれば、ソウヤだって笑顔になるでしょ？」

「笑顔ねえ…」

ふと、弦巻の言葉に悔しさに近いものを覚える。

（笑顔って言っても、この表情で精一杯笑ってるつもりなんだけどなあ。）

「だってソウヤ、心の底から笑ってないじゃない？」

「え？」

「だから何か楽しいことをみつければ笑顔になると思うの！」

「あはは…」

凶星だった。俺自身あの日から笑った覚えがない。自分の胸の内

側を直に見られているのではと思うほどの確な言葉に乾いた笑い声のようなものが口から溢れる。

「だから早くいきましょー！」

「はは…りようかい。じゃあ弦巻は正門で待っててくれ。」

「ごころでいいわよ！」

「おう、じゃあごころ、改めてよろしくな。」

「ええ！よろしくね！」

こうして、俺はごころの「楽しいこと探し」とやらに付き合うこととなった。

（弦巻とか関われば、また笑えるようになるのかな？）

いつの日にか自分が失ってしまった感情^{ごころ}。許されるのなら、また心の底から笑えるようになりたい。そんな密かな願いをもちながら俺は支度を整え、ごころの跡についていくのだった。

しかし、この「楽しいこと探し」がキツカケで、後に花咲川の【異空間】のある意味仲間入りをするとはこのときの俺はまだ微塵も思っていないかった。

第2話 目を離せば…

「あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ」

こころの「楽しいこと探し」に付き合ひ、数週間が立った。現在、俺は放課後の机で完全にダウンしていた。

理由は主に2つ。

1つは、学校の授業だ。高校に入学したばかりか、中学校の復習が多く、つまらないのだ。これ、高校生になったばかりのなら人わかるよね。俺の場合は一人暮らしをするに当たって、学力は必須だったので、中学の範囲に加え、ある程度の高校の予習を済ませてある。よつて、かなり退屈だったのだ。

「卯月さん、大変そうだね〜」

「奥沢よ、そう思うなら癒しのような何かを俺にくれ。」

後ろからクラスメイトの奥沢美咲がでかいたため息をついている俺を見て、話しかけてくる。出席番号が隣同士のせいか、こころを除けば多分一番話しているのは奥沢だ。

「具体的に」

「……」

「まあ、ガンバレ」

「ソウヤ！今日も楽しいこと探しに行きましょう！」

はい、主な理由2つ目が来ました。

「あゝ、こころ悪いが今日はパス。」

「あら？なんでかしら？」

「バイトの面接。俺一人暮らしだから生活資源はしっかりと確保しておかないと行けないからさ、また明日誘ってくれ。」

「わかったわー！」

そういうところは教室をダツシユで駆け抜けた。途中、廊下を走ってはいけません！と注意する女子生徒の声が聞こえた。

「卯月さん一人暮らしたんだ。」

「まあな、それよりもこころが何しでかすのがわからないのがバイトの面接より不安なだけど…」

「あぁー、弦巻こころこの辺りでなんて言われていると思う？」

「なんて？」

「花咲川の【異空間】、そしてその異空間に平然と入っていくから卯月さんの場合は…」

「やめてくれっ！聞きたくない！」

奥沢のまさかの宣告に、耳をふさぎ、机に顔をぶつける。ゴツっ！という鈍い音が教室に響く。

「まあ私には関わるのは無理かな…。何事も程々が一番だし、弦巻こころを抑えることができるのは卯月さんだけだと思うよ。まあ、がん

ばってね。」

「今のセリフ、フラグとして認識するからな。」

「あーはいはい。じゃ、これから私もバイトの面接だから。また明日〜」

「おう、また明日〜」

俺は：バイトの時間までまだあるが、早めに向かっても問題ないだろ。五分前行動は学生の基本！……合ってる？

「えっと、ここでいいんだよね？」

俺が向かったのは花咲川から少し羽丘よりのコンビニだ。ちなみにここをバイト先に選んだ理由としては、俺の家が花咲川と羽丘の真ん中あたりにあり、そこから一番近いコンビニが、ここだからだ。

「とりあえず、受けるだけ受けるか…」

うだうだしてても時間の無駄だという結論にいたり、早速店内に足を踏み入れる。

「いらっしやいませ〜」

「さんしゃい〜ん」

受付の方にギャルっぽい人とショートヘアの女子高生がいた。心なしかショートヘアの子なんか挨拶おかしくなかった？

「すみませーん、バイトの面接の予約をした卯月ですけど。」

「あ、面接希望の子？ちよつと待ってていま店長呼んでくるから。」

「はい。」

それから十分ほど、即日採用だった。なんでもこのコンビニがまだできたばかりで、人手不足だからだそうだ。

一応、俺がここで本格的に働くのは、明日からだ。今日は挨拶を済ませる様な形で俺はコンビニを跡にした。

「さてと、思ったよりも時間できたし、どうしようかな。」

バイトの面接を難なく終えた俺は、余った時間をどう使うか悩んでいた。

「あ、この漫画今日発売日じゃん。」

スマホをいじっていると新作の漫画が発売開始とネットで話題になっているので、現在地から一番近い本屋を探す。

「えーと、ここからだ」と駅前の本屋が一番近いな。」

スマホで地図を確認すると駅へと足を勧めた。

「ナニコレ？」

思わず素の声でそんなことを呟いてしまう。
現在俺の目の前に広がる光景を説明しよう。
駅前には主に2つの人だけだかりができていた。

まず一つ、主に羽丘の女子生徒を中心とした人だかりだ。その人だかりの中心には女子生徒がいるようだ。遠目から見ても身長が高いことがわかる。

「きゃあーっ！薫さまっ！握手してくださいっ！」

「ふ……。構わないが子猫ちゃん……。君のその透き通る白い肌を傷つけてしまわないか心配だ……。いいかな？そつと、いくからね？」

「……ああ……」

「ああっ、また失神者が……。っ。」

おい、人が倒れたぞ、誰か救急車を……。あ、必要ねえな。幸せそうな表情で逝ってるし。※死んでません。

「ああ……。！また……。私の美しさのせいで……。！かのシェイクスピア曰く、これは運命なのか。神は我々を人間にするために、何らかの欠点を与えるのか……」

その言葉を聞きさらに失神者が出るが、そんなことはどうでもいい。

問題はもう一人の方だ。

「らーららららー♪ほら、花音、あなたのドラムで、もつともつと盛り上げなきゃー!」

「ふええ、もう許してくださいっつ」

改めてもう一度言おう。

「ナニコレ?」

(ここらの奴何やってんの!?路上ライブ!?てか隣りにいる花音って呼ばれてる水色髪の生徒絶っ対に巻き込まれたパターンじゃん!!)

俺の胸には今までに感じたことがないほどの焦りが生まれていた。

「そうだ、家に帰ろう。」

思考放棄した結果、バレないうちに帰宅という手段を選ぶ。花音と呼ばれていた女子生徒には大変申し訳無いが、後日差し入れという形でお詫びをしましょう。

だが、その判断は遅すぎた。

「あら?ソウヤじゃない!こっちに来て一緒に歌いましょう!!」

「なーんでこういう時ばかり俺運がないのかなあ!?!かなあ!?!」

回れ右してきつさと帰ろうとした瞬間、こころに見つかった。

「3人でバンドをするわよ!きつととても楽しいわ!!」

結果、周りの視線もあったが断れるはずもなく…世にも珍しいボーカル二人とドラムという奇妙なバンド(仮)が今ここに生まれたので

あつた。

第3話 生徒会室に呼ばれた時の嫌な予感は凄い

「卯月さん昨日何やってたの?」

昼休み、俺は惰眠を貪っていたところ、奥沢に声をかけられた。ちなみにこころは学校内で

「花音を探してくるわ!」

と言って、教室を出ていった。ついでお詫びとして学校の近くで売っているパンを入れた袋をこころに持たせた。多分、花音先輩(あの後先輩ということを知った。)のこころに行つて一緒に食べるだろうと予測したからだ。

ちなみに、教室の窓から中庭を見ると案の定花音先輩と食っていた。

「別に? バイトの面接帰りに本屋に寄っただけだが?」

今思い出すとあの路上ライブは人生で一番恥ずかしかったため、あの意味思い出にはなったが、個人的には忘れたい思い出なのだ。

「ほんとに?」

「ほんとほんと。まじまじ。」

「じゃあこれ何?」

「ん?」

顔を伏せていた俺の前に、奥沢のスマホが置かれる。そしてトンとスマホの画面に触れる音がして一つの動画が再生される。

『らーららららーらーらー♪ほら、ソウヤも花音も歌って！楽しいわよ！』(満面の笑み)

『ふええ〜』(顔を真っ赤にし、涙目)

『らーららららーらーらー♪』(若干死にかけた表情&虚ろな瞳)

ガタン!!!

思わず椅子から転落してしまう。

「ちよっ、おまつ！それ！」

「いやー、結構うまいじゃん。」

「なんで動画取ってるの!?!」

「んー、なんとなく？」

「消せ」

「えー、もつたいない」

ニヤニヤとした表情をしながら奥沢はスマホの画面をいじる。

「はあ〜、さすがに昨日はつかれた。俺はもう寝るぞ。」

「はいはい、お疲れ様。」

しかし、現実はそのなにごくなく…

「ちよつといいかしら？…このクラスの風紀委員を呼んでもらいたいのだけど。」

凜とした声が教室に浸透し、一瞬でクラスが静まり返る。教室の入り口には声の主と思われる。生徒が立っていた。長い翡翠色の髪が印象的な人だ。

「あー、一応俺っす。」

「…」

え？何この沈黙。何この空気？何この状況!?

「放課後、生徒会室まで来るように。」

「あ、はい…」

シーンとした雰囲気は教室を支配する。

「あー、その…骨は拾っておくよ…」

「まだ死んでねえよ!？」

誰かが教室で放った言葉に思わずツツコンでしまう。

「ついに来てしまった…」

そして放課後、俺は生徒会室と書かれた教室の前にいる。

(やばい…俺何かやらかしたっけ?)

この学園に入ってから俺は何も問題行動をしてな……いや、主にこの関係で問題起こしてるかも…

「早めに来るとは関心ですね。」

「!？」

背後を見ると、昼休みに来た女子生徒がいた。

「ど、ども…」

「どうぞ入ってください。」

あくまで淡々とした態度で教室のドアを開ける。生徒会室の中は思ったよりもシンプルで、縦長の机が大半を占めており、奥に設置してあるデスクの上にはパソコンがあった。…これ生徒会室というよりは、会議室じゃね？

「では改めまして、私は2年の風紀委員の氷川紗夜です。」

「は、はあ…一応1年C組風紀委員の卯月創也です。」

「では卯月さん、貴方は何故ここに呼ばれたか分かっていますか？」

「いえ、全く心当たりがありません…」

嘘です。こころだけに心当たりしかありません…。え？つまんな
い？なんかごめん…

「ではこちらは何？」

「うぼあ」

思わず変な声が出る。

「氷川先輩…どこでこれを…」

俺の目の前に出されたのは、昼休みに奥沢が俺に見せてきた動画と
同じものだった。いや、全く同じものというわけではなく、カメラの
位置が違うものだが同じものであるということとは変わらなかった

「この動画の件でこの生徒について調べてもらおうように言われたの
で。」

「こころ関係の案件ではない事に安堵したのもつかの間、俺の精神は
ゴリゴリと削られているのだった。」

「ところで卯月さん、中学時代は何か部活を？」

「一応、強制参加制の中学だったので吹奏楽部に入っていました…」

「なるほど、音が取れていると思ったらそういう事でしたか。」

何かに納得したような様子を見せる氷川先輩。というかその動画
撮ったやつマジで誰だよ…。ちなみに、それから数十分程、氷川先輩
に主に音楽関係のことで質問された。

「要件はそれだけです…ありがとうございます。」

「そうですか…失礼しました…」

そうやって、俺は生徒会室を後にした。

「なんか…すげえ疲れた。って、バイトまであんまり時間ないじゃん！早めに行つとかないと！」

腕時計を確認すると予定していたバイトの時間が近づいていることに気が付き、俺はコンビニまで走る事になったのだ。

卯月さんが生徒会室を出ていったのを確認して、私はスマホのとある人物にメッセージを送る。

『湊さん、昨日の動画の人物から話を聞きました。』

その数分後に返信が来る。

『そう、ありがとう。それで、どんな人物だったの？』

『中学時代に吹奏楽をしていたらしく、音感などがとても良いようです。その中学校だと部員が少なかったらしく、複数の楽器を掛け持ちしていたようで、キーボードだけでなく、ボーカル、ドラム、趣味で始めていたギターの類。うまく彼を引き入れれば、Roseliaの

成長が見込めそうです。』

『そう、ならその子の事を次の練習で詳しく教えてもらえるかしら。』

『わかりました。』

一連のやり取りを終え、スマホを閉じる。

「これであの子よりも…もつと…」

そんな私の呟きは、誰もいない生徒会室に広がるだけで誰にも聞かれることはなかった。

第4話 バイト開始、そして結成？

氷川先輩の呼び出しをくらったあの後、俺は現在走っている。何故って？んなもん遅刻しそうだからだ。おのれ氷川先輩め：次に合ったら文句の一つでも言ってる：うん、無理だな。あの先輩に逆らえる気がしない。

「はあ…はあ…」

そんな出来もしない復讐を考えながらも俺は速度を早める。

「つしやあ！到着!!」

なんとかギリギリで目的地へと到着した。初日から遅刻はなんとか免れることができたか…

「おねがいます！」

とりあえず挨拶をして、スタッフルームへと向かう。

「お、来たみたいだね〜」

「遅いですよ〜」

カウンターには昨日会った茶髪ロングの人と、白髪ショートの人がいた。

「すみませんっ！」

一分もかからず身支度を済ませ、カウンターへと向かう。

「えつと…よろしくお願いします先輩。」

カウンターのふたりに挨拶をする。

「あはは、そういえばまだ自己紹介してなかったね。アタシは今井リサ、気軽にリサでいいよ☆」

「青葉モカちゃんです、よろしく」

「卯月創也です。よろしくお願いします。」

思ったよりもいい環境の職場のようだ。厳しい職場ではないということに安堵し、俺は仕事に取り掛かる。

「それでさ、その時の友希那ってばね」

「それをいうなら、蘭もあの時にですね」

「へえ、そんな事があつたんですか。」

仕事をしているうちに、わかったことだがリサ先輩（年齢的にも歳上なのでリサ先輩）は、ギャルっぽい見た目の割にとっても面倒見がよく、家庭的と、まさに女子力の塊のような人物だった。バイトであることを懇切丁寧に教えてくれた。

モカ（同級生なので呼び捨て）は、おっとりマイペースという言葉がしっくりとくる人物だ。あと、無類のパン好き。二人共コミュ力が高いようで、とても話しやすかった。

「ちなみに創也は学校で好きな子できた？」

「おお〜？モカちゃんも興味ありますなくそ〜くんの色恋話〜」

「いやいや、入学して一ヶ月くらいしか経ってないのに恋愛なんて早すぎますって…」

何故かお互いの親友の話から切り替わり、俺の恋愛事情に変わってきた。女子の色恋沙汰にはついていけない自信がない…

「ええー、ちよつとくらい可愛いなあとか美人だなくとか思う子いないのー？」

「う〜ん？」

試しにクラスにいた女子を思い浮かべてみる。…：うん、こころと奥沢くらいしか話したことないからそれくらいしか思い浮かばねえ…先輩枠なら放課後会った氷川先輩だな。あと花音先輩。

「いませんね」

え？なんでそう答えるのかだつて？考えてみる皆の衆、軽々しく「いますよ〜」なんてこの場で発言すれば爆弾となりうるのだ…。

「え〜つまんないな〜」

「いや〜モカ、わかんないよ？男の子って案外そういうの隠すこと多いし。」

何故わかったのりサ先輩…：エスパ〜？

「いやあ〜そんなわけないじゃないですか〜」

なんとか身振り手振りで誤魔化そうと試みる。

「おやあく、なんだか怪しいですな〜」

「ほらほら〜、素直に吐いちゃったほうが楽だよ〜」

「え？いや、ホントにそういうのなくて…ってモカさん？リサ先輩？
聞いてます!?!」

何故か2人共手をワシヤワシヤさせながらジリジリと寄ってくる
…え、ちよつとまって、その手なに？その動きは何!?!何でこっちに!?!

「「かかれー!」」

「ちよ、まつ……」

ちなみに、俺が開放されたのはこの5分後…つまり定時となるまで
いろいろと尋問されたのだった…嫌悪感や不快感を抱かなかつた
のは、2人のコミユカの高さなのか…悪意を感じなかつたからなのか
…。一言で言えば、いい意味でも悪い意味でも疲れるバイトであつ
た。

「ただいま〜」

定時となりバイトを終えたため、俺は自宅へと向かう。歩いて数分
なのでとても助かる。

「へっくしー!」

何故だろう…くしゃみが出た。風は…窓閉めてるから吹いてない。
…俺の知らないところでこころが何かやらかしている気がする…
気のせいかな? (フラグ)

そんな不安を覚えながらも、俺は明日に備えて早めに眠るのだつ
た。

「すー、すー」

早朝の教室。それは人が少なく程よい静けさを持っている。俺は現在、早朝の教室で爆睡をしていた。理由は教室の鍵を開けるのが当番制のため、それが俺に回ってきたからである。

「おはよー」

ん？奥沢の声が聞こえる。

「おは……よ!?!」

なんとなく後ろを向くと、奥沢がいた。うん、それは別に問題でも何でもない。問題は奥沢の眼だ。どこか遠くを見つめているようで、それでいて眼のハイライトが消えている。要するに超怖い。

「なあ、バイトそんなにキツかったのか？」

「はは……」

え？ナニコレマジでどういう状況超怖いんだけどっ!?

「バイトは……辞めたよ……問題はその後にあって……」

「お、おう……」

「弦巻……ころの……」

「このころの…?」

「バンドに入ることになった…」

「ふむふむ…バンドに…え?」

「何でわたしが…セイシュンだーとかそんなアツいのは間に合ってるのに…何事も程々がちょうどいいのに…」

「いやあ、良かったじゃないかバンド。いいじゃないかバンド。頑張れよバンド。」

「というか奥沢ならやらないって言えばすむ話だし、断れなかつたってもここまで落ち込むか普通?何らかの原因で声が出なかつたとか?…自分で言つといてなんだがどんな状況だよそれ。」

「そんな他人事みたいに言ってるけど、卯月さんもバンドメンバーでしよ?」

「え?」

「え?」

え、なにれ初耳…じゃねえ!!そういうえば花音先輩とこのころの3人で路上ライブ?やったときに言ってたわ!!って、昨日の胸騒ぎは案の定このころが原因か!

「ソウヤー!!」

「ぐえつ」

まさかのバンドメンバーに奥沢が加わったという事実には驚いていたのもつかの間、教室の入り口からこころがダツシユでこちらに来て、抱きついてきた。あまりの勢いに奇声が漏れる。

「どしたこころ?」

「あたしたちのバンドに新しいメンバーが加わったのよ!」

「おお、よかったな。」

すごい喜んでることがわかる。問題があるとすれば現在進行系で抱きつかれているため顔がすごく近い事と、奥沢がうなされてることくらいか?あ、近くの男子がなんか歯ぎしりしていることも追加で。

「それで?誰が加わったんだ?」

「新しく加わったのは、はぐみと薫とミツシエルよ!」

「うんうん、はぐみさんと薫さんとミツシエルさんが加わったのかあ……は?」

ミツシエルって誰やねん。奥沢どこ行ったし。チラリと隣の奥沢を見る。

おいこつち見ろ、窓の外見てんじゃねえ、ミツシエルって誰だよ、ミツシエルってなんだよ!?

え、ちよつとまつて、こころは何を引き入れたの!?!こころは何をしようにしてるの!?!こころは何を目指してるの!?!すげえ怖いんだけど!?!

「じゃあ、あたしははぐみと花音のところにも行ってくるわね!!今日

の放課後はバンドメンバーで作戦会議よ！」

そう言うと、こころは俺から離れて廊下ををダツシユで駆けていった。あ、氷川先輩にまた廊下走るなって言われている。うん、すっごいデジャヴ既視感。というかはぐみって人は同じ学校なのか…

「って、それどころじゃねえ！奥沢！ミツシエルってなに!？」

最大の謎がまだ残っていた。

「一言で言うなら…クマ？」

「クマア!？」

何そのバンド……。

結局、その日の授業はミツシエル？という謎のクマ（仮）について思考を割かれ、全く授業に集中できなかつただけ言っておこう。

第5話 第一回！バンド作戦会議…だと思おう。

「うそだろ…?」

「あはは…まあ気持ちはわかるよ」

「うん、この反応は仕方ないと思う…」

その日の放課後、俺は奥沢と花音先輩に案内されて弦巻家へと来ていた。

「それにしたってコレは…」

俺はあえて息を思いつきり吸い込み、次の瞬間言いたいことを全力で叫ぶ。

「大きすぎるだろお!!??」

俺達の目の前には、とにかくデカイ、それはもうデカイ家…もとい豪邸が建っていた。

しばらくすると、どこからともなく黒い服にサングラスの集団…まるで逃○中のハンターの様な人たちが現れた。うん…なんで皆捕まるのかいま理解したわ。逃げ切れる気がしない…だつてさつきまでそこにいなかったもん…ほんとどつから現れたのさ!?

「お待ちしておりました。奥沢様、松原様、卯月様。お話はお嬢様から伺っております。」

「あ、はい…」

お嬢様って…なんか突っ込むのが面倒になってきた…

そして開門。すごいなあ、こんな入り口ドラマくらいでしか見たことないや…（思考放棄）

「やっときたわね！ソウヤ！美咲！花音！」

「おいーっす」

「う、うん…」

「あはは…」

三者三様の反応を見せながらも、俺達はこころについていき、広い部屋へと到着した…って俺の家より大きいじゃねえか！

「あ、みー君とかのちゃん先輩も来た！」

「やあ、子猫ちゃん達、遅かったじゃないか」

うわあー、女子しかいねえ。

「あれ？新しい人だ！」

「新しいメンバーとは…なんとも儂い予感がするね…」

うん、片方知らねえけどもう片方の人は見たことある…だつて駅前で何かの名言で失神者を大量生産してたすごい人じゃん！記憶に残ってるもん！※ある意味当ってるけどある意味違います。

「じゃあ早速、作戦会議をするわよ！」

こうして、こころの号令によりバンド会議が始まった…。

「まず、今まであたしが考えてきた楽しいことリストを紹介するわね！」

そういうと、こころはホワイトボードを持ってきた。

「これで『バンド』をやろうと思うの！」

へえ、こころも意外とバンドのことを考えてたんだ…てつきり何も考えずまず行動かと思つてたからなあ。なにになに…

「なにになに？海の砂浜でお城を作る…シロツメクサで冠を作る…流れ星を探しに山に登る…うん、これ…」

はぐみが読みあげる。

「洗い立てのシーツの匂いを嗅ぐ…お腹いっぱいお菓子を食べる…ふふ…これは…」

薫先輩が更に読み上げる。

「なあ…これって…」

「どうやらはぐみと薫先輩も気がついたようだ…だつてこれバンド全然関係ないもん…」

「なあ、こころ、これって」「すごくいい!!!」「…え?」

二人が俺の言葉を遮り歓喜の声を上げる…

「なあ、奥沢…って、奥沢は?!」

隣りに座っていたはずの奥沢を探すが、姿形がどこにもない…まさか逃げたのか?

「えへへ、そうでしょう?これで毎日、みんな楽しく暮らすのよ!」

だめだ…ツツコミが追いつかねえ…常識人いないのか?

「こ、こころちゃん…!どれもすごく楽しそうだけど、楽器を弾いたり、歌を歌ったり、曲を演奏したりしないと音楽をしていることにはならないよ?」

「花音先輩…!」

どうしよう…花音先輩がすごく頼もしく見える…常識人がいてよかった!

「そうなの?どうしても音楽をしなきゃいけないの?」

「そこからかよ!」

思わずツツコんでしまう。

「あつ、そうだった。バンドって音楽するんだよ!おんがく…『おと』…『たのしい』?うくん?なんかわかんなくなってきた…」

それでいいのか女子高生…

「ど、どうしてもっていうか、だって……えっと、だから……うう」

「花音先輩……」

あ、だめじゃん……頼りなくなってきた……

「はっ!!それよ!それだわ!バンドで、音を楽しむのよ!!はぐみあなた、天才ねっ!」

「えっ!?本当?はぐみバンドの才能あるのかな?やったーっ!」

「なるほど……では、みんなでめくるめく音を楽しむ旅に出るとしよう……」

「薫も最高よ!!それじゃあせーので、みんなで音楽をするわよ!せーのっ、はい!」

「」「……」「」

訪れる沈黙……

「って、何をすればいいのかしら?」

「やっぱり分かってなったのか!!」

「だって!あたしはとにかくバンドのみんなと楽しいことがしたいのよっ!楽しいことをしなきゃ始まらないじゃない!」

「いやまあ、わかるけどさ……ほら、バンドって楽器あってこそそのバンドっていうか……楽器がないと始まらないじゃん?それなら、バンドじゃなくてもできるんじゃないのか……?」

「それでもわたしはこのバンドで『世界を笑顔にしたい』わ!!」

「『世界を…笑顔に?』」

「…そういえばそうだったな…」

そうだった。こころの行動原理の一つは周りの人間の笑顔…こいつが何よりも好きなのは人の笑顔だ。

だからこそ俺みたいなつまらない顔しかできない人間を引き込めるのだろう。自分の好きなことのために一直線、それがどんなに困難な目標でも臆することはない。それが俺の知る弦巻こころという人間だ。

「だからこのバンドで世界中を回って笑顔でいーっぱいにするの!!」

「感動したよこころ…人は…一つの役を演じ続けることなどないと思っていた。でも、君たちの、いや世界の王子なら喜んで引き受けよう。」

「すごい…はぐみも…すっごくいいと思う…あのね、はぐみソフトボールとか、いろいろスポーツやってるから泣いちやう人をたくさん見たの…そうすると、はぐみも泣きたくなっちゃって…だから、世界を笑顔に、賛成っ!音楽頑張る!根性出すよっ!!」

「現実的じゃない…けど、もし本当にそんなことができたら…素敵だなんて…思う…」

これも、こころの魅力というべきか…こころのカリスマというべきか…こころの純粹さあってこそなせるものだろう。やっぱりすごい

やつだよ…お前は。

「うくんっ！それじゃあ行くわよっ！世界をーっ！！」

「笑顔にーっ！！」

「あはは…元気だなあ…」

「ほら！その3人も！！世界をーっ！！」

え？俺もやるの!?

「「え、笑顔…に？」」

ん？ちよつと待てよ、こころはいまなんと言った？3人？まてまて、さつきころが呼んだのは、俺、花音先輩の二人だろ？奥沢は途中で帰ったのか、さつき見たときはいなかったし…じゃあ、こころの言う…三人目とは？

ギギギと音がするような速度で後ろを見る…

「?どうしたの?」

そこにいたのは奥沢の声をした巨大なピンクのクマだった。

「ひゃああああ
!!!?!!?」

この日のバンドの集まりは、俺のなんとも情けない叫び声で締めくくられるのだった。というか…学校でこころがいつてたミツシエルって奥沢のことだったのか…

第6話 氷川先輩地獄

「今更なんだが、なんで美咲はミッシェルに入ってるんだ？」

あの作戦会議からだいたい約数週間後、学校の休み時間に、ふと疑問に思ったことを奥沢に伝える。あ、ちなみに呼び方が奥沢から美咲と名前に変わっているのは同じバンドメンバーで一人だけ名字呼びなのはなんか面倒くさいからだそうだ。まあ俺の場合、花音先輩とはぐみと薫先輩は名字がわからなかったから最初から名前呼びになってたっただけなんだけどな。

「いや、本当に今さら……」

いやだって、本当にあの後流れに流されてうやむやになったけど、マジで何でキグルミ来てるの？

「前にバイトを辞めたって言ったでしょ？」

「あー、そういえば言ってたな。」

「その状態で無理やりハロハピに加入させられて、そのまま断ろうとしたけどいろいろあって断れず……」

「うん、だいたい把握した。」

そうそう、言い忘れていたがこころ率いるこのバンドの名前は『ハロー、ハッピーワールド！』通称ハロハピだ。意味は、『世界を笑顔に！』だ。まさにうちのバンドらしい名前だろう。

「というか、創也が音楽関連に長けていることに驚いたんだけど……」

「中学時代は吹奏楽部関連で音楽くらいしかやることなかったから

な。」

「それでも個人的にすごくありがたい…私と花音さんだけじゃ演奏まで持ってたのになどれだけ苦労したことか…」

「いや、個人個人の…技量？努力…？があつてこそ演奏つて成り立つし…俺は昔の経験を使つてみんなの手助けをしてるだけだよ…」

「でも、こころと一番付き合いが長いのは創也でしょ？」

「つても、数週間程度の違いなんだけどな…」

「え…本当に？つつきり幼馴染レベルの付き合いかと思つてた…」

「そんなに長くない。クラス発表から知り合つた。」

そんなに意外なことだろうか？まあ、こころの事だから、またライブをやりたいとか言い出すだろうし、それまでに作詞作曲でもしておくか…

「美咲、今から作曲するから手伝つてくれ。今のうちに負担を減らしておく。」

「え、今から!?まあ、いいけど…」

「まあ、こころならどんなライブがしたいのか予想がついているからこのまま仮として作る。」

「…何気にハロハピに一番夢中になつてるのつて創也なんじゃ…」

「案外そうかもな…」

そう言つて、作曲のため、筆箱から筆記用具を取り出したときだった。

「すみません、卯月さんはいますか？」

教室にあの凜とした声が響く。教室の入り口には、声の主である氷川紗夜先輩がいた。

「あれ、あの先輩前にも来た人だよね…つてあれ？」

美咲が横を振り向くが、そこに創也の姿はなかった。

「いませんか…一体どこに…」

そういつて、教室から立ち去っていく。

「つて本当に創也はどこ?!」

教室全体を見渡すが、創也の姿はどこにもない。

「み、美咲い、ヘルプミー!!」

「え?」

辺りを見渡すも、創也の姿はどこにもない。

「窓だ、窓の外を見てくれ!」

「ま、窓?」

声が窓の外から聞こえるということに困惑しつつも、美咲は窓の外を見る。

「どこにもいな…ってええ!？」

窓の外を見ても創也の姿はなく、どこにもいないと思ったときだつた。

「す、すまん美咲、登れなくなったから引つ張ってくれ…」

なんとそこには窓のレール部分に手を掛け、ぶら下がっている状態の創也がいた。

「いや、本当に何してるの!？」

なんやかんや言いながらも美咲は創也を引き上げる。

「いや…氷川先輩に見つからないように隠れようと思ったんだけど場所が他になくて…」

「もしかして…創也って腕力がない?」

「…試すか?」

そう言って、創也は腕の裾をめくり、肘を机につける。

「腕相撲? まあ、いいけど…」

結果発表をしよう。

「創也…」

「何も言わないでくれ…」

結果は、椅子の上でうずくまっている創也を見れば明らか。左右両方の勝負をした結果、2戦0勝2敗で美咲の勝利で終わった。

「何故か俺って腕力だけじゃなくてな…どんなに鍛えても腕の筋力だけはひ弱な女子並みの筋力しかないんだわ…」

「つてことはさっきのは握力で耐えてたの…?」

「うん…」

なんとも言えない気まずい空気が流れる。

「つて、そうじゃなくて、なんであの先輩から逃げたの?前に生徒会室に行ったときに何かされたの?」

「いや、何にもされなかったぞ。ただ…あの人の目がなんかちよつと苦手で…」

「苦手…?どういうこと?」

「うくん、なんというか…観察…いや、鑑定されてるつて言えばいいのか?…そんな品定めをされてる感じがして…」

「ソウヤ!!またライブをするために作戦会議をするわよ!!」

しばらくして、はぐみのところまで行ってたところがこちらに飛び込んできた。

「わっぷー……ライブか……」

「ごころ!?!」

「じゃあ新曲でもやるか……」

「新曲!良いわね!じゃあ……」

(まあ、そのことは後でいつか。)

結局、氷川先輩の視線については後回しにしごころの相手に専念するのだった。

「ふう〜やつと終わった〜」

時は進み放課後。帰りのホームルームを終え、俺は現在正門へと向かっていった。

「今日はバイトもないし、練習もない……ごころはどっかに走っていつて……はぐみはソフトボールに行つて……花音先輩はシヨツピングモールへ用事……薫先輩は演劇……ミツシエ……じゃなくて美咲は羊毛フェルト作り。」

つい最近聞いたハロハピメンバーの予定を口に出し改めて確認す

る。うん、

「暇だ」

最近はライブに向けて色々と練習のアシストなど、割と多忙な毎日を送っていたせいかな時間が空くと意外と暇である。

「あつ、ハンバーガー食いたい。」

ふと頭に、思い浮かんだ食べ物。

「最後に食べたの何年前だっけ？」

そう考える頃には俺は足を進めていた。たしかこの辺りに花音先輩がバイトをしているっていうファストフード店があったはず…

「どこか…」

俺の目の前には某人気のファストフード店がある。

「おお、結構いい匂い…」

店内に入るとファストフード店固有の独特の匂いが広がっていた。

「どこらへんでいいかな…」

俺は、ハンバーガーとLサイズのドリンクとポテトを注文し、出入り口付近の席に座る。

「うん、うまいな。」

それくらい感想しか出ないが、普通に美味しいと思う。そしてしばらく食べているときだった。

「寒っ」

誰かが入店したせいで、夏近くの春には考えられないような冷風が店内に入ってきた。ちらりと店の出入り口を見る…

「ブフォツ!」

「？」

直後、俺は手に持っていたドリンクを吹き出しかけ、全力で顔をそらす。

(なんで…なんで…)

あまりの非常事態に俺は冷静さを欠いていた。

(なんで氷川先輩がここにいるのさ!?)

そう、店内に入ってきたのは氷川先輩だった。白いシャツに緑色の上着をうまく着こなし、ニット帽をかぶっている。

(え? 何でいるの!? てか、気付いてないのか!? まあ、気付いてないのなら好都合、このままタイミングを見て逃げよう…)

なんとか怪しまれないように、残ったものを食べ始める。

(てか、本当にあれ氷川先輩か?)

席が離れているせいで声は聞き取れないが、こころなしか「るんっ♪るんっ♪」という擬音が聞こえる。…幻聴か?というか学校にいるときには考えられないような笑顔だ。氷川先輩はクールビューティーというイメージが俺の中でさらさらと砂のように崩れ去った。

(まあ、関わるに越したことはないか…)

注文した品を完食し、俺は店内を後にした。

「さて、どうすっかな…ん?」

ピロリン♪と軽快なリズムが耳に届く。スマホの着信音だ。

『松原花音先輩から新着メッセージが届いています。』

スマホの画面には、着信を伝える表示がされていた。

「花音先輩から?…どうしたんだろう?」

『迷っちゃったよ(汗)どこにけば良い?』

「ん?」

花音先輩から届いたメールに違和感を覚える。いや、画面の向こう側で花音先輩が「ふええ〜」ってなってるのはなんとなく分かるんだけど…もしかして…

『先輩、ちなみに今どちらに？』

その数分後…

『創也くんごめんさい、送る人間違えてました…』

やっぱりか…。メールを送る人間違えるってたまにあるよね。

『どうせ暇してますし、近くでしたらそちらに向かいますよ…』

『すみません…』(迷惑をおかけします…)『』

確か花音先輩が向かったのって、デパートだっけ？そんなに遠くないし、行けるかな？

こうして次の目的地へと足を進めるのだった。

一方、某ファストフード店では…

「ごこのポテトるんっ♪てするほど美味しいんだよね。おねーちゃんにはデパートに行っちゃったし、後で私も行こうかな」

創也にとっての悪夢が始まりつつあった。

「それで、花音先輩はどこで誰と待ち合わせをしてたんですか？」

「えっと、ごめんね創也くん…デパート内のこちらへんで千聖ちゃんと待ち合わせをして…」

「はあ…その千聖さんって人は今どちらに？」

「いま電車の乗り継ぎに手間どってるって連絡が…千聖ちゃん電車の乗り継ぎが苦手で…」

なにこの圧倒的に遠出に向かない組み合わせ。

「まあいいや、とりあえず目的地に向かいましょうか…」

「ううっつ」

俺は現在、花音先輩と手をつなぐ形で目的地に向かっている。何故手を繋いでいるのかだって…この約5分くらいの間に俺と7回もはぐれそうになってるんだよ…もはや不可抗力だ。

「はあ…花音先輩、目的地ですよお疲れ様です。」

「な、何から何までごめんなさい…」

「いえ、俺は道案内…もといリードしただけなのでお礼を言われるようなことは…っ!？」

「そ、創也くん？」

「先輩、すみません！後でいくらでも殴って構いませんのでっ!」

「え？」

ガバツ！

そんな擬音が聞こえる。

「ふええくっ!?」

俺が何をしているのか説明しよう。俺は現在、花音先輩に抱きついていてる。以上。

え？説明が足りない？なんで俺が花音先輩に抱きついていてるのかだつて？

(氷川先輩…、あの量を一人で食べきったのか!?てかデパートに何のようなの!?)

そう、目的地周辺には氷川先輩が普段学校で見せるような凛とした表情でいるのを発見したのだ。というか、店でちらりと量を見た時、3人分くらいのポテトがあつたよな!?

「そ、創也くん…その…」

よく見ると花音先輩の耳が真っ赤だ。

「先輩、すみません…もう少しだけ耐えてください…」

「う、うん…／＼／＼」

俺が花音先輩に抱きついてから数分後、氷川先輩は何処かへ去って

いった。

「すみませんっ先輩！後日お詫びを入れるので！ほんとにすみませんでした!!」

そういつて、俺は全力でデパートの出口に向かうのだった。

「ふ、ふええ〜」

創也が立ち去った後、花音は完全に一種の混乱状態だった。

（ふ、ふええ〜つ。ま、まさか創也くんがあんなに肉食系だったなんて…）※違います。

「あ、花音！遅れてごめんなさい…」

花音が完全に照れている状態のときに、彼女の友人である白鷺千聖がやってきた。

「あら？どうしたの花音？」

（たしかに創也くんは優しくていい人だし、練習だっていつも見てくれるし…本当にいい人だし…あのハグ割と良かったなあ……あつ…）

「花音？本当にどうしたの？」

「ふ、ふええ〜。」

「花音!? 本当になんかあったの!?!」

かあああと、顔を真っ赤にし、ゆでダコのような状態になった友人の姿に千聖は驚いていたのであった。

「はあ…はあ…後少し…っ!」

出入り口まで一直線。氷川先輩がこのデパートにいる以上、下手に絡まれるのは避けたい…。上の階から全力ダッシュでこちらにきた以上、氷川先輩がこの階層に来るまでにはそれ相応の時間がある。

「これで脱しゅっつっ!?!」

しかし、目の前には何の冗談なのかニット帽をかぶった氷川先輩がいた。もちろん即座に隠れる。

(はああ!?!なんでここに居るの!?!瞬間移動か!?!瞬間移動なのか!?!)

そんな俺の状況を知ってか知らずか、氷川先輩は的確に俺のいる場所に近づいてくる。

「まずい…これ以上は…」

(隠れることができそうなものがない以上…ここまでか…)

そう諦めかけたときだった。

「あれ、創也？デパートで何してるの？」

ふと、声のした方を見ると、布などを売っている店の前に美咲がいた。

「美咲い!!」

次の瞬間、美咲に抱きついた。

「え!?!ちよつとまって!?!ええ!?!本当に何してるの!?!」

「すまん美咲、今度お礼をするしつかりとお詫びをするから、ちよつとだけ耐えてくれ!」

「え、ええ〜?」

その数分後、なんとか氷川先輩が立ち去るまで俺達は耐え忍ぶことができた。

「悪い美咲、今度マジでお詫びするから!」

そう言い残し、俺はその場を跡にした……

「本当に何だったの……?」

その場所にはほんのりと顔を赤らめた美咲が立ち尽くすのであった……

「おいおい、なんで先輩入り口の方で休んでるのさ…」

デパートの入り口に設置してあるベンチで氷川先輩は自動販売機で買ったアイスをそれはもう美味しそうに食べていた。

(くっそ、何処か長時間身を隠すのにうってつけの場所は…あつ!!
男子トイレ!!)

隠れる場所が思い浮かんだ。そう、男子トイレならば長時間身を隠すのにうってつけ。おれは入り口にいる氷川先輩に気づかれないうに男子トイレへと足を進めた…。

「俺って何か悪い事したっけ?」

僅かに残った儚い希望は簡単に砕け散った。…なんでだろ、正しい使い方したのに薫先輩が頭の中にチラつくんだけど…

「って、本当にそれどころじゃない…」

隠れるために俺は男子トイレに向かった。だが、確認できた階層の男子トイレは今現在全て行列ができるほどの男性客が並んでいた。ここまで来ると自分の運勢が知りたくなる。

「とにかく、このまま並ぶのはマズい」

長時間その場に居座るということは、移動を続ける氷川先輩に見つかる可能性が高いのだ。

「って、さっそく氷川先輩がいる…もうやだ…」

しばらく安全圏を求めて移動をするが、移動する場所の殆どで氷川先輩に遭遇する。呪われてるのかな？俺。

しかし、どの場所でも救いというものはあるらしい。

「ソウヤあ!!!」

「ゴフツ!？」

聞き慣れた声とともに、身体に衝撃が走る。

「こころ!?!なんでこころに!?!」

案の定、抱きついてきたもとい突進してきたのはこころだった。

「はぐみのソフトボールが終わって、デパートに来てみたの!」

「そ、そうか…って、まずい!」

何か気になることでもあったのか、氷川先輩は、俺達のいる方向へと近づいてきた!

「っ!こころっ!」

「?」

必死にごまかすために、身体にひつついているこころに抱きつき返す。

「どうしたの?」

「いや…ある意味やむを得ない状況といえますか…事情といえますか…」

「ソウヤ…出会った頃と随分変わったわね!」

「はあ?どういうことだ?」

突然何を言い出すんだこの元気ハツラツつ娘は

「出会った頃のソウヤって、何にも興味が無いって顔をしてたのよ? 世界にはとーっても楽しいことが沢山あるのに、ソウヤは何も知らないみたいだったのよ?」

「そうか?…いや、そうなんだろうな。」

こころたちと関わって、俺も思い返せば丸くなったのかもしれない。出会ってからの期間は短いもの、たしかに変わっているという実感があつた。いや…変わっていると言うよりは戻っている? まあ、どちらでも良いか。

「あたし、とーっても嬉しいのよ!!」

「何が?」

華のような…そんな純粋な顔で彼女はいった。

「ソウヤがしっかりと私たちを見てくれて!」

その笑顔は…あまりにもキレイで…あまりにも純粋で…とても可

愛らしく俺の目には写った。

「へ?..」

その言葉を聞いた瞬間、身体が確かに熱くなるのを感じ取った。

「え、いや…その…えつと…」

なんとか言葉をつなげようと試みるが、体の熱が思考を邪魔して、うまく言葉が出ない。どうしよう、顔が熱くなってきたのが分かる。

「あ…こ、こころ、そろそろ俺行くよ。その…あ、ありがとな!」

「?.. どういたしました!」

氷川先輩がいないことを確認し、俺は、逃げるようにその場を去った。

「はあ…はあ…」

流石に疲れてきた。もう何度も氷川先輩と遭遇し、そのたびに隠れ、喉もカラカラになっていた。

「あれ? 創也こんなところで何してるの?」

「り、リサ先輩?」

名前を呼ばれ、後ろを振り返ると、そこにはコンビニの先輩であるリサ先輩がいた。私服がなんとも最先端だなあ。という印象をもった。

「あ、そうだ、創也さ、この後は暇？」

「一応暇ですけど…？」

「ならば、ちよつとそこの喫茶店でお茶してかない？友達を一人待ってるんだけど、なんか来るのが遅くなっちゃうみたいでさ」

「良いですよ。」

簡単な返事をして、俺とリサ先輩は喫茶店内に入る。

「いやあ、ほんとに助かったよ。一人で待つのが割と厳しくてさ」

「いえいえ、こちらこそ本当に助かりました。」

とりあえず喫茶店でジュースを頼み、一息をついたところでピロリン♪という軽快なリズムがなった。ちなみに今回は俺ではない。リサ先輩だ。

「あ、ちよつとごめんね…うん、もうすぐ来るみたい。」

どうやら知り合いと連絡がついたらしい。そしてその数分後。

「お、きたきた、おーい、紗夜。こっちだよー！」

(なんつ…だとっ!?)

思わず俺はジュースを飲む手を止めて顔を下にそらす。

「遅れてすみません今井さん。あら？なんで卯月さんが」

はい、速攻でバレました。もうやだこの世界…

「リサちーやつほー！」

ん？もう一人の声は誰だ？リサ先輩は一人と待ち合わせって聞いたけど…

そう思っつて、俺は顔を上げる。

「……カハツ!?」

「あれ!?創也!?どうしたの!?もしもーし！」

リサ先輩が呼びかけてくるが、それどころではない。

「ひ、氷川先輩が…二人…」

俺の目の前には氷川先輩が二人いた。いや、まとう雰囲気？に若干の違いがある。片方は、ファストフード店で見たような時の様な雰囲気だが、もう片方はいつも学校で見かける雰囲気だ。だが、生憎と今の俺には余裕が全く残ってなく、落ち着くのは暫く先になるのだった…

（ああ…なんだかこころと美咲と花音先輩に悪い事しちゃったなあ
〜）

先程までの自分の苦労は何だったのか…そんなことそんなことを考えつつも氷川先輩たち？から逃げる方法を頭の中で模索するのだった…

(というか今更だけどなんで俺は氷川先輩から逃げてたんだっけ?)
※本当に今更である。

おまけ

花音「ふ、ふええく、創也くんが…あんなに積極的に…」

千聖「花音っ！戻ってきてーっ!!」

美咲「(羊毛フェルトの材料を買いに来ただけなのに…創也は何をしてたの?)」

後日、美咲が花音からも話を聞き、創也が制裁を喰らったのは、また別の話…

第7話 会合！Roselia!!そして、にゃんこ

「それで、昨日はなんで私だけじゃなくてこころや花音先輩にも抱きついたの?」

「紗夜先輩を見つけた。逃れるために抱きついた。以上。」

「あのねえ、そういうことはちゃんとそのときに言ってもらえないかな…、こつちだつて話を聞く余裕くらいあるんだから。」

「今日出会って3秒後にグーで殴ってきた奴の言う言葉か?」

「う…」

あのデパート地獄から次の日の放課後。俺は美咲の目の前で正座をさせられ、尋問を受けていた。もちろん、俺が昨日美咲たちに抱きついたのが悪いし、殴られる覚悟はあったがグーはアウトだろ…

ちなみに、先輩の呼び方が変わっているのは先輩があの後と双子ということを知り、紛らわしいということで、名前+先輩になったのだ。

「それで、結局その紗夜先輩は、何で創也を探してたの?」

「なんでもロゼリアってバンドのコーチをお願いしたいって言われて…引き受けた。」

「…浮気?」

「うっさいやい。」

だつてもしも断ればあの動画をネットにアップするつて…。絶対に見られたくない奴だつているんだ。それだから受けざるを得ない。

だが、あの時の紗夜先輩は日菜先輩（紗夜先輩の双子の妹）を見て、脅しとは別件で複雑な顔してたのをよく覚えてる。困惑した紗夜先輩もそうだが、日菜先輩も明るく見えたものの、不安が強いように見えた。まあ：俺が関わるような問題でもないだろうし、そこまで深く考えなくてもいいだろう。

「って、そろそろ時間だ…」

「時間？なんの？」

「顔合わせ？」

「へー、ま、いってらっしゃい。」

「おう」

「いいです。」

学校を出て紗夜先輩に連れて行かれ、着いたのは、サーライブハウス
CサーiサーRサーCサーLサーEサー”。ここで普段練習をしているようだ。

「湊さん、つれてきました。」

「そう、ありがとう。紗夜。」

紗夜先輩に案内された先で出会ったのは、長い銀髪をした羽丘の女子生徒だった。

「あなたが卯月さん？」

「は、はい一応そうです…」

「…」

うう…この鑑定するような目は苦手だ…。

「私は湊友希那。紗夜から話は聞いていると思うけど、返事は？」

一応、俺はまだ完全にこのバンドのコーチになつたわけではない。こつちだつてハロハピの活動があるんだ。あの時点で断れば動画を公開すると言うだけで、無理そうなら辞退しても良いそうさ。

「…まず、貴方たちの演奏を見てもいいですか？」

「ええ良いわよ。」

そういうと、サークルの練習室に案内される。

「じゃあ、私たち『ロゼリア』の演奏1曲目、いくわよ！」

マイクで友希那先輩が宣言し、曲が始まる。

「おお…」

思わず感嘆の声が漏れる。それほどまでに音量・雰囲気は圧倒的なのだ。だが…

(焦ってるのか?)

俺が感じた違和感、それは焦りだ。ハロハピの演奏は「楽しい」。「笑顔をみんなに」といった感情や考えを伝える。不安(主に花音先輩)や緊張(主に花音先輩)が多少あっても、「楽しい」ということが伝わる演奏だ。それに観客を巻き込むことが、ハロハピの演奏である。

だが、ロゼリアの演奏は、ある意味ハロハピとは真逆だ。一人一人の技術はハロハピと比べ、圧倒的に高い。だが、そこには「楽しい」という感情がほとんどないのだ。たしかにその圧倒的な技術は多くの観客を魅了するだろう。だが、足りない。主に友希那先輩や紗夜先輩からは「焦り」「自信」「必死」「期待」など、プラスとマイナスの感情がごちゃ混ぜになっているように感じる。

比較的プラス面の感情が大きいのはリサ先輩を含めたキーボードとドラムの3人だろう。だが、「緊張」や「不安」も少なからず有る。

(ロゼリア……青薔薇か……)

青い薔薇。自然界には存在せず、「この世にないもの」「不可能」を表す花。彼女たちの演奏からは、尋常ではない努力が元であることが分かる。それこそ不可能を成し遂げるための努力だろう。

(だからロゼリアか……)

正直、演奏の技術を上げるのを手助けする程度なら俺でもできるだろう。だが……本当にそれだけでいいのか? っつて、なんで俺はこんなにこのバンドについて真剣に考えてるんだ?

『ソウヤ! 笑顔よ! 世界を笑顔に! あなたならきつとできるわよ!』

つてところがいつも言ってるよな。世界を笑顔に…か…こころの奴、何時も言ってたな。

そんなこと、まともな笑い方一つできない俺には無理だろ…

『どうしてできないなんて思うの？世界を笑顔にする、それが私たちハロー、ハッピーワールド！よ？』

(…そうだな…笑ってないやつを笑顔にする。たった、たったそれだけのことじゃないか。俺たちがするのは、それだけなんだ。)

「それで、貴方の返事は？」

演奏を一通り終えた友希那先輩がマイク越しに質問を飛ばして行く。

答えはもう決まっていた。

「はい。コーチの件、引き受けますよ。」

これからより多忙になるであろう生活に俺は若干諦めながらも、歩みを進めるのだった。

「じゃあさ、創世のロゼリアコーチ就任祝いとして今から駅前のファミレスでも行かない？」

突然、リサ先輩が提案する。

「リサ姉！あこも賛成!!」

ドラムを叩いていた子が賛成を示した。というか、中学生か？中学でここまでドラムができるとなるとかなりの練習量だろう。

「いえ、それよりも練習を…」

「そういえば、あの駅前のファミレスのサイドメニューって結構美味しいですよ。ポテトとか」

前にこころに振り回されたときにそのファミレスで休憩がてら飯を食ったのだが、サイドメニューがとても美味かったのだ。そんなことを口走ったときだった。

「ポテツ」

「「「「?」」」」

ポテ？今紗夜先輩からは考えられないような声がだされなかったか？

「そんなジャンクフードには興味がありませんが、親睦を深めるという意味でなら賛同します。」

「先輩…」

うん。昨日ファストフード店でポテト食べたのは日菜先輩だつて分かった。

あの「るんっ♪」って擬音が頻繁に使われるのが日菜先輩だ。

「ポテト…好きなんですか？」

まさか…

「……」

凶星つすか。紗夜先輩のクールビューティーのイメージは再び砂のように崩れ落ちた。

「練習…します？」

「………（泣）」

うわ、目に見えて落ち込んでるよ…。

「あー、でも練習を兼ねてファミレスに行きます？」

「………（喜）」

…だんだん面白くなってきたぞ。

結局、ロゼリア+俺でファミレスに向かうことになった。ちなみに、友希那先輩の方はリサ先輩が上手に丸め込んだ。近くで見ている見事な手腕だった。

一応、それぞれの自己紹介は済ませた。友希那先輩、紗夜先輩、リサ先輩は知っていたが、ドラムとキーボードの人は知らなかったため、自己紹介をした。

ドラム、宇田川あこ（中3）

キーボード 白金燐子先輩（高2）

「へえ、そんな事があつたんだ。」

「はいーそれでね、あこ達がドーン！バーン！ってね！」

うん。擬音が多いけど何を言いたいかはだいたい分かる。

俺は現在、ロゼリアのドラムの、あこの話を聞いている。このバンドの中で唯一の年下だから比較的話しやすいのだ。ちなみに今話しているのはネオ・ファンタジー・オンラインというゲームについてだ。キーボードの燐子先輩もやっているらしい。ちやうど暇つぶしになるゲームを探していたから今度やってみようかな？

「…(もしかもしゃ)」

てか、紗夜先輩すげえフライドポテト食ってんじやん。

「じゃあ、そろそろ解散しよつか☆」

リサ先輩の合図で解散となる。

「ふい〜。さてと、ハロハピとロゼリアの練習メニューでも考えるか。」

他にやることがないということもあるが、出来ることはあらかじめ終わらせておく。そんな習慣が身についていたせいか、必然的に俺の仕事量は増えるのだ。まあ、以前と違いそれを苦痛に感じることはないから良いのだが。

「にゃーん」

「ん？」

公園の近くを歩いていたらときだった。

「猫か」

猫の鳴き声が出て横を振り向くと、小柄な黒猫がいた。

「にゃ〜」

「かわいい…」

人に慣れているのか、こちらに寄ってきて、足元でなく。

「野良猫かな？」

腕時計を見ると、だいたい午後6時ほど。まだ遊ぶことが可能な時間帯だ。ご飯も先程のファミレスで食べたため、家に帰ってから作る必要はないだろう。

「お前、ちっちゃいな。」

肩に乗せてもそこまで重く感じない。痩せていることが分かる。

「お前ひよつとして捨て猫？」

「にゃお」

「う…」

やめろ、やめてくれ。小動物にそういう目をされるといじめているみたいな雰囲気です。罪悪感が半端ないんだよ…

「にや、にやーんちゃん…」

「は?」

猫に夢中になって気が付かなかったが、人が近くに来ていたらしい。

「ゆ、友希那先輩?」

「あつ、創也じゃない。なにしてるの?」

いや、あんたの方こそ何してんだよ。という言葉は心の内にしまっておこう。というか、思いつきりキャラが崩れるような発言をしなかったか?

「えつと、この子先輩の飼い猫ですか?」

「…違うわ」

うん、だよね。どう見たって、野良とか捨て猫あたりだし。

「おお、よしよし、この辺りがいいのか?」

「にやあゝ」

子猫の喉あたりを搔くと、気持ちよさそうに鳴く。うん、可愛い。

「……………」

すごい視線を感じる。しかもその視線の中にはしっかりと嫉妬の感情を感じるし。

「えつと…触ります?」

「!」

うん。すっげえ嬉しそう。なんだろ…ロゼリアって最初会ったときはザ・シリアスみたいなのバンドかと思っただけど全然違うわ。これもはやボケ集団じゃねえの? ハロハピに勝るとも劣らないボケ集団じゃないの? だって、今の友希那先輩、子猫と遊んですっごい嬉しそうだし…演奏していた時の姿からは考えられないほど幸せな表情だもん。

「にゃーんちゃ…この猫の名前は?」

「……決まってるません。そもそもさっき拾ったばかりなので。一応捨て猫みたいなので。」

「そうなのね…」

うん、すっごい悲しそうなの目をしてる。見てるこっちにも罪悪感が…。はあ…俺は制服のポケットからスマホを取り出し、親とのメッセージを確認する。うん。生活費だけなら親が最低限出してくれる。バイトを続ければ何とかかなりそうだ。

「あー、一応この猫捨て猫みたいなので家で保護しようと考えてるのですが、良かったら名前つけてあげてくれませんか?」

「わかったわ」

そういって、友希那先輩は考え始める。というか、表情がすっごい本気だ。

「……こあ」

ポツリと先輩がこぼす。

「良いじゃないですか。ここあ。」

「にゃ〜」

どうやら気に入ったらしい。これで決まりだ。

「よろしくな、ここあ。」

「にゃあ〜」

こうして、我が家に一人猫が増えた。

「よかったら友希那先輩もここあにたまに会いに来てあげてください。」

「ええ、ぜひ……時間があつたら行かせてもらおうわ。」

「あ、はい」

まだ猫好きがバレていないとでも思ってるのか？ちよつとからかってみよう。

「あ、あんな所に子猫の大群が……」

「!？」

そんなことを言うと、首がもげるのではと思うほどの速度で俺が指を指した方向を向いた。

「あ、すみません。気の所為でした。」

「つゝゝゝ!!」

あ、顔真っ赤にしてる。

あ、なんか拳を握りしめてこっちに近づいてくる。

あ、俺これ知ってる。吹き飛ばす1秒前ってやつだ。だって友希那先輩の手が俺の目の前まで迫ってるもん。

その日、日が落ちかけた公園には、猫の鳴き声に紛れて、クラッカーによく似た音がそれはもう響いたらしい。

というか、なんか今日の俺すつごく殴られてね？まあ、美咲はグーで、先輩はパーという違いはあるが、痛いということは大して変わらなかった。

野外教室編

第1話 班を決める時はだいたいジャンケン

「はい、来週から三日間、野外教室があります。」

朝のホームルーム、担任の先生はそう告げた。

「野外教室ねえ〜」

「そんなつまんなそうな顔してどうしたの？」

「野外教室に対して思い入れがな無かった。こういうイベントに対して興味が湧かななったから小中学校はサボってた。」

「え!?!修学旅行も!?!」

「いや、修学旅行は1日目だけ行って、八ツ橋とかの名物だけ食べて当日早退した。」

八ツ橋って美味しいよね。もはやあれ目的で京都に行ったようなもんだもん。それ以降は滞在する意味がないし。

「ええ〜」

呆れたような表情の美咲。まあ、これでも俺は丸くなった方だろう。ところが以前言ったように俺も変わっているのかもしれない。

実は今回のイベントは結構期待しているつもりだ。

「いや、でも今回のイベントは結構期待してるぞ。話が通じる奴が多

いからな。」

「ソウヤ！美咲！今回の野外教室、あたしと一緒にの班になりましたよ！」

「話…通じる？」

「ごめん、自分で言ってる不安になってきた……」

こうして？俺、こころ、美咲の班が完成したのだが……

「あと、1人は男子がいないと駄目なんだが……」

今回の野外教室は男2人・女2人もしくは女5人という班に分かれる。この学校男の数が少ないんだよ……。

しかし、その問題なら杞憂に終わりそうだ…何故かって？なら、今の俺の状況を説明しよう。

「なあなあ、創也くん、僕もその班に入れてくれないかな？」

「創也くん、俺たちダチだろ？お前の班に入れてくれよう」

「創也く、お前の班に入れてくれ」

うん、男子に何故かすごい班に入れてくれと頼み込まれてる。男にモテても気持ち悪いだけだろ…：まあ、女でも大して変わらんが。あ、これ全国の非リアを敵に回す発言か…：といっても俺も非リアだかな。※彼女いない非リアではありません。

「そ・れ・で、本音は？」

『クラス屈指の美少女と戯れてるお前が羨ましいぞこの野郎!!!』

うわあ、汚い本音がダダ漏れじゃん。まあ、ここまで清々しいと不快感もクソもねえな。

「うわあー」

ほらあ、美咲がドン引きしてんじゃん。

「？」

こころは何が何だかよく分かって無いみたいだな。そのままできてくれよ…。

「ジャンケンして勝った奴な。」

『最初はグー！ジャンケン……』

結果は

「うしやあ!!!!」

俺と比較的仲のいい男子が勝った。まあ、男子生徒Yとでも覚えてくれれば……

「創也！お前人の名前を勝手に男子生徒Yあたりに改名しようとか考えんじゃねえぞ！」

「何故バレたし」

まあ、いいや。こいつは矢坂^{やさか}勇人^{ゆうと}。先程言ったように俺とは比較的に仲の良い男子だ。

「えーと確認だけど、この班のメンバーは俺、こころ、美咲、勇人でいいか？じゃあ、先生の所に報告にいくぞ。」

「「はーい」」

こうして俺達は担任のところへ向かった。

「失礼しました。」

俺は職員室を出て、担任に教えられたことをこころたちに報告する。

「えーと、俺達の班は2班。班長は何故か俺、今週中に必要なものを買って揃えておくように、ついでに1年羽丘学園の生徒もこの日に同じ施設を使うことから、揉め事は控えるようにしましょう。何か質問は？。」

「はいー！」

「どうぞ勇人君。」

「おやつは持って行っていいですかー？」

「300円までならどうぞー」

「わーい」

「何このレベルの低い会話…」

「言わないでくれ美咲…」

「じゃあ、他に連絡事項が会ったら、俺から連絡するから話し合いでも「そうだわ！」…どした？」

突然、こころが大きな声を出す。何か思いついたようだ。

「どうしたのこころ？」

美咲が若干不安そうにこころに尋ねる。

「今週の休日にこの班のメンバーで買い物に行きましょうよ！何を買うのか決めましょー！」

「まあ…それくらいなら」

「俺ももちろんOKだぜ！」

みんなで買い物か…買い物なんて1人でいった記憶しかないな…。これも野外教室の醍醐味か。

「じゃあ、今度の休日に2班で買い物いくか。」

とりあえず決定したこの班の方針。

その1 みんなで仲良くお買い物に行こう!!

【次回へ続く。】

第2話 ナンパは慎重にやらないとフラグになる。

「時間…合ってるよな？」

自分の腕時計の時刻を確認する。今日の俺は、野外教室の班で必要なものを買って揃えにデパートに来ていた。

「創也が1番乗りか、ちえ。」

声が出た方を見ると、同じ班の男子である勇人がこちらに来ていた。

「別に今日は暇だったしな。」

休日のため、デパートは人が多く感じる。花音先輩が来たら真っ先に迷子になりそうだな…

「あ、やつほー！ソウヤー！」

「ちよ、こころ、声大きい！」

しばらく勇人と駄弁りながら待つこと数分、我が班の女子たちが来たようだ。うん、すつごくわかりやすい。

「おっす。」

「おっはよー！」

各々適当に挨拶をする。てか勇人も朝からテンション高いな。

「さあ、出発するわよー……ところで今日は何を買えば良いのかしら

？」

「そこからかよ!？」

なんとも締まりの無い俺のツツコミで買い物はスタートするのだった。

「最初は何を買うんだ？」

「えーと、まずは…」

俺は肩に掛けたりリュックから『野外教室のしおり』と書かれたプリントを取り出す。

「懐中電灯」

↳電化製品コーナー↳

「ソウヤー!この懐中電灯なんて良いんじゃないかしら!!」

「ごころ!?!どっからそんなの持ってきた!?!」

心が手にしているのは小型の大砲のようなサイズをした懐中電灯……もとい照明器具。

「これなら、周りがよく見えると思うの!」

「いや肝試しとかで使うやつだからね!?お化け役の人逃げちゃうからね!」

「というか、なんで電化製品コーナーに照明器具があるの?」

「さあ?」

「そのこの2人!話してないでこの照明器具戻すの手伝ってくれないかな!?これ地味に重いんだよ!!」

結局、懐中電灯は普通のもので売り切れてて、こころがまた大砲型照明器具を買おうとしたが、なんとか阻止し、その間に以前会った黒服の人たちが通常のものを用意してくれた。え、お金?もちろんしっかり払いましたとも。

「なんか、懐中電灯買うだけで微妙に疲れが…」

「ソウヤ!次の買い物は何かしら?」

「はいはい、えっと次は…」

ポケットに無理やり入れた『野外教室のしおり』に目を通す。

「おやつ」

「っしやあ!!!」

「うるさい」

「ひどっ」

おやつで喜ぶのは小学生までだぞ勇人。

くお菓子売り場く

「っしやあ!!まとめて買い漁ってやらあ!!!」

ご覧のとおり、勇人君がぶっ壊れました。お菓子でここまでなるとか精神年齢が心配になってくる。

「言つとくが、300円上限忘れたのか?」

「な!?!う、嘘だろ...?」

「昨日の話もう忘れたのか?」

「こ、高校生のおやつ300円とか...うま○棒30本しか買えないじゃないか!クソッ!なんでだあ!」

「30本もあれば十分だろ。」

「俺は諦めない!!何がなんでもお前を倒し、おやつ300円上限を上げてみせる!」

ちよつと待て、なんで俺を倒す流れになってる。意味わからん。てか300円上限ってただの冗談なのに...

「俺はお前を打倒し、必ずやうま○棒シユールストレミング味1000本を野外教室に持っていくんだ!!!」

「んなもん許可出来るかボケエエエエエ!!!」

すかさず、勇人の顔面に蹴りを入れる。

※シユールストレミングとは、主にスウエーデンを中心に生産・消費されるニシンの塩漬けのこと。通称、〃世界一臭い食べ物〃。

結論、勇人におやつを選ばせてはいけない。お前は飴でも舐めてろ！

「やばい…買い物始まって1時間足らずで胃が…」

「まあ、そんなことより次の買い物は何？」

「そんな事って酷くね美咲さん!？」

「ほら速くして」

「えーと、次は…」

美咲に急かされ『野外教室のしおり』を確認する。

「みんなで楽しめるもの（ゲーム機を除く）。」

　　～おもちゃコーナー～

「なあ、創也！これ持っていていいか？」

　　そういつて勇人が持ってきたのは、某宇宙戦争映画に使われる、ラ
○トセ○バー（青）だった。

「よし、それ貸せ今すぐお前の脳内ぶった切ってやる。」

「やだよ！そつちに赤色のやつがあるからそつち使え！」

そういう問題じゃない。というか野外教室の何処でそんなもの使うのさ…

「ソウヤ！これも良いんじゃないかしら！」

そう言ってこころが持ってきたのは仮面ラ○ダーの変身ベルトだった。

「こころ、世界を笑顔にしたいのは分かるが明らかに別ジャンルだ。」

「あら？そうかしら？」

仮面ラ○ダーが野外教室に参加してやることって何も無いじゃん？だからやめよ？ね？黒服の人たちがマジモンの仮面ラ○ダーのスーツとかベルトを作る前にやめよ？な？

「美咲、俺の手に負えない、ヘルプ」

「はあ…もうさ、適当にこれで良いんじゃないの？」

そう言って、美咲が見せてきたのはランプなどの簡単なカードゲームだった。

「え、普通…」

「なんで私だけそんな冷めた反応!？」

いやだつてさ、こころと勇人の選んだものと比べたら良くも悪くも普通だし…まあ普通が一番か…。

それから時間は過ぎ、最後の項目へと写った。

「えーと、ここで買い揃える物はこれで最後か…」

「ソウヤー！最後は何を買うの？」

また『野外教室のしおり』を取り出し、最後の項目を確認する。

「就寝用の寝袋」

くキャンプ用具コーナーく

「やっぱり問題が起きる気がするんだよなあ」

「もう諦めたほうが良いんじゃないの創也？」

俺と美咲は既に呆れ半分疲労半分の状態となっていた。

「ソウヤー！寝袋つて暖かいのね！」

こころは現在、寝袋が複数おいてあるコーナーにて、寝袋で遊んでいる。

「まあ、身体が冷えないようにしないと意味がないからな。キャンプとかだと夜は冷えるらしいし。」

「あら？この寝袋結構大きいのね！ソウヤ！これなら何人かで使えそうよー！」

「へえ、どれどれ？確かに結構でかいサイズだな。」

「ところが目の前で広げたのは、ところが両手で広げても完全に伸びきらないほど横幅の長い寝袋だった。」

「ソウヤ！どれくらい広いか試しに一緒に入ってみましょ！」

「おっけー」

「ここに誘われ、寝袋に一緒に入る。」

「おお…たしかに結構大きいな。でもこれ1人用にしては大きすぎないか？」

「そうなの？」

まあ、さすがにこころとの身体の密着が多い気がするが、一つの寝袋にこれだけ入ることができれば寝相が悪くても問題なさそうだな。

そんな会話をしていると美咲がこちらに寄ってきて寝袋の頭の方に着いたタグを確認する。

「2人共、これ1人用じゃなくて2人用…もといカップル用だつて。」

「へ!？」

「ああ、道理で無駄にデカイわけだ。」

こんなのだれだけ太った人が使うのかと思っただらカップル用だったのか。

「ま、そろそろどれを選ぶか全員決めたと思うし、レジの方に行くぞ。」

そうやって、俺は一足先に寝袋を抜け出した。

「ま、私も寝袋選ぶだけならすぐ終わったし、こころ、早く行く…こころ？」

「~~~~／／／」

なぜか美咲の目の前には、耳を真っ赤にして先程のカップル用寝袋に隠れるこころがいたとか。

それから数分後。

「よし、とりあえず買うものは全部揃えたし今日はこのまま…つてあれ？」

「どうしたの？」

「そういえば勇人は？」

「そういえば寝袋買うあたりから見てない…」

「どこにいったのかしら？」

そんな話に切り替わった、直後だった。『ピロリン♪』と俺のスマホの着信音があった。

「あ、勇人からメール来てる。なにになに…?」

『とんでもなく怖い人に絡まれちゃった☆』

『助けて♡』

「は?」

なんともうざい文章とともに救援コールが届いていた。

「なんだって?」

「なんかおつかない人に絡まれたって」

「はい?」

結局、俺達は勇人の搜索へと足を進めるのだった。

「あくあ、たしかおつかないな。」

うん。たしかにあの人を敵に回したらあかんな。まあ、結論から言おう。心配する必要など全くなかった。

「だいたい矢坂さんは、実力と行動が伴ってないんですよ!」

「いや、そんなこと言われましても…」

「貴方は花咲川の生徒としての…ガミガミ」

俺達の目の前には、勇人に加え、花咲川学園の風紀委員の紗夜先輩がいた。ちなみに、勇人は人が多いにもかかわらず正座状態だ。誰がどう見ても、説教を紗夜先輩から食らっている。

「あ、創也！ヘルプ！」

げっ、見つかった…

「あら、創也さん、こんなところで何を？」

「えーと、一応ソイツと野外教室の班が一緒なので買い物に…」

「あ！バカ！」

え？俺なにかまずい事言った!?

「なるほど、貴方は班の活動中にも関わらず、あのようなことをしたと…」

「ひい!？」

なんか勇人が尋常じゃないほど怯えてるんだけど…

「あの、紗夜先輩…勇人は何をやらかしたんですか？」

「先程、矢坂さんは…」

く回想く

「はあ…寝袋って言っても適当に選ばばいいだろ。あ、コレなんか良いかも！」

創也たちが3人で行動している間、いつの間にか勇人は一人、寝袋を漁っていた。

「ムムツ?!あれは…」

勇人が視線を向けた先には、長い翡翠色の髪 of 女性の後ろ姿（紗夜先輩）が写っていた。

（間違いない…あの人は後ろ姿は見ただけで分かる。俺の第6感が告げている。あれは…）

今思えば、この時点で彼は手を引くべきだったのである。

（弦巻さんや、奥沢さんにも引けを取らない美女だ!!）

思いついたら即行動ならぬ、見つけたら即ナンパ。彼は猛スピードで女性（紗夜先輩）の元へ向かった。

「ちよつとそこのお姉さん！僕と一緒にそのカフェで一息つきませんか〜？」

「あら？貴方は…矢坂さん？」

「あ…オワタ」

〜現在〜

「ということがありまして…」

「……勇人」

「なに？」

「相手が悪かったと思って諦めな。そんな虎の尾を踏むようなことをしたお前が悪い。」

「そんなあ!?!」

「じゃあな、強く生きろよ。」

そう言つて俺達はその場を立ち去ろうとするが…

「ちよつと待つてください創也さん。」

ガシツと、右肩を先輩に掴まれた。

『「相手が悪かった』とはどういう意味ですか?』

「……ボクソンナコトイイマシタツケ?」

「先輩!間違ひなく言つてました!」

この野郎っ!

「創也さんとは一度お互いの認識についてはっきりさせたほうが良さ

そうですね。」

結果、勇人と仲良く一緒に正座コースへと突入したのだった。

ちなみに、こころと美咲は先に逃げるように帰っていた。
おそらく美咲の判断だろう。解せぬ。

【次回へ続く】

くおまけく

創也「(おい、何人を巻き添えにしてんだよ!)」チラッ

勇人「(最終的に捕まったのはお前だろ?)」チラッ

紗夜「お二人とも聞いていますか?」

創&勇「はい!」

創也「(まあ、しかたない。今から逃げるぞ。準備しろ。)」チラッ

勇人「(どうやって?)」チラッ

創也「紗夜先輩! あんなどころでフライドポテトの特売が!!」

紗夜「え!?!」

創&勇「今だあ!!」ダツシユ!

紗夜「え!?!ちよつとあなた達、待ちなさい!!」

俺達はその場を逃げ切ることに成功はしたが、後日怒られたのは言うまでもない。

第3話 計画を立てる時は慎重に

「それじゃ、会議を始めるとしよう」

俺は、以前デパートでこころにノリで買わされた伊達眼鏡を装着し、会議の始まりを宣言する。

「ってというか、なんでメガネかけてるの？」

「様式美ってやつさ」

「無駄に気合い入ってんなー」

「とつても似合ってるわよソウヤ！」

「おう、ありがとうさん」

おっと、話がずれた。

「今回、俺達が向かうのは〃〇〇野外教室センター〃だ。」

そう言うと同時に、先程先生からもらった地図を机に広げる。

「おお：見た感じ結構森が多いな。」

「川もあるし、泳ぐことも出来るみたい」

「いいじゃない！コレだけ広ければライブとかもできそうね！」

結構好評のようだ。まあ、川あり、山あり、森ありで基本何でもできそうだからな。因みにこころ、花音先輩と薫先輩は無理だぞ。学年と学校が違う。

「それじゃ、まず何をするか話し合おう。」

ある程度の地形を理解したところでさっそく本題に入る。

「それで、この2泊3日でまず何をしたい？」

「ハロハピのみんなとライブがしたいわ！」

「却下。」

俺と美咲が即座に提案を遮る。

「花音先輩と薫先輩はその日学校だ。」

「ミッシェルは今、海外にいるから無理だよ。」

てか、美咲、ミッシェルのごまかし方それで良いのか？

「それなら仕方ないわね！」

良かった。ちゃんと納得してくれた。

「あ、はいはい！俺ucciやりたいことある！」

「なんだ？」

「羽丘高校の人たちも参加するんだろ？だったら!!」

「「だったら?」」

大きな声で…宣言するように勇人は一言。

「ナンパ祭りだ!!」

「はっ..」

「ナンパ祭り?」

「ああ、そうさ!男なら黙ってナンパだろ!野外教室の夜…澄んだ空気に満天の星空、これほど女子と仲良くなるイベントなど、ナンパの神様が俺達にナンパをしろと言っているにきまつてぐべえ!」

「許可できるわけねえだろ。そしてこころに変なことを教えるな。」

とりあえず、腹に一発。特にイベントの発音をネイティブ風にしたのがかなりウザかった。

「グフツ…我が野望は…永遠に不滅…なり…ガクツ」

「ガクツ…じゃねえよちゃんと会議に参加しろ。」

とりあえず勇人を叩き起こし、会議を続行する。

「じゃあ、他にやりたいことはあるか?」

「はっ」

「どうぞ美咲」

「川があるなら川遊びとか？一応泳げるくらいには深いみたいだし。」

「まあ、それくらいなら問題ないな。」

「俺もさんせー」

「いいじゃない！川遊び！とっても楽しそうだわ！」

美咲の意見は難なく通りそうだ。やっぱり美咲のほうが班長向いているんじゃないか？

そして時は流れ、様々な意見が出続けた。殆どは却下したが何とかまとまった。ちなみに、主に却下された意見はこんな感じだ、

「空から森全体を見てみたいわ！そうだ、スカイダイビングなんてどうかしら！」

とか

「イノシシ狩りじゃあああああ
!!!!!!」

とか、主に野外教室ではやらないことが却下された。

「それじゃ、俺はまとまった案を先生に提出しに行ってくるよ。」

そう言つて、この日の会議は問題なく？終え、俺達は、明後日の野外教室に備えるのだった。

日が落ち、部活も終え、本来ならだれもない教室の中にはこの日だけ、一つの集団が集まっていた

「それでは諸君…いや、我が同胞たちよ…よくぞ集まってくれた。」

本来だれもないはずの教室の教壇には、この集団の代表である矢坂勇人が司会をしていた。

「いや待て、俺は何も聞かされずにここに来たんだけど？いきなりお前らに拉致られて何がなんだか分かってないんだが？」

放課後となり、この日、創也はロゼリアのコーチの約束をしていたので、放課後をサークルで過ごし、練習を終え帰宅しようとしたところ、いきなり目の前に現れた勇人＋クラスの男子達に拉致され、再び学校に連れて行かれたのだ。

「黙れ小僧！」

「あ、俺に人権ないのね。」

しかし、よく見るとクラスの男子たちの面構えが違う。まるで…家族を残して戦場に行くような…それでも希望を捨てずに前向きに生きる兵士のような面構えだ。そんな人見たことないけど。

「〃〇〇野外活動センター」で2泊3日過ごす事になっているのはみ

んな知っていると思う。」

「それがどうしたんだ？」

クラスの男子の一人が尋ねる。

「俺は気付いてしまったのだよ…」

そのあまりにも真剣な表情に創也を含めた男子10人がゴクリと生唾を飲む。

「この野外教室には…露天風呂がある！」

「なんだと!？」

「まさか勇人お前!？」

「みつけたのか!？」

クラスの男子は創也を除いて全員動揺している。

「なあ…勇人お前何考えてんだ?？」

そんな中、一人だけ理解の及んでいないものがある。創也だ。

「てめえ!…こんだけ言ってもまだ分からなえのか!」

「お、おう…」

(なんて形相だ…そんなに風呂に入りたいのか?)

今までにない…もはや鬼を通り越して、悪魔の如き形相で創也の胸ぐらをつかみ、接近し、言い放つ。

「この世で最も崇高なる儀式！それすなわちNO☆ZO☆KIである！」

「ほえ？」

「そして何より！今回の計画に踏み出した理由を説明しようと思う。竹田君、前へ。」

勇人の合図で、竹田（クラスの男子）が男子たちの前で地図を広げる。

「ボクは以前、この場所を訪れたことがある。そしてハイキングの最中…偶然見つけてしまったのさ…向こうからは見えづらい…だが、こちらからははっきりと見える…そんなノゾキポイントをね…」

『うおおおお!!!』

クラスの男子（創也除く）から尋常じゃない程の歓声上がる。

「そして！この地図と竹田の話を元に、最高のノゾキ地点をあぶり出した！」

『うおおおお!!!』

再び、クラスの男子（創也除く）から歓声上がる。

「俺達がこの命を…魂を燃やす時があるとすればそれはいつだ！」

『女湯を除く時だ!』

「お前ら!女湯を見たいか!!」

『うおおおお!!!』

「全国の健全な男子たちの夢を叶える義務が俺達にはある!!」

『うおおおお!!!』

「その夢を叶える覚悟が!貴様らにはあるか!!」

『うおおおお!!!』

「いざ征くぞ!禁忌の楽園!!女湯へ!!!」

『ゴーゴーゴー!!!』

「そんなこと言ってるけど、野外教室は明後日だぞ?」

『あ…』

ちなみにこの時、創也は既に諦めていた。

(なんて熱気だ…これ、俺が女子とか先生に密告しようものなら即こいつらに殺されるやつじゃん……うん。考えず、流れに身を任せよう。)

しかし、彼等は気付くべきだった。教室のロッカーに隠れていた影の存在に…彼等の存在を破滅へと追いやる死神の存在に…

第4話 野外教室1日目 出発

野外教室当日の朝、ピピピツと、人の睡眠を妨げる目覚まし音が部屋の中に響く。

「なんだ…もう朝か…」

「にやあ〜」

「おはよ、こここあ。」

以前、友希那先輩が名付け、現在は俺の家で過ごしている子猫のこここあ。俺の布団の上で元気よく鳴いている。

そういえば、この前先輩に眠っているこここあの画像をロゼリアの練習中に見せたら面白いくらいの反応になったっけ？まあ、その後ビンタ食らったが。

「さて、飯を作っていくか。」

「にや〜」

こここあの皿には市販のキャットフードを入れ、自分の皿には、白米に生卵と醤油を掛け少し炒めた肉と野菜を混ぜるように入れた、即効のどんぶりを作り、5分で完食。

「さて、時間はまだあるし、ちよつとゆっくりすご「ソウヤー！」…無理だな。」

野外教室の準備を完全に終え、こここあと遊ぼうと思った矢先にこここらの声はつきりと外から聞こえた。

とりあえず、玄関に置いてあった荷物を取り、ここあを抱え、外に出る。

「あ、ソウヤ！一緒に学校まで行きましょ！」

「いいけど…俺お前に家の場所教えたっけ？」

「教えてもらってないわ。黒い服の人たちが案内してくれたの！」

「そうっすか…」

さっすが黒服さん。お嬢の友好関係はあらかじめチェック済みつてわけですかい。

「それよりも早く行きましょ！」

「はいはい」

「みやあ〜」

こうして、予想よりもずっと早く野外教室に向かうのだった。

「それじゃあ、よろしくお願いします。」

「お任せください。3日間の間、我々が責任を持ってお世話させていただきます。」

「あ、それからここあが良く好んで食べるキャットフードの販売場所と値段、遊ぶ時間と入浴の時の注意事項とか他にも色々書いたメモ

を渡しておきます。」

「かしこまりました。安心して野外教室をお楽しみください。」

俺は現在、黒服さんにここあを預けている。一人暮らしなので、こういった泊まりの用事などは、面倒を見てくれる人がいないのだ。もしかしたら、ロゼリアの人たちなら引き受けてくれるかもしれないが、頼るか頼らないか迷っていたところ、黒服さん達が申し出てくれたのだ。

「それじゃ、2日後にね。」

「みやあ！」

ここあが元気な返事をしたのを確認して、俺とこころは自分たちの班の集合場所に向かう。

「おはよー」

「おはよー！」

俺とこころが挨拶をして、集合場所に向かう。

「おはよ。こころ、もうちよつと声下げて…眠い…」

「おっはよー弦卷さん！創也！」

美咲は寝起きのような状態だが、しっかりと挨拶はした。勇人は全く正反対の挨拶。元気の塊のような挨拶だ。

「それじゃあ、出発まで少し予定の確認でもするか。」

話し合いをしながら過ごすことおよそ数十分、ほぼ全ての生徒が揃ったようで、先生の点呼の確認を終え、校長の話に入った。

『(相変わらず話が長い…)』

1年生の全ての思考が一致したあたりで、話は教頭先生に遮られ、俺達はバスへと向かい、目的地への移動を開始するのだった。

「目的地まで大体どの位かかるんだ？」

「んー、大体2〜3時間くらいだな。てか、お前自分のしおりあるだろ。確認してないのか？」

「いやあく班長に聞けば解決するので」

「……今度からお前にだけ伝えないでおくわ。」

「ひどい！」

俺たちは現在、バスで移動していた。

「ねえ、ソウヤ！何か面白い事ないかしら？」

後ろの席からこころが聞いてくる。

「んー？たぶんそろそろレクリエーション係の人が何かすると思うけど……」

『待たせたな！お前ら!!!』

直後、バス内のマイクを使った勇人の声が響く。

「お、始まったみたいだな。てか、レクリエーション係アイツかよ。」

『さて、今回の野外教室のレクリエーションは俺が担当するぜ！』

ノリノリだな。

『じゃあ、まず行われる催しは、これだ！』

どこからとも無く、デントツ！という効果音が響く。よく見ると勇人の片手に録音機が握られている。

『カラオケ大会だ!!!』

『…は?』

クラスの8割の声が一致する。

『それでは、歌い手一番の方は挙手を!』

『……』

いつせいに黙る

『あれ!?みんなノリ悪くね!?…しようがない!なら、俺の得意曲を歌うぜー!』

「いいぞー!」

「やれやれー!」

「ひゅー!」

他人がやるとなった途端これかよ…

「では一曲目!ミュージック、スタート!」

勇人が合図すると、ロックな雰囲気音源が流れたかと思えば、突然、演歌のような独特の音が流れ出した。

「ねえ、今から矢坂さんが歌おうとしてるのって…」

後ろの席から美咲が聞いてくる。

「ああ…某猫型ロボットが出る超人気アニメのあの曲だ…」

そう、あのアニメ界でも名言である、「俺の物は俺の物!お前の物も俺の物!」で有名なあの音痴なガキ大将の曲だ。

『ぶっ飛ばす!デンジャラス!俺ジャー!』

おっと、こつからは色々で見苦しいので割愛させてもらおう。強いて言えば、再現率が無駄に高かった。

『みんなあ!ありがとう!!さて、俺の美声が続くものはいねえがあ!!』

何故ナマハゲ…という疑問は放って置いて、選曲のおかげか、勇人自身の力か、先ほどとは違ってクラス全体が明るく手が上がっている。あ、俺?上げないって流石に。

「はい！あたしも歌いたいわ!!」

「俺も歌うー!」

「私もー!」

ほらな?俺が挙げなくても誰かが上げるって。あ、最初に歌いた
いって言ったのはこころだよ。

『ではでは、2曲目は…そうだなあ。』

何やら考える素振りを見せる勇人。…ん?なんか今日があつたよ
うな…。嫌な予感がする。

『よし決めた!!』

にやりと、笑い、勇人が俺の後ろの席を指差す。

『我ががクラスのお姫様!その天真爛漫さを制御できる者はいるのか
!!弦巻こころー!!』

「わーい!!ソウヤ!美咲!一緒に歌いませよ!」

「勇人(矢坂さん)!!!謀ったな(でしよ)!!!!」
俺と美咲が同時に叫ぶ。

勇人がこちらを見て、維持の悪い笑みを浮かべた理由が分かった。
こころを指名すれば、必然的に俺と美咲のこのクラスのハロハピメン
バーが巻き込まれる。勇人をはこれを狙ったのだ。

「ほら二人共!はやく歌いませよ!」

「はあ…ちなみに何歌うか決めてるの？」

「?…何も決めてないわ!そうだわ、ハロハピの曲を歌いましょうよ!」

「いや、こころ…流石にそれはCDにはないって…」

「美咲のいうとおりだ。残念だが、歌うなら他の曲を…」

「ハロハピの曲ならあるぞ。」

「あるの!?!」

勇人の衝撃的な発言に驚いてしまう。

「おう、今朝、黒い服を来た人たちがこれをお使いくださって、CDを渡されてな。そのなかに、ハロハピって書いてあるのがあったから、多分それ。」

まじか…黒服さん有能すぎませんか？

「美咲…どれがいいかしら?」

「あー、うん。これで良いんじゃないかな?」

美咲はもう諦めたようだ。

「あー、俺は3曲目から歌うよ。美咲、2曲目は頼んだ。」

マイクが2つしかないので、デュエットが限界なのだ。まあ、解説くらいは挟んでおくか。

「勇人、解説するからマイクパス。」

「ほらよ」

勇人からマイクを受け取り、こころと美咲のデュエット曲を解説する。

『えーと、今からこころ達が歌うのは“笑顔のオーケストラ”。こころ率いるバンドの曲です。一応、俺らがバンドやってるのを知ってる奴もいると思う。それじゃあ、どうぞ！』

マイクを美咲に渡し、曲の音源を流してもらう。

『それじゃあいくわよ美咲！』

『あー、はいはい。』

『『笑顔のオーケストラ!!』』

曲が終わる。結果は、大成功。本来はこころメインの曲だが、美咲とのデュエットということもあり、かなり盛り上がった。最初の頃と比べたら、随分と上達したなあ。

『みんなー!!ありがとう!!』

『はい創世の番。』

「任された。」

こころはやはりハイテンションで、美咲はマイクを俺に渡してくる。

『えーと、次に歌う曲…こころ、なにがいい？』

『そうね…これがいいわ！』

そういつて、こころが選んだ曲は、ボカロ曲の『ロメオ』。ああ、この曲ならなんとか歌えそうだ。薫先輩とかが歌ったらめっちゃ様になるやつだな。

『それじゃあ3曲目！行くわよ！』

『『ロメオ』』

無事に曲を歌い終えた。ただ…クラスの連中の一部の反応が変だ。

「なあ…卯月のやつ、あんなに歌うまかったのか？背景に城が見えたぞ…」

「卯月くん…かっこいい…」

「何気に弦巻さんの声も合わさって鳥肌がやべえんだけど…」

うん。いい反応？だと思う。

そして、その後もカラオケ大会は続いた。

そして約二時間後。

『着いたああ
!!!!!!』

俺達は現地に到着した。

第5話 野外教室1日目 ハイキング

現地に到着してから数分後。

「の、喉があゝ」

「あんだけ歌えばそうなるって…」

勇人が喉を痛めた。理由はもちろん、バス内でのカラオケ大会だ。何気に俺の班が一番多く歌ってた気がする。まあ、好評だったから良いけど。

「それでは、現地に到着したのでお昼にしましょうか」

引率の教師の合図で、全員がカバンから弁当を取り出す。

「あー！」

「どうした？」

「弁当でお湯忘れた……」

そういつて、勇人がカバンから取り出したのは、カップ焼きそばだ。

「…俺の弁当いるか？」

「恩に着る。」

家でもないのに弁当にカップ焼きそばという謎の選択をした勇人。バクバクと俺の弁当を食っている。

「いやあ、創也の料理って、親が作ってんのか？めっちゃくちゃうまいぞ？」

「いや、一人暮らしだからそれ作ったの俺だぞ。」

「ソウヤ！私の弁当のおかずと交換しましょ！」

「あー、はいはい。チーズハンバーグ、牛肉コロッケ、ミニパスタ、他にも色々作ってきたからどんどん交換してくれ〜」

「お前さ、何気に今回の野外教室一番満喫してね？」

「否定はしない。」

初めて本格的に参加する行事なのだ。絶対に成功させるつもりで挑まなくてはという使命感から俺は徹夜で弁当など、様々なものを作ったのだ。

「あー、私もいい？」

「おう、いいぞ〜。」

そういえば、美咲はファミレスの料理が好きだったっけ？

「「「うちそうさま」」」

「あいよ。お粗末さまです。」

弁当は、すぐに完食した。思ったよりも好評だった。

「それでは、ハイキングに移りますよ〜！」

そして、次の行事が始まる。

ハイキングとは、健康や見聞を広げる、また、自然の様子を楽しむために軽装で山道を探索することである。

しかし、健康や見聞を広めるということなら百歩譲ってよしとしよう。だが、今の状況で楽しむということはないだろう。なぜって？

「ちよつと…なんでこんなに…道がぬかるんでるんだ…?？」

「ああ…確か昨日この辺りで雨が降ったらしいぞ。まあ、すぐ止んだらしいけど地面がぬかるむ分には十分な量みたいだな。」

そう、道がまるで田んぼのようにぬかるんでいたのだ。こんな道じゃあ、進むのにも苦勞する。楽しめる要素なんてまったくない…

「いえーい!!みんなー！」

…ごめん、例外がいた。ここは全力全開で今この時を楽しんでいくようだ。

「はあ…はあ…なんでお前らそんなにサクサク…進んでるんだ？」

勇人は息切れしているようだ。それと勇人、俺と美咲の場合は、

「ミッシェルとテニス」

「ここらに振り回されて」

ハロハピに関わっていれば勝手に体力がつくってもんさ。まあ、ほとんどのバンドに参加していない俺でさえついていることから、どんな活動をしているかは察してもらいたい。

「こころは…うん。普段からあんだだけ動ければね…」

「それでも気をつけろよ。いくら動けたって何が起こるかわからないからな。」

「きやつ!？」

「うげつ!？」

突然、後ろに引っ張られ、後方に倒れる。

「いたた…やっぱり足場が不安定…なんだけど…」

周囲に美咲の声が浸透する。

「…俺、女子に押し倒されたのって人生初なんだけど…」

今の状況を説明しよう。美咲が躓つまずき、何か支えを得るためか、俺を引っ張り、美咲が俺を押し倒してる状態だ。

「うっ!!せいっ!!」

「ぐぼっ!？」

腹を全力で殴られる。流石に理不尽だと思う。

「ほ、ほらっ!はやく行くよ!!」

耳を真つ赤にしながらも、美咲は俺を足蹴にし、起き上がる。ひつで。

「おーい、生きてるか?」

「女子ってたまに理不尽だよな。」

「いや、それはお前だけだと思うぞ?」

「…?」

その後もハイキングは続いた。その後も、様々なハプニングが続きながらも、ハイキングは続行した。具体的にいうと…

「あ、そこのお嬢さんっ!良かったら俺らと一緒に」

「はっ!」

「ぐべっ!?!」

ナンパを開始しようとした勇人を全力(物理)で黙らせ、また、ある時は…

「あら、あんな所に川があるわ!行ってみましょう!」

「ちよつ、こころコースを脱線してる!」

コースを脱線しようとしたこころを全力で足止めし…また、ある時は…

「うわっ!？」

「またあ!？」

今日は厄日なのか、頻繁に転ぶ美咲に何度か押し倒され、その度に腹を殴られ：

その後も色々なことに（主に創也が）巻き込まれ：色々な事がありながらも、なんとか山頂まで到着した。

「はあ：はあ：なんで俺ばっかり：」

創也は息切れを起こし、

「グフツ：ちよつとくらい：俺にも春を：」

勇人は満身創痍の状態となり、

「うう：創也を何回も：そんなんじゃないのに：」

何故か美咲は顔を真っ赤にし、

「みんな泥だらけね。でも、楽しかったわ！」

笑顔のところが班を鼓舞する状態がいつの間にか成り立っていた。

山頂に着き、他のクラスの人たちが来るまで待機しているときだった。

「あー、そーくんだろ。」

「ん？この独特の気が抜けた声は…モカ…？」

「そうです。モカちゃんです。」

「やっぱり…」

案の定、コンビニバイトの同僚の青葉モカだった。

「そういえば、羽丘の生徒も参加してるんだっけ？」

「そうだよ。モカちゃんに会えて嬉しいですよ。」

「あーうん、そうだなー」

モカと居ると良い意味で気が抜けるんだよなあ。

「はじめましてお嬢さん。僕は矢さぐへっ!？」

美人・美少女を見つけた瞬間、自製の効かなくなる勇人。テメエは女と見れば見境なしか。

「おーい、モカー！どこだー？」

「モカー！どこいるのー？」

「モカちゃん、どこ行ったのー！」

どこからとも無く、モカを呼ぶ声がある。

「おい、呼んでるぞ。」

「おーい、みんな。こつちだよ」

モカが声を上げると、羽丘の生徒と思わしき女子3人がモカの元に集まる。

「モカの知り合いか？」

「あ、もしかしてここに来る途中話してたバイトの同僚の創也って人？」

「そうだよ」

おい、ここに来る途中で話してたって、どういう意味だ。

「あ、いつもモカちゃんがすみません…」

「あ、いえ・慣れてるので。」

茶髪のショートの子が話しかけてくる。うん、きっと苦労人なのだろう。

「あー、モカが何を話してたかは知らないけど…まあ、卯月創也です。」

とりあえず自己紹介。モカに変な紹介をされていたら大変だ。

「アタシは、宇田川巴だ。よろしくな。」

「上原ひまりです！よろしくね！」

「えっと、羽沢つぐみです。」

ん？宇田川？最近どこかで聞いたような…あつ

「もしかして、あこのお姉さん？」

「そうだけど…あつ、もしかしてあこのバンドに来たコーチって創也のことか？」

まじか…意外なところで人って接点があるもんだな。しかし…

「…？さつきからじつとこつちを見てどうした？」

「いえ…お気になさらず…」

「ともちん、そーくんは身長で負けたことが悔しいんだよ」

「何故わかったし…」

「えつと…なんか悪いな！」

やめて！その素直な謝罪が地味に心に響くから！

「そういえば、モカも巴さんもバンドやってるんだっけ？」

「あとは、ひーちゃんもつぐともやってるよ。それとここには居ないけど蘭ともやってるよ。」

「そういえばバイトで幼馴染でバンド組んでるって言ってたな…て事は…後の1人は別のクラスなのか？」

「そうだよ」

へえ、聞いた限り仲が良いみたいだな。羨ましい限りだ。

「いった…おい創也…お前少しは加減つてものを…」

あ、変た…じゃなくて勇人が起きた。

「お嬢さん方、よければ僕達の班と一緒に行動ぎやつ!」

「目覚めた瞬間息をするようにナンパするな。さつき赤いメツシユをした人をナンパしてただろ。」

「「「あ…」」」

「もしかしてその人がナンパしたのって…」

「ん?さつきここに来る途中で赤いメツシユの人をこいつが口説きに行つてたけど…まさか…」

「うん…多分その赤いメツシユの人って、蘭ちゃん…」

「……ほんとすみませんでした。」

地面に膝を着き、日本の奥義、DOGEEZAの構えをする。え?そんなもモノを日本の奥義にするなって?いや、ほんつとにすみません。うちの班の変態がご迷惑を…

「ソウヤー!勇人ー!そろそろ行くわよ!!」

あ、ここらに呼ばれてら。

「えーと、呼ばれてるみたいだからそろそろ…」

「またね〜」

「おう！また今度！」

「またね〜！」

「またね」

うん。いい人たちだ。本当にうちの変態がご迷惑をおかけしました…

謝罪を終え、班の元へ向かう。

「知り合い？」

「まあ、そんなところ。向こうもバンドやってるんだって。」

「へえー。」

そんなとりとめのない会話をしながら俺達は気絶した勇人を抱えつつ、集合場所に向かうのだった。

ちなみに、創也達が4人と話している頃、こころは…

「なら、キャンプファイヤーの時ね！ん〜っ！とつても楽しみだわ！」

「こころん、ナイスアイデアだよ！」

「はぐとこころんからもオーケーでたし、私もみんなに相談してみる

ね！」

なにやら、不穏な動きを見せていた。

第6話 野外教室1日目 夕飯及び入浴

「よし、時間もちょうどいいし、カレーづくりにするぞ。」

「「はーん」」

ハイキングも終わり、山頂のキャンプ施設へとたどり着いた。

「じゃ、役割ごとに行動するように。」

それぞれが役割を決め、夕食づくりの実行に移す。
ちなみに、俺の班の役割はこんな感じだ。

監視役？卯月創也

火係 ？弦巻こころ

野菜係？奥沢美咲

調理係？矢坂勇人

俺が監視をすることで、この班で問題が起きるのを事前に防ぐ。多少この采配にした教師に文句を言ってやりたいが、まあ、カレーを作る程度では何も問題は起こらない…よな？

こうして、波乱万丈のカレー作りが始まった。

「創也、塩ってこれくらいでいいのか？」

おっと、さっそく呼ばれたようだ。

「あーはいはい、ちよつと見せて…」

勇人の手元の食材を見る。えーと、夏野菜のサラダ用のソースを作

るため、少量の塩を入れる予定だが……

「馬鹿野郎！それ塩じゃなくて小麦粉だ!!しかもただけ入れてんだ！俺少量って言ったよな!？」

「あつ！ほんとだ！」

作り直し確定。

「ソウヤー！火が全然つかないわ!!」

「ん？ああ、昨日雨が降ったから薪が湿気てるんだと想うけど……」

「なら、これ入れれば火がつくんじゃねえか？」

「あ、バカッそれはガソリー」

ドンツ!!!

その日、焚き火場に一つの黒煙が上がったのは言うまでもない。

「だはははははは
!!!!!!」

「ちよつと……笑い事じゃ……ぶふっ」

「ソウヤ……大丈夫……？」

「いや、芸術的なまでの作品ですなあ」

「モ、モカ!!……くふっ」

「でも…創也くんの髪が…ふふっ…」

「ひまりちゃんも…笑っちゃ…ふふっ…」

「というか、全然知らない人の頭が…ふふっ…」

「お前ら！笑いたきゃ笑えよ畜生！」

『あははははははははははは
!!!!!!』

「笑ってんじゃねえ!!」

あの後、勇人が火の中にぶっ込んだガソリンが爆発した。間一髪で俺が庇ったこともあり、ここは無傷。だが、おれは直撃し、何の因果かギャグ漫画の爆発オチのように黒焦げアフロになってしまった。

というか、1人見たことがない人…いや、昼のハイキングで勇人がナンパしようとした人だ。あの赤メツシユは覚えてる。ということ、今日の前にいる人がモカの親友の蘭か…。とりあえず勇人は明日川の底に沈めてやる。

「ソウヤ…ごめんなさい…」

「いや、無傷だったし構わねえよ。だからそんなしよぼくれた顔をするんじゃねえよ。お前は笑顔が一番可愛いんだからさ。」

「えっ!?」

「なあ…あれは素で言ってるよな？天然の口説きか？つち、羨ましい…」

「矢坂さんは心が穢れてるから創也には敵わないよ」

「おお：アツアツですな〜」

「よくあんなセリフがスラスラ出るな…」

「巴も偶にあんな感じだつて…」

「なんか無駄に様になってるね…」

「でも、創也くんの容姿も相まって凶悪…」

「ところで、モカ達はここにいて良いのか？」

「「「あ」」」

先程の爆発騒ぎを聞きつけた羽丘の生徒は、素早く退散した。そしてその数分後…

「煙が上がっていたが、なにが起こったんだ!!」

引率の教師が複数人駆けつけてきた。

「なんか突然爆発が起きました。負傷者一名です。」

手を上げ、教師に存在を知らせる。

「ぶふっ!?…卯月…その頭は…ぐふふ…ふざけてるのか?」

隠せてねえよ畜生。

「爆発の巻き込まれてアフロになりました。火傷とかはないのでご安

心を」

「そうか…ぷっ…つぎからは…気をつけるように…ふっ」

…そんなにこの髪型がおかしいのか？怒る気が失せたのか、教師陣は退散した。

「さて、カレー作りを再開するぞ。」

こうして、何事もなく？カレー作りは再開された。

「や…やっと終わった…」

「おつかれ…さま…」

「お疲れどころか…俺ら過労死一歩手前だぞ…」

あの後、主に勇人とところが再び暴走を始め、それを沈めるために俺と美咲が全力で動く。

「まあまあ、出来上がったから良いじゃねえか！」

「とっても美味しそうだわ！」

木製の机の上に並べられたカレーを見て、二人共ノリノリだ。精神年齢ってなんだろうね。

「めっちゃうまいー！」

「んんんっ！最高だわ！」

「確かに、普通のカレーよりも甘みもあつて、まろやか…」

ちなみに、カレーは結構好評みたいだ。花音先輩の誕生日(番外編)より人が少ないから本当に楽に出来た。

「うん、隠し味がいい感じに聞いているな。」

「「隠し味?」」

「ああ、これだ。」

俺は、ポケットから茶色い液体が入ったボトルを取り出した。

「これって…焼肉のたれ?」

「正解」

「なんで焼肉のたれが隠し味なんだ?」

「焼肉のたれの材料には、りんご、はちみつとかのカレーの代表的な隠し味が多く含まれてるから、低コストでカレーの味を上げることが出来る。」

「さすが…花音先輩の誕生日でも思ったけど、どこからそんな主婦力が出てくるのさ…」

「とっても物知りなのね!ソウヤは料理の天才よ!」

「よっ!我らのお母さん!」

「ふっ…褒めてもカレーしか出ないぞ…ちよつと待て、お母さんってどういうことだ勇人」

そんな雑談をしながら、夜になった。

完全に夜になる前に、花咲川も羽丘も就寝用のテントを建てたらしく、あとは風呂に入り、明日に備えるだけとなった。

そう…つまり夜が来てしまったのだ。いつか来ることは分かった…可能ならば、このときだけは永遠に来てほしくなかった。俺は目の前の漢（笑）たちを見ながら、そう思わずにはいられない。

「野郎ども！準備はいいかあ！」

『おおおお!!!』

「準備よし！計画よし！天気よし！神は俺たちの味方だ!!義は我らにありーいざ行くぞー！」

『うおおおお!!!』

そう…以前勇人が持ちかけた女湯を覗いちやおう作戦。実を言うと、羽丘の男子と合同で見るらしい。

ここに来る前日、花咲川と羽丘の男子が密かに集まり、結託していたらしい。ほんつと、エロパワーは、無限大だなあ。（呆れ）

「はあ…どうかバレませんように……」

「へいへーい、創也どうしたあ？テンション上げてこうぜ！」

「……」

こいつを思いっきり殴りたい。

こうして、俺たちは獣道へと進み、覗きポイントへと向かうのだった。

「よし、後5分すれば、女子達が露天風呂に集まる……つまり、あのお湯が溜まった場所が、男の夢と希望に溢れた楽園へと変貌する！野郎ども！突撃ダア！」

『うおおお!!!』

獣道を抜けると、広場へと繋がった。その奥には、かなり薄くだが、湯気と光が見える。

「ついに……ここまで……全員、双眼鏡は持ったな！いくぞ！」

双眼鏡を片手に勇人が真っ先に覗きポイントへ突撃した。

そして、悪夢は始まる。

ボンツ
!!!!

『え?』

突然の事だった。勇人が突撃し、覗きポイントまで到着した瞬間、地面が爆ぜた。その衝撃で、勇人は獣道の方角へ飛ばされ、そのまま見えなくなった。

「まさか……地雷原!」

そう呟き、1人の生徒が一步後ずさると

ボンツ
!!!!

再び、地面が爆ぜた。それに巻き込まれるように複数人の生徒が次々に獣道へと吹き飛ぶ。

残り、数人

「全員!不用意に動くな!!巻き込まれるぞ!」

羽丘の生徒の声で、冷静さを全員が取り戻す。
しかし

ボンツ
!!!!

「ぐおっ!?!」

ボオオオンツ
!!!!

「ぐあっ!?!」

「うおっ!?!」

次々と哀れな男子生徒達は爆発に巻き込まれ、獣道へと飛ばされる。

残り1人

「つて、ついに俺だけかよ!!!」

結局、残ったのは俺だけだ。

「あ、俺このままなら帰ってよくね? うん、巻き込まれただけだし、わざわざ痛い目を見る必要もねえな。よし、帰ろう!」

そうだ。俺はもともと巻き込まれた側の人間。ならば、普通にテントに戻ればいいだけだ

しかし、その判断は遅かった。

ドンッ!!!

「ですよねえー!!!」

結局、俺も地雷を踏み、空中へと投げ出される。

(あーあ。結局こうなるのなら、サボっておけば……ん？ちよつと待て、滞空時間がおかしくねえか?)

いつまで経っても、硬い地面の感触はなく、空中に投げ出されたままだ。

「つて、そっちは女湯じゃねえか!!??」

そう、俺は爆発の際、何故か来た道ではなく、女湯の方面へと吹き飛び、現在崖から落下中だったのだ。

「やばい！死ぬ！マジで死ぬ！」

微妙に高い位置からの落下。良くて骨折、最悪死ぬかもしれない。

「死んで！たまるかああ!!!」

俺は雄叫びに近い悲鳴を上げながら、崖から飛び出た木に飛びつく……が、落下速度に耐えきれず、そのまま手を離してしまう。

「まだまだああ!!!」

崖を蹴り、とにかく落下の衝撃を緩和する。

そして、

ズボン!!!

お湯の中へと飛び込み、無傷での生還を果たした。

「しゃあっ！俺は生きてるぞ!!!」

しかし、喜んだのも束の間。

「それでね。」

「そんな事があつたんだ」

「あ」

女子の声が遠くから近づいてくるのがわかる。

「あれ？おたえどうしたの？」

「うん。今、お湯の中に誰かいた気がする。」

「そんなわけないだろ？……まさか覗きか？」

「ええく!?ど、どうしよう…」

「いやいや、流石にそれはないでしょ。」

女湯には、5人程の女子が入ってきた。

(嘘……だろ?)

人生でもトップクラスに入る異常事態故か、創也は限界を超えた速度で誰かに完全に気づかれる前に、近くにあった草むらに隠れることが出来た。

(これ以上人が来る前に脱出しないと、本格的にやばい……どうにか今の内に逃げないと……)

しかし、やはりというべきか、その判断は遅すぎた。

「わーいっ!!!」

「ちよっ!……ころ、はぐみ!飛び込んじやダメ!」

「元気ですなあ」

(嘘やろ……?)

次々と知り合いの声が聞こえる。モカの声も聞こえたことから、おそらく羽丘の女子も入ってきたのだろう。

(くそっ!これじゃあ脱出なんて出来ない……このまま隠れているしかないか……)

創也にとつての地獄が、今、始まりを告げたのであった。

くおまけ?く

「いった…なんでいきなり地面が…」

その後、突然の爆発に巻き込まれて飛ばされ、数分ほど意識を失っていた勇者

「だがっ…俺は諦めないぞおお！！！！」

彼が再び女湯に到着するのは、後数回ほど地雷を踏む必要があるのだが…それはまた別の話。

第7話 野外教室1日目 社長と罰

前回のあらすじ。不可抗力で女湯に落下。以上。

え？情報が足りないって？……簡潔に言えば、何故か爆発に巻き込まれて女湯にドボンということつすよ……ちなみに、今の俺は草むらに上手に擬態して、女湯から人間が1人もいなくなるのを待っている。勇者達がいれば鼻血出しながら喜びそうな案件だが、生憎と楽しむだけの余裕はまったくない。

(はあ……なんでこんなことに……というか、なんで覗き場所が爆発したんだ?)

そんな疑問に答えるように女子サイドでは会話が広げられていた。

「そういえば、矢坂？って男子が覗き計画立ててたらしいけど、あれってどうなったんだ、奥沢さん。」

女子の一人が衝撃の発言をする。

(はあっ?!?思いつきり計画露出してんじやねえか!!なーにが極秘作戦だよ!全世界の極秘作戦実行者に謝れ!)

「あーうん、前に教室に忘れ物をした時に偶然聞いたから……黒服さんに頼んで覗きポイントに非殺傷性の地雷を大量に仕込んでもらって……」

(え!?なに、そんな事してたの!?)

「まあ……私が知ってる限り、創也は巻き込まれただけかもだけど、止めなかつた方も悪いからさ。まあ、そういう訳で覗きはない状態だから安心して大丈夫だよ市ヶ谷さん。」

(ごめん……不可抗力で思いつきり侵入してます……)

本当に申し訳ない……

(あ、でもあいつらと一緒にの方向にぶっ飛んでたら、俺女子に捕まっ
ぶっ殺されたんじゃない？…そう考えると案外ラッキー…なのかな?)

そんな考えが頭をよぎった時だった。

「うわあ!？」

女子の一人が風呂場で走り回っていたのだが、風呂桶を踏んで、思
いっきり転んだ。

ゴンツ!!

そして、踏まれた桶はあろうことか俺の方向に飛び、顔面に直撃し
た。

「香澄！風呂場で暴れるな!!誰かに当たったらどうすんだ!」

「ごめん有咲」

「カスミさん、大丈夫ですか?」

(前言撤回……ここにも殺される……っ!)

頭にたんこぶを作りながらも悲鳴をあげなかった俺は頑張ったと
思う。

「ねえねえ、みんなで恋バナしようよ！」

しばらく隠れながら過ごしていると、女子の誰かが呟いた。まあ、声的にひまり辺りか？

「もう入学して2ヶ月なんだし、そろそろ気になる男子が見つかったんじゃない？」

「気になる男子か？」

「誰かいる？」

何やら盛り上がってるようだ。

(女子ってこういう話題ホント好きだよな……恋愛する理由が分からねえ……)

「ひーちゃん、彼氏いないから焦ってる？」

「そ、そそ、そんな訳ないじゃん!？」

(動揺隠せてねえぞひまり……)

「でも、ルックスだけなら創也くんも良いよね。土下座してたけど。」

「まあ、見た目だけなら悪くないと思う……土下座してたらしいけど」

「たしかに、見た目は良いよな。土下座してたけど。」

「そーくんは割とイジリ甲斐があるよ、土下座もしてたし。」

(土下座土下座って…いや確かにほとんど羽丘女子には土下座した覚えしかない良いけどさ…)

「何故か自分の話題が上がる。」

(あれ…でも嫌な気はしない…なんだこの気持ち…?)

なんとも言えない複雑な気持ちが湧いてきたときだった。

「って、話が脱線してる！みんなは好きな人いないの？」

「「「いない(ない)」「」」」

羽丘幼馴染組は声を揃えて否定する。

「もおっつ！じゃあ、花咲川の人たちは？」

そこで巻き込むのかひまり…

「はーいつ！私はみんなが大好き!!」

それ、恋バナじゃなくね？

「香澄！大声で言うなあ〜！」

あ、言い争いに発展してら。

「じゃあハロハピの3人は？」

「はぐみはハロハピのみんな！あとは、うちのお店のコロッケ！」

一つ人外が混じってるし…てか、なんともはぐみらしい解答だな…

「あたしもみんなが大好きよ！」

「こころ、はぐみ…多分解答間違ってる…」

美咲がツツコんでいるが、若干ニヤけてねえか？

「そういえば、奥沢さんと弦巻さん、よく卯月さん？と一緒に居るところ見るけど、そこら辺はどうなんだ？」

「いや…まさかそんな…」

しかし、そこで美咲の頭の中に今日の昼の光景が思い浮かぶ。

何度も何度も創也を押し倒し、その度に、抱きついてしまっていた自分の状態を…

「ふ、ふええー…」ブクブクブク…

「みーくんがかのちゃん先輩みたいになってお風呂に沈んじやった!?」

「奥沢さん!?!」

「っというか…こころはどうなの!?創也のことどう思ってるの?」

何かを思い出したように風呂の底から起き上がる美咲

「あたしはもちろん創也のことも大好きよ！」

「それって、ラブじゃなくてライクでしょ…」

(ライクとラブの違いがようわからん…というか、というかハロハピのメンバーはひまりみたいなの恋愛脳じゃないだろ…)

思い返す限りでもそんな感じはなかったと創也は記憶している。
※気付いてないだけ

「あ、でもね…最近…」

「最近…どうしたの？」

「…こころは顔を少し赤くしながら言葉を紡ぐ。

「ソウヤと居ると、胸の辺りがなんだかキュツつてするの…それが嫌だってわけでもないのだけど…」

(少し距離があるせいか、あまり上手に聞こえねえ…)

「…こころ…それって…」

美咲は直感的に悟った。

(まさか…こころが創也に対して抱いているのはライクじゃなくてラブってこと!?)

「…こころ、それって『そういうえばひーちゃん最近太ったって言ってたよねー?』…ま、いっつか…」

美咲がその思考にたどり着いた瞬間、モカが口を挟み、話題が切り替わった。

「モ力!?それは言わないでよ!?!」

(……あれで太ったって……詐欺じゃね?)

改めてひまりの身体を見る。うん、詐欺だ。だって、腹回りの肉なんか大して無いくせに胸の……まあ、脂肪が明らかに他の女子より多いもん。てか、太ったって、胸に引っ付いてる脂肪じゃね?まあ、その場合痩せることはまず無理だな。

「…!?今、誰か痩せるの無理って考えなかった!?!」

「いや、そんなことはないと思うよひまりちゃん……」

キヨロキヨロと辺りを見渡すひまり。……無駄な思考は命取りだな。

「そういえば、市ヶ谷さんも弦巻さんも結構大きいよね。」

女子の誰かが呟く。

「なっ!?わ、私は知らねえし!」

「あら?…そうかしら?」

市ヶ谷さんと呼ばれた女子は恥ずかしがり、こころはすつとぼけている。

「たしかに……市ヶ谷さんもこころも他のみんなより大きいよね……」

美咲が若干羨ましそうに2人を見る。

(確かにあの二人は他の女子よりはデカいよな。それに比べて美咲は…控えめだな)

「こころ達と比べると美咲は控えめである。」

「…：…なんだろう…：今、無性に創也を殴りたい…」

(やつべ)

美咲から殺意が漏れ出ている。流石に命の危険を感じたため、無駄な思考を消し去る。

(というか、これ男子が聞いて良い会話じゃないよな…早く上がってくれないかな…?)

いい加減、風呂場ということもありさらに言えば、俺の服装は現在濡れているとはいえ、長袖長ズボンのジャージ…つまり地味に暑いのだ。

(やばいな…頭がボーツとしてきた…)

長時間この場に居座っているせい、創也は少しずつのぼせていた。

「それでさ〜」

「へえ〜」

「いいなあ〜」

そんな苦しんで^創いる者^世の事などお構いなしに、女子たちは長風呂を

満喫していた。

(やばい…そろそろ思考が纏まらなくなってきた…そうだ…長袖のジャージだけでも…)

そう考えて、ジャージの金具に手をかけようとした時だった。

ガサガサ…

ジャージを気づかれぬように脱ごうと手を動かしたところ、擬態していた草に腕が触れてしまい、ガサガサと音がなってしまった。その結果…

『誰?!』

女子の何人かに勘付かれてしまった…

(あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ!!!!!!!!)

今の創也の心情を分かりやすく説明しよう。簡潔に言えば

(あ…オワタ…)/ (へっへっ)

この状態である。

(まだだ…諦めんじゃねえ!頭を全力で回転させて打開策を見つけてんだ…っ!)

創也は現状打破のため、全力で思考を巡らせる。

【プランA】素直に出て謝罪

「みんな…ごめんっ！不可抗力だったんだ…」

「この変態っ!!」

バキッ!!!

「ごふう!?」 | : (?、、「 < : ゲームオーバー

うん、この策は没だな…美咲あたりに殺される…
よし、次の案だ。

【プランB】死んだふり作戦

「大変！誰かが倒れてる！」

「シンダフリ

「誰かつ！救急車を！」

(よし、このままやり過ごせば…)

「あら?…ソウヤったらなんでお風呂で寝たふりをしてるのかしら?
?」

「……」

「起きてるの!?創世の変態!!」

バキツ!!!

「ごふう!?」 | : (?、?、?、?) < : ソウヤハシンデシマッタ!

だめだ…こころに一発でバレル…

実を言うと、こころが教室での休み時間中に話しかけてくるのは、
決まって俺が起きている時か眠ったフリをしている時なのだ。つま
り、一瞬でバレて美咲に殺される。

はい没。次の案だ!

【プランC】動物作戦

「みやあゝ」ネコノナキマネ

「つて、なんだネコかあ、ビックリしたな。」

「はぐみ、ねこ見てみたい!」

「みやあ!?」訳?はあ!?

「あれ?ねえみんなー、猫はいなかったけど、そーくんならいたよー
!」

「え!?!嘘!?!この変態!」

バキツ!!!

「ぎにやあ!?!」訳?ごふう!?!

ダメじゃん…猫に興味を惹かれたはぐみ辺りに見つかつて最終的に美咲に殺される…

あれ!?ひよつとしてコレって将棋で言う詰みの状態じゃね!?

「ねえ、誰か確認に行ったほうが良いんじゃないの?」

ヤバイツ!マジヤバイツ!

誰かが一歩づつ確実に近づいてきているのが分かる。

「ああああああああああ
!!!!!!おちるうううう
!!!!!!」

…あれ?なんか今変な声が聞こえたような…

「ああああああああああ
!!!!!!」

間違いない…誰かがこちら側に近づいてきている。女子も流石に聞こえた様子で、辺りを見渡す。

「死んで!たまるかああ
!!!!!!」

(…まさか…上空か!?)

その考えにたどり着き、音を建てないようにチラリと上を向く。よく見れば、謎の物体が雄叫びに近い悲鳴を上げながら上空から落下している。

ズボオン!!!

『ぎゃああ?!?!?!』

女子の悲鳴など気にせず、その物体は俺と同じようにお湯の中へと落下した。

「よっしゃあ！俺は勝った！あいつらの犠牲は無駄じゃなかったんだ！」

湯船の中から這い上がって来たのはずぶ濡れになった今回の主犯である勇人だった。

しかし悪すぎるタイミング……いや、自分的にはグッドタイミングだが、あいつは自分の現状を嫌でも理解することになるだろう。

「大量の地雷を仕掛けたはずなんだけど、懲りてなかったんだね矢坂さん」

「ひっ!？」

勇人が慌てて振り向くと、後ろには美咲（バスタオル装備）などの女子達（バスタオル装備）が鬼のような形相で立っていた。というか、いつの間にバスタオルなんて持ってきたんだ…。

「他の男子達が犠牲になったんだし、リーダーの矢坂さんにはそれ以上の対価が必要だとアタシ、思うんだよね」

「ひいいい?!?!」

あ…あいつ…死んだな…。

だが、コレはチャンスだ。勇人を生贄に捧げることで女子たちは勇人を半殺しにした後、勝手に風呂からでていくだろう。そこを狙って脱出。すまんな勇人…俺を巻き込んだ代償とでも考えてくれ。

「最後に、遺言は？」

「…ッ！な、なら言わせてもらおう！」

「言ってみな？」

「俺は……否、俺達は共に約束を誓った漢だ……！」

おい…勇人のやつまさかあのセリフを…ッ!?

「俺達の夢は…」

勇人は一息吸い込むと、心の底から、魂の咆哮を上げる。

「不滅だああああ!!うおあああああ——っ
!!!!」

最強神兼社長の雄叫びをあげた勇人の末路は……すまない、とても
じゃないが俺の口からは語ることが出来ない…

「わ…ッ……我が生涯に…一片の……悔いなし…」

(え!? アイツあの状態で生きてるの!? R18—Gを軽く超えたモザイクが必要なレベルだぞ!?)

草むらから見ていた創也は、流石にあの状態でそのセリフを吐いた勇人に恐怖と呆れを通り越してもはや尊敬すら抱きそうになっているのであった。

「はあ…とりあえず、この変態と地雷で吹き飛んだ男子を吊し上げに行くとしますか…」

とりあえずのノリであいつらは殺されるのか…

「俺達の野望は…不滅なり…」

「あ、まだ息があつたんだ」

勇人がジャージの首あたりを掴まれ、そのまま何処かに連行される。

もしも、今の状態の勇人のように自分がなっていたかもしれないと思うと、鳥肌がたつた。

「まあ、いい…アイツのおかげで女子は1人残らず風呂場から立ち去った…今の内に脱出つと…」

女子が1人もいなくなったことを確認し、俺は崖をよじ登り、露天風呂から何とか脱出したのだった…

くおまけ1く

??「ごめんみんな、ちよつとお風呂場に忘れ物をしたから取ってく

るね。」

女子「じゃあ先に脱衣所出てるね」

??「うん!」

女子たちに一旦席を外すことを伝え、彼女は風呂場に再び向かう。
??「えーと、何処に置いたっけ?…って、あれは?」

創也「よし:っ!脱出完了:…何とか助かった:」

彼女の視界には崖をよじ登り、どこかに逃げる創也が移っていた。
??「あれって…:…?」

脱出の瞬間を見られていたことに創也は気付かないでいた:

くおまけ2く

女子達『さあて、どんな罰が良いかなあ?うふふ:』

男子達『嫌だああああ!!!』

女子達『あははく、覗き実行犯に人権なんてある訳無いじゃん♪』

男子達『ヤメロー!!死にたくない!死にたくないよーッ!!』

女子達『さあて、残りの野外教室は入院生活ね♪』

男子達『ぎやああああ!!!』

その様子を壁から覗く男が1人。

創也「(…地雷で吹き飛ばされたのが女子風呂でよかった:)」

こころ「ソウヤー!」

突然創也に抱きつくこころ

創也「うおっ!?:…どうしたこころ?」

こころ「見つけたから来ただけよ!…:…あら?ソウヤ、その額どうしたの?」

女子風呂で負った傷たんこぶを見つけ、思いっきり触るこころ

創也「いつでええええ!!!」

思わず悲鳴をあげてしまう痛みが奔った。

創也「(女子風呂に男がはいった罰か…本当にやばいのは純粹無垢のころだったか…)」

あまりの痛みにも、意識を手放しながらそう思う創也であった。

第8話 野外教室2日目 討伐

勇人の女子風呂侵入事件が終わり、次の日。

「いたた…」

まだ痛む額を擦りながら起床する。

「うう…ごめんなさい…ほんの出来心だったんです…」

「やめろお…それだけはあ…」

「すみません…すみません…」

「……………」

男子のテントでは、創也を除いた全ての男子が青を通り越して白い顔をしながら、夢の中で苦しんでいた。

(美咲たちを怒らせるのはやめよう…殺される…)

密かな決意をいだきつつ、就寝用のテントから出て行く。

「さてと、朝食の準備でもしておくか…」

腕時計の時刻を確認した限り、みんなが起きるのは約2時間後。これなら誰にも邪魔されずに朝食の下準備が出来る。

蘇る昨日の回想

「おい、砂糖の入れ方が分からねえんだけどー！」

勇人の手には大量の粉が入ったボウルが乗っている。

「馬鹿野郎！それ砂糖じゃなくてパン粉だ!!同じ過ちを繰り返すじゃねえ！」

とか

「火力が弱いならコレを入れれば…」

勇人の手には、ペットボトルに入った大量のラー油。

「バカッ！ラー油入れても火力はーボンッ!!…だからなんで爆発すんだよ！」

とか

「よしっ！隠し味にコレを…」

勇人の手には、マムシなどの昆虫を配合した特製ソース(勇人談)が握られている。

「ふざけんな！昆虫を混ぜた隠し味なんかあつてたまるかあ！」

「あれ？昨日の妨害の9割はあのバカ野郎勇人じゃね？」

今思い返しても勇人が原因だと思う。

「ま、今はその妨害がない…ああ…薫先輩風に言うなら、儂い時間だな…」

あ、薫先輩の口調が移った…まあ、それほどあの妨害はヤバイ…嫌がらせをしているんじゃないのかと思う程、酷いのだ…まあ、明確な悪意がないぶん、余計タチが悪い。

「ふう……終わっちゃったな……」

昨日のように妨害がなかったおかげで、10分程で片がつく。

「さーてと、散歩でもするか……」

妨害がないおかげで朝食に必要な準備を減らすことが出来た。

しばらく散歩をすることで、頭に浮かんだことがある。

「あ、魚食べたい……」

ふと、そんな思考が頭をよぎった。

「なら、早速取り掛かろつと……」

魚が食べたい。そう思ったのなら即行動。

「さすがに泳ぐのはマズイ……なら罾トラップだな。」

材料は簡単な網、竹、針金、その他諸々……

「まあ、4個もあれば充分だな。」

テキパキと道具を使い、魚を捕らえるための仕掛けを組み立てていく。

「にしても、道具が資材庫にあってよかったな」

燃やす用の薪を作るための斧やノコギリ、鉋、キリなど工作に使い

る物が大量に用意してあり、おかげで仕掛けを作ることが出来た。
完成した4つの仕掛けを川へと向かい、仕掛ける。一応、仕掛けの中には魚が食べそうな餌を入れ、設置した。

え？餌はどこから用意したって？あのバカ野郎男のメシからだ。昨日、美咲たちにあんなことをされた事もあり、本来なら川に沈めるつもりだったが、代わりにあのバカ野郎男の朝食の肉を川の底に沈めさせてもらおう。

「げ……まだ時間があるし……」

腕時計を確認しても、人が起きるのはあと1時間はある。やばい……
超暇だ……。

「はあ……おとなしく寝るか……」

この状態では、さすがにやることがない。こうなった以上、寝ることくらいしかやる事がない。

「ん？……あれって……」

俺は現在、2度寝をするために、就寝用のテントに向かっているのだが……

「あれってイノシシだよな……この山にもイノシシって居るんだなあ……
……イノシシイ
!?!?!」

俺の目の前には女子テントにノソノソと近づくと、巨大なイノシシの

影を発見した。

「おいつ!?このままだと女子の誰かに死人が出るぞ!」

流石にコレはマズイ：野外教室にシリアスなんざ望んでないんだよっ!

「目算1，5メートル：対象距離30メートル：射程圏内っ!」

俺は自分の足元に落ちていた自分の拳よりも一回り大きい石を手に取り、イノシシに向けて全力で投石する。

ゴンツ
!!!!

遠くからでも正確に直撃したのがはつきりと分かる。

「フゴツ!」

よし、こちらの存在に気付いてくれた。

「おいつ!デカイノシシ!こっちだ!」

大きな声を出し、こちらに引きつける。

「フゴオ!!!!」

「あ、やべ…」

人間じゃなくてもガチギレしていることが分かる。

「ブゴオオオオ
!!!!!!!」

「ぎやあああ!!!ごめんなさいいいいい!!!」

こうして、卯月創也VSデカイノシシの狩るか狩られるかの対決が始まった…。

あれ!?このまま俺死んだら色々と（ストーリー的に）不味くね!?

「だああああ!!!しつけええええ!!!」

「ブゴオオオ!!!」

俺は現在、俺は現在デカイノシシとの命がけの鬼ごっこ中である。

かれこれ、30分近く全力で走り続けている。イノシシの突進速度は45キロを程…つまり、世界で一番足が速いと言われている人間よりも速いのだ。

俺は、木や建物を遮蔽物として利用することでギリギリだが、30分の逃走を可能としていた。

「つち…倒すしか…ない…危ねえ!」

やはり、人間である以上動物の体力に勝つことは難しい。確実に俺とデカイノシシの距離は近づいていた。

「ブゴオオ!!!」

「今だ!!!」

デカイノシシが俺に向けて突進した瞬間、俺は全力で上に向かって跳び、木に掴まる。

「フゴッ!」

突然消えた俺を見失い、困惑するデカイノシシ。チャンスは1度きり…失敗すれば、まず間違いないで死ぬ。

「失敗すれば文字通り食い殺されるとか…うげえ…不可抗力でも女子風呂覗いた天罰が当たったのか…これ…?」

「あれ? 昨日女子風呂にいたもう1人の男の子って、君だったの?」

「うん……………え!」

どうやら俺が逃げた先である木の上には先客がいたらしい…

「えーと……………だれ?」

俺が掴まった木の枝より上の枝に腰掛ける女子が一人いた。というか、知らない人なんだけど…あ、昨日の風呂で真っ先に入ってきた人か…

「私? 花園たえだよ。君は?」

「…答えなきやダメ?…」

「だめ」

「…卯月創也…です」

「そういえば、創也は昨日なんで女湯にいたの？」

「…完全に不可抗力だったんです…」

「へー、何があったの？」

「…爆発に巻き込まれたせいで…女湯に凸った…」

「じゃあ、私たちの裸見た？」

「イエ…ミテナイデス」

「嘘でしょ？」

「……………」

「ところで、あのイノシシどうするの？このままだと私も降りれないよ？」

「まあ、そうなんだよなあ…あ、そうだ、取引しない？」

このままだと、花園にいつバラされるか分かったもんじやない…
だったら、何とか対等な立場にまで相手を落とせばいい。

「…あ、18？」

「は？」

18って…どゆこと？

「なっ!?てめえ、そういうことか!？」

一瞬、どういう意味なのか全く分からなかったが、自分の腕で身体を守るような動作を取る花園を見て、どういう意味か悟った。

「てめえ、俺を何だと思ってやがる！」

「んー、性欲魔人？」

「ぎっけんな！俺は変態じゃねえ！」

「え？」

「え？…じゃねえよ!!」

だめだ……こころ達とはまた違ったジャンルの話を聞かないタイプの人だ…

「まあ、良いから話を聞け…このままだと、お互いあのデカイノシシが下に居るせいで何も出来ない。だから、提案だ。」

「…やっぱり18？」

「な訳ねえだろ！」

だめだ…ジャンルは違うものでもペースを乱される…

「俺からの提案は、俺がああのイノシシを無力化するから花園はその女湯の件を一生黙っていて欲しい。」

「うん、いいよ」

「よし、取引成立だな。……つと、そういえば花園」

「あ、おたえでいいよ」

「……おたえ、一つ聞きたいんだが、スマホって今持つてる?」

「持つてるよ」

「あのさ、ちよつと貸してくれない?」

「じゅうは「ちげえよ!」はい」

それ以上言わせてたまるか! まあ、一応、おたえのスマホを貸りて『イノシシ 急所』で検索をする。なにになに…イノシシを無力化するには…なるほど、頭を砕けば良いのか。

調べ終わったスマホをおたえに返す

「それで、どうするの?」

「うん、今からあのデカイイノシシの頭蓋を…」

一息吸い込み、木から手を離し、自分の真下にいるデカイイノシシの頭上に落下する。

「蹴り砕く!!!」

体を捻り、空中で回転し、勢いを加速させる。高所からの加速落下による、かかと落とし。それは、人間であろうとも、頭蓋に強烈なダメージを負う。

その一撃は、デカイノシシの頭部に三分違わず直撃し、ゴギツ!という骨が砕ける生々しい音が周囲に響く。

「倒しちゃったの!? スーパーマン?」

木の上では、花園が驚いてる。

「ーッ!」

しかし、イノシシが倒れると同時に、創也も同時に地面に倒れてしまふ。

「大丈夫!」

慌てて木の上から飛び降り、創也の様子を確認する。

「うええええ……脚攣った……やばい……動けない」

結局、何をやるにしてもオチが無ければ済まない創也であった。

第9話 野外教室2日目 川遊び

「いやあ、本当に助かったよ！ありがとう！」

「い、いえ…お気になさらず…本当に偶然なんで…」

俺の目の前には宿泊施設の管理人がとびっきりの笑顔で俺の肩をバンバンと叩いている。

「まさか、学生があのにノシシを仕留めるとは驚いたよ！」

「いえ…そんなことは…」

実は俺がかかと落として仕留めたデカイノシシは周辺の農作物を食い漁って甚大な被害を出していて、対処に困っていたらしい。それが何年も続くのだから今回の討伐はかなりのお手柄ということだ。

427

「肩外れるかと思った…」

俺が施設の管理棟から出たのは、丁度生徒たちが起床する時間だった。

「あ、来た」

「おたえ、お前ここで待ってたのか？」

「うん、そうだよ。」

管理棟から出て少し広くなった場所にイノシシ討伐の目撃者でも

あるおたえが待っていた。

「待ってる意味なくね？」

「いや、待ってる意味ならあるよ。」

「はい？」

え、ちよつと待って、何でこっちに近づいてくるの…!?!
本能的に恐怖を感じ目を瞑る。

「おつかれさま」

「はい？」

おたえは、俺に急接近するといきなり俺の頭を撫でてきた。いや、
本当になんで？

先程のような恐怖は消え、困惑する。

「あの一、おたえ殿？これは一体…」

「頭をなでてる」

うん、それは分かるよ。でもね、俺が聞きたいのはそうじゃないん
だよ！

「なんで？」

「んー、なんか…うさぎに似てる？」

「は？どこが？」

「寂しいと死んじやいそうなところ？」

「ぎ、寂しくなんかねえし！」

誰が孤独死なんかするか!!!

「でも、頭撫でられてちよつと嬉しそう」

「……」

……久しぶりに人に頭を撫でられたけど……思いのほか悪くない
……
しかし、そんな時間がいつまでも続くわけがなく……

「ソウヤー!!」

「ぐへえ!?!」

突然、横から強い衝撃が体全体を襲い、そのまま押し倒される。完
全に油断してた……

「おはよ……ころ……」

「あ、……ころだ」

「2人共そろそろ朝ご飯の時間よ！早く行きましよ！」

「ちよつ、……ころ！速いって！」

そう言うと、こころは俺から離れたかと思うと、いきなり、俺の手を掴んで野营地まで俺は強制的にこころに連行されるのだった。

「ぎ、寂しくなんかねえし！」

「でも、頭撫でられてちよっと嬉しそう」

「……」

その光景を見ていたこころは、複雑な気持ちが胸の中で生まれていく事に気付いた。

こころの目の前には、同じ1年生でもあり、友達でもある花園たえが創也の頭を撫でている光景が映った。

(なにかしら……この気持ち……?)

今までに感じたことのない感情に疑問を抱く。

(胸の中が……なんだかモヤモヤする……全然笑顔になれないわ……)

このままでは駄目だと感覚的に判断し、思考を切り替え、創也の元に思いつきりダツシュし、飛びつく。

(やっぱり、ソウヤといると、とつても落ち着くわ!)

起き上がった創也の手を少し強引に引いて、こころ達はその場を後にするのだった。

「ついに来たか…この時が…」

「あ、お前生きてたんだ。」

現在、男子用のテントでは勇人が深刻そうな表情をしている。

今朝の死に顔は静かであったのに、起きたら何でこんなに騒がしくなるのやら…

「創也…この後お前は何があるか分かってるだろ？」

「はあ…なに？お前のことだから『川遊びで女子の水着を拝めるぜヒヤッホーウ!!』…とかそんな感じか？」

「な…ッ!？」

「お前さ、まだ懲りてなかったんだ…」

もうこいつすげえわ。あんなに酷いことされておいて次の日にはケロッと復活してる。こいつ本当に人間か？

「まあ、そこまで理解しているのなら…分かるだろ？」

「いや分かんないし、分かりたくもないし」

そんなフラグみたいなのを言っていると…あ、ほら…こいつ死んだな。

「川に沈められるのと生き埋めになるの、どっちが良い？」

「あ…」

その時の勇人の絶望の表情は…今でも鮮明に覚えている。※死んでません

「はあ…創也も班長ならあの変態どうにかしてほしいんだけど…」

「俺がどうにかする前に半殺しにしているのは美咲たちだろ？」

俺と美咲の目の前には、水中の底に沈んだまま動かなくなっている勇人がいる。

現在、俺達は2日目午後のプログラムでもある川遊びを満喫中だ。まあ、1人だけ川は川でも三途の川を泳いでるやつはいるが。

「それより、班の女子の水着の感想は？」

普通なら、似合っているとでも言えば良いのだろうが、今回に限っては俺は女子達の水着を直視できないでいた。

「……………まあ、似合ってんじゃないの？」

「何で目を逸して言うの？……………まあ、いいや。あたしも少し泳いでくるね。」

そういうと、美咲は川の広い場所に泳ぎに行った。ちなみに、こころは既に広い場所で泳いでる。

「はあ……………罪悪感が…」

昨日の風呂の一件で、俺は女子の水着を直視できない。だってそうだろう!? 罪悪感がヤバイんだよ罪悪感が! 女子の裸体見た次の日に水着見るとか、マジで罪悪感すごいからな!?

「はあ……………顔合わせづらい…」

今回の川遊びくらいは、何事もなく、平和に、そして平穩に終わってほしいと思わずにはいられないのだった。

「あ、創也だ。」

「はあ……………なんか俺ら、無駄に遭遇率高くないか？」

川全体を見渡せる岩場に腰掛けていたところ、後ろから声がかかる。今朝から聞いた声なので、嫌でも判別はつく。後ろを見れば、案の定おたえが居た。

「それで、おたえの班も川遊び？」

「うん、そうだよ。泳がないの？」

「泳がない」

「泳げないの？」

「泳げる」

罪悪感に押しつぶされそうになりつつも、それを表情に出していない俺は本当に頑張ってると思う。

「あ、それと私の水着どうかな？」

「あーうん、似合ってるじゃねえの？」

おたえの方向一切向いてないけど。

「見てないのに分かるの？超能力？」

「なんとでもいいやがれ…」

本当にこのころと話題が変わるやつだな…

「寂しいの？」

「…否定はしない。」

俺の視線の先にはこのころや美咲が川で遊んでいる光景が映る。ただ、昨日のこともあって凄く気不味い。勇人を叩き起こして連れ

てけば、多少罪悪感が薄れるけど…あいつ今三途の川だからなあ…

「それっ！」

「はっ!?!」

背中に強い衝撃が走ったかと思えば、次に俺が感じたのは、冷たく冷え切った水の感覚。

まあ、みんなに分かりやすく言うのならおたえに休んでいた岩場から突き落とされ、水の中に落ちたのだ。

「いきなり何すんだよ!?!」

「泳げば楽しくなるよ? 創也は変に考えすぎてるし。」

「だからって突き落とす必要ないだろ!」

はあ……でも、おたえの言うとおり、俺が気にしすぎてるだけなのか?

「おたえー!どこいったのー?」

「あ、私呼ばれてるからそろそろ行くね。ばいばい。」

「あつ、ちよま……せめて引き上げてほしかった…」

そんな俺の思いとは真逆におたえは何処かへ立ち去ってしまった。というか、状況だけ見ればもはや通り魔だな…

「あつ、ソウヤー!こっちに来て一緒に遊びましょ!」

「あーうん、今行くー！」

ま、振り切るキツカケにはなったかな？

その後は、気持ちりが軽くなったのか、なんとかかこころと美咲の2人と顔を合わせることが出来た。

「よっしやあ！俺、復活完了!!」

まーた騒がしいのが戻ってきたよ…

「三途の川から戻って来た直後で悪いけど、女子達はみんな着替え終わってるから水着姿は拝めないぞ？」

「なん…だと…っ!？」

がつくりと膝をつく勇人。マジでこいつのエロパワーどっから来てんだ？

「ま、それはそうと、バーベキューの時間だ。」

空を見ると、ほのかに暗くなっていることが分かる。明る過ぎず暗過ぎずの、落ち着きのある時間帯。

キャンプ場の一角では既に何人かの生徒が、バーベキュー用の食材を用意している。

「喜べ勇人。お前が食べたがってたイノシシ肉があるぞ。」

「まじで!？」

「おう、マジだ」

実を言うと俺が討伐したイノシシは栄養のあるものを食い漁っていたのか、肉質がかなり良く、かなり上質なものとなっていたらしい。俺が討伐したということで、高級なお肉が無料で手に入ったと思えばいい。

まあ、討伐直後に足攣ったせいで、俺としては微妙な結果だが……まあ、こいつらが満足してる分、良かったかな？

「創也！お前やっぱり最高のダチだ！俺はお前と言う親友を持ったことを俺は誇りに思うぞ！」

「そうか、良かったな」

すごく感謝されてる。

「んくくっ！とっつても美味しいわ！ソウヤはやっぱり料理の天才よー！」

「肉を焼くコツがあるんだよ。それさえ知ってれば簡単だぞ？」

ちなみに、みんなの肉は俺が焼いてる。最初に勇人がやろうとしたけど……

「おい、そろそろその肉取った方が……」

「いやっ！まだだ！……もつとだ……もつと熱くなれよおおお！」

「炭になっちまったじゃねえか!!!」

とにかく熱い某テニス選手のモノマネをして、肉一つ炭にしたから

炎から遠ざけてる。

「でも、こんな量のお肉どこから持って来たの？」

「……まあ、色々あったんだよ」

肉をもきゅもきゅ食べながら聞いてくる美咲。俺がイノシシを、討伐したことは内緒にしているのだ。だって、それで変な噂立てられたら面倒だしさ。

「創也、私のレタスと交換しよう？」

しばらくするとどこからともなくおたえが現れ、レタスを俺の目の前に突き出してくる。

「……レタスと肉って釣り合ってなくね？」

「大丈夫。美味しいよ？」

「お前違う班だろ……まあ、良いけどさ」

レタスと焼肉を等価交換……それどんな錬金術ですか？

「あ、私もー！」

「あはは……私も良いかな？」

「わ、私も……」

おたえの後ろから、ネコミミの女子と茶髪ポニーテールの女子と黒髪シヨートの女子が来る。

「友達？」

「うん！」

「お前ら、遠慮ってものが無いのか!？」

しばらくすると金髪ツインテールの女子がやって来ておたえ達を
引き離そうとするが……

ぐうぐう

金髪ツインテールのお腹が鳴った。

「ち……ちがあああう!!!」

結局、肉の量が多いことからおたえの友達にもちやんと分けまし
た。ま、肉焼いたの俺なんだけどネ!

「へえ、香澄達もバンドやってるんだ。」

「そうだよ！そーくんもバンドやってるんでしょ？」

現在俺はネコミミ女子……もとい香澄達とハロハピ1年組で話を
している。

「まあ、そうだけど……なんで知ってるの?」

「ごころんから教えてもらったの!」

「たしか創也は中学時代に音楽やってたんだっけ？」

「まあ、吹奏楽ならパーカッションを中心にやってたからな。後は趣味のカラオケとギター。」

「めっちゃ凄いや……」

「そんな大層なもんじゃ無いっての。」

「そんな事ないわ！ソウヤはハロハピのみんなをとっつても笑顔にしてくれるのよー！」

「それって具体的に何なんだ弦巻さん……」

「えーと……何だったかしら？」

「覚えてないのかよ!？」

「創也は主に作詞作曲演出……ほかにも色々私とやってるよ。」

「奥沢さんも卯月さんも苦労してんな……」

「市ヶ谷さんもお疲れ様です。」

ここに同志がいたことに密かな喜びを抱きつつ、バーベキューパーティーは幕を閉じた。

ただ、男子のテントに戻った時に男子達（主に勇人）が血涙流しながら右手の中指を立てて

『テメエばっかり美少女とイチャコラしやがってけしからん!!!マジ羨ましいんだよこの野郎!!道を誤った親友を戻すのも友の役目!全員

突撃イ！』

と言いながら教師が使うマイクを使って男子達に演説していたのが夕食後に起こった出来事だ。ちなみに、勇人と共に突撃して来た生徒は、勇人含め、先生の説教を食らってた。

そして、夜が始まる。

第10話 野外教室2日目 迷走肝試し

肝試しとは、怖い場所へ人を行かせて、その人の恐怖に耐える力を試すことである。もっぱら夏の夜に行なわれ霊的な恐怖に耐える、日本の伝統的なゲームの一種である。

正直さ、世界中に電気という超素晴らしいものが普及してる現代社会において恐怖なんてないだろ？時代は化学。魔法じゃねえんだよ。だからさ、わざわざ暗い森とかに入って霊的恐怖に耐える必要なんてないだろ？

「だから、俺は肝試しには参加しない。」

「創也……怖いのか？」

「違うぞ美咲……違うんだ！」

「怖い？なに馬鹿なこと言ってるんだ美咲。こんな現代社会において幽霊なんているわけないし、単に体調が悪いだけだからな？」

「あ、怖いんだ。」

創也の足はガックガクである。

※卯月創也はお化け、ホラー、怪奇現象などの類に壊滅的に耐性がないぞ！

どのくらいかと言えば、中3で『青〇』やってガチ泣きするレベルだ！

「とにかく！俺は！絶対に！行かない！」

「そんなこと言ったってよ、人数的にもお前が参加しないと数合わせの関係でめんどくさいんだけど？」

勇人がクラス全員分のクジが入った箱を持って来る。

「なら、お前勇人を今ここで始末すれば……っ！」

「え？……ちよ、なんでこっちに近づいてくんだ?!いい、嫌だ！俺は女子と一夏のランデブーをするんだ！まだ夏じゃ無いけど！だからこんなところで死ねるか！」

「うるさいっ！抵抗すんじゃない！天井のシミ数えてる間に息の根止めてやるから安心しろ！」

「ぎっけんな！……外だし、天井ねえから数えられねえよ!!せめて天井ある場所にしろ！」

数が合わないなら合うまで減らせばいい！こいつなら問題ないだろ!!

「……創也……これ何だと思う？」

その様子を見ていた美咲は、懐からスマートフォンの写真アプリを起動する。

「ん？スマホなんか見せて何……を……つ!?」

美咲のスマホ画面に表示されていたのは、以前、花音先輩の誕生日会（番外編）の時の写真だ。

分かる人なら分かるだろう。その写真の内容が……俺の黒歴史の一つだと……

「もしも創也が参加しないなら、この画像を紗夜先輩達に公開するかもよ?。」

「な……美咲……なんて酷いつ!」

俺は肝試しをしないために美咲に逆らうには、あまりにも弱みを握られすぎていた……

もつとも、当時の現場を誕生日会に出席していた人間はその光景を実際に見ているので、紗夜が気付くことはないのだが、創也はそのことに気付かない。

「ほい、クジ引きをするぞ〜」

勇人がクジの入った箱を持ってこちらに箱を向けてくる。

「さ、奥沢さんも創也も早く引いてくれ。」

俺は箱の中に手を入れ、番号の書かれたくじを一枚取り出す。

それで、俺のクジの番号は……

「9〃……同じ番号のやつを探せってことか？」

よく見ると、他の人達はどんどんペアを作っている。

「創也は何番？」

「俺は9〃、美咲は？」

「6〃」

「このクジ逆だったりしないかな？」

「何？そんなにあたしとペア組みたいの？」

「うん」

「え……？」

(だってお化けとか出ても素手で殴って倒しそうだし。)

という本音は心の奥に鍵かけて閉じ込めておこう。殴られる。

「えっと……それってどういう……？」

「？……そのままの意味だぞ？」

「な……何でこんなにストレートに……」

「？」

ストレート?どういう事だ?まあ、いいか。

「おい、誰か『9』のクジ持ってるやついるか?」

「ソウヤー!!」

「ぐおっ!?……ひよつとしてこころも『9』?」

俺の名前を呼びながら飛びついて来たこころに番号を尋ねると、こころは満面の笑みで答えた。

「ええ、そうよ!んんんっ!とっつても楽しみね!」

正直なところ、ペアがこころで良かった。だって、こんな元気とポジティブをミックスして純粹をトッピングしたような相手なら、怖さも吹き飛ぶだろう。

そう思っていた時期が俺にもありました。

「ソウヤったら、どうしたのかしら?顔がとつても青いわよ?」

「いや……やっぱり現実と想像はいつも違うと言いますか……」

うん。想像してたよりも何倍も怖い。しばらく森を進み、足が震え

て来た。

(やばい……超怖い……足が動かない……)

あまりの恐怖に足が動かない。昔からそうなのだ。

どうしようも無い程の恐怖……どうしようもない状況を前にすると、足が震えて、動けなくなる。

(やっぱり……あの日からは……一歩も……)

吐く息が重い。呼吸が上手にできていないのかもしれない。

このまま意識を手放してしまった方が楽なのではないかと思う。

しかし、ふと冷たい自身の手に小さな暖かさを感じた。

「ソウヤ、怖いのなら一緒に手を繋いで歩きましょう？そうすればきっと怖くないわ！どんな事でも、勇気と笑顔で乗り切れるわよ！」

いつも通りの……華が咲いたような俺には眩しすぎる笑顔で、こころは俺の手を掴んだ。

「ね？怖くないでしょ？」

「あ……」

ふと、足の震えが収まっていた事に気がつく。

(人つて……こんなにも暖かいんだな……)

ふと、そんな事を思う。

大丈夫。俺は少しずつとはいええ、成長している。大切な人達がいるんだ。あの頃とは違う。怖くない。

「そうだな……怖くない……ありがとうこころ」

そう言つて、俺はこころの手を離そうとするが……

「こころ？」

こころの方が俺の握った手を離さない。

「えっと……どうせなら、このまま最後まで手を繋いでた方がいいと思うわ！」

「まあ……そうだな。」

暗い森の道で2つの懐中電灯の光だけが、俺とこころを照らしていた。

だがしかし、こころの顔が赤くなっている事に、創也は気付く事はなかった。

しかし、ここで事件が起こっていた。

「なあこころ……道はこれであってるの？他の組が見えないんだけど……？」

「うくん、おかしいわね？」

完全に迷子になっていた。

「ううう……」

こころと手を繋いでいるおかげで完全に戦意喪失はしていないものの、迷ったという事実には漠然とした恐怖が襲ってくる。

(顔が真っ青……大丈夫かしら?)

創也と手を繋いでいたこころも創也の様子に不安を覚えながらも、口を出せないでいた。

ブチッ!

「あ……」

突然、こころの持っていた懐中電灯の灯りが消えた。

「おいおい……マジかよ……」

「電池切れかしら?」

「まあ、後一本あるし、電池は新品にしてあるから大丈夫ー」

バキツ!!!

「うわっ!?!」

突然、どこからとも無く飛来してきた物体が俺達の最後の生命線……もとい懐中電灯を破壊した。

「ソウヤ！今石が飛んできたのが見えたわ！」

「石!?!何で石が飛んで……って、見えたの!?!」

周囲には、街灯などの明るいものが何一つとして無く、一歩先は完全な闇という状況であった。

「というか、本当に何も見えない……」

「何かが起こりそうでもってワクワクするわ！」

俺とこころはお互いの手の体温を頼りに懐中電灯で先程まで照らしていた道の壁に沿って、俺達は歩き続ける。

先程よりも足場が悪くなっていたが、なんとか俺達は、はぐれること無く進んでいた。そして……

「あっ！ソウヤ！今あっちの方に明かりが見えたわ！言ってみましょ！」

「あつバカッ！いきなり動くと…っ！」

明かりを見つけたらしいところが突然駆け出した。そして、俺達は現在、手を繋いでいるが足元も礫に見えないでいた。そんな状態でいきなり走れば…

「わっ!？」

当然転ぶのであった。

「いたた…こころ、大丈夫ー」

ぶにっ

「ひ、ひやつ!？」

突如、自分の顔面がマシユマロのように柔らかい大きなものに包まれていることに気がついた。

そして、周囲に響いた、こころの声……

ついでに今の状況を軽く説明しておこう。俺が転びそうになったところの下敷きとなり、こころは俺に覆いかぶさるように倒れた。

つまり…当たっているのだ…こころの胸に着いた大きなアレが

……

「そ、ソウヤ…その…ちよつとくすぐったいわ…んあっ！」

「も……申し訳ありませんでしたー!!!」

俺が即座に起き上がり、会心の土下座をしたのは言うまでもない。え？感想言えって？……柔らかかったとだけ言っておこう。

くおまけく

創也の懐中電灯破壊シーンの真実。

創也達が歩いている場所よりも高い位置にて。

勇人「はあ…なんで俺がお化け役に…女子との吊橋効果期待してたのに…」

ふと、勇人の目が地面に落ちている石ころを捉えた。

勇人「ああもう！何で俺ばっかり女運がないんだっ！」

そういうと、足元の石ころを蹴飛ばす。

オイッ！カイチュウデントウガコワレタゾ！

勇人「はあ…まあいい…創也たちは予定通りなら、この道を通る…アイツのあのビビリ様…恐怖のどん底に叩き落としてやる。」

ゆうとは口元をニヤリと釣り上げ笑う。

勇人「ふーっふっふわあーはあーはあーはあーはーっわうああーはあーはあーはあーはあーはっわふあっはっはっはっはあーっわわひあっはっはっはっわわ」

某息子に殺されたサ○ヤ人の笑い声を真似る勇人がそこにはいた。だが、創也達がここには来ないという事実を彼はまだ知らない。

更に言わせてもらえば、先程の奇声…もとい笑い声で、人が寄り付かなくなり、結局肝試し終了まで彼はぼっちになるのだが…それは

まあ、別の話だ。

第11話 野外教室2日目 星空の告白

「ここは…?」

俺とこころは、あの状態から起き上がり、なんとかこころが明かりを見たという場所へ辿り着いた。

「こんな広場があったのか?」

俺達が辿り着いたのは、ひと通りのまったく見晴らしの良い広場だ。

「もう…なんなのさ…」

あれだけ苦労して辿り着いたのに、得たものが何も無い。それは流石に凹んでしまう。

「でも…無駄足じゃなかったかな?」

俺はふと、右手に掴まったところを見る。

「ソウヤー!とつてもキレイよ!あんなに星空が輝いているわ!」

夜空に輝く星に負けない程の輝いた金色の瞳でこころは夜空を指差すところ。

「ああ、そうだな…」

こんなにキレイな瞳をしている奴が隣りにいるんだ。とても無駄足だったとは思えない。

「まあ、少しこちらへんで休むか…流石にこんな夜道を懐中電灯無しで歩くなんてバカな真似は出来ないしさ。」

俺とこころは、人気のないこの広場で休息を取ることとなった。

「丁度いい、ここで休むとするか…」

「分かったわ!」

程よく草の生い茂っている場所を見つけ、腰掛ける。

「まさか迷子になるとは思わなかったな…」

「でも、こんなに素敵な場所が見つかったのよ!良かったじゃない!」

「…そうだな。」

ふと、夜空を見上げる。

(夜空って…こんなにもキレイだったんだな。)

そんなことを思う。少し前まではこんな考え方が出来るとは思いませんでした。

「ねえソウヤ…ソウヤは空…好き?」

こころが訪ねてくる。

「さあな。少なくとも、夜空は嫌いじゃない。」

(まあ、好きでもなかったんだけどな…)

夜になると独りになれた。唯一の安らぎの時間…どうしようもないほどの孤独が襲ってくる…それが俺にとっての夜だった。自分1人ではどうすることも出来ないこの2つの矛盾した感情はあの日からずっと俺を蝕んでいった。

全てが始まり、全てが終わった時間…それが俺にとっての夜だった。

「そういうこころは…?」

「あたしは、朝の空も昼の空も夜の空も、全部の空が大好きよっ!!」

「なんともこころらしい解答だな。」

正直、羨ましいと思う。何かを好きになる。それは、とても素晴らしい感情だ。

「俺さ…家出みたいなの状態なんだよね。」

「いえで…? いえで…って何かしら?」

キョトンと首を傾げるこころ。まあ、家出なんてものと程遠いやつだしな…

「家出って言うのは…自分の両親と喧嘩して家を出ることだよ。」

「親と喧嘩してるの?」

「まあ…色々とあつたんだよ。」

連中から逃げるように花咲川へと入学した。俺はそこでこころ達と出会った。

「ずっとずっと…誰とも関わることも無く独りで勝手に野垂れ死ぬのかと思ってた…」

(ああ……この気持ち…ずっと昔に感じてたものだ……)

自身の心の内側を独白していく内に、不思議と曇っていたココロが穏やかに晴れていくのが分かる。

「毎日一人で変わらない時間を過ごして終わりを迎えるんだって思ってた。」

でも、こころ達に出会った。

「前にさ、〃心の底から俺が笑ってない〃って俺に言ったよな…こころ?」

「いったわ…でも、今のソウヤはとつても楽しそうよ?」

なら、良かった…俺が今こころに送れる言葉は、これだろう。

「ありがとうこころ…俺さ、今とつても…」

息を吸い込み、伝える。

「とつても…幸せなんだ。」

言葉に出して改めて分かった。俺は…今…こころ達のおかげでこの時、8年ぶりに本当に笑顔になれたのだと。

「とつても…幸せなんだ。」

いままでに見たことのない表情で…普段の彼からは想像も出来ないような穏やかな笑顔で彼は微笑んだ。

「あ…」

それは彼女が彼に最も望んでいたものだ。その笑顔は今まで見せた彼のどの表情よりの儚く、短いものだった。思わず、彼の顔をじつと視てしまう。

「いっころ…っ」

彼が不安そうに彼女に尋ねる。

「だ…っ…大丈夫よ…っ！」

顔に熱が灯っていくのがハッキリと分かる。

時間帯が夜で、2人を照らすのが夜空の星々だけだったおかげで彼女の顔を見ることは出来ない。

もしも見えていれば…きつと赤くなっていたことが彼に知られていただろう。

(どうして……うっ……やっぱりソウヤといると胸がドキドキする……胸が……苦しいわ……でも……もつと……)

この苦しみの正体を彼女はまだ知らない。

「はあく……にしてもどうすっかなあく……」

このままでは朝にならないと移動はできない。夜の森ほど危険なものはないのだ。

「はあ……ま、気長に待つか……」

創也はゴロンと地面に寝転がる。

「……ところも転がったらどうだ？」

先程見せた「笑顔」は鳴りを潜め、いつもの無愛想な表情へと彼は戻った。

「そ、そうするわー！」

創也の隣でこころが寝転がる。

「くっくっ！」

「ソウヤ…寒いのか？」

「いや、そんなことは…へつくし…あるかも…」

「なら、一緒にこうやって身体をくつつければ暖かいわ！」

そういって、こころは転がっている創也の身体に抱きついてきた

「たしかに、人肌って暖かいな…」

「そうね！」

こころはそのまま創也の胸に顔を埋める。

「こころ？」

トクン…トクン…

(…ソウヤの鼓動が聞こえる…とつても…落ち着く…ずっと…こころして…いたい…)

程よいテンポで鳴る彼の鼓動は、少女を眠りへと誘うのだった…。

「こころ…つて、眠ってる…のか？」

「すー…すー…」

「ま、話を聞く限りずっと楽しみにしてたみたいだからな…。」

俺は地面から起き上がり、ここらの頭の部分を自分の膝にのせる。所謂膝枕ってやつだ。

そつと、頭を撫でる。

「本当に……きれいだなあ……」

夜空を見ながら、俺のつぶやきは誰にも聞かれること無く、夜の闇に溶けるのだった。

「やっぱり、そろそろ移動しないとヤバイよな……」

腕時計の時刻を確認すると、肝試しの終了時刻が刻一刻と迫っていた。

「しようがない……俺がやるしかないよな……」

俺はここらに衝撃を与えないように細心の注意を払いながら立ち上がり、ここらを背負う。

（こいつ軽っ!?!）

俺の筋力（平均的な女子以下）でも持ち運べるくらいには、ここらの体重は軽かった。

「やっぱり道分かんねえからなあ……」

どうしようもなく困り果てていたその時だった。

「あ、黒焦げアフロになってた人だ…」

「だれが黒焦げアフロだっ!!…ってモカの幼馴染の…蘭だっけ？」

声が出た方向を見ると、モカ達の幼馴染でもある…えーと…美竹蘭？…がいた。赤メツシユが特徴的でよく覚えている。

「そうだけど…何やってんの？」

「迷子になった。助けてくれ。」

答えを濁す必要はない。シンプルイズベスト。

「え……」

「え？」

おい…まさか…そんな最悪のパターン…絶対に嫌なんだけど…

「ひょっとして…お前もっ…」

「……」

目を全力でそらす蘭。その態度が何よりも最悪のパターンを物語っていた。

しかし、今回は悪運が強かったらしい。

「らん、どこー？」

「蘭！いたら返事しろー！」

「蘭ちやーん！何処にいるのー！」

「らーん！」

蘭の幼馴染達が

「あ、みんなが呼んでる…」

「え、あんな大人数で肝試しやったの？ナニソレズルイ」

苦勞して俺とこころは2人でここに来たのにあんな大人数とかずるくね？

(いや…これなら好都合だな…)

「なあ、俺ら一応迷子だからさ、連れてってくんね？」

「別に良いよ…」

「ありがとう」

短い言葉を交わし、俺は眠りについたところを背負って蘭に付いていくのだった。

「ま、キャンプファイヤーまではゆっくり眠らせとくか。」

その後、俺は羽丘の生徒と合流し、何とか花咲川のゴール地点まで辿り着いた。

「こころ！創也！大丈夫だった!？」

流石に帰りが遅いことを心配した美咲がこちらに駆け寄ってきた。

「おう、こころは途中で眠っちまったけどな…」

「あの状況で寝たの!？」

「おう…ホント規格外だよ…」

俺の背中ではこころは穏やかな寝息をたてている。まあ、流石にキャンプファイヤーが始まれば起きるだろ。

笑顔のある所に飛んでいく…それがこころだし。

「創也ア…テメエ…」

ふと、後ろから地獄の底から響いたような怨念を具現化したような恐ろしい声が聞こえる。

「うおっ!?!…勇者人!?お前その格好どうした!?!つて、くっせえ!?!」

思わず鼻を抑えてしまう。

声を出していたのは、勇者人だった。ゆうとの服装は、白いドレスのようなものを纏い、黒い長髪のカツラを装着し、所々に血のメイクがされているのだが…血のメイクに紛れて泥や草木、酷い部分には動物の排泄物が付いていた。というか、9割くらい動物の排泄物の匂い…あ、残りの1割は体臭ね。

「俺が1人でだれも来ない森で終了時間までボッチで待機してたのに…俺が仕掛けた動物の糞を入れた落とし穴に落ちるわ…捕獲用の

くおまけ2く

創也「テメエ！マジでこっちに來るな！！臭い！！！」

勇人「ふはははは！！！！我が怨念！！貴様などに止められる程甘くはない！！！」

創也「くっせええええええ！！！！！」

鬼ごっこを続け、創也が逃げた先には、羽丘の生徒たちが居た。

創也「だれかあ！！助けてくれえ！！！」

勇人「はははははは！！何処にしようというのかね！！！」

創也と勇人が走っていると、ふと、蘭と勇人の目があった。

蘭「うわっ…きも…」

小さなつぶやき…だが、その言葉のナイフは確実に勇人の心臓を抉った。

勇人「かふっ…ッ!？」

創也「……?…助かった…のか?」

その後、勇人は川に投げ捨てられましたとき。キャンプファイヤーが始まり、三途の川から戻ってくる頃には、匂いは多少はマシになったとき。

めでたしめでたし。

勇人「じゃねえよ!!」

第12話 野外教室2日目 ライブだ！ソイヤー！

「それでは！ただいまより、花咲川学園と羽丘学園の2校による『野外教室合同キャンプファイヤー』の開催を宣言しますっ!!!」

『うおおおおお!!!』

花咲川学園1年及び、羽丘学園1年レクリエーション係担当の勇人とひまりの声を合図に2校の生徒達の歓声上がり、組み立てられた木に火がつけられる。

キャンプファイヤーは、キャンプで焚き火を囲んで行われる行事である。

普通は教師やらが決めるものかもしれないが、今回は完全に生徒たちが主導をしている。

この際だから、ハッキリ言っておこう。レクリエーション係を担当し、さらにはキャンプファイヤーの担当まで請け負ったのはあの馬鹿野郎^勇だ。

普通に考えれば、多忙で頑張っているような好印象を抱くかもしれないが……今回のイベントの計画の9割はあの馬鹿野郎^勇が計画している。つまり……どんな混沌^{カオス}が待ち構えているのか……

この先の展開に俺は胃を痛めるのだった……

「それでは!!まず最初の催しは!!これだ!!」

「ソイヤー!」

ドドンッ!!

何処からとも無く和太鼓の鳴る音が聞こえる。って、マジでどこから和太鼓取り出した!? てか、叩いてるのは巴か!? なんて法被はっぴ着てんの!? ソイヤって何!?

「ッキャンプファイヤーを囲って一発芸を披露しよう!!!」

一発めから不安なのが来たよ……………

「それじゃあ! まずは俺の特技だ!!」

勇人がキャンプファイヤーの目の前に立ち、2校全体の注目を集める。

「あれ? 矢坂くんの特技って息をするようにナンパをして息をするように三途の川を渡ることじゃなかったっけ?」

「覗き行為をする事じゃなかったっけ?」

『うつわ…………サイテー』

「その女性陣! 聞こえてるからやめてくれませんかね!? 吾輩の心臓が言葉の暴力で潰れそうなのですが!」

血の涙を流しながら叫ぶ勇人。まあ、前科があるからな。お前は。

「ふっ…………まあ良い。俺の特技はこれだ!」

「ソイヤ!」

ドドンッ!!

(ねえ、だから「ソイヤ」って何なの!?!…って今はそれより勇人の一発芸だ…:えーと?)

『手品?』

勇人の手には「手品」と書かれた半紙が全員に見えるように掲げられている。

へえ、あいつ手品とか出来たんだ。なんて疑問よりも先に不安が創也に押し寄せてくる。

「レディースアードジエントルメーン!今宵は俺のマジックショーに集まっていたいただきありがとうございます!ごいすー!」

「いや、誰もマジックショー目的で来てねえし」

「さて、今夜!俺はこの場を混沌と不思議で満ちた場に変化させる事を約束しましょう!!」

「いや、お前が手品やるとか言い出した時点で既にこの場は混沌に満ちてるわ。」

額に青筋を浮かべる勇人

「創也!お前いくら俺でも怒るぞ!!」

「はあ!? テメエこつち来るな!!手品に集中しろよ!どうせ俺を巻き込もうとか考えてんだろ!」

「何で俺のやろうとしてた事分かってんだよ!!」

「こつちに来てからどんだけテメエと一緒に居ると思ってやがる!!」

ちなみに、ハロハピを除けば創也が1番一緒にいた時間が長いのは多分勇人だ。

「こうなったら力尽くでテメエをステージに立たせてやる!」

そう言つて勇人が実力行使のため、創也に迫った時だった。

「いいから舞台に集中しろ!!」

ヒュンツ!!

創也が高速で回し蹴りをすると、空を切る大きな音が響いた。

「は!?!」

かなり強めに蹴りを入れたはずなのに、避けられた事に驚きを隠せない創也。

「ふっふっふ……如何かな?俺の“首落ちマジック”は!!」

よく見ると、勇人の頭部が定位置ではなく、胸の辺りまで頭部が下がっている。

『おお〜!!』

周りの観客達生徒から、感嘆の声を上げる。

「テ…テメエ…っ!」

今度は創也が額に青筋を浮かべている。

「おっと、創也はお怒りの模様……ならばこれだ!!」

ボンツ!

勇人は懐から何かボールのような物を取り出すと地面に叩きつける。次の瞬間、そのボールが破裂し、白い煙幕が発生する。

「うおっ!何だこれ!」

突然の煙幕に創也は困惑してしまう。

「ふっ……こつちだよーん!」

「あっ!いつの間に……」

先程まで勇人はキャンプファイヤーの近くにいたはずなのに、現在は観客席の方にいる。

「あれれー?創也くんはそんな所で、何をしてるのかなー?ぷーくすくすww」

ブチツ

明らかに何かブチ切れた音が会場に響く。

「……………」

会場にいる生徒及び教師達に嫌な汗が流れる。

「ね、ねえ矢坂さん？そろそろ……謝った方が……」

「いやいや〜あいつ今まで女子とイチャコラしてるし、ここら辺で俺の鬱憤晴らした方がいいじゃん？それにさー、俺の手品で観客魅了すれば女子にもモテるじゃん♪」

完全に自分に酔っている勇人。

彼はまだ気づかないでいた……地雷を通り越して、核爆弾級のヤバい奴を踏み抜いた事に……

「ユウトオ!!! テメエ◎△\$♪×●&%#てやるっ!!!」

もはやキレすぎて人の言葉を話さなくなった創也。煽り耐性は低かったらしい。

「げっ!? あいつガチギレしてる!?!?」

結局、一発芸でこの場を一番混沌とした状況に変貌させたのは、勇人と創也なのであった。

ちなみに、あの後勇人は……

「勇人ー! あんな所で美女がお前の名前を呼びながら誘惑してるぞー!」

という言葉聞いて

「え!?! マジで!?! モテ期到来!?! どいどい!?!」

と言って創也から逃げる為に隠れていたのに出てきたせいで……

ガシツ!!

「捕まえた」

その後、勇人は三途の川に旅立ちましたとき。

『えー、花咲川のレクリエーション担当の方が川遊びに行ってしまった為、司会は羽丘レクリエーション担当、上原ひまりが引き継いで進行させていただきまーす!』

何とか混沌とした状況は防ぐことができた。※できてません
司会はひまりに引き継がれ、キャンプファイヤーは続行している。

『えー、それでは次のイベントはこちらです!!』

「ソイヤ!!」

(もうツツコまないぞ…)

ドドンツ!!

「〃対バンライブ〃です!!!」

『……………え?』

おそらく、今声を出したのはバンド活動をしている人たちだろう。
羽丘の方を見ると、ひまりを除いた蘭、モカ、つぐみの3人が驚いている。あ、巴は和太鼓叩いてるから気にしないみたい。

そして、花咲川のバンド活動をしている人達は……

「ハッピー！ラッキー！スマイル！イエーイ!!」

「有咲ー！おたえー！りみりんー！沙綾！私たちも行くよー!!」

おそらく……いや、むしろほぼ100%元凶であろう人物達がい
しやいでいた。

「美咲！ソウヤ！2人とも早くやるわよ！」

「ちよつと待ったあああああ
!!!!」

俺と美咲の悲鳴に近いツツコミが会場に響く。

「あたし達バンドやるって聞いてないんだけど!？」

「そもそも、対バンライブなんて普通事前告知があるはずだろ!! 一体
いつ決めた!？」

「昨日の夜ご飯を作るちよつと前よ!」※野外教室編第5話参照

「あの時かあああああ
!!!!」

完全に油断していた……。
チラリとおたえ方面を見る。

「香澄！私ら何も聞いてねえよ!?!」

「でも、楽しそうだね。対バンライブ」

「ライブ……めっちゃええ〜」

「あはは……私は……ちよつと遠慮しておくよ……」

沙綾は遠慮しているようだが、他の3人は結局のところ乗り気みたいだ。ただ、気になることがあるとすれば沙綾自身の表情だ。『ライブがやりたくてたまらない』って感じがするのに、なぜかそれを無理やり押さえ込んでいる気がする。気のせいか……？

「ちよつ、こころー！あーもうっ!!創也ーやる曲決めるから手伝って!」

「あーうん、今行く。」

こころ達の無茶振りに答えるため、美咲が俺にヘルプを求めてきた。それをキツカケに思考を中断し、俺は美咲の後を追うのだった。

「それで、ハロハピの演奏は俺がギターとドラムをやれば良いのか？
流石に両方同時には無理だから、曲ごとに変えてやるけど、いいよな
？」

「まあ、そうなるけど……創也一人の負担が凄いことに……」

ハロハピ名物？である作戦会議を実行中の俺と美咲。楽器は、黒服さん達がおたえ達の分もモカ達の分もいつの間にか揃えていた。ほんと……計画立ててた段階だとライブなんて無理だったのに、黒服さん達のおかげで実現しちゃったよ……。

(ん…までよ…?…?)

野外教室の計画を建てていた時の…こころや勇人の発言を思い出す。

「空から森全体を見てみたいわ！そうだ、スカイダイビングなんてどうかしら！」

とか

「イノシシ狩りじゃあああああ
!!!!!!」

だった気がする…あれ!?全部実現してない!?女湯なんかスカイダイビングみたいな侵入をしたし、イノシシ狩りも…まさかこんなところでフラグが建っていたとは…

フラグ建築士の資格なんて、何の役に立たねえし…意味ねえんだよなあ…

「よし…準備完了つと…」

準備されていた楽器の最終確認を終え、こころ、はぐみ、美咲の元へ集まる。

「とりあえず俺が薫先輩と花音先輩の担当部分をやるから、3人ともいつも通りやってくれ。」

「「はーい」「」」

こうして、俺たちは生徒達が待機するキャンプファイヤーの会場へ

と足を運んだ。

「それじゃあ、まずは私達から！」

このライブの一番手は、香澄達のバンドだ。

というか、香澄とおたえの持つあのギター絶対に黒服さん達が用意したやつじゃない……あの2人、最初から野外教室に持って来てたのかよ……

「それじゃあ、一曲！『私の心はチョココロネ』!!!」

香澄の声を合図に、曲が始まる。

落ち着いた雰囲気から始まったこの曲により、キャンプファイヤーの最初の曲としては、とても良いスタートとなった。強いて言うなら、ドラムがあればもつと良くなると思う。だから香澄達は沙綾をスカウトしてるのか？

そうして、香澄達のバンドの演奏を終えた。

会場の生徒達の反応もなかなか良い。本当にいいバンドだと思う。

「続いているバンドは“after grow”!!幼馴染み5人で結成された王道ガールズバンドの実力はいかに!!!」

ひまりはこの後、ライブに出るため司会はいつの間にか戻ってきていた勇人が引き継いでいる。

というか、あの野郎……あれだけ痛めつけたのに生きてるとか……何アイツ三途の川に拠点でも構えてんのか？

「じゃあみんな……いくよ！“That Is How I Roll
!”」

今度は蘭の声を合図に曲が始まる。

先程の勇人の説明あり、王道ガールズバンドという説明に納得のいくロツクな雰囲気会場全体に響き渡る。

ライブとかで他のバンドを見る機会があつたけど、他のバンドよりもなんと言うか……結束力が強い感じがする。

結果は説明するまでもないだろう。会場全体はとても盛り上がっていた。

そして、俺^{ハロハピ}たちの出番となつた。

今回の曲では俺はドラムを担当する。ドラムなら、すぐに調整が可能だからだ。試しに軽く叩く。うん、いい感じだ。まあ、アンコールがあつたらギターもやるんだけどね。

丁度、こころ達の準備も出来たらしい。

「ハッピー！」

「ラッキー！」

「スマイル！」

「「「イエーイ!!!」」」

『「「「イエーイ!!!」」」』

ハロハピの掛け声に合わせて、会場全体が盛り上がる。よし、駆け出しは順調だ。

「それじゃあ、いっくわよー!!! 『えがお・シング・あ・ソング』!!!」

最後に、こころの声を合図に曲が始まった。

キャンプファイヤーは俺たち、ハロー、ハッピーワールド！の曲で、幕引きとなった。

普段、俺がハロハピの表舞台に立つ事はない為、こうやってみんなと演奏できるのは、とても新鮮で不思議な……言葉にするのなら、
「楽しかった」ってやつだろう。

「ふい〜」

軽く口から息をこぼす。疲労が溜まっていることは否定しないが、それよりも今までにないほどの充実感の方が大きい。

「お疲れ様。」

椅子に座って休んでいると、後ろから美咲が声をかけてくる。

「おう、そっちも疲れ様。」

「まさかあの後アンコールで何曲もやる事になったのは驚いたけどね。」

「ああ……とりあえず勇人は明日しばく。今日はもう疲れたし。」

実はこの対バンライブ…結果は判定不能となった。
なぜかと言うと勇人が…

〜約数十分前〜

「いやあく、ぶっつけ本番の企画だから、投票するの忘れてたわメンゴ
メンゴ〜」

『はっ?』

「いやあく、悪いけど3バンドの方々、後何曲かよろしく〜」

〜現在〜

なんて言うもんだから、会場からは爆笑と勇人に対するブーイング
とアンコールが来てたよ…まあ、流石にあれだけの演奏を終える頃
には、キャンプファイヤーの火も大分弱くなってたけどね。今日はもう
疲れたし、勇人をしばくのは明日に延期だ。

「そういえば…今日の創也はなんていうか、いつもより明るかったけ
ど…」

「おいおい…俺がいつも根暗みに言うなよ…」

「いやでも、いつも仏頂面だし、こころがいつも創也を笑顔にしよ
うとしても、乾いた笑みみたいな事しかしないじゃん…」

「……………まあな。」

え？なに？俺そんなに仏頂面だったの!?

「でも、さっきのライブ中の創也…たぶん誰がみても楽しかった風に見えると思うよ。」

「そうか…なら良かったよ。……………ありがとな。」

「ん？今なんて言ったの？」

「いや、なんでもない。さてと、そろそろキャンプファイヤーも終わるし、みんなの所に行こうか。」

「はいはい。」

美咲と話せてよかった。自分自身が少しでも前に進めているのだと改めて実感できた。

こうして、野外教室2日目の最終行事は無事に幕を閉じた。俺達はいろいろと濃い思い出を振り返りながら、明日に備えて眠るのだった。

くおまけく

勇者「なんで女子風呂に行かせてくれねえんだよ!!いい加減この縄解け!!!」

何故か男子のテントの近くの木に亀甲縛りで吊るされている勇者。

創也「悪いな。お前に恨みがあるわけじゃ…いや、普通にあつたな…まあ、弱みを握られている以上、こうするしかなかったんだ。」

創也が後ろを見ると、笑顔で写真のアプリを起動する美咲。

勇人「このっ!!裏切り者モンがあああ

!!!!!!!」

血涙を浮かべながら一晩中泣き叫ぶ勇人は下手な肝試しに出てくるオバケよりもずっと怖かったと後に創也は語る。

エピソード 野外教室編 最後にやる事は意外とな
い

「ん…朝だ…」

昨日のキャン^対ンプ^パフライ^ラヤー^イの疲れが抜けきってないか、未だに倦怠
感を感じる身体に鞭を打ち、起床する。

「…また早く起きすぎたなこりや…」

男子用のテントを見渡すが、全員寝袋からはみ出してはいるもの
の、安らかに眠っている。てか、こいつら寝相悪っ!?

「朝食の下準備でもしておくか…」

2泊3日の野外教室…3日目…つまり、今日でこのキャンプ場とお
さらばする訳だ。

「やっぱりまだ暗いよなあ」

軽く身支度を整え、テントの外に出るとまだ太陽が昇りきっていな
いため、僅かに暗い。

(ああ…なんか2日目の朝もこんな感じだったな…マジでバラさない
でくれよおたえ……って、あれは?)

2日目の朝…おたえとの出会いを思い返していると、奇妙な物体が
目に止まる。いや、その物体の正体は知っているのだが…

「おーい！ 勇人ー！ 少しは反省したかー？」

そう…奇妙な物体とは、また性懲りもなく女湯を覗こうとして、男子テントの近くの木の上に亀甲縛りで吊るされている勇人だ。

「……………」

あれ、返事がない？

「おーい！お前、生きてるかー？」

「……………くない……………」

ボソボソと何かを呟く勇人

「はあ？今なんて言った？聞こえないぞー！」

呆れながらも勇人に近づいた時だった。

「うげっ!？」

勇人の顔を改めて確認し、悲鳴が漏れる。

「なんか…この体勢にも慣れてきたせいか…悪くないな…ハアハア…」

勇人（亀甲縛り）は、吊るされた状態なのに何故か悦んでいた。とても、子供とかには見せられないようなヤバめの表情だ。

「…なにも…みなかった…」

何も見なかったことにして、俺はその場を立ち去る。あいつは一体

何を目指しているんだ？

「ソウヤー！おはよー！とつても素敵なおね！」

「おはようこころ。取り敢えず食材の下準備は終わってるから手伝ってくれ。」

「分かったわ！」

俺の次に起きてきたのはこころだった。意外とこころって早起きなんだよね。

「おはよー2人とも」

次に起きてきたのは美咲だった。眠そうな目をしながら歩いてくる。

「取り敢えず顔を洗ってこい。2人とも寝癖がすごいぞ。」

「分かったわ！」

「そうする…」

こうして、最終日の朝が始まった。

「じゃあ、テントの片付けから始めるぞー」

『はーい!!』

俺達は、3日間お世話になったテントの片付けをしている。

「あーあ、テントの鉄骨って組み立てるのも解体も面倒なんだよなあ。」

「口より先に手を動かさせ勇人。」

「はいよ」

まず最初に行くことは、テントの解体だ。中に入れていた私物はあらかじめ全て移動させている為、後は解体をするだけなのだが……

「てめえは毎回毎回何かアクションを起こさないと気がすまねえのか
勇人オ!!」

「違う！違うんだ！今回は完全な事故なんだ!!」

俺の目の前には解体中のテントの中に突っ込み、布やら紐やらが絡まり、動けなくなっている勇人がいる。

俺が少しトイレに行ってる間に何があったんだよ……

「美咲、何があったか説明してくれ。」

同じ活動をしていたはずの美咲に尋ねる。

「実は創也がトイレに行ってから……」

〈約5分前〉

「あと少しで終わりそうね！凄いわ美咲！」

「まあ、説明書があれば普通に出来るからね。」

「こころと美咲の2人が順調に進めていた時だった。」

「あ!!!」

「!?」

突然、勇人が大きな声を上げる。

「どうしたの矢坂さん？」

美咲が不安そうに尋ねると…

「テントの中にしまってた薄い本回収するの忘れてた!!!」

「そういって、勇人は解体中の中のテントに自ら突っ込んだ。」

「あ！あつた！……あれっ!?なんか出られねえ!？」

　　～現在～

「ということがあつて…」

「はあ…なにしてたんだこの変態は…」

「ソウヤ、薄い本つてなにかしら?」

「覚える必要も考える必要もないしょうもない言葉だこころ。覚えと

け」

「いや、それ矛盾してるから」

「というか、野外教室に薄い本持つてくるとかこいつ変態だろ…あ、変態だったわ。」

「やけに1日目の就寝時間でハアハア騒がしいと思ったたらそいつが原因か…」

「とりあえずこいつどうする?..」

「まあ、出られなくて困ってるのは本当みたいだし、先生の所に連れてこう。」

「それもそうだな。」

「お?まじで?いやあ、マジで助かる!..」

その後、勇人は無事教師たちの手で脱出は出来たのだがもちろん、薄い本は教師に回収されましたとき。

「おいちよっと待て教頭、なぜ薄い本を自分の懐に入れてんだ!...あ、女性教師に怒られてる。」

「そういえば、この後の予定って何があったかしら?..」

「ちよっと待ってろ、確認する。」

“野外教室のしおり”を取り出してこの後の予定を確認するが

……

「あれ？」

「ソウヤ？どうしたの？」

「この後の予定は……無い！」

「「え!」「」」

いや、ホントにこの後できることなんて何もねえぞ？

「まあ、野外教室の最終日ってだいたいこんなものだからね。」

「そうなのか？」

「あ、創也は野外教室の経験が無いんだっけ？」

「まあな。でも、こんなに楽しいイベントならまた参加した……ん？
待てよ……楽しい？」

ここで改めて、創也がこの場所で過ごした2泊3日の出来事を思い
返す。

〜1日目〜

美咲に何度も押し倒され、その度に殴られ、黒焦げアフロとなり、女
湯にスカイダイビングしてこころの一撃で倒れた。

〜2日目〜

イノシシ討伐で脚を攣って、おたえに女湯のことがバレて、おたえに川に落とされて、肝試しで迷子になり、キャンプファイヤーで勇人を三途の川に突き落とし、対バンライブをする。

～3日目～

亀甲縛り状態の勇人に驚く

「あれ!?思ってたよりもまともな思い出がなくね!？」

野外教室初経験の俺でも明らかに普通じゃないって分かるぞ!？」

「いや、そんな大袈裟な……」

ここで、美咲の野外教室での思い出を振り返ってみよう。

～1日目～

創也を何度も押し倒し、急接近。勇人の風呂場に侵入で大騒ぎ。

～2日目～

創也にストレートな感情を向けられる※美咲視点

～3日目～

テントの片付けを勇人に妨害される。

「創也、矢坂さんをもう一度三途の川に沈めた方があたし、いいと思

う。」

「奇遇だな。俺もだよ。」

「お前ら酷くね!?!」

突然の殺害宣告に異議を申し立てる勇人。

「というか、お前の野外教室これだろ」

〜1日目〜

ナンパして創也を黒こげアフロに仕立て上げ、女子風呂に侵入してゲームオーバー。後にコンティニュー

〜2日目〜

三途の川に沈められ、自分で仕掛けた対リア充兵器を全て受け、三途の川に沈められた後、創也に喧嘩を売り、もう一度三途の川に向かう。

〜3日目〜

薄い本を教頭先生に回収される(という名目で盗られる)

「あれ!?俺大体女子と創也に三途の川に沈められてない!?!」

「何気にお前の超人ぶりがよく分かる野外教室だったな。」

濃い。とにかく濃すぎる。とても3日で経験することではないだろう。

「でも、それもあと少しで終わるんだよなあ」

「「……」」

勇人の言葉に全員がそれを惜しむ。

「でも、次があるじゃない！」

「次？」

え？野外教室ってまだあるの？

「野外教室が終われば、次は文化祭があるわ！そしたら夏休みに夏祭り、海もあるわよ！」

ああ…そういう事ね…

「そうだ…俺にもまだ恋人ができるチャンスがあるんだ…っ！っ！」

（勇人／矢坂さんの場合は、その性格を改善しないとまず無理だな／よ……）

そんなことを考えた俺の美咲は悪くないと思う。だってこいつ変態だし。

まあ……でも……

「確かに、こころの言う通り野外教室が終わってはい、おしまいって訳でもないんだ。」

こんな考え方、以前の俺ではこんな考え方は出来なかっただろう。

「そうだった……まだまだ大量にイベントがあつたんだ……ツツコミが追いつかない……」

頭を抑える美咲。大変そうだなあ（他人事）

「それでも俺はちよつとだけ楽しみだけどね。ははは。」

不思議と不安などの感情は無く、期待や楽しみといった感情が大きく、自然と笑みが溢れる。

「「あー!!!」」

突然、3人が大きな声を挙げる。

「うおっ!?どうした!?!」

「ソウヤがまた笑ってくれたわ!」

「創也が…笑った!?!」

「あの創也が笑った…だと…っ!?!」

俺が笑ったことに対して過剰なまでの反応を見せる3人。

「お前ら……俺をなんだと思ってるんだ?」

「そんなの、ハーレム野郎のクセに全くと言っていい程幸せオーラのない変人にきまつぐおっ!?!?」

取り敢えず勇人の腹に蹴りを入れる。こいつマジで口を開くと碌な事言わねえな。

「でも…本当に創也にそんな笑顔が出来たことに驚いたんだけど…」

「俺だって笑う時は笑った…笑ったり…あれ!?俺までもに笑った記憶がないぞ!?!」

「そうだって!これ見てみ!!」

そういつて、美咲がスマホを開き、画像を見せてくる。

「確かに笑ってる写真が一つもない……って、なんでこんな写真を
持ってるの!?!」

ハロハピの集合写真とかならば良かったのだが、美咲が見せた画像
の一覧の中には、俺の黒歴史（例：花音先輩の誕生日会など）

「あ」

「あ…じゃねえよ!!今すぐ消せ!!」

「え…普通に嫌なんだけど。」

そういつて、逃走を開始する美咲。

「待ちやがれ!!そのスマホぶっ壊すぞ!!!」

こうして、バスの集合時間まで俺と美咲の鬼ごっこは続いたのだっ
た。

く帰りのバスく

「ふいふ…久しぶりに木とかじやない椅子に座ると、なんか違和感があるな…」

「そうかしら？あたしはどれも面白いと思うわよ！」

「こころが俺のとなりの席から話しかけてくる。」

「まあ、流石に今回もアイツは自業自得だな…」

キャンプ場に向かった時のバスでは、俺のとなりは勇人だったのだが、当の本人はというと…

バスの最前席にて

「矢坂くん？このうつつすい本はなんですか？しかも君の持ち物を調べるとこれの他に10冊は出てきたそうじゃないですか…？」

「いやあ…キャンプ場のゴミ掃除をしてたら拾ったんですよ…」

「しかもこの本…すべて『矢坂勇人』と名前が書かれていますね。しかも、購入した時の日付まで…お新しいものだと一週間近く前に発売されていたものみたいじゃないですか？」

「へえ、それはすごいですね…じゃあ、僕が責任もって破棄してくるので返してくださいませんか教頭先生…？」

「いや…、私が責任をもって処分しよう。安心したまえ。」

「いえいえ、そんな教頭先生のお手を煩わせるなんてとんでもない」

「いやいや、気にすることはない。若者にこんなものをもたせるわけには行かないからな。」

「いえいえ……」

「いやいや……」

教頭先生とだれが薄い本を捨てる……もとい手に入れるか勝負をしていた。アンタらそれで良いのか……？

「まあ、なんにせよこれで1学期に残った行事は文化祭だな。」

夏休みの少し前に文化祭とかいうハードスケジュール。
花咲川学園うちの高校って意外とブラックなのかな？

「どのみち俺がなにか面倒くさいことに巻き込まれるんだろうなあ……」

どうにも嫌な予感がする。というか……こころとはぐみがメチャクチャな要求出して、俺と美咲が奮闘する未来が透けて見えるよ……

「ソウヤー！3日間お疲れ様！楽しかったわね！」

ふと、横を見る。

「そうだな……俺も楽しかったよ。」

何の曇りもない、純粹な瞳で「楽しかった」というところ。やっぱりこいつには敵わないなあ…

こんな眼をされたら、不安なんかよりも先に「頑張らなきゃ」って思える。

「文化祭も頑張るわよ！ソウヤ！」

「ははは…お手柔らかな、こころ。」

これから来るであろう苦労（主に俺と美咲）に不安と期待を抱きつつも、俺達は花咲川へと帰るのだった。

くおまけく

創也「すうー…すうー…」

こころ「あら？ソウヤ…眠っちゃったのかしら？」

帰りのバスにて眠ってしまった創也

美咲「……………」パシヤツ！パシヤツ！

そして、眠っている創也の寝顔を密かに撮影する美咲。

こころ「あら？美咲ったら何してるのかしら？」

美咲「弄るように創也の寝顔を撮ってる。こころも要る？」

こころ「私も欲しいわ！」

自分の寝顔をいじられる日が近い内に来ることを、創也まだ知らない。

逃亡せよ！ヤンデレ逃走劇！〜ヤンデレ達との3日間〜

プロローグ 崩れ始めた日常と資材

ドンツ!!!

俺達の目の前にはもはや威圧感すら放つダンボール、絵画、なんか高そうな壺…etc。とにかく大量の物体が並んでいた。

「あの……これは？」

「はい、お嬢様の要望通り、〃文化祭で使えそうなもの〃がある倉庫でござります。」

俺の疑問にいつの間にか近くに待機していた黒服さんが答える。

「ふ、ふええ〜…これ全部文化祭で使うの…？」

「いや花音さん、流石にそれは不是吗……ないよね？」

「いや…俺に聞かれても……」

「ハロハピはいつもこんな場所で練習をしていたのですか？」

「そうですけど…流石にこの倉庫の存在は知りませんでした…」

「さあ、張り切って探すわよー!!!」

俺、こころ、美咲、花音先輩、紗夜先輩の5人は現在、弦巻家の特大倉庫に来ていた。

時は遡ること2時間前

く花咲川学園 生徒会室く

「では、これより『花咲川学園文化祭実行委員会』による一回目の会議を始めます。」

花咲川学園では、7月の初めあたりで文化祭が行われる。

今回、その文化祭で俺とこころは実行委員に任命されたのだ。

「えー、ここで問題なのが、文化祭でどのクラスも出し物などに使う資材が圧倒的に不足しているとのことだ…：クラスに資材などを配布すると、全校に向けての出し物に回らなくなってしまい…」

しばらく会議を進めていると、各クラスに配布する資材についての問題点が上がっていた。

（たしかに、これっぽっちの資材じゃあ各クラスに回す余裕なんて全然ないよな…）

手元に配られた資料を見て分かったが、装飾などに使える資材が少なく、かなり節約をしないと厳しそうだ。

「どこかに、誰も使っていない大量の資材があればなあ…」

誰かがそんなことを呟いた。

「いや…そんな都合良くあるハズが「あるわよ!!」…あつたわ。」

そんな都合の良い資材が弦巻家にはあるらしい。あ、俺知ってる。これ絶対にこころの屋敷に向かうパターンだ！

く現在く

こうして、俺は実行委員から紗夜先輩。こころのストツパー兼手伝いとして花音先輩と美咲を呼んだのだ。いやあ、2人も暇人がいて助かったよ…。はぐみは文化祭に備えて？ベースボールの練習があるらしいし、薫先輩は演劇があるらしい。残った花音先輩と美咲は今日は丁度予定が空いていたらしく、こうして呼んだのだ。

「それにしても、創也くんが文化祭の実行委員だなんてなんだかすごいね。」

倉庫にて資材を漁っていると、花音先輩が話しかけてくる。

「ああ…その事つすか…実はちよつと色々ありまして…」

いや、本当に色々あつたんだよ…？

「実は…文化祭の実行委員をクラスの中で決める時に居眠りしてたらいつの間にか俺の名前があげられて…気がつけば実行委員になつてたんですよ…」

「あはは…大変だね…」

もちろん、俺の名前を挙げたのはあの変態野郎だ。とりあえず復讐として、アイツが学校に持ってきてきた薄い本を生徒指導の先生に渡し

た。まあ、その生徒指導の先生がああ、あの教頭先生だから、あんまり意味ないかもだけどね。

「2人とも、口よりも先に手を動かしてください。」

やべ、紗夜先輩に怒られちゃった。

「ご、ごめんね紗夜ちゃん…?」

「今から手を動かしまーす」

まあ、俺の文化祭実行委員になった経緯は置いておくとして、俺たちは倉庫での資材調達を始めるのだった。

それから約1時間後。

「なんかどれも高そうなものばかりで使えそうなものが無い……」

作業状況はあまり良く無かった。

「日も暮れてきたし、そろそろ帰った方がいいのかな?」

季節は夏ということもあり、そこまで暗くはないが作業開始からかなり時間が経っているのが分かる。花音先輩の言う通り、そろそろ

帰った方がいいのかもしれない。
そんな時だった。

ガタツ！

俺と花音先輩の周囲で荷物が崩れる様な不吉な音が響いた。

「ねえ創也くん……何か不吉な音が聞こえた気がする……」

「奇遇ですね花音先輩。俺にも不吉な音が聞こえたんですよ。」

俺と花音先輩は漁っていた資材の山を改めて見上げる。

あ、なんか箱みたいなのが上から降ってきた。

俺、これ知ってるよ！山が崩れる3秒前ってやつだ！

「きゃあああああ
!!!??」

俺たちは逃げようとしたが既に遅く、俺と花音先輩は資材の山に埋もれてしまった。

「いたた……大丈夫ですか花音先輩……？」

「ふ、ふええく、ビックリしちゃった……って……そ、創也くん……／＼／＼」

「どうしました？」

俺が花音先輩を守る形でなんとかお互いの安全を確保できたのだが……花音先輩の顔が赤い。なんで？

「その……この体勢はちよっと不味い気が……」

「体勢？」

今の2人の状態を説明しよう！

土砂崩れのように落ちてきた資材から創也は花音を押し倒す形で守ったのだ！つまり…現在進行形で創也は花音を押し倒しているぞ！

「す、すみません!!!今どきますす！」

完全に不味い体勢になっていることに気が付いた創也。すぐに移動しようとするが、その判断は少し遅かった。

「2人共！今すごい音が聞こえたのですが………」

「「あ」

資材の崩壊の音を聞き、紗夜先輩が真っ先に駆けつけてきた。

「ふっ!!!」

ヒュン!!!

そんな空をきるような殺人的な音が俺の耳に先に届いた。

「ちよまつ!!」

紗夜先輩は近くに落ちていた重そうなダンボールを片手で持ち上げ、俺に全力で投げてきた。

ゴンツ!!!

「うがっ!？」

当然、狙いは寸分変わらず俺の頭に直撃した。

「風紀委員ともあろう者が不順異性交友など何を考えてるんですか!? こつちが心配して来てみれば何をやってるんですか!!」

「ふええくっ!ごめんなさい!!」

何故か謝る花音先輩。違う。そうじゃない。誤解を解いて花音先輩。

「さ、紗夜先輩……誤解……」

「はっ!!!」

ヒュン!!!

今度は近くにあつた置物を投げってくる先輩。

ゴツツ!!!

「うげっ!？」

(あ、俺に人権ないのね。)

そんなことを考えながら、俺はゆつくりと意識を手放すのだった
……

「まったく…そういう事なら早く言ってくれば良かったじゃないですか。」

「俺が誤解を解く前にあの箱投げしてきたの先輩じゃないですか。」

「……」

俺が目を覚ました後、こころと美咲がこっちに来て俺は目を覚ました。俺が気を失っている間に花音先輩が紗夜先輩の誤解を解いてくれたらしい。別にいいんだけどね？強いて言うなら俺が倒れる前に誤解を解いて欲しかったよ花音先輩…

「ていうか、紗夜先輩は何を投げたんですか？」

美咲は現場に来たばかりで状況が飲み込めてないらしい。

「ほら、ちょうどこころが運んでる箱だよ。」

俺が指を刺した方向では紗夜先輩が投げたダンボールをこころがこちらに持ってきた。

「このダンボールの中には何が入っているのかしら？結構重かったわ！」

「だろうな。身をもって体験したし。」

クツソ痛いからな。

「開けてみよう？」

「それもそうっすね」

気になった俺達はダンボールの中身を開封した。

「これは……ジュース？」

紗夜先輩の投げたダンボールの中からは瓶詰めされたジュースが6本ほど出てきた。

「なんだかキレイな色をしてるね。」

「色的にりんごジュースでしょうか？」

「多分そうだと思いますよ。ダンボールの開け口に『ジュース』って書いてあるし。」

「なら、丁度喉も乾いたことだしみんなで飲みましょうよ！」

「そうだな。花音先輩も美咲も紗夜先輩もそれでいいっすか？」

「私は大丈夫だよ。」

「あたしも平気だよ。」

「私もかいません。」

全員で休憩することとなり、みんなでお茶会をして、この日の資材調達は終了した。

あのジュースけっこうジューシーで美味しかったな…

しかし、このジュースが俺の日常を壊す元凶となることを、俺はま
だ知らない。

くお茶会解散後 おまけ？く

黒服A「では、こちらのダンボールは我々で片付けさせて頂きま
す。」

こころ「わかったわ！」

お茶会を終えた後の掃除をする黒服たち。

黒服B「さてと、後はこのダンボールを片付ければ……おや？」
ジュースが入っていたダンボールを持ち上げると、一枚の紙が落ち
る。

黒服C「なに書かいてありますね…なにになに…？」

片付け中にダンボールから落ちてきたプリントには…

Super Original Ideal Yandere
Apple

と書いてあった。

黒服C「これはどういう意味でしょうか…？」

黒服B「害はないと思いますが、一応調べてみましょう。」

黒服C「そうですね」

第1話 また生徒会室に呼ばれちゃった

「やっべえ!!遅刻する!!」

「にやあ!!」

俺は慌てながらも急いで身支度を整える。もちろん、ここあの朝ゴハンも忘れずに。

「早く学校に行かないと紗夜先輩に怒られる!!」

風紀委員の関係でたまに遅刻する生徒を確認しに校門で待機していることがあるのだが、遅刻した生徒は紗夜先輩からO・H・A・N・A・S・H・Iを受けるのだ。

しかも風紀委員である俺が遅刻したとなると…考えるだけでも鳥肌がヤバイ。

「いってきまーす!!!!」

「みやあ〜」

玄関の鍵を閉める余裕もなく、俺は全力で学校まで向かうのだった。

「しゃっあ!!!セーフ!!!」

なんとか校門まで辿り着く。ギリギリで間に合った事に安堵するが…

「アウトです」

「そんなっ!？」

「事実です。」

そう言いながら、紗夜先輩は自分の右手に着けてある腕時計を見せる。

紗夜先輩の腕時計は「8時1分」と表示されている。花咲川は8時登校なので、間違いなく遅刻だった。というか、これくらいなら許してほしいんだけど…

「まったく…遅刻したのは創也さんと松原さんの2人ですか…」

「あれ？花音先輩も？」

学校来る前に迷子になったのかな？探しに行ったほうがいいのか…？

「松原さんは事前に遅刻すると連絡が入っていたので、今回は不問としますが創也さん…」

「な、なんですか…?」

恐る恐る紗夜先輩に聞く。やべえ…紗夜先輩の顔を直視できねえ…顔を見ることがさえ怖すぎる。

っていうか、花音先輩事前に対策をしたのか!?ズルい!!!

「放課後、生徒会室に1人で来てくださいね?」

説教
極刑の判決を言い渡す紗夜先輩。

「はい…」

紗夜先輩からどんなお説教を受けるのか恐怖しながらも俺は教室に向かうのだった：

「ふふふ…」

彼女はニヤけそうになる顔をなんとか笑みを零す程度に留め、腕時計の時間を5分ほど前に巻き戻した。

「なんとか2人だけの空間を作ることになりましたね…」

今日は生徒会を使う人はいない…よって、完全な密室空間へとなるのだ。

「もう少しデ…創也さんが…ワタシのモノに…フフフ♡」

彼女の顔は赤く紅潮し、普段の彼女を知る人間からは、とても考えられないような顔だった。瞳には一切の光はなく、そこに風紀委員としての彼女の姿はなかった…

もしも、創也がこの時の彼女の表情を見ていれば、少しは違った未来になったのかもしれない。

「オッス創也！遅刻ギリギリだったな！」

教室に入ると、勇人が声をかけてきた。

「はあ？何言ってるの？俺遅刻したみたいだけど…」

「はあ？お前こそ何言ってるんだ？今8時になったばかりだから遅刻でも何でもねえぞ？」

教室の時計を見ると、勇人の言う通り、時刻は8時を示していた。

「まじかあ…これ紗夜先輩の腕時計がズレてたってパターンじゃん…」

「へえ…あの人の時間の管理に結構厳しいのに珍しいこともあるんだな。」

「はあ…あのお説教を無意味に喰らうことになるのか…」

以前、紗夜先輩のお説教を見たことがあるのだが、とても言葉で表せるものではない。勇人にいたっては説教の常習犯なので、どれだけそれが地獄か理解しているだろう。

「うわあ…：：：～」

「そんな餞別は嫌だ…」

衝撃の事実には絶望しながらも、俺は自分の席に着席するのだった。

昼休み

「そういえば創也、今日は遅刻しそうになってたけど…何かあったの？」

昼休みとなり、俺はハロハピのメンバーで弁当を食べていた。

「いやあ…昨日の資料運びのせいでちよつと疲れちゃってさ…眠りすぎちゃったんだよ。」

「なるほど。」

「確かに、創也くん昨日はぐっすりだったもんね。」

「でも、遅刻しなかったのだから良かったじゃない！」

「教室から見てたけど、そーくん、すつごく脚がはやかっただ！」

そんな感じで俺達は昼食を続けた。

「はあ…どのみち、紗夜先輩に説教を食らうんだろうなあ…」

普段の説教は俺紗夜先輩のそばで待機することでストップパーとなり、短時間で終わらせるように仕向けるのだが…今回、ストップパーである俺自身が説教を受けるとなると…何時間かかることやら…

「ソウヤ…サヨに何も変なコトされナイわヨネ？」

「ハ、ハハハハ…?」

なぜかこちら側にゆっくりと寄ってくるところ。なんだろう…この瞳に光がない…なんか怖いんだけど!?

キーンコーンカーンコーン

「あ、昼休みが終わるみたいだよ!はぐみ、この後体育だから早く行くな!!」

そういうと、はぐみは食べ終わった弁当を急いで片付け運動場へと向かった。

「あ、俺も授業の準備してないから教室に早めに戻ってるよ!」

はぐみに便乗して、俺は何とかその場を切り抜けた。

(今日のところ…瞳に光がなかったような…考え過ぎか?あのころがあんな怖い顔をするはず無いし…昨日の疲れがまだ残ってるのかな…?)

ところの表情に不安を抱きつつも俺は教室に向かうのだった。

そして、放課後。創也に悪夢が襲いかかろうとしていた。

「はあ…ついに来ちゃったよこの時放課後が…」

相変わらず謎の威圧感すら放つ生徒会室…うん、すつごく入りたくない…このまま逃げて帰ろうかな…？

「どこへ行くつもりですか？創也さん？」

「ですよねえ…」

当然、背後で待ち構えていた紗夜先輩に捕まる。

「ちゃんと逃げないで来ましたね…まあ、逃げても捕まえるだけです♥…」

「そりゃあ、逃げたらもつと酷い説教食らうことになりそうなので…」

「まあ、それよりも早く生徒会室に入ってください。」

「ちよっ！分かりましたから押さないでください！」

ぐいぐいと俺を押しして無理やり生徒会室に入室させようとする紗夜先輩。

結局、そのまま強引に入室させられる。

「さて、それでは確認ですが、あたは何故ここに呼ばれたか分かっていますか？」

「…遅刻したことでしょうけど…紗夜先輩の時計、あの時の時間と合っていないみたいなんですけど…」

勇人の話が確かなら、俺は遅刻をしていないらしいのだ。無駄に説教を受ける趣味はない。時間のズレを伝え早く帰宅しようと考えて

いたのだが…

「ああ、その事ですか…時計は私がわざと5分進めていたんですよ。」

「……………え？」

（紗夜先輩は今、なんて言った？わざと5分進めていた？じゃあ、何で俺はここにいるんだ？）

嫌な予感が止まらない。ここにいたら酷い目に会おうと俺の本能が警鐘を鳴らす…

「今回私が貴方を読んだのは、弦卷さんや奥沢さん…松原さんとの関係性についてです…」

「こ、こころ達との関係性…ですか…？」

ジリジリとこちらに寄ってくる紗夜先輩。俺も本能的に後ずさってしてしまう。

「あなたは風紀委員でアルニも関わらず弦卷さん達との距離が近すぎるんじゃないデスカ？…一歩間違えれば不純異性交友デスヨ…？」

「そ、そんなこと言われましても…同じバンドメンバーですし、アレも多分こころなりのスキンシップじゃないんですか？俺は別に構いませんし…」

第一、俺に抱きついてきたりするのはいや、10割がこころだ。なのに何故美咲や花音先輩にまでそんな指摘をされるのだろうか？

しかし、そんな思考をしている間にも、紗夜先輩はジリジリと確実に俺との距離を詰めていき、俺はついに壁際まで到着してしまう。

というか、さつきから紗夜先輩の顔が怖い。怒った時とはまた違ったバクトルの怖さ。頬は紅潮し、瞳からは一切の光が消えていた。なんだか、昼休みに見たところと少し似ている気がする。

「あなたがヨクてもワタシが駄目なんデス…」

「……っ！」

　　教室の隅まで下がった以上、俺に逃げ道はなく、紗夜先輩に完全に逃げ道を塞がれてしまう。

「弦卷さん達とはどこまでいったのデスカ？ 一歩間違えれば創也さん自身が襲われていたかもシレナインデスヨ？」

「お、襲われるってそんな…ってというか、俺今先輩に襲われそうで怖いんですけど!?!ちよつ、近いですって!」

　　視界の殆どが紗夜先輩の顔で占められている。あと少し近づけば唇と唇が触れ合ってしまうような距離だ。

　　紗夜先輩をから逃げようとするが、両手を押さえつけられ、手を動かし抵抗することが出来ない。いや、強引に振り払えばいけるかもしれないが、リスクが高すぎる。

　　普段から紗夜先輩はロゼリアのギターで鍛えられているということもあり、平均的な女子以下の腕力しかない俺には現状対抗できる策が何一つとしてなかった。

「ワタシがあなたに風紀のトリカタを骨の髄までオシエテアゲマス♡…そうすれば、他のオンナとはもつと適切な距離がトレマスヨ…?」

(やばい…これは…獲物を前にした肉食獣の目と同じだ…っ！)

「くっ!」

俺では紗夜先輩に腕力で勝つ事はできない。だが、他の身体能力では俺の方が上…ならば全力で紗夜先輩の後ろにあるドアから脱出すればいい。

(よしっ! 抜けた!)

今出せる最大の速度で紗夜先輩を出し抜き、ドアに手をかけ、脱出………するはずだった。

ガチャガチャ

「なっ…開かない!」

紗夜先輩の後ろ側に回り、出入口であるドアに手をかける事には成功したが、鍵がかかっており、動きが一瞬止まってしまった。

即座に鍵を開け、再び脱出を試みるがすでに遅い。

「うわっ!」

後方に強く引っ張られ、そのまま押し倒されてしまう。先程押さえつけられてた手を強引に振り解いたせいで、腕が痛む。同じ手はもう二度と使えない。

「さ、紗夜先輩……っ!」

完全にマウントを取られる。こうなった以上、俺に逃げ道はない。

「創也サン…? イマ、ナンデニゲタンデスカ? ワタシガイレバアナタニハナニモモンダイガナイデショウ? ネエ、ナンデニゲタンデスカ?

「ネエ、ナンデ……?」

「ひっ!？」

紗夜先輩の眼はたった一筋の光さえ無く、先程よりも頬が紅潮していることから、完全に俺を襲うつもりなのだど理解する。

「ふふふ…大丈夫デスヨ? 創也サンは大人しくしていればイイインデスカラ…♡」

(もう……駄目だ…だれか…っ!)

あまりの恐怖と突然の状況に、俺は半ば諦め、目を瞑った時だった。

ガラッ!!

「大変よ! 紗夜さん! 一年生の矢坂勇人って男子が映画鑑賞部の部室を占拠して男子数十人で成人向けのビデオの鑑賞会を始めたわ!!! 早く何とかしないと……って、何してるの?」

紗夜先輩の手が俺の服に触れた瞬間、生徒会室のドアが開き、紗夜先輩の同級生と思わしき人物が入ってきた。

「……すみません、躓いて倒れた際、彼を巻き込んでしまったので……今止めに行きます。」

「……今度…勇人にお礼言わなきゃ…」

「……今度…勇人にお礼言わなきゃ…」

学校で何バカな事やってんだ!?!的なツツコミよりも先に、勇人への感謝が口から出た創也であった。

それから約2時間後。

「さすがに疲れたな……」

その後、勇人が時間を稼いでくれたおかげで無事に下校できた。俺は現在、バイト帰りの為、近場の公園に寄って休憩してる。

今日の紗夜先輩の事をモカやりサ先輩に相談するわけにもいかず、俺は暗くなり、人1人いない公園で今回の件について考えていた。

「にしても紗夜先輩のあの目……何だったんだ……?」

学園の風紀を守る風紀委員自らがその風紀を壊そうとしていた。しかも、相手はよく知る相手……さらに言えばコーチをしているバンドのメンバーの1人なのだ。普段の彼女を知る人間からはまず考えられない行動だろう。

「はあ……明日はロゼリアのコーチがあつたけど、事前にリサ先輩に休むって言うっておいて正解だったな……どうせ明日は土曜日だし久しぶりに家でゆっくりするか……」

そう思い、自宅へと帰宅しようとした時だった。

バチツ
!!!!

「がっ!?!」

ベンチを立ち、移動しようとした瞬間、全身が痺れそのまま受け身も取れずに倒れてしまう。

「フッフ…ニゲラレルトオモツタンデスカ？ソウヤサン♡」

「…さ…よ…せんぱ…い…なん…で…？」

紗夜先輩の手にスタンガンが握られている事を確認し、俺は意識を手放すのだった…。

第2話 脱出せよ！創也 VS 紗夜！

「ん……う……」

深く沈んだ意識が次第に覚醒していくのを感じる。

「……は……？」

現在の自分の状態を改めて確認する。手足は麻のロープで縛られているが、一応、ベッドの上で眠らされているような状態だ。

「そうだ…俺は…紗夜先輩に……」

だんだんとここに来る前の記憶がハッキリとしてくる。周囲を見渡せば、落ち着いた雰囲気の一部屋に一つ、存在感のある青いギターが目にとまった。間違いはない。紗夜先輩のギターだ。ロゼリアの練習の時によくみている為、誰が使っているかくらいは判別がつく。

ガチャ

「あら、やっと起きたんですか」

「紗夜先輩……」

不意に、扉が空いたと思えば入ってきたのはやはり、紗夜先輩だった。花咲川の制服ではなく、私服を着ていることから、ここが紗夜先輩の家だと確信する。

「なんで……こんな事をするんですか……？」

「なんで……ですか……ふふふ」

こちらが質問したというのに、紗夜先輩は笑っている。たったそれだけの動作だというのに、嫌な予感…寒気が止まらない。ずっと狙われているような不快感が全身を襲う。

「そんなの…あなたが欲しくなったからですよ…」

「俺が…?」

ジリジリと生徒会室の時のようにこちらに寄ってくる紗夜先輩。違う点があるとすれば、俺には逃げ道も抵抗する手段も、全てが封じられているという事だろう。

「以前までは頼りがいのある後輩と思っていましたが…いつからでしょうね…創也さんの事が欲しくて欲しくてしようがないんですよ…」

俺の顔に近づいてくる紗夜先輩。先輩の吐息が鼻腔をくすぐる。一種の甘さのようなモノさえ含むそれは、俺の神経を少しずつ麻痺させていく。

「ヤット…ワタシノモノニナツテクレマスネ♡」

俺の顔を通り過ぎ、耳元で甘く囁いてくる先輩。
先輩の吐息が耳にかかる。

「はむっ」

「ひゃっ!?!」

突然、紗夜先輩が耳を啜えてきた為、変な声をあげてしまう。

「案外可愛らしい声がでるのですね…ふふ」

頬を紅潮させ、濁った瞳で俺を見る紗夜先輩。

「こ、これ以上はダメです…っ！こんなところ誰かに見られたら…」

物理的な抵抗ができない以上、言葉による説得しか方法はない。

「大丈夫です…ワタシの両親は仕事の関係で帰ってくるのは明後日なので、家にはいませんし、日菜も仕事で今日は遅くなるかもしれないと聞きました…つまり、この家は私と創也さんの2人つきりという事ですよ♡」

(嘘だろっ!?)

ここで会話を断つのは危険すぎる。どうにかして会話を続けなければ……

「というか、なんで俺があの時公園にいるって分かったんですか!？」

まず最初に思いついた事はそれだった。

「その事でしたら……これです。」

紗夜先輩は、私服のポケットから小さなレーダーのようなものを取り出した。

「そ、それって…発信器ってやつですか……」

「よくわかりましたね…お察しの通り、これで創也さんのいる公園に

たどり着き、ここまで運んだんですよ。」

なぜあの時、紗夜先輩が俺のいる場所に現れたのか、疑問が解消される。

(つて、会話を続けて誤魔化さないと…っ！)

そこで、ふと思い浮かんだ疑問がある。

「そ、そういうえば！日菜先輩って高校生なのに仕事してるんですか？」

先ほどの紗夜先輩の発言から突破口を探し、思い浮かんだのがそれだった。

「…日菜でしたら、学生兼アイドルなんですよ。以前、オーディションをしたら受かったそうです。今は "Pastel*Palette" というアイドルバンドでギターをしているそうです。」

「な、なるほど……」

マジかよ…あの先輩そんなに凄かったのか…

「ですが…」

突然、紗夜先輩が口調を強くし、言葉を繋ぐ。

「ナンデアナタノクチカラホカノオンナノナマエガデルンデスカ？アナタニハワタシイガイヒツヨウナイデシヨウ？」

たった一筋の光さえない瞳で紗夜先輩は俺を見据える。どうやら

最悪の質問をしてしまったらしい。

「ち、違います！そんなつもりじゃ…」

「言い訳はイリマセン…オシオキデス♡」

紗夜先輩は、どこから取り出したのかアイマスクを俺の顔に装着し、耳元で囁いてくる。

「もう二度と…他のオンナに目移りしないよう…あなたが誰のモノなのか…直接身体に教え込んでアゲマス♡」

「ひうつ!?!」

そう囁くと同時に、耳にぬるぬるとした生暖かい感触を感じる。

「知ってますか？人間は目から8割程情報を得るのですが、目を使わなければ、耳から情報を得ようとするんですよ…?」

くちゅ、くちゅ、ぺろ…

アイマスクで視界を塞がれ、触覚や聴覚が敏感になっている。そんな状態で責められ続け、俺の理性と精神はゴリゴリ削られていた。

(や、やばい…刺激が…強すぎる…っ！)

顔を動かして逃げようにも、しっかりと顔を固定され、びくともしない。

(っっていうか明らかに力が強すぎる…っ！全く抵抗できない…!?)

女性からは考えられないような力で押さえつけられている以上、逃げる手段が殆どない。

「ふふふ…そろそろ創也さんのファーストキスをいただきましようか♡」

万事休すか…放課後のように勇人あたりの人間が何かアクションを起こしてくればありがたいが、そんなことはありえないだろう。

「それでは改めて…イタダキマス♡」

そして、俺の唇と紗夜先輩の唇が触れようとしたその時だった。

ドタドタドタ

「…え？」

何かがとてつもない速度でこちらに近づいてくる音がする。紗夜先輩もその音に気が付いたようで、寸前のところで俺と紗夜先輩の唇は接触を避けることが出来た。

「…ふっー」

「わっ!？」

近づいてくるものの正体が分かったのか、紗夜先輩はベッドの端に置かれた布団を取り、俺に被せて来た。

「おねーちゃん!ただいまー!!」

(この声は…日菜先輩!?)

音の正体は紗夜先輩の双子の妹の日菜先輩だった。

「おかえりなさい日菜…それと、いつも部屋に入る時はノックをしよう？…パスパレの練習はどうしたの？」

「なんかね、マネージャーの人が体調不良みたいで自己練習になったんだけど、あたしはもういいかなーって！」

日菜先輩からは俺が見えていないのか、普通に紗夜先輩と話し込んでいる。

「日菜先輩っ！助けっ?!?!」

布団越しに助けを求めようとした瞬間、口の中に異物が入る。

(紗夜先輩!?)

紗夜先輩は俺が何をしようとしているのか、察したのか、布団越しに俺の口の中に指を入れてきた。これでは声が出せない。

「あ、そうだー！おねーちゃん！一緒にご飯食べようよー！」

「…別に、私と一緒に食べる必要はないでしょう…?」

「えー、それだとるんっ♪ってしないもん…それとも、何か一緒に食べられない理由でもあるの？」

「……分かったわ。後で下に行くから待ってて。」

「はーいー！」

そう言うと、日菜先輩は部屋から出て行ったようだ。
そして、身体から布団の重みが消え、視界が明るくなる。アイマス
クも取ってもらえたらいい。

「私は今から日菜と食事をしてきます。」

紗夜先輩は俺の後ろに回り、俺の身体にさらにロープを巻き付け、
部屋の家具と俺を縛り止める。

「ニゲヨウナンテ、カンガエナイデクダサイネ？」

「っ！」

俺はその言葉に恐怖し、ただコクリと小さく頷くことしかできな
かった。

(はあ………いったい紗夜先輩に何が起こってんだ?)

紗夜先輩が日菜先輩と食事をしている時、俺は今回の件について改
めて考えていた。

(紗夜先輩の一連の行動は普段の先輩からは考えられないような風紀
をぶっ壊すものばかり……キャラ崩壊なんてレベルを軽く超えてる

ぞ…)

どんな可能性を考えても、先輩があんな状態になった理由がわからない。

(やっぱり消去法で何らかの外部的要因があるのか?)

そんな思考に至り、数分がたった頃だった。

コンコン

(っー……来たか…)

部屋のドアがノックされる。おそらく紗夜先輩だ。次こそ逃げ道はない。そう思い、これから先で起こるであろう展開を覚悟した。

「あれ?なんでそーくんがここにいるの?」

「ひ、日菜先輩!?!」

どうやら悪運が強かったらしい。入ってきたのは紗夜先輩ではなく日菜先輩だった。

「ねーねー、なんでおねーちゃんの部屋にそーくんがいるの?縛られてるけど……趣味?」

「これが趣味に見えます?……あ、あとこのロープほどいてもらっていいですか?肌に食い込んで地味に痛いんですよ…」

「ふーよー」

こうして俺は、紗夜先輩の捕縛からなんとか解放されたのだった。

「そういえば、紗夜先輩は？」

今、この状況を紗夜先輩に見られれば日菜先輩も俺も間違いなく碌な目に合わない。

「おねーちゃんなら、今お風呂に入ってるよ！意外と長風呂だから…あと10分くらいすれば上がってくると思うよ？」

「なるほど…あ、日菜先輩、ちよつとスマホ貸してもらって良いですか？」

「いいよ…でも、何に使うの？」

「ポケットに入れておいたはずのスマホが無いので、場所を確認しようと思ひまして。」

日菜先輩からスマホを受け取り、自分の携帯に電話をかける。

ピロロロロ、ピロロロロ

部屋の本棚の裏から小さく音が聞こえる。

「あつたよー！」

日菜先輩が音の方向へと向かい、俺のスマホを取り出す。そして俺にスマホを渡してくる。当然、俺も日菜先輩のスマホを返す。

「ありがとうございます。」

「あ、それから…はい、これ！」

日菜先輩は、少しスマホをいじると、俺に何かを見せてきた。

「あの…これは？」

「あたしの連絡先！」

「なんで俺なんか？」

「えーとね、なんだかるんっ♪ってきたから!!」

「る、るん？」

「うん!…それとも、あたしと連絡先交換するの…いや？」

若干の上目遣いになって訪ねてくる先輩…：なんだか、紗夜先輩の双子ってこともあって、違和感がすげえ…

「まあ…俺のでよければ。」

こうして、俺は日菜先輩と連絡先を交換した。

「って、こんなことをしている場合じゃなかった！早く脱出しないと…っ！」

「なら、こっちだよ！」

日菜先輩は俺の手を掴み、玄関を出て、外に連れて行かれる。

「すみません先輩…助かりました…」

「おねーちゃんならあたしが様子を見ておくから、安心して逃げてね！」

「はいっ！ありがとうございます！」

こうして、俺は氷川邸からの脱出を、日菜先輩という協力者を得ることで脱出するのだった…

「卯月創也くん…かあ…うん！るるるるんっ♪って感じがする！」

走り去っていった少年の姿が見えなくなる頃、1人の少女はその場で眩くのだった。

少女の目は、1点の曇りもなく、新しいおもちゃを見つけた子供のように輝いていた。

「とりあえず家の近くまで逃げてきたけど…」

俺は改めて、連絡先に加わった「氷川日菜先輩」と記された項目を見る。

「何気に俺、アイドルと連絡先交換したんだよなあ…あいつには黙つ
とこ…変な呪いかけられそうだし…」

スマホの電源を切り、家の方向へと向かう。

「はあ…アイドルと連絡先交換した反動で不幸が来なければいいけど
…」

幸か不幸かわからないような状況だったが、俺は窮地を脱した事に
安堵し、気を緩めたその時だった。

「みつけたわよ！ソウヤ！」

「こ、こころろ!?!」

突然、俺の目の前に黒い大型の車が停車したかと思えば、車の窓が
開き、こころろがいた。

「こんな時間に何してんだ!?!」

「それよりも、早く乗って!!」

「ちよ、まっ!!」

ドアが開いた瞬間、こころろが俺の服を引っ張り、車の中へと引きず
り込まれる。

「今からあたしとソウヤの家に向かうのよ♪」

「はあ?!!」

こころがそう言うと同時に、車が動き出し、俺の家とは反対方向に進みだした。

とりあえず、心の底から一言…

「また誘拐じゃねえかコノヤロおおおつつ
!!!!!!!」

暗くなった街に、俺の悲鳴が轟くのだった。

第3話 ココロノコエ。創也&ココロ

「そうやあ…しゅきい…♡」

こころは頬を赤くし、俺の身体に抱きついている。酔っ払ったような状態なのだが、素面しらふである。

「いや、マジでどうしてこうなった…」

俺は現在、弦巻家のこころの部屋にて、こころに甘えられる……もとい、捕まっていた。

どうしようもないほど緩みきった笑顔で甘えてくるその様は猫を想像させるが、そんな可愛らしいものではない。

「な、なあ…こころ？」

「どうしたの？ソウヤ？」

「そろそろ俺、身体が痺れてきたんだけど…動いてもいいかな？」

「……………ナンデ？」

「っ！」

しまった…地雷を踏んだ。

「外にはとっても危険なものばっかりなのよ？ソウヤを襲おうとする人だつて要るし、ソウヤがいつどこで誰に狙われているかわからないわ…だからココニイタハウガイイワ♡」

紗夜先輩のような光のない濁りきった瞳でかたるこころ。現在進行形でこころに抱きつかれている以上、俺に抵抗する手段はない。

「はあ…わかったよ…」

「えへへ…ずっと一緒にいましょうソウヤ…♡」

時は遡ること数時間前。俺は紗夜先輩の家を脱出し、帰宅しようとした瞬間、突然車で現れたこころにそのまま誘拐されたのだ。

そして、そのまま流れるようにこころの家に連行され、現在のような状態に至ったのだ。

「ってというか、俺まだご飯も食べてないし、風呂も入ってないからアレなんだけど…」

というか、紗夜先輩が香水か何かを使ってたのか、微妙に身体に紗夜先輩の匂いが染み付いてるんだよなあ…嫌ってわけじゃないけど、やっぱり男の俺としては落ち着かない。なんかずっと紗夜先輩に監視されてるみたいだし……

「……サヨノニオイガスルワ」

「はあ!?!なんで分かんだよ!?!」

こころが俺の近くに寄ってくると、すんすんと俺の匂いを嗅ぐ。つていうか顔が近いっ!

「ネエ、ナンデサヨノニオイガスルノ?ネエ、ナンデナノ?ソウヤ…コタエテ…?」

瞳に光がない上に、俺に抱きつく力が自然と強くなる。

「っ……文化祭関連の用事があって……それで紗夜先輩の所に行つてたんだよ。」

直感だが、いまのこころに紗夜先輩との間に起きた事件を言つてはならない気がする。

「なら良かったわ!」

そういうと、俺を抱きしめる力は比較的弱くなり、再び俺の身体に身体を埋め始めた。

騙した罪悪感よりも安心感の方が大きい。

(つて、流石に家に帰つたほうが良いかな……?ここあの餌は……心配ないな。あいつたまに友希那先輩の家に勝手に遊びに行くからな……)

「ソウヤ……今日は泊まっていつてほしいわ……」

「なんで?」

「ソウヤが逃げないように、あたしが一緒にいるためよ!」

「なんじゃそりゃ」

……紗夜先輩たちの自宅とは違い、こころの家は、広い上に警備も厳重だ。日菜先輩みたいな助っ人が現れることも期待できない。よつて、脱出は現状不可能。いずれにせよ、こころに従うことしかできない。

「はあ…わかったよ。今日だけだ。」

こうして、俺は弦巻家に泊まることになった。

「ふい〜…やつと一息つける…」

俺は現在、弦巻家の風呂場…もとい入浴場で入浴中だ。なにか良い成分でも入っているのか、疲労が取り除かれるのを実感する。

(やつぱりこんな状況…いろいろとおかしすぎる。)

ここ数日を振り返っても、こころや紗夜先輩があんな状態になった理由がやはり思い浮かばない。

(それに、あの紗夜先輩が俺を襲おうとしたんだぞ…身体能力だけなら紗夜先輩よりこころの方が上…クソツ！どの道詰んでやがる…つ！)

万が一こころに迫られた時の対処方法が何も無い。対話で済ませることができればいいが、力で迫られたら勝ち目はない。

「はあ…こんな時、勇人みたいに頭がパツ^バパラ^カパーになれれば少しは楽なんだけどなあ…」

ちなみに、どうでも良いが勇人の成績は普通に学年でも上から数えたほうが圧倒的に速い。なんでも…

『リア充共に教えてやるのさ…彼氏彼女なんて作るから成績が俺より低いんだってね…ふ…ふはは…ふははははは!!!!』

って、教室で高笑いしてた。もちろん、クラスの女子達がドン引きしていたの言うまでもない。

ちなみに、生活指導の教頭先生は清々しい笑顔でサムズアップしてた。…実はあの2人結構仲良いだろ。薄い本の取り合いほぼ毎日してるけど。

(さてと、身体も洗ったし、そろそろ出るか…)

そう思い、風呂から出ようとしたときだった。

「ソウヤー！あたしも入るわ！」

「あいよー……………はあ!？」

ガチャ

風呂場にごころの声が響くと同時に、風呂場の扉からペタペタと裸足で誰かが近づいてくる音がする。もちろん言うまでもない。こころ本人の登場だ。

「な…なんで俺がいるのに入ってきたんだこころ!？」

足音のする方向とは反対に顔を向ける。

「そんなの、ソウヤと一緒に風呂に入りたかったからに決まってる

「じゃない！」

「なっ…／＼／＼」

平然とそんなことを行ってくる。ころ。

「それにバスタオルを身体に巻いているから大丈夫よ！」

「なんだそれなら安心…じゃねえよ!!!」

「あら？黒い服の人たちにソウヤと一緒にお風呂に入りたいて言ったら、「バスタオルを身体に巻いていけば、卯月様も一緒に入ってくさるか。」って言ってたけど…お風呂に入るのだからやっぱりバスタオルはいらわないわよね！」

「いやいいです！そのままで大丈夫です！というかそれ以上進まないでください！」

「わかったわ！」

あつぶねえ…もう少して手遅れになるところだった…っていか、黒服さん、マジでナイス。本当にありがとうございます!!

「はあ…結局こうなるのか…」

「ソウヤ、ため息ばかりついていたら、
“笑顔”が逃げちゃうわよ？」

「それを言うなら、
“幸せ”じゃねえの？」

「そうとも言うわね！」

さりげなくこころが俺の隣に座ってくる。

「…なあこころ…ちよつと近くね？」

「そんな事ないわ♡」

そんな事ない…とこころは言っているが、すでに俺の肩とこころの肩が触れている状態だ。

(やばい…黒服さん達がこころにバスタオルを装着してくれたからまだ良いけど…流石に罪悪感がやばい…)

とにかく、罪悪感がすごいのだ。

あの時…野外教室1日目の夜…俺は爆発に巻き込まれて女湯に突撃した。

その際、こころ達の一糸纏わぬ姿をバッチリと(湯気が凄かった為奇跡的に完全には見ていないが)見てしまったのだ。

そんな感じで、創也が罪悪感に苛まれていると、こころが口を開いた。

「ソウヤ、まだ身体を洗ってないのなら一緒に洗いましょ！」

「はあ!?お前自分で何言ってるかわかってんの!？」

「もちろんよ!それとも、何かダメな理由でもあるのかしら?」

「い、いや…そういう訳じゃないんだけど…」

「なら良いじゃない！」

そういうと、こころは俺の手を引っ張ってお湯から上がろうとする……って、ちよつと待て!!!

「ちよつ!?!引っ張らないでも自分で上がれるから!!!」

結局、俺は腰にタオルを装備し、こころと共に身体を洗い、風呂を出るのだった。

あ、18禁的な流れを期待した奴…残念だったな、至って平和に終わったよ。

しかし、こころで俺は現在、新たな問題に直撃していた。

「だから俺は！男！お前は女！これ以上理由ないだろ!?!」

俺たちの目の前には巨大なサイズのベッドが一つ置いてある。まあ、その8割近くはいろんなもので埋まっているのだが。

「あたしはソウヤと一緒に寝ることが出来ればそれで良いわ！」

「俺がよくないんだよ!!」

そう、寢床の問題である。風呂場でのこころの侵入は完全に想定外

だった為、行き当たりばったりでなんとかやり過ごしたが、今回は別だ。

一緒に風呂に入った（お互いタオル装備）女子と今度は一緒に寝るとかめっちゃ恥ずかしいからな!?いや、勇人辺りなら喜びそうだけどき！

そして約一時間の攻防を経て勝ったのは……………

「さあ、私と一緒に寝るのよ！」

「く…っ！負けた…っ！」

こころだった。就寝服を掴まれたと思ったらそのまま布団にぶん投げられ押し倒されたのだ。冗談抜きで力が強くなってないか？…全く抵抗できなかつたぞ……

「ふふふ…なんだかい匂いがする…」

「そうか…」

俺は逆にその匂いが落ち着かねえよ…

「すう…すう…すう…」

「ね、寝やがった…」

しかし、そんな俺とは正反対に、こころは眠りにつくのだった。

現在時刻深夜2時

「ソウヤ…」

ふと、眠っているはずのところが創也の名前を呼ぶ。

「どうした？……って、寝言か？」

突然の自体が重なり続けたというのに、深夜という時間帯にも関わらず創也は眠りにつけないでいた。まあ、現在進行系でこころに抱き枕にされているのも理由の一つなのだが。

「だめ…行かないで……行っちゃ…だめ……」

寝ているこころの目から一筋の涙がこぼれ落ちる。

「っ!？」

初めて見るこころの涙に創也は動揺していた。

「あ………そうや………?」

そして、こころが目を覚ました。

「そ、その……大丈夫か？」

あのところが泣くなんて今まで想像できなかったかともあつてか、創也は下手な言葉をかけられないでいた。

「ソウヤ!!!」

突然、こころが創也を胸元に強く抱き寄せた。

野外教室でのことや風呂場のことと変に意識しないように意識を保っていた創也だったが、さすがに今回の事は動揺してしまう。

「なっ!?!ここ、こころ!?!ちよっ、当たってるから!離し!離さない!!」……
「こころ?」

どこか必死さを感じさせるこころの声に恥ずかしさよりも疑問が浮かんでしまう。

「このままこの手を離したらソウヤがどこかに消えちゃいそうで……怖い……暗い部屋でソウヤは消えそうで……必死にボロボロになるまで何かを守って……最後は……」

「……」

今にも泣き出しそうな声で言葉を絞り出すこころ。

「ずっとソウヤの心は悲鳴をあげてたわ……苦しい……助けて……とても辛そうで……あたしも胸の中がぎゅっって締め付けられているみたいで……笑顔になれなくて……」

こころの創也を抱く力が自然と強くなる。

「お願い……ソウヤがもつと笑顔になれるよう……あんな顔をしなくても良いように……あたしが笑顔にするから……どこにもいかないで……」

震えた声でこころは創也に願った。彼の答えは……

「なんだ、そんなこと気にしてたのか？」

「…え？」

何事でもないように…当然のことを口にするように彼は答えを告げる。

「少なくともハロハピの前から突然いなくなったりしないよ。」

「ほんとうに？」

「ああ…離れたくないって思う。ハロハピは俺にとって居場所なんだ。いっつも何するのか予測できないし、纏め上げるのもたいへんだし、苦労することばっかだし………それでもさ」

一度呼吸を整え、言葉を紡ぐ。

「こころがハロハピに俺を入れてくれたから、今があるんだと思う。こころがいたからこそ今のハロハピがあるんだよ。それに、俺がこころ達の目の前から消えたら。誰がハロハピの演奏手伝うんだよ………まあ、心配するなってコト！」

自分で言ってて照れくさくなったのか、途中で言葉を早くし、切り上げる創也。

「ふふ…良かった…ありがとう、ソウヤ…」

先程のような震えた声ではなく、安心と喜びに満ちた声音で創也に

語りかけるこころ。

「…おう………」

創也も照れくさそうに返事をする。

こうして2人は無事就寝するのだった。

ちなみに次の日、こころに抱きつかれたまま寝ていたことに気付いた創也が恥ずかしさで悶絶するのだが、それはまた別の話。

第4話 S・O・I・Y・A

「や…やっとなげ出した…」

「えへへ…そうやあ…」

俺の目の前ではこころが抱き枕おとりを抱えながら幸せそうに眠っている。

「はあ…心臓破裂するかと思った…」

だって仕方ないだろ？朝起きたら視界一面こころで埋まってしかも両手脚使って完全に拘束されてたんだもん。朝から心臓に悪すぎる。

「にしても…都合よく全部が夢オチって訳にはならなかったか…」

改めて昨日の出来事を振り返る。

【その1】紗夜先輩に迫られ、スタンガンで気絶させられ、襲われそうになった。(未遂)

【その2】こころに誘拐され、お泊まりをする。

「はあ…マジでこれからどうしよう…」

とりあえず、家に帰る必要があるのだが…そのためには弦巻家を脱出することがある。

「何度か来ているおかげで屋敷内の構造はある程度わかってるけど…絶対それだけじゃないよね…」

屋敷を脱出するには、まず屋敷の警備システムを出し抜く必要がある。こんなに大きい屋敷なのだから、侵入者対策は確実にされているだろう。

さらに黒服さんたちの目を欺く事も忘れてはいけない……………

「あれ？自分で考えていて無理な気がしてきたぞ…？」

普通にこの場所に來た時点で詰んでいる事を思い知らされる。

「というか、なんでこころや紗夜先輩があんな状態に…」

俺がそんなことを呟いた直後だった。

「そのことに関しては我々が説明させていただきます。」

「うわあ!？」

突然、後ろから声がかかり、驚いてしまう。

「く、黒服さん?。」

俺の背後には、いつの間に待機していたのか、黒服さん達が待ち構えていた。

「驚かせてしまい、申し訳ありません。」

謝罪をしてくる黒服さん。だが、そんな事より…

「その…説明って…こころや紗夜先輩になにが起こってるのか知ってるんですか?。」

「はい。今回の件について説明しますので、まずは会議室まで来てください。」

「分かりました。」

こうして、俺は今回の事件の真実を知るべく、こころの部屋を後にするのだった。

しばらく移動して、会議室までやってきた。

「まずは、こちらをご覧ください。」

そういって、会議室の机には何処か見覚えのある液体の入って瓶が置かれた。

「あ、これって…あの時のジュースですか？」

以前、文化祭で使う資材を探している時に、偶然見つけたジュースだ。

とても美味いから、また飲みたいと思ってたんだよね。弦巻家特製のジュースらしいからお店じゃ買えないらしいんだよね。

「はい…そして、このジュースこそが今回の事件の元凶です。」

「……………え？」

思わず疑わしい目を向けてしまいそうになる。

「このジュースが元凶？まさか毒とかそういう類の…っ!？」

「いえ。このジュース自体は特に身体に害はありません。むしろ疲労困憊、過労死寸前、瀕死状態からでも完全回復できるような代物です。」

「それってもはや仙〇じゃん……って、それならなんでそんな仙〇もどきのジュースが今回の元凶なんですか!？」

「そもそもこのジュースはお嬢様の護衛用に作られた『身体強化薬』に部類されるものです。」

「いや、それ〇豆だろ!?!〇豆だよな!？」

「成分には『筋力増強剤』『増血剤』『アドレナリン分泌促進剤』『栄養剤』『カフェイン』……etc……とにかく、即効性の身体強化の見込める特別性の飲み物でした。」

「ある意味仙〇よりも強力じゃねえか!？」

仙〇は回復しかできないからな。

「ですが、この『身体強化薬』には、とてつもない副作用がありました……」

「ま、まよか……」

このジュースに副作用があるということは……察してしまう

「はい、この身体強化薬には、女性が飲んだ場合に限り、使用者を特定の異性に対して強制的にヤンデレに変貌させるという、副作用が確認されました。」

「そ、そんな…嘘だろ…?」

たしかにこころや紗夜先輩のあの状態はヤンデレとでも言うべき状態だろう。

「残念ながら、確かにヤンデレ化の作用は確認されています。それはもう、世間的に言う『理想のヤンデレ』とでも言うべき状態まで使用者を変貌させます。」

(勇人が欲しがりそうなものだなあ…)

思わず現実逃避をしてしまう。

「当然、廃棄をしたのですが…資在庫にまだ残っていたようです。」

「はあ…そうですか…」

「我々は、この身体強化薬を『Super Original Id
eal Yandere Apple』…略して『SOIYA』と
呼んでいます。」

「……………えーと…」

俺の耳が紗夜先輩に舐められた事が原因でぶっ壊れてなければ黒服さんは今なんて言った?

スーパ
Super ↓ 超すごい ↓ S
オリジナル
Original ↓ オリジナルの ↓ O
アイデア
Ideal ↓ 理想の ↓ I
ヤンデレ
Yandere ↓ ヤンデレの ↓ Y

A^ァp^ッp^ッl^ェe↓リ^ルン^ルゴ^ルジュ^ルース↓A

S[〃] + O[〃] + I[〃] + Y[〃] + A[〃] ↓ S^ソO^ソI^イY^ヤA

って事か？ははは……ついに幻覚まで聞こえてきたか…※正しくは幻聴です。

「…何か言いたげですが、真実です。」

「そんな真実は嫌だああ!!!」

だって、ソイヤだよ!?!ソイヤってなんだよ!?!野外教室の時に巴が言ってた掛け声と同じだろ!?!巴か!?!巴なのか!?!黒幕は巴なのか!?!※違います

く羽沢コーヒー店く

「へっくし!!」

「あれ？巴ちゃん、どうしたの?」

「なんか誰かに噂されてる気がして…」

く会議室く

「ソイヤ?…ソイヤって何なの…?…ソイヤ怖い…」

完全に心をへし折られる。

「一応、ヤンデレ状態を治す方法はあります。」

「本当ですか!？」

「はい。」

半ば諦めていた俺だが、黒服さんのまさかの発言に、希望を見出す。

「以前廃棄したはずのものと言うこともあり、作り出すのが遅れましたが…こちらです。」

そういつて、黒服さんが取り出し、机の上に置かれたのは、似たような色をした瓶詰めされたジュースだった。

「あの…これってヤンデレ薬と同じものなんじゃ…」

え？ソイヤって言わないのかって？意地でも言いたくない…なんか負けた気がするし…

「いえ、こちらはヤンデレ状態を解除する解毒薬です。急ぎで作ったため、正式名称は無く、数もあまりありません。」

「な、なるほど…解毒薬だったのか……」

変な名前を付けられるよりかは解毒薬って呼称したほうがまだマシだな…

「お嬢様には、既に風呂上がりの時の夕食に混入させる形で服用させておりますので、残りは…」

「紗夜先輩と美咲と花音先輩か…」

あの時、ヤンデレ薬を飲んだのは、俺とところを除き、紗夜先輩と美咲、花音先輩だった。

「はい。我々は引き続きお嬢様の経過観察を続けます。卯月様は3人の解毒をお願いします。」

「分かりました。」

俺は、机の上に置かれた瓶を全て、鞆の中に詰め込み、弦巻家を後にするのだった…

外に出て、改めて鞆の中身を確認する。

「解毒薬は合計10本…チャンスは10回…やるしか無いのか…俺だけだと役不足だな…あいつらを頼るか…」

俺は、スマホの連絡先を開き、『解毒作戦』を開始するのだった。

第5話 解毒作戦開始、そして警告。

スマホの電源を付け、とある人物に電話をかける。

プルルル、プルルル

「もしもし？日菜先輩ですか？」

『あ、そーくん、どうしたの？』

昨日、連絡先を交換したばかりの紗夜先輩の妹、日菜先輩に俺は電話をかけていた。

「いえ、少しお願いしたいことがあります……今からお時間大丈夫ですか？」

『えーと……うん、大丈夫だよ！丁度パスパレの練習も終わったし、今からそっちに行くね！』

「すみません、ご迷惑をおかけします。」

『あ、ちよつと待って！』

「？」

『うん、今そーくんと話してるの！え、本名？えーと、たしか…卯月そーくん！』

「先輩、俺のフルネームは『卯月創也』です。断じて卯月そーくんなんて名前じゃないです。」

微妙に音漏れで聞こえてるんだよね…

『あれ？聞こえてた？』

「はい……あ、話を続けてください。」

『うん！……本名は、卯月創也だって！え？千聖ちゃんも行くの？うん！わかった！……ねえ、そーくん！』

「はい、創也です。」

『あれ？根に持つてる？』

「いえそんな事は……それで、どうしたんですか？」

『なんかね、千聖ちゃんもそーくんに会いたいらしいから、あたしと千聖ちゃんの2人で会いに行くね！バイバーイ！』

ピッ！

こちらが何かを言う前に切られてしまう。

「……………はい？」

チサト……ちさと……千聖？……女優の白鷺千聖か!?

「あれ？俺あの人と関わりってあったっけ？」

一応、花音先輩の誕生日会で会った事はあるが、そこまで関わりはない。あまり関わりのない人物も来ると聞き、俺は多少の不安を覚えるのだった。

「よし、次は勇人だな。」

勇人に電話をかけ、待つこと1分弱。

「もしもし？起きてるか、勇人？」

『起きてるぞ馬鹿野郎!!!要件は何だどつと喋りやがれこの野ピツ
!』

反射的に電話を切る。

「……………」

電話越しでも勇人がガチギレしている事が分かる。とりあえず一言。

「うるせえ…」

頼る相手間違えたか？

プルルル、プルルル

「あ、かかってきた。」

スマホには、『矢坂勇人』と表示されている。

「もしもし?」

『おう、創也。さつきは悪かったなこのハーレム野郎。ナンパ中に電話が来たせいで雰囲気台無しになってナンパ相手に逃げられて怒ってるとか、そんなんじゃないから安心しろこのスットコドッコイ。』

「……………戦績は？」

『7☆5☆3』

「もつと詳しく」

『……………753戦0勝753敗』

「うわあ…」

……………ここまで失敗していると哀れになってくるなあ…

『てか、なんで俺に電話かけてきたんだ？』

「そのことは会ってから話す……………とりあえず、商店街の〃羽沢コーヒー店〃って所に来てくれないか？」

『ええー…面倒くさいんだけど…それに俺、駅前にいるから商店街まで大体30分かかるんだけど…』

「……………氷川紗夜先輩の妹の氷川日菜先輩、女優の白鷺千聖先輩も来る。」

『5分以内にそちらに向かいます。』

「はあ!?!もう移動してんのかよ!?!てか速くね!?!」

駅前から商店街までかなり時間がかかるはずだけど…勇人の欲望は人の限界すら超えるらしい。

なにあいつ？人間やめたの？タコ型の超生物でも目指してるのか？
？勇人がタコ型の超生物みたいに移動している様子を思い浮かべる…うん、普通にキモい。

「まあ、これなら問題なく作戦を実行できそうだな…」

俺は解毒作戦を実行するために羽沢コーヒー店に足を向けるのだった…

「おう、遅かったな。」

羽沢コーヒー店の入り口には勇人が待機していた。マジでこいつ超生物じゃん…

(試してみるか…)

「…あ、あんな所に可愛らしい美女がいるぞ」

適当に勇人の後ろを指差す。あ、やべ、適当に指差したけど一応美竹蘭がいるじゃん。あの赤いメツシユは見覚えがある。

「お嬢さん、よろしければ僕と一緒にデートでも「ふっ!!」「ごはあ!?!」

すげえ、蘭の一撃で勇人の身体が2メートルくらい吹っ飛んでる。

「これで754戦0勝754敗だな」

てか、勇人のやつマジでありえない速度で移動してるし、人外の領域にでも入ったか？

「ねえ、これアンタの連れ？」

蘭が勇人を引きずりながら俺のところまで歩いてくる。

「おう、変態が迷惑かけたな。」

「別に良いけど…ちゃんと手綱握ってて。」

「おう、悪いな。」

「お、お前ら…俺を何だと思ってやがる…ふ…ふ…」

結局、俺は勇人を蘭から受け取った後、勇人を引きずりながら店に入るのだった。

あ、ちなみに蘭はそのままサークルに練習に行ったよ。後は日菜先輩と千聖先輩が来るのを待つだけだな。

「やつほー！そーくんお待たせー！」

しばらく店でコーヒーを飲んでしていると聞き覚えのある声が耳に届く。

「日菜ちゃん、お店の中なんだから静かに。」

「はい。」

そう言うと、日菜先輩に続いて少し小柄な金髪の人物がやってきた。間違いない、女優の白鷺千聖だ。花音先輩の誕生日に見かけたことがある。ちよつと挨拶したくらいで、本人は俺の事を覚えているのかしらないけど。

「テメエ、アイドルの氷川先輩と白鷺先輩とどういう関係だあ？」「そーくん」ってどういう意味だあ。あ？？また俺の知らないところでハーレム作ってたのかあ。あ。あ。？」

「お前ちよつと黙ってて。シリアスが壊れる。」

とりあえず、ガムテープで勇人の口を塞ぐ。

「わざわざ呼び出してすみません…俺自身、下手に動くのがちよつと怖くて…」

「「？」」

勇人（ガムテープ装備）、日菜先輩、千聖先輩が首を傾げる…

「実は……今現在、紗夜先輩と美咲と花音先輩が……」

俺は今現在起こっていることを全て話した。

「何そのジュース、面白そう！るんってきた!!」

「今の話聞いて何処に面白い要素があつたんですか!？」

絶対状況を理解してないだろこの先輩…

「そんなものが…道理で花音の様子が…」

「花音先輩に何か合ったんですか？」

「ええ…一昨日の金曜日から花音の様子が普段と違ったつというか…瞳に光がなかったと言うか…」

「はあ…やっぱりヤンデレ化してたのか…」

「へえ、ジュースにそんな効果がねえ…『超すごいオリジナルの理想のヤンデレのりんごジュース』、略して『ソイヤ』ってところかな？」

「は？…こいつ今なんて言いやがった？」

「あのさ、お前本当に人間？」

「え？」

「ここまでの確に正式名称当てられると逆に怖いんだけど…」

「今回の黒幕勇人説が出てきたぞ…まあ、そんな事はないんだろうけど…」

「それで、創世君はどうしたいのかしら？」

「よかった…まともに話を聞いてくれる人がいたよ…」

「はい…日菜先輩と千聖先輩には紗夜先輩と花音先輩の解毒をお願いしたいんです。」

「解毒?」

「はい…美咲に関しては…俺と勇人の2人がかりで解毒をしようと考えてます。俺自身、筋力がないので万が一紗夜先輩や美咲、花音先輩に襲われたら普通に勝ち目がありません。」

「お前自分で言ってる悲しくないの?」

「黙れ」

「(・・ω・・)」

いざとなったら勇人を肉壁にして逃げてやろう。

「紗夜ちゃんに1番安全に近づけるのは日菜ちゃん、花音なら、私……たしかに、理にかなっているわね。」

千聖先輩は納得してくれたようだ。

「察しが良くて助かります……今からお2人には解毒薬を2本お渡しします。これをさり気なく紗夜先輩と花音先輩に飲ませてください。」

そう言って、日菜先輩と千聖先輩に瓶を2本ずつ渡す。

「これが解毒薬…分かったわ、花音に会ったらこれをうまい具合に飲ませてみるわ。」

「ねーねー、そーくん!これ飲んで良い?」

「駄目です。」

「えー」

頬を膨らませる日菜先輩。いや、本当に止めてもらえますか？ある意味俺の命がかかっているの…

「あ、そういえばあの後、紗夜先輩はどうなったんですか？」

「うっ…そのお…なんか、あの後のおねーちゃん、すっごく怖くて…上手く話せなくて…」

「こ、怖い？」

「うん…なんか…」創也さんがワタシのところから逃げだした？ナンデナンデナンデナンデナンデ…？いえ、そんなはずはありません、きつと創也さんは照れているだけに決まっています…どうやって拘束を抜けたか知りませんが、何処かに隠れているんでしょうネ……ふふふ…案外お茶目なところもあって可愛いものね…あ、鬼ごっこですか…ワタシが鬼で創也さんが獲物……とつても分かりやすくいいデスネ…待っててくださいいね創也さん…貴方を捕まえて美味しくいただくまでドコニモニガサナイワ♡』…って1人でずっと喋ってて…」

無駄に再現率の高い紗夜先輩の声で日菜先輩が当時の状況を語る。

「あ、あの紗夜ちゃんがそんなことに…」

千聖先輩は戦慄した表情を浮かべる。

「え、何その先輩、超見てみたいんだけど。」

そんな千聖先輩とは対象的に、勇人は興味津々のようだ。

「俺は何も聞かなかった…俺には関係ない…」

俺？俺は何も聞かなかったよ？ヤンデレ化した紗夜先輩（c.v. 氷川日菜）の声なんて聞こえなかったよ？

「と、とりあえず、千聖先輩と日菜先輩にそれぞれ2本、俺が6本持つてるので、もしも解毒に成功した場合、俺に連絡をください。」

「連絡って言っても…私、貴方の連絡先を知らないのだけれど？」

「あ、そうだった…」

「はあ、仕方がないわね。スマホを貸して頂戴。連絡先を入れておくから。」

「なんかすみません……」

「……一応、貴方に警告よ…もしかしたら、今回の件で最も危険なのは花音かも知れないわ…気をつけて…今回は貴方にそれを伝える為に来たの。」

「え?…」

スマホを受つた瞬間、密かに警告される

「それじゃあ、私達はそろそろ行くわね。日菜ちゃん、行くわよ。」

「はーいー!」

こうして、千聖先輩と日菜先輩は店を後にした。

「花音先輩が一番危険ねえ……一応、警戒はしているつもりだけど……まあ、千聖先輩に期待するしかないか……」

しかし、ここで黙っていない男が1人。

「てめえ、なに人の目の前で鮮やかに女優兼アイドルの白鷺先輩と連絡先交換してんだこの野郎!!」

「お前いい加減黙っとけ!!」

怒り狂う勇人に会計を押し付け、俺は店を後にするのだった……

あの後、怒り狂った勇人を何とか落ち着かせ、俺達は一旦別れた。なんでも、勇人のやつが……

「俺の部屋にヤンデレ系の薄い本が会ったと思うから持ってくるわ。それで対策出来るかもしれないし。」

といって、一旦自分の家に向かったのだ。

「とりあえず、家に帰って……あの様子でも見よう……もしかしたら友希那先輩の家に行ってるかも知れないし……」

そう言って自宅であるマンションへの道へ歩いている時だった。

ガバっ！

「むぐっ!？」

突然、背後から何者かに抱きつかれたかと思うと、口元に布を強く押し付けられる。

(だ、誰だ!?このっ……力が強い…っ!?全く動けねえ!?)

必死に抵抗して、背後から抱きついていて何者かを振り払おうとするが、全く離れる様子はない。

(うっ……ヤバイ…力が入らなく…なってきた…)

何分もそうやって格闘していると次第に、全身の力が抜けていく感覚がする。

改めて口元に当てられている布の匂いを確認すると独特の刺激臭がする。

(この匂い……まさかクロロホルムか!?クソっ……この……まま……だと……)

余りにも多く気体を吸い込んだせいか、徐々に力を失い、俺は意識を手放すのだった。

「いったい……だれ……だ……?」

意識を手放す直前、俺が目にしたのはどこか見覚えのある黒い髪だけだった……

第6話 ヤンデレ吸血鬼？創也 VS 美咲

「……………」

一度沈んだ意識が覚醒する。目を開けば、見慣れない部屋のベッドの上に布で両手足を縛られている。

(またこのパターンか…紗夜先輩の部屋じゃない……つて事は美咲か花音先輩のどっちか…)

流石に何が起きているのかわかっていて、同じような状況に一度遭遇すればある程度は冷静に判断できる。

(クロロホルムで俺を気絶させてここまで運び込んだのか……花音先輩は俺と同じくらいの筋力しか無いし、まず俺を運ぶことは難しい……消去法で今回の犯人は美咲か?)

そんな結論に辿り着いた瞬間だった。

ガチャリ

「あ、起きたんだ。」

「やっぱりお前か……美咲。」

部屋のドアがゆっくりと開いたかと思えば、入ってきたのは、案の定美咲本人だった。

(勇人のいないこの状況でこれは流石に不味いな……)

「あれ？驚かないんだ。なんか意外。」

予想外の反応に、少し驚いたような顔をする美咲。

「まあ、いきなり後ろから気絶させられた時は流石にビビったよ……それで、どうしたら俺は解放されるんだ？」

会話で時間稼ぎをする。その間に、可能な限り室内の観察をつづける。

（解毒薬は一体何処に……）

今回は紗夜先輩の時とは違い、解毒薬もある。だからまだ完全に心は折れていない。

（よし、見つけたぞ……）

美咲が入って来たドアの入り口を見ると、俺の鞆が壁に立てかけられていた。

そして、俺が解毒薬を発見すると同時に美咲が動き出す。

「それはもう決まってるよ。」

美咲がゆっくりと俺の方に寄ってきて、抱きつき、俺の耳元で囁く。

「創也があたしのモノになってくれれば、開放してアゲル♡」

「……っ！」

耳に美咲の生暖かい吐息がかかり、思わず身体に鳥肌が走る。

「少なくとも痛い事はしないヨ？ただ、2人で最高に気持ちいいこと

をすするだけダカラ♡」

美咲の目を改めて見る。紗夜先輩やこころと同じように瞳に光はなく、ただただ濁りきった瞳で俺を見据え、頬を紅潮させているのが分かる。

「それじゃ、始めよ♡」

そう言うと美咲は俺の着ているシャツに手を掛け……って、ちよつと待て待て待て待て?!?!?

「ま、待てつて！落ち着け！俺らまだ学生だろ!?!それに俺風紀委員だし、そんな風紀を盛大にぶち壊す様な不純異性交友なんてしてたら俺ら退学ものだぞ!?!」

下手に刺激をしないよう、口数を減らし観察に徹していたのが悪かったのか、いつの間にか事態は悪い方向へ転がっていた。

「その時はあたしが創也を養ってあげる♡誰にも見つからないような場所で2人で幸せに暮せば問題ないよね?」

「問題大アリだ!!」

俺の意見を一切聞く気がないのか、再び俺の服に手を伸ばしたその時だった。

プルルル、プルルル

俺の耳に聞き慣れたスマホの着信音が届く。

間違いない。俺のスマホだ。音のする方向を見ると、勉強机の上に無造作に置かれている俺のスマホを見つけた。

「……頼む美咲、誰からかかって来たのか確認してくれ……」

「……………」

美咲は無言で俺の服から手を離し、俺のスマホを見る。

ピッ！

「な!？」

俺のスマホ画面を見て数秒ほど固まったかと思えば、容赦なくスマホの着信を切った。

「ネエ、創也?」

「!？」

美咲が言葉を発した瞬間、尋常じゃない程の悪寒を感じた。

「ナンデ創也のスマホに日菜さんの電話が来てるの?」

日菜先輩から?!

(つて事は日菜先輩の方は紗夜先輩の解毒に成功したのか……)

喜ばしい限りだ……このタイミングでさえなければ。

「ネエ、ナンデ日菜サンカラ電話ガキタノ?」

(おのれ日菜先輩イイイイ!!!!!!)
!!!!!!

美咲の目は光のない虚ろな瞳で問い詰めてくる。

「日菜さんとどんな関係なの？ダメでしょ??創也はあたしのモノなんだよ？それなのにナンデ他のオンナから電話がかかってきたのかなあ？ねえ、ナンデ？ナンデナンデナンデナンデナンデ？」

あまりにもタイミングの悪すぎる報告に美咲の暴走は加速する。
ヤンデレ

「お、落ち着け！日菜先輩はただの友達だ！頼むから早まらないでくれ！」

「大丈夫、今から方針を変えたから♡」

「え？」

そう言うと、美咲は俺のシャツを強引に破り俺の首元に唇を近づけ
……

カプツ

「いっ!?!」

噛み付いてきた。

「創也が他の誰のものでもない……アタシのモノなんだって証拠をま
ずはつけてあげる♡」

はむ……ん……ちゅう……びちや

どれくらい時間がかかったのだろう。美咲は俺の首の皮膚を少し

破り、そこから流れる血を舐めたり吸ったりしている。

痛みよりも美咲の匂いやヌルヌルとした舌触りに加え恐怖心がごちや混ぜになつたよく分からない感情の方が強く感じた。

「ご馳走様♡」

一応満足したようで、俺の首元から口を離す。

頬を紅潮させながら、口元に少しついた血液を舌で舐めとるその様はまるで吸血鬼を彷彿とさせる。

（次は一体何を……）

今の状態の美咲は何をしてくるのか、全く予想がつかない。

そして、美咲が次に言ってきたのは……

「とりあえず、創也もお腹が空いてきたでしょ？一緒にご飯食べよう。」

「へ？」

至つてまともな事を言い出した。

（何を企んでるんだ……？）

先ほどまで支離滅裂しりめつれつな事を言っていたのに、意外にもまともな事をいつている。安心感よりも恐怖心が強くなる。

だが、部屋の時計を見ると、時刻は17時となっていた。

（確か…俺がこころの家を出たのが昼頃だから……4時間近く眠つたのか……）

だが、美咲の言う通り、小腹が空いてきたのも事実だ。

「分かった」

俺は、美咲の提案にのることにした。

「はい、どうぞ」

美咲に出されたのは、ご飯、ハンバーグ、サラダ、ジュースといった、何の変哲のない普通のハンバーグ定食だった。

「はい、あーん♡」

「……………」

これは…どうすれば良いんだ？

美咲は、ハンバーグをスプーンで一口サイズに切り分け、俺の目の前に運んでくる。

「あーん♡」

「っ!?!」

やべえ!?! ハイライトが仕事放棄しやがった!?!

「い、いただきますっ!!」

俺は慌てて目の前のスプーンに乗せられたハンバーグを食べた。

(味はそこまで変じやない…異物混入もない…思い過ごしか?)

何かやばいモノを入れているのかと思っていたが、至って普通の味のハンバーグだった。

(あれ?…でもなんか…身体が…暑い?…頭もぼーつとしてきて…まさかっ!?)

自分でもしつかりと理解できるほど、体温が急上昇しているのが分かる。やばい…だんだん苦しくなってきた…心臓が…バクバクして…まさかこれって…っ!?

「み…美咲／＼／お前…何を入れやがった…／＼／」

「かなり強めのやつを使ったけど、こんなにも効き目があるんだ♡」

美咲はポケットから桃色の液体の入った小瓶を見せつける。

「即効性の媚薬だよ♡」

最悪だ…

「うう…あ…っ…」

やばい…ただでさえクロホルム薬の影響で重い身体に力が入らなくなる。

「まさかその料理全部に…っ!」

「あたしから襲うより、創也から襲ってもらった方が嬉しいし、創也と一緒にいるためにはこれが確実だからね♡」

「う……あ……／＼／＼」

「我慢なんてしなくて良いんだよ？あたしはいつでもOKだから後は創也がその気にさえなれば……ね？」

あえて誘惑するかのようには、美咲は俺の耳元で甘く、蠱惑的に喋ってくる。

「ぎ……けん……良い訳……ねえだろ……／＼／＼」

既に消えかけている俺の理性だが、まだしっかりと役目は果たしてくれているらしい。湧き上がる衝動を抑え込んでくれている。

自分が思っている以上に俺の理性は強いのかもしれない。

「へえ……意外と粘るんだね。」

俺が全力で耐え、このままでは平行線である事を悟ったのか、美咲は俺から離れ、媚薬入りのハンバーグ定食の方へ向かう。

「これなら、創也が粘っても意味ないよね♡」

「なっ!？」

次の瞬間、美咲は媚薬が入っているであろうジュースを一気に飲み干した。

「味は普通のリンゴジュースだけど……思ったより効力が高いみたい♡」

最悪の展開だ。

こちらの理性は崩れかけ。美咲に至っては理性の一欠片もないだ

ろう。俺が襲われるのははや時間の問題…

そう思っていたのだが……

「あ、あれ？なんか……眠くなって……きたん……だ……けど……」

ジュースを飲んだ数秒後、美咲はパタリと倒れてしまう。

「すう……すう……」

どうやら眠っているだけのようだ。

「ね、寝た？……あ、もしかして……」

俺は、手足を拘束している布を5分ほどで解く。手錠などの金属類ではないため、時間をかけてなんとか解くことができたのだ。

そして俺は、改めて自分の鞆の元へ向かう。

「やっぱり一本だけ減ってる……」

6本あったはずの解毒薬は5本しかない。

おそらく、美咲が持ってきた定食についていたジュースはこの解毒薬らしい。

「なんにせよ、美咲のミスのおかげで助かった……」

こうして俺は、無事？奥沢家での危機を乗り越えるのだった……

【奥沢美咲 解毒完了】

【残りヤンデレ 1人】

第7話 これで解決？

く湊家く

「みやあ〜」

「あら？」

作詞中の机から少し離れ、窓の外を見る。

「に、にやーんちゃん…っ!?」

友希那が目を凝らすと、見慣れた黒猫が窓の近くにいることが分かった。

創也の飼い猫であるここあだ。

「ここあ？なんで私の家にいるの？」

窓を開け、自分の部屋に招き入れ、部屋に置いてあるキャットフードを取り出しながら聞いてみる。

彼女の部屋にキャットフードが常備されている時点で、ここあがどれほどここに通り詰めているか、分かるだろう。

「にやあ…にやん！」（訳：主人創也が帰ってこないからお腹空いちやっつて…）

「創也が？…これは少しお仕置きが必要かしら？」※ヤンデレではありません

「みやあ…」（訳：まあ、昨日の夜、変な水色の女の人も来てたし、いつもの災難とかだと思うけどね。）

飼い猫にさえ災難体質だと言われる創也。哀れである。
だがしかし、

(水色の変な女の人?…少し心配ね…)

友希那はキヤットフードを美味しそうに食べるここあを撫でつつ、
創也のスマホに電話を入れる。

『おかけになった電話番号は、現在、電波の届かないところに……』

「駄目ね、掛からないわ。」

電話のアナウンスが流れ、創也のスマホに連絡が届かない事が分
かった。

(Roseliaの練習も今日は休んでいたし、何かあったのかしら
?……紗夜も今日は珍しく休んでいたし、連絡ついでに創也の事につ
いて聞いてみるしかないわね…)

「みやあ〜」(訳:ごちそうさま。)

「ふふっ♪にゃーんちゃーん♪」

キヤットフードを食べ終わったここあをこれ以上ないほどの笑顔
で撫でる友希那。

紗夜に連絡を入れるのは、もう少し先のようだ……

く同時刻、奥沢家玄関く

「っ!?!……今すぐここあの所に行かないと友希那先輩に殺される気がする……」

なんとも言えない、ヤンデレとは違う無駄に具体的な殺気のようなものを感じつつ、俺は机の上に置いてあるスマホを確認する。

「ちっ…充電が切れてやがる…」

自分のスマホを起動するが、なんの反応もない。電源ボタンを長押しするが、かろうじて充電切れの表示がされるだけで、なんの反応もない。

昨日から充電をしなかった事もあり、事切れたのだろう。

「でも、日菜先輩は解毒に成功したみたいだし…後は花音先輩だけか……」

美咲のミスにより、かなりギリギリだったが俺は美咲の部屋から脱出しに成功したのだ。

寝起き+媚薬の影響で身体は万全の状態とは程遠いが、移動程度なら問題ない。

「はあ…はあ…」

とはいえ、歩くだけでも体にかかる負荷は凄まじいものだ。外に出たのは良いが、思うように身体が動かない。

「美咲の奴…マジでどんな薬媚薬を盛りやがった…」

それ程までに薬の影響が強いのだ。

もし、この状態でヤンデレ化した花音に遭遇すれば、ほぼ間違いなくまともに抵抗できずに襲われるだろう。

「早く帰らないと……」

ただその一心で歩いていたその時だった。

「あれ？創也くん？」

背後から、ある意味死刑宣告にも等しい声が聞こえる。後ろを振り向けば、予想通り花音先輩がいた。

「先輩……ッ!?!」

花音先輩の姿を確認した瞬間、俺は今持てる全力の力で走り始める。

「あつ、待って創也くん!!」

後ろから声が聞こえるが、振り返ってはいけない。今の先輩に絶対に捕まるわけには行かないのだ。そう思っただけで走っていたのだが………

「私、もうヤンデレじゃないよ!!!」

「……………え?」

花音先輩は今なんて言った？ヤンデレじゃない？なんでヤンデレの事を知ってるんだ？

「解毒薬を貰って飲んだから、もう大丈夫!」

え…まじで？

「本当なんですか…？？」

歩みを止めて、花音先輩の方を見る。

「千聖ちゃんから聞いたの…ヤンデレ化するジュースを私とこころちゃん、美咲ちゃんに紗夜ちゃんが飲んだから…創也くんが逃げるんだって…」

今のところ、花音先輩の発言におかしな点はない。

「でも、千聖ちゃんから解毒薬を貰ってすぐに飲んだから大丈夫だよ…っ！」

襲ってくる気配もない…ということは…本当に？

「千聖ちゃんも電話したみたいだけど…電話が繋がらなかったみたいで…」

たしかに俺のスマホのバッテリー残量が0になっている。

花音先輩の話が本当なら千聖先輩の情報が俺に届いていないのも納得で来る。

「よかったあ…」

「そ、創也くんっ！」

緊張の糸がプツリと切れたのか、思わずその場にへたりこんでしまう。そんな様子を見た花音先輩は俺の方に慌てて駆け寄ってきた。

「あはは…すみません、なんか腰が抜けちゃって…」

思わず、自分でも分かる程の苦笑いが口から漏れる。

今思い返せば本当に大変だった…紗夜先輩に（性的に）襲われそうになり、こころに（物理的に）誘拐され、美咲に（性的&物理的に）襲われそうになり…

「うわあ…マジで碌な思い出がねえな…」

「ふ、ふええ〜…そ、創也くん大丈夫?」

「…ちよつと色々やばいですね……」

解決したとはいえ、薬の影響はまだまだ残っている。あ、やべ、普通に限界だわコレ…

ガシッ

「か、花音先輩?」

突然、花音先輩が俺の肩を掴み、支えてくる。

「えつと…創也くん、思ってたよりも辛そうだから…家まで送るよっ…」

やばい…花音先輩が天使すぎる……ハッキリ言ってもう歩くのもしんどいからすつごく助かる…

「すみません…助かります…花音先輩…」

こうして、俺は花音先輩に助けられる形で改めて帰宅を開始するの

だった…

しかし、俺は勘違いをしていた。このヤンデレ事件はまだ解決していないのだと…

やっと手に入った。

彼が私の手元に来たのだと改めて実感する。

「すみません…助かります…花音先輩…」

彼が私を頼ってくれた。その事実だけで彼を襲いたい衝動に駆られるが、ギリギリで抑える。

ズット一緒ニイヨウネ、創也クン♡

「や、やっと家に着いた……」

「おつかれさま、創也くん。」

花音先輩の協力もあり、俺は無事に自宅へと辿り着いた。

「やっぱりここあはないか…」

室内を調べるが、どこにもここあの姿がない事から、友希那先輩の家遊びに行っていることが分かる。

「あ、そうだ…(´_´)飯作らないと…」

そう思つて台所に向おうとしたが…

「えっと、創也くんも疲れてると思うし、せつかだから私が作るよ？」

花音先輩が俺の退路を塞ぎ、代わりに台所で調理をすると言い出した。

「えっと…いいんですか？…せつかくなのでお願いします。」

一瞬どうするか迷ったが、本格的にヤバイので花音先輩にお願いすることにした。

「うん、まかせてね♪」

妙に…いや、すつごく張り切っているように見えるが、俺は特に気にせずそのまま家のリビングへと向かった。

「あ、そうだ…スマホ充電しないと…」

スマホを充電して、俺はリビングでゆっくりと休息を取っていた。

ブー…ブー…

「ん？着信？」

充電を始めてから5分ほどたったところで、スマホが振動を始める。

「うげっ…着信数がえげつないことに…」

スマホのLONEの通知数、2333件。

「つて、勇人と日菜先輩がほとんどじゃん…」

その膨大な通知の殆どは勇人と日菜先輩のスタ爆行為によって埋まっていた。

一瞬、バカと天才は紙一重という言葉が頭をよぎるが、即座に思考を切り捨てる。

「あ、そうだ、千聖先輩に一応連絡入れておいたほうが良いよね。」

え？日菜先輩？1000件以上のスタンプ送ってくるから後回しでいいだろ。

そんな軽い気持ちで千聖先輩とのトーク画面を開いた。

「……………は？」

そこに映っている文章を見て俺は絶句してしまう。

『今すぐ花音から逃げて。』

千聖先輩からは、複数の不在着信の最後に、そう記されていた。

第8話 絶体絶命！創也 V S 花音

く松原家く

「すみません、花音が家に忘れ物をしてしまったみたいなので、取りに来ました。」

「あら、千聖ちゃん、どうぞ家に上がって行って」

千聖は親友である花音の親に頼み込み、花音の部屋に上がる。

創也から解毒薬を貰って花音を探しているのだが、全くと言って良いほど手掛かりが見つからないのだ。

最終的に松原家まで行ったのだが、やはり花音は留守らしい。

少しでも手掛かりが欲しい為、花音の部屋に上がる。

「今のところ、特に手掛かりになるようなものは………あら？」

ふと、花音の机の上に置いてあるタブレットの電源が充電器に差し込んだまま付けっぱなしになっている事に気がついた。おそらく、オートロックをオフにしていたのだろう。

多少の罪悪感を感じつつも、閲覧を開始する。

「嘘………でしょ………」

タブレットの画面には、見覚えのないどこかの部屋が映っていた。だが、それが誰の部屋なのかは、簡単に予想できる。間違いなく卯月創也の部屋だ。画面の端っこの方に、花咲川学園の男子制服が洗濯されているの事からも間違い無いだろう。

さらにそれを裏付けるかのように、花音と創也の2人が画面に映った。

「一応伝えておいたほうが良いわね…」

念の為、創也のL〇INに『今すぐ花音から逃げて。』と送っておく。

そして、事態は動き出す。

「あっ!？」

突然、花音が動き始めたと思えば、次の瞬間、花音が創也を押し倒したのだ。

「このままだと2人が……」

千聖は、創也を救出するべく、急いで救出作戦を始めるのだった。

↳2日前 弦巻家から帰宅中↳

「それじゃあ、俺はこの道で帰るので…花音先輩、迷子にならないでくださいわね?」

「ふ、ふええ〜っ、そんな頻繁に迷子にならないよお〜」

弦巻家での資材集めを終え、軽くお茶会をしてから帰宅を開始した、創也、花音、美咲、紗夜の4人は帰宅していた。その間、美咲と紗夜は帰宅路の違いから既に別れ、現在は創也と花音の2人が歩いていた。

「そう言って、この前も帰る途中カフェに寄ろうとして、迷子になって

たじゃ無いですか……結局、俺がその後バイクで送る羽目になりましたし……」

「うう……その節は大変ぐ迷惑を……」

こうして見ているのなら、2人は仲のいい男女の友人同士のように見えるだろう。だが、花音の心の内はどうしようも無いほど狂い始めていた。

(どうしよう……創也くんと話してるだけでいつも以上に胸がドキドキする……なんで？いつもはもつと落ち着いていられるのに……)

創也を見ているだけで、胸の鼓動が速くなる。それだけなら、まだまともな症状だっただろう。

「やっぱ心配なんで、家の方まで送りますよ……？」

「な、なんかごめんね……？」

「気にしなくていいですよ……ただの自己満足なんで。」

少し照れ臭そうに頬を描く創也。

(どうしよう……今すぐ創也くんに抱きつきたい……創也くんと一緒にいたい……)

「ほら、到着しましたよっ。」

「えっ……あ、本当だ。」

自身の内側から漏れ始めてきた正体不明の欲望と対峙していたら、

いつの間にか自宅の前まで到着していた。

「それじゃ、俺はこれで。」

そう言つて、創也は帰宅を始めようとする。

「ま、待ってー!」

「?..どうしました?」

思わず、創也を呼び止めてしまった花音。

「えっと...いつも家まで送ってくれるお礼に、渡したいものがあるから...ちよつと待ってて!」

「え?...まあ、分かりました...」

ただ少しでも創也と長く話していたい。始めはそんな純粋な気持ちだった。

「たしか私の部屋にお菓子がいくつかあったような...つて、あれ?」

玄関から自室へ向かう途中、奇妙な銀色のシールのような物が複数収納された奇妙な箱が目に入る。

「これって...『盗聴器』?」

箱の上には、小さな紙が添えられており、そこには『盗聴器』と記されており、簡単な説明が書かれていた。

(これさえあれば創也くんの声がいつでも...)

そんな思考に至った途端、創也に対する花音の欲望は歯止めが効かなくなっていた。

「はい、創也くん、これ、お礼のお菓子だよ。」

「おお、すげえ量……ありがとうございます、花音先輩」

ビニール袋に入った大量のお菓子を見ながら、感謝を述べる創也。

「あ、創也くん、首筋に何かついてるよ?」

「え、どこですか?」

「私取るからじつとして?」

「あ、すみません。」

そう言っ、花音は創也の首筋の辺りに銀色のシール……盗聴器を気付かれないように貼り付ける。

「はい、取れたよ。埃が付いてただけみたい。」

「ありがとうございます……って、そろそろここあの飯の時間だ……花音先輩! お菓子ありがとうございます!」

腕時計を確認して、少し焦った様子を見せ、花音に渡されたお菓子袋を抱えつつ、創也は素早くその場を去っていった。

「またね、創也くん♡」

彼女の思惑に乗せられているとも知らずに

それから数時間後。

「えつと…多分ここだよね？」

既に人通りが少なくなりつつあるこの時間帯に、花音は出歩いていた。

「あ、見つけた。」

花音の目の前には、そこそこ高級そうなマンション…つまり、創也の家が建っていた。

そして、いくつかの階を調べていると、『卯月』と書かれた表札を発見した。

「お邪魔しまーす…」

ダメ元で玄関のドアノブを捻ってみる。

「あれ、鍵をかけ忘れちゃったのかな…？」

鍵による抵抗はなく、ガチャリと小さな音を立てるだけで、スムーズに室内への侵入が完了した。

「あ、創也くんだ…寝顔も可愛いなあ♡」

リビングの方に行くと、布団を敷いてすやすやと眠っている創也の

姿を発見する。

「つて、今はそれどころじゃなかった…」

今すぐにも襲いたいという欲望が湧き出るが、なんとか堪え、創也の部屋の部屋に小型の監視カメラを設置し始める。

「これで大丈夫…だよな？」

チラリと創也の方を見るが、多少の物音では動じないのか、すやすやと心地良さそうに眠っている。

「ふふっ、大丈夫だよ？私が創也クンを守ってアゲルカラ♡」

花音の創也に対する思いは確実に強く、変貌していった。

～次の日の夕方～

『案外可愛らしい声がでるのですね…ふふ』

『こ、これ以上はダメです…っ！こんなところ誰かに見られたら…』

盗聴器で拾った音声を聞いている。創也が紗夜に襲われていることが分かる。

(駄目…創也クンは私のモノなのに…紗夜ちゃん、ズルイよ…)

明らかな嫉妬の感情が花音の心に芽生えていた。

～その日の夜～

『な…なんで俺がいるのに入ってきたんだこころ!?!』

『そんなの、ソウヤと一緒にお風呂に入りたかったからに決まってるじゃない!』

今度はこころが創也の入浴中に突撃していることが分かる。

(いくらこころちゃんデモ、ソウヤクンのお風呂に入るナンテ…ユルセナイナア…)

嫉妬は次第に独占欲へと変貌を遂げ、少しずつその感情は増大していく。

〜今日の夕方〜

「いつ!?!」

「創也が他の誰のものでもない…アタシのモノなんだって証拠をまづはつけてあげる♡」

(美咲ちゃんが創也クンを襲ってる…ユルセナイ、創也くんは他のダレのモノでもない…ワタシだけのモノ…こころちゃんや美咲ちゃん、紗夜ちゃんのモノでもない…ワタシのモノ…それなのにナンデみんなワタシとソウヤクンの邪魔スルノカナア?今スグ創也クンを助けないと…創也くんはワタシだけのモノなんだから♡)

もはや、誰にも彼女を止めることは出来ない。瞳を濁らせ、頬を高調させた花音は、助けるために、創也の元へと向かうのだった…

〜現在 創也の家〜

「先輩…騙してたんですか…?」

創也は現在、花音に押し倒されている。

千聖からの『今すぐ花音から逃げて。』という内容の連絡を見て、疑問に思ったのもつかの間、身体に衝撃を感じたかと思えば、創也は花音に押し倒されていたのだ。

「ごめんね…でもね、創也くんが悪いんだヨ?」

花音の瞳に光は無い。濁りきった瞳で創也の腕をガツシリと押さえつけ、頬は紅潮していることから、今すぐにでも襲うつもりなのだと理解する。

「……………」

(花音先輩はヤンデレ葉の事を知っていた…でも、俺たちはその事を伝えた覚えはない。下手に教えて、解毒を拒絶される危険性もあったし……一体どうやって……)

『一体どうやって』って顔してるね……教えてあげる。」

そう言うと、花音は創也の首筋の辺りに手を伸ばし……銀色のシルのようなモノを見せる。

「盗聴器だよ♡」

(え!?そんなのが今まで俺の首筋に付いてたの!?)

「一体いつから……」

「ごころちゃんの家でみんなで文化祭の資材集めをして、ヤンデレ化のジュースを飲んだ日からだよ?」

「そんなに前から!」

「初めてあのヤンデレ薬を飲んだ時から創也くんを見て、襲いたい、メチャクチャにしたいって想いが強くなってきてね?この気持ちを抑えるの、大変だったんだあ♡」

言葉を喋りながらも、創也の手足を抑える力を緩める気配はない。どの道、解放するつもりはないらしい。

「ミンナが創也くんに話しカケテ、とつても嫉妬しちやってネ? だけど、もう我慢ナンテシナクテイイヨネ?」

最後の言葉を発すると同時に、花音は創也にゆっくりと覆い被さる。

「花音先輩っ! やめっ……んぐっ!」

ヤンデレ薬には、筋力を高める効果がある。当然、創也が敵うはずもなく、そのまま強引に唇を奪われる。

「やっぱりごころちゃん達のニオイがする……私で上書きしないと……はむっ」

「花音先輩……っ……息がっ……んむう!」

一度目のキスは、どちらかと言えば唇を奪う事を目的としたキスだった。

だが、二度目は違う。唇を奪うなんて生優しいものではなく、蛇が

カエルを捕食するかのようになり、食欲に創世の口内を舌で蹂躪する花音がそこにはいた。

「や、やめっ…むうっ!？」

必死に顔をずらして行為^{キス}を止めようとするが、顔を手で押さえられ、動く事はできない。

一旦解放された腕を使い、抵抗を試みるがヤンデレ薬には筋力増強剤も含まれている事もあり、花音を動かすことはできなかった。

んっ、ちゅっ、はあっ、ちゅぷっ……

花音の口から漏れる息と、唾液同士がぶつかった時の水音だけが、室内に響き続ける。

「えへへ…ぐっ馳走様♪」

「……も、もう充分ですよね?」

自分の口元が花音先輩の唾液と自分の唾液でビチャビチャになっている事がわかる。早く止めなければ、花音先輩が一生後悔する。しかし、その発言は悪手だった。

「ナンデ?」

「……え?」

「ワタシ…コレダメじゃ満足できないんだヨ?」

「あ……」

花音先輩が次に何をしようとしているのか悟ってしまう。

(ヤバい……っ！早く逃げなきゃ！)

身体を捻り、逃げようと試みるが花音に覆い被されている以上、ほとんどの抵抗は無意味に終わる。

「ニガサナイヨ？」

「…………っ！」

駄目だ……花音先輩の眼は光が一筋も無く、俺を獲物として捉えている。

「お願い……します……これ以上は……」

「ダイジョウブ、コワクナイヨ？……ヤサシクシテアゲルカラネ♡」

最早、自力ではどうすることもできない。俺にできる事はただ、機械のように否定の言葉を口にする事だけだった。

第9話 失敗

「ふふっ……可愛いなあ♡」

「せ、先輩……もう……やめて……うっ……」

押し倒されてから数分間……その間創也は花音に長時間攻め続けられていた。

「確か、紗夜ちゃんの話だと、創也くん耳が弱いんだよね？」

「はう……っ！」

くちや、くちゆり、くちゆ……

そう言うと、花音は創也の耳元であえて吐息を吹きかけるように喋り、次の瞬間、耳を貪るように舐め始める。

(お願い……これ以上はもう……理性が……)

美咲に盛られた媚薬の効果が未だに抜けていないと言う事もあり、創也の身体は敏感になっている。そんな状態で責められ続け、創也の心は既に折れかけていた。

「なんで創也くんはそんなに誘うのが上手いのかなあ？」

「さ、誘ってなんか……うっ！」

すかさず、花音は創也の首を舐め、追い詰めていく。

今の創也の表情は顔を赤くし、瞳は潤んでいる……そんな状態では花音の高まった嗜虐心をさらに昂らせるだけだった。

「じゃ、そろそろ…ね♡」

そう言っつて、花音が創也の着ているシャツを脱がせようとしたとき
だった…

ピンポーン

「……？」

突然、玄関のチャイムが鳴った。

「せ、先輩……せめて誰が来たか、確認を…」

かろうじて言葉を口から絞り出す。

「いいよ……でも、ニゲナイデネ？」

光のない虚ろな瞳で俺を見据える。

「といっつても、その状態じゃ逃げられないよね♡」

「……っ」

そう言っつと、花音は玄関に向かって歩いて行った。

「う、動けねえ…」

長い時間、花音先輩からの快樂攻めにあっていたせいか、腰が抜け、

身体にはまともにも力を入れる事ができなくなっていた。

「うあ…」

かろうじて身体を地面に這わせることで、移動は出来るが、逃げることは不可能だろう。

そう思っていたのだが…

コンコン

「……………う？」

どこからともなく、コンコンと窓を叩く音が聞こえる。

「おーい、創世ー、生きてたらこの窓開けてくれー!」

どこからともなく、すつごく聞き覚えのある声が聞こえる。

「はあ…はあ…ここー応俺の家なんだけど…勇者?」

「ふつ、美女ある所に我有り…いついかなる場所でも美少女&美女のいる場所に駆けつけることが出来るように日頃から鍛えていたのさ。それに、お前も同じようなこと出来るだろ?」

「はは…今回ばかりはお前に感謝だよ…」

なんと、リビングの窓からは、今回の事件の協力者…勇人が顔をのぞかせていたのだ。

「つて、不味い…早くしないと花音先輩が…」

一応、勇人に現在の状況を説明するが、花音先輩がいる為、速く逃走を提案するが…

「フツ…問題ない…松原先輩がここに来るのはまだ先…事前に対策をすることなど俺には朝飯前…俺を誰だと思ってる創也?」

急にドヤ顔をする勇人。

「末期型変態王兼防御力カンスト男」

「その通…じゃねえよ!!」

こんな状況でもノリツツコミをする勇人は大物だと思う。

「はあ、今日の昼に俺が何のためにお前の護衛から離れたと思う?」

「エ〇本を読むため。」

「ちげえよーいや、合ってるけどさけどさー!」

うーん…勇人がやろうとしていた事…あ!

『俺の部屋にヤンデレ系の薄い本が会ったと思うから持ってくるわ。それで対策出来るかもしれないし。』

「ヤンデレ系の薄い本!!!」

「はい、今受け取ります。」

そういって、花音が扉を開ける。

「あれ？この部屋の人は男の人だって聞いたんだけどなあ」

配達員が不思議そうに呟く。

「あの…それで荷物は？」

花音が配達員を怪しく思い始める。

「あ、これだよ！…じゃなかった…これです！」

そう言うと、小さな箱のような物を渡す。

「あ！もしかしてこの部屋の人の彼女さんとかなの？」

突然、配達員がそんな事を言い出す。普通に考えてそんな事を言えばただ単に怪しまれるだけだが…今の花音はヤンデレである。つまり…

「ふええ、彼女だなんてそんなく／＼／＼」

よほど創世の彼女だと言われたのが嬉しかったのか、目に見えてデレ始める花音。

「いやあ、こんな美人な人が彼女だなんて、きっと彼氏さんも幸せでしょうね！毎日イチャイチャしてるの？」

「い、イチャイチャ：／／／」

創也の方から花音を求めてくる姿を想像するだけで、花音の妄想は加速していく。

「いや、彼女さんって言うよりもお嫁さんっていった方がるんっ♪っってくるよねー!」

「お、お嫁さん…ふええ／／／」

(ほんとにこういう風に言うだけで効果あるんだ…なんか面白い!るんっ♪っつてする!!!)

配達員…：もとい氷川日菜は、完璧な形で足止めをしていた。さすが天才と言うべきか、ほとんど怪しまれること無く、配達員の演技をこなしている。

まあ、普通にボロが少し出ているが、妄想に夢中となっている花音では、それに気付くことは出来ないのだった…

〜リビング〜

「ま、そんな事より、脱出するぞ。氷川先輩(妹)が松原先輩を足止めしている今がチャンスだ。」

「あ、ちよつと待って…：台所の方に行ってくれないか…? 解毒薬がそこに置いてあったきがする…」

「わかった。」

「勇人が台所に解毒薬を取りに向かうが……」

「おい、創也……まさか奥沢さんの解毒にこれ全部使ったのか？」

「は？何言つて……嘘だろ……」

「勇人が解毒薬の入った鞆を持ってくるが、中にはカラの瓶が入っているだけで、肝心中身が見当たらない。」

「そうか……だから花音先輩はあの時……」

「自宅に辿り着くと同時に、花音先輩は何かを作ると言つて、台所に向かった。おそらく、その時に中身を捨てたのだろう。」

「くそ……やられたか……」

「これでは、花音先輩を解毒することが出来ない。」

「白鷺先輩や氷川先輩(妹)にいくつか渡しておいて正解だったな……よし、今すぐ逃げバチツ!!!がっ!?!」

「勇人!?!」

「勇人が俺に逃亡の提案をした瞬間、勇人が短い悲鳴をあげてその場に倒れ込む。」

「アレダケニゲナイデイツタノニ、ワカッテナカッタノカナア?ソウヤクン♡」

「花音先輩……」

「オヤスミ、ソウヤクン♡」

バチツ!!

「がっ!?!」

完全に回復の出来ていない状態では抵抗など出来るはずがなく、俺はそのまま意識を手放すのだった…

〜それから数分後〜

「それで、どうして失敗したのかしら?」

「ご、ごめんなさい…」

創也の家の近くで、勇人は千聖の説教を受けていた。

「日菜ちゃんから聞いた話だと、貴方が高笑いをしていたせいで花音に勘付かれて失敗したらしいじゃない。」

「っ!?!」

ガッ!と日菜のいる方向を見る勇人。プイツ!と目をそらす日菜。

「聞いているのかしら?」

「すみません!完全に俺のミスです!」

涙目になって謝罪をする勇人。地面に頭をこすりつけて土下座をする。全く無駄のない最速の土下座だ。素人目から見ても、その土下

座は次元の違う完成度の高さだと分かる。

普通なら余りの土下座の完成度の高さに怒る気も失せるものだが

……

「あら、土下座をすれば許されるとでも思っているのかしら?」

「誠に申し訳ありません!!踏まれても文句などあろうはずがありません!!」

土下座の力が強すぎて、頭と地面の接触部分が陥没をしている。

「踏む時間があるくらいなら花音と創也を探しだしたらどうかしら?」

そう言いつつも、しっかりと勇人の頭を踏む千聖。

勇人の土下座パワー+千聖の踏む力で勇人の頭は完全に地面に沈んでいる。残っているのは勇人の首から下の胴体だけとなった。

「でも、千聖ちゃん、そーくと花音ちゃんはもう何処かに逃げちゃったんでしょ?追う手立てはあるの?」

「そこは彼に頑張ってもらうしか無いわね?」

「ですよー…ちなみに見つけられなかった場合って…」

「あら、そんな分かりきった事をきくのかしら?」

そういうと、千聖は、指の関節を一つ、パキリと鳴らした。

「直ちに搜索に向かいます!!!!!!」

こうして、再び創也の救出作戦が始まった。

第10話 ヤンデレ騒動 閉幕

「あはは……いつもありがとうございます花音先輩。」

「また道に迷っちゃったんですか……はあ、大丈夫ですか、花音先輩？」

「助かります、花音先輩。」

彼が私の名前を呼ぶたびに胸がドキドキする。

彼を最初に見た時の印象はどこか無表情で少し、何を考えているのかわからない人だと思った。でも、いつも周りの事を気に掛けている姿や、ハロハピのみんなと一緒に過ごしていくうちに、彼が優しい人なんだって思った。

「どうしたんですか、花音先輩？」

でも、彼の優しさは私だけに向けられているものではない。いつも彼以外の誰かに向けられた優しさなのだ。

いつからだろう。それをもどかしく感じ始めたのは。

いつも彼のことから離れない。

いつも彼の事を考えるだけで胸が締め付けられる。

いつも彼の事を目で追ってしまふ。

この気持ちは一体なんなのだろう……

「へっくしー」

微妙な寒気と共に、眠気が一気に覚醒する。雨でも降っているのか、微妙に肌寒く感じる。

「もうやだこのパターン……」

ここまで来れば嫌でもこの後どういう展開かわかる。

「なんかの倉庫か？」

辺りを見渡すと、若干埃かぶった荷物があちこちに置いてある事からも、ここが倉庫だとわかる。

「嘘やん……」

立ち上がろうとするが、手に冷たい感触を感じ、動きが阻まれる。よく見ると金属製の手錠が俺の手に嵌められ、柱と繋がれている。

「おはよう、創也くん♡」

しばらくすると、コツコツと足音が聞こえ見覚えのある人物がやってくる。

「花音先輩……」

「どうしたの、創也くん？」

「気絶させるならスタンガンはやめてもらえませんか？結構痛いんですよ……」

論点はそこではないのだが、普通にそれだけは言いたい。

「ふふっ、それはごめんね？でも、逃げようとした創也くんが悪いんだよ。」

そう言うと、花音先輩は俺にゆっくりと這い寄ってきて……

「イタダキマス♡」

再び唇を重ねてきた。

ちゅ……くちゅ……はぁ……んむっ……ちゅっ……

「……………」

「抵抗しないんだね♡」

手錠で拘束されている以上、抵抗は無駄媚薬：薬の効果は時間が経過し抜けたのだが、そんな事はお構いなしに花音先輩は貪欲に唇を重ね、舌をねじ込んでくる。

「えへへ……ズット一緒にいようね？私がずっと創也くんを守ってあげる♡創也くんの優しさはワタシだけに向けてね♡ズットズット、幸せに暮らそう♡」

長年望んでいたものがやっと手に入ったかのように、花音先輩は俺の身体を味わい続ける。

「二度と他のオンナに目がいかないように、私しか見れないようにしてあげるからね♡ズットズット……ダイスキだよ♡」

もはや、俺に抵抗できる手段はない。電話による救助もスマホがない為期待できない。解毒も俺の持っていた解毒薬は全て花音先輩に

捨てられた。

俺に残された手段は……

「その……優しく……お願いします……」

ただただ、花音先輩の要望に応えることだけだった……

「ヤット、ワタシノモノニナツテクレタネ♡」

明らかに男が言うような台詞ではないが、花音先輩は満足してくれたのかそのまま俺の衣服に手を伸ばす……

その時だった。

バンツ!!!!

突然、倉庫の入り口と思わしき扉が勢い良く開き、俺と花音先輩は動きを止め、音の下方向を見て、その場にいる人物の名前を呼ぶ。

「千聖先輩／ちゃん!？」

扉から堂々と入ってきたのは、今回の事件の協力者である白鷺千聖先輩だった。

「創也君……これはどう言うことなのかしら?」

「……………ほえ?」

何故だろう……千聖先輩から妙な威圧感を感じる……というか尋常じゃないくらい嫌な予感がする……待って、手汗がすごいことになったんだけど!?

そして、その予感は的中するのだった。

「私と言う女がありながら、他の女の子に手を出すなんてどういうつもりなの!?!」

次の瞬間……空気が……死んだ……

「先輩の方こそどういうつもりですか!?!」

この場でそんな事を言えば花音先輩が……

「ドウイウコトナノ、ソウヤクン?」

「ひっ!?!」

虚な瞳がジロリと俺を映す。

「聞いて花音! 私と彼は交際しているのよ! ま、毎日放課後こっそりと会って、手を繋いで一緒に喋ったり、お互いにき、キスをしたりする仲なのよ!?!」

「嘘つけえ!!!」

手を繋ぐ事どころかまともに話したことだつてないだろ!? まとも
に会つて話したの解毒薬を渡した時くらいだよな!?

なんでそんな嘘を恥ずかしそうに顔赤くして言えるの!? 何考えて
んの先輩!?

「それに創也君、私にあんなことをしておいて、私を捨てるつもりなの
!? あんなに激しくしたの!? お願ひしますって私に自ら頼み込んで
きたの!? そんなのあんまりだわっ!」

「ソウヤクン、ワタシジヤナクテチサトチャンナノ? ネエ、ドウイウコ
トナノ? 嘘ダヨネ? ソウヤクンハワタシト幸セナ家庭ヲ作ルンダモ
ンネ?」

「そんなんっ!? 花音にまで手を出すなんて何を考えているの!? 他に何人
の女の子に手を出したの!? 紗夜ちゃん? 美咲ちゃん? ころちゃん
? 一体何人の女の子に手を出したの!?!」

「誤解が誤解を生むからやめろおおおおお
!!!!!!」

創也の悲鳴が倉庫に響き渡る。

「こんな昼ドラみたいな展開は嫌だああああ
!!!!!!」

そう言つて、創也は自分の耳を両手で塞ぐ。

そして、ふと違和感を覚える。

先ほどまで手に纏わりついていた冷たい感触が軽くなったのだ。

(あれ!? 手錠が外れてる!?)

辺りを見渡すと、俺と柱を繋いでいた手錠は近くの地面に無造作に置かれている。

「創也、こっちよ。」

「え、ちよつ!？」

そして、突然後ろに引っ張られ、現在位置から離れる。

「ゆ、友希那せむぐつ!？」

「静かにして。松原さんに気付かれるわ。」

俺を後ろに引っ張った人物……友希那先輩は大きな声を出しそうになった俺の口を手で押さえつける。

「ど、どうしてここに友希那先輩が？」

「にゃあ!」（訳：私もいるよ!）

「いっ!あも!？」

友希那先輩の右肩には見覚えのある小さな黒猫の子供……ここあが乗っていた。

「話は松原さんから逃げ切っただけからよ。」

そういうと、友希那先輩とここあは花音先輩とは反対方向に向かって移動を開始する。そして、現状打破のため、俺もその後を追うのだった。

「な、なんとか外に出られた……」

友希那先輩とここあについて行き、倉庫から脱出した瞬間だった。

「ソウヤー!!!」

「ぐえっ!?!」

突然、聞き覚えのある声が聞こえ、身体に強い衝撃を感じるのと同じ時に、地面に押し倒される。

「こころ!?!」

俺を押し倒してきたのは、なんと、ヤンデレが解除されたこころだった。

「どうしてこころ!?!」

「私が弦巻さんに頼んで、この場所まで連れてきて貰ったんです。」

「さ、紗夜先輩まで!?!」

こころに気を取られて気がつかなかったが、近くには紗夜先輩がいた。

「創也さんはこころがどこか分かりますか?」

突然、紗夜先輩が質問を飛ばしてくる。

「いえ、分かりません。」

「ここは隣町にある元〇〇〇工場……ようは誰も使わなくなった廃屋です。」

「隣町!?というかなんで俺と花音先輩のいる場所がわかったんですか!?!」

「今着ている服の襟の後ろの辺りを確認してください。」

「え、服の後ろ?」

慌てて襟の後ろ辺りを触っていると、一部、ゴツゴツとした明らかにおかしい感触がみつかる。

「私が付けた発信器、付けたままでしたよ?」

「……」

なんだろう……助かったのに助かった気がしない……複雑な気分だ

…

「えっと……」

どうしよう……お礼を言いたいのにすつごくお礼を言いたくない……

「はあ……まさかこころの家で飲んだジュースが、そんなおっかないも

のとは思わなかったよ…」

「美咲まで!？」

花音先輩以外の元ヤンデレが、この場に集結した。

く創也が誘拐されてから1時間後く

「はっ!？」

ここあが眠り、すっかり紗夜に連絡する事を忘れていた事を思い出す友希那。

「ここあに夢中になって連絡を忘れてたわ…」

そう思い、改めてスマホの連絡先を開き、紗夜に電話をする。

プルルルル…プルルルル…

『はい……もしもし……』

数コール鳴った後に、どこか眠たそうな紗夜の声が聞こえる。

「紗夜、今日は珍しく練習を休んでいたけれど、どうしたの？」

『そ、それは……ちよつと体調を…』

「そう？演奏に支障が出ないよう、体調には気をつけて。あなたは口ゼリアのギタリストなのだから。」

多少の雑談をして、本題に切り込む。

「それと、創也も今日は練習を休んでいたのだけど、さっきから連絡がつかない事について何かしらないかしら？」

『そ、そそそそ創也さんですかっ!?!』

「?…ええ、そうよ。」

明らかに普段の紗夜からは想像のできない動揺した声が聞こえるが、なんとなくスルーをする。

『いえ…私にも分かりません…分かったら私から連絡するので…』

「ええ、頼んだわ」

そう言っつて、創也の無事を気にしながらも通話を終了する。

「ここあを放置していた罪は重いわよ…創也…」

尚、命の無事は保証はできない模様…

く氷川家、紗夜の部屋く

「うう…なんで私はあんな事を…風紀委員が風紀を乱してどうするのよ…」

友希那からの連絡の後、紗夜は自らが創也に対して行った事を思い出し、布団の上で悶絶していた。

「創也さんに対して……あんな事を……」

夢だと思いたいが、解けたロープと自身のポケットに入っていた気絶している創也の写真や発信器のリーダーが、全て真実だと物語っている。

「創也さんにどう謝罪すれば……」

そんな事を考えていた時だった。

プルルルル…プルルルル…

「今度は誰……？」

再びスマホに着信が届く。

『おねーちゃん大変!!そーくんが花音ちゃんにビリビリされて誘拐されちゃった!!!』

「はい？」

〜現在〜

「そこからは、もう1度湊さんに連絡をして、創也さんを探しに行った矢坂さんが弦巻さんと偶然遭遇して、ここに辿り着きました。」

「倉庫であなた達を見つけてからはここあと私が入ってここあと手錠の鍵を探させて白鷺さんに注意を引かせて今に至るのよ。」

「す、すげえ…」

ロゼリアの先輩2人からこの救出作戦の真相を聞き、驚く。

勇人は多分、解毒薬を新しく入手するために弦巻家へ向かったのだろうが、それが良い方向へ働き、移動手段の確保に繋がったというわけか…

「あれ？それじゃあ勇人はどこに？」

「矢坂さんには、これを持たせて倉庫の中に侵入させたよ。」

そうやって、美咲が見せてきたのは何かの液体の入ったプラスチックのスプレーだ。

「これは？」

「黒服さんたちが用意してくれた、解毒薬を霧状きりじょうに噴射ふんしゃする道具だつて。」

「白鷺さんが気を引いている間に矢坂さんが倉庫の天井に張り付いて、ずっと解毒薬を部屋の中に充満させるという作戦です。そろそろ……」

「来たわ！」

「こころが指差した方向を全員が向く。」

「おつす！創也、生きてて何よりだ！……ほっ！」

「みなさん、お疲れ様です。」

「えへへ……創也くん……♡」

「こころが指差した方向には、埃まみれ蜘蛛の巣まみれの勇人と、何かいい夢でも見ているのか、眠っている状態の花音が千聖に運ばれる形でこちらに向かつて来ていた。」

「けほっ…だれも使っていない工場だから埃っぽかったんだけど…」

咳をしながら愚痴を言う勇人

「あら、私にあんな昼ドラみたいなのドロツドロのセリフを言わせておいてその程度で済んでいるんだから、全然良かったじゃない♪」

黒い。それはもう黒い笑みで千聖先輩は勇人に話しかける。

「それに、今回の件だって元をたどれば貴方が調子に乗って高笑いをしなければなかったのよ？」

「返す言葉もございませぬ……」

完全に尻にひかれてる勇人。って、千聖先輩のあのドロドロしたセリフは勇人発案なのか…

「すみません、千聖先輩助かりました。」

とりあえず、千聖先輩にお礼を言いに行く。え、勇人？後でいいだろう。

「気にしなくていいわ。花音が貴方を襲っていたらどんな形であれ、花音が可愛そうなもの。」

「まあ、俺自身が五体満足の状態ですので、花音先輩も気にしなければ

良いんですけど…」

まあ、確実にふええ〜ってなって顔赤くして数日はまともに話せないかもしれないんだよなあ…

「その点はまかせてもらって構わないわ。」

そんな考えを汲み取ってくれたのか、千聖先輩は俺が頼みたいことを申し出てくれた。本当にありがたい。

「ま、なんにせよこれでヤンデレ薬の服用者は全員解毒完了だな…」

空を見上げると、いつの間にか日が上がっている。

3日間のヤンデレ達との壮絶な攻防を経て俺はようやくやく日常へと戻るのだった……

くおまけく

友希那「創也、ちよつとこつちに來なさい。」

創也「なんですか？」

友希那「ふっ！」

創也「ぐおっ!？」

説明しよう！現在創也は、友希那から不意打ちのコブラツイストを受けているぞ！

友希那「ここあのお腹を空かせた罪は……重いわ……よっ!!!」

ゴキツ

創也「ぐふ…っ」

ここあ「にやあ…にやあ…にやあ…にやあ…にやあ…にやあ…(訳…3…2…1!友希那選手の勝利ー!)」

もう二度と、ここあのお腹を空かせるのはやめようと、密かに決意をする創也であった。

エピローグ 変わらない関係

「疲れたあ……」

ヤンデレ騒動の次の日。俺は放課後の学校の中庭で黒い鞆を枕にしながら寝そべっていた。

「ああ、癒しが欲しい……」

せつかくの文化祭前の3連休もヤンデレ騒動で潰れ、ここあは友希那先輩の家にお泊まりに行っている。友希那先輩の怒りを沈めるにはそれしか無かったのだ……

それにより、癒しが消えた……

「ウサギはいかがでしょう。」

「……それさ、学校の飼育小屋のウサギだろ？連れ出していいのか？」

「大丈夫。」

空を適当に眺めていると、いつの間に俺のセリフを聞いたのか、おたえが近くに座って、ウサギを撫でていた。

「あれ、これ何？」

ウサギを撫でていたおたえだが、俺が枕代わりにしている黒い鞆を見てこれは何かと聞いてくる。

「……ジューズ……」

実はこの鞆の中身は、全て解毒薬なのだ。え、なんでヤンデレ騒動終わったのにまだ持つてるのかって？……なんか怖いんだよ……いつ何処でヤンデレに狙われるかわからないって思い始めてさ……

「あ、りんごジュースなんだ。飲んで良い？」

「勝手にどうぞ」

俺の鞆から解毒薬を抜き取り、飲もうとするおたえ。解毒の効果を除けば、至って普通の健康的なりんごジュースだと黒服さんたちから聞いているので、一本あげるくらい構わない。

「いただきます。」

なぜか正座をしてお茶をすするように飲み始めるおたえ。

プルルル…プルルル

「電話？……黒服さんからだ。」

一体なんの用だ？

「はい、もしもし。」

『お忙しい中、すみません。』

「いえいえ、放課後暇してたんで大丈夫ですよ。それで要件は？」

『はい、単刀直入に聞きます。現在、卯月様がお持ちの解毒薬の中に『S·O·I·Y·A』と掘られている瓶はありませんでしたか？』

「……………」

俺は無言で鞆の中の解毒剤を確認する。…うん、何処にもない。そして…

「結構美味しい…創也、これ何処で売ってるの？」

おたえが飲んでいた瓶になにか小さな文字が掘られているのを確認する。

「おたえ、ちよつとその瓶貸してくれ。」

「いいよ。…間接キス狙ってるの？」

「……………」

おたえの発言を無視して瓶に掘られている小さな文字を確認する。

その瓶には、しっかりと文字が掘られてたよ…『S·O·I·Y·A』ってね…

「ねえ、創也なら別に私が飲んだ後のジュースを飲んでも良いんだよ？だって創也は花園ランドの大切な住人だもんね。創也はずっと私と一緒にいるもんね？」

あー、俺これ知ってるよ……

『卯月様、どうかなさいましたか？』

「黒服さん、解毒薬、追加発注お願いします。」

俺はただ、要件を伝えスマホの電源を切る。

「どっけんの♡」

立ち上がり、すぐに帰ろうとするがおたえに突然腕を掴まれ、歩みを止められる。

「ちよつとドラ○エで世界を救いに行くっていう予定があるから離してくんね?」

「やだ♡創也を花園ランドに連れてくまで、離さないよ♡」

「そうか……」

こうなった以上、俺に出来ること一つ。

「あ、あんなところにウサギの群れが!!!」

適当な場所を指さし、おたえの注意を引きつける。

「え、どっけん!?!」

「にげろおおおおお!!!」

次の瞬間、俺は全力でおたえからの逃走を開始する。

「ニガサナイ♡」

こうして、再びヤンデレからの逃走を開始するのだった。

〜2年 教室〜

「はあ…花音、いつまで落ち込んでるのよ…」

「ふええ〜…だって、私、創也くんにあんな事をしちやつて…」

今思い出すだけでも自分の顔が熱く火照ってくるのが分かる。

「私、きつとえつちな子だって思われちやつてるよお…ふええ…」

何故自分でもあそこまで理性とは程遠い行動に出てしまったのか…そんな事を考えつつも、しっかりと創也の唇をあんなに激しく奪ったという事のインパクトが強く、今朝からずっとこの調子の花音なのだ。

「二応、彼も気にしてないって言ってたじゃない…」

「でも、創也くんに嫌われちゃったら私……」

そんなネガティブな思考ばかりが頭をよぎる。創也に避けられる事を想像しただけで胸が張り裂けそうになってしまう。

「はあ、重症ね…」

立ち直りの兆しを見せない花音に手こずっている千聖だったが…

「iiiiiiiiiiやああああああ
!!!!!!!」

「?。」

遠くの廊下から叫び声にも似た声が聞こえる。

「花音…この声って、まさか…」

「そ、創也くんっ!？」

なぜ、廊下から悲鳴が聞こえるのかはともかく、あたふたしながら隠れる場所を探し始める花音。しかし、その判断は少しばかり遅すぎた。

「花音先輩っ! 助けてくださいー!」

汗だくになりながら、教室に駆け込んでくる創也。

「ふ、ふええっ!」

創也の顔を見て顔を真っ赤にしながらふたたび慌て始める。

「創也、花園ランドに一緒に行こう? ナンデ逃げるの?」

「ひっ!？」

創也が花音を盾にする形でたえから距離を取る。

「おたえがヤンデレ葉を飲んで現在進行系で襲われそうなんです! 助けてくださいっ!」

「ふ、ふええっ! ゆ、勇人くんはどうしたの…っ!？」

「あの野郎、紗夜先輩を間違えてナンパしてボコられて戦闘不能ですっ！」

かなり走ったのか、創也はかなり息切れをしていた。

「ふ、ふええ、た、たえちゃん、落ち着いてっ！」

創也が花音に守られ、花音の隙間から創也を虎視眈々と狙う構図がいつの間にか完成していた。

その様子を見ていた千聖は……

(やっぱり、彼は花音の事を嫌いにはならないわよ……今もそうやって頼られてるのが何よりも証拠じゃない。)

創也&花音vsたえの攻防を見ながら、千聖は満足そうにその後にするのだった。

くおまけく

勇人が創也の救助にいけなかった理由。

勇人「へいつっ！その麗しきレディ！良ければ部活をサボって僕とデートに……」

紗夜「なるほど、矢坂さんは今日、部活を家の用事で休むと聞いていましたが、ナンパをするための嘘でしたか。」

勇人「げっ、氷川先輩!？」

紗夜「あなたには、もう一度OHANASHIをしたほうが良いですね。」

勇人「え、ちよつと待って、どこから弓道部の弓と矢なんて取り出したんですか……どうして矢の先端に尖った鉄が付いてるんですか……どうしてそれを俺に向けてるんですかっ!!!」

紗夜「……ふっ！」

勇人「ぎやあああああああああ
！！！！！！！！」

その後、ボロボロになった勇人が生徒会室で倒れているのを発見されたとか何とか。

壮絶！文化祭奔走編！
プロローグ 文化祭に向けて。

「よし…これくらいでいいかな？」

俺は大量のパンが乗せられたトレイを持ち、レジへと向かう。

「すみませーん、お会計お願いしまーす」

カウンターには誰もいなかったので、呼びかける。

「はーい、いらっしやいま…あれ？創也？」

店の奥から出てきたのは、最近文化祭関連でよく話すようになった山吹沙綾だった。

「あ、紗綾じゃん…もしかしてここって沙綾の家なのか？」

「うん、そうだよ。」

そう…俺は現在、『山吹ベーカリー』というパン屋にて買い物をしているのだ。

「えーと、メロンパン、チョココロネ、焼きそばパン、あんパン…：は
い、2750円ね。」

「ほい」

財布から2750円を取り出す。

「なんか凄い量だけどパン、好きなの？」

「まあ、嫌いではないな……これは徹夜用だ。」

「徹夜？」

「ちよつと、学校で忙しくなりそうで……」

創也の瞳から光が消え、遠くを見つめ始める。

く遡ること1日前く

放課後の生徒会室。

「……おい勇人、この大量の依頼書はなんだ？」

「はい！文化祭で披露する出し物でありますっ！」

俺の目の前にはざつと1000枚近くのプリントの山が積み上げられている。ちなみにこれ、勇人の言ったとおり全て文化祭の出し物の要望である。

「はあ……1学年5クラスあるから、この山から15クラス抜いて……985枚……うげえ……これ全部出し物かよ……」

そういつて、創也は、クラスの分を除いたプリントの山から一番上のプリントを見る。

「えーと、なにになにに：？『花咲川の文化祭でミスコンを開いて欲しいです。可愛い女の子たちをもっと見たいです！』……はあ、誰だよこんな要望書いたやつ……」

1番下に記された名前を見る。

『1年C組 矢坂勇人』

「テメエかあ!!!」

「うごっ!?!」

勇人の顔面に蹴りを入れる。必殺上段回し蹴り。

「おい、ちよつと待て、まさかこの要望全部……」

嫌な予感を感じ、要望書を上から雑に数枚を取り出し、確認する。

『花咲川のイケメンコンテストを開いてください！俺の美貌で会場の女子をメロメロにしてやるぜっ！』 1年C組矢坂勇人』

『水着コンテストを開いてほしいっす！花咲川の女子達の水着姿を！むふふ』 1年C組矢坂勇人』

『モデルショー開催よろしく。あ、野郎は興味ないんで美女限定でおなしゃす』 1年C組矢坂勇人』

などなど……

「殆どお前の欲望丸出しの要望じゃねえか!?!」

「いだだだだ!!!ギブ!ギブだつて!?!」

反射的にコブラツイストを食らわせる。

「あ、でもちやんとまともな要望も入ってたり、他の生徒からも入ってたりする…!」

勇人の要求欲望に混じって、いたって普通の要望も混じってたり…どの道全てを確認する必要があるのだった。

「学校に泊まったほうが良いのかな…?」

未だ数百枚も残ったプリントを見て俺は徹夜を決意するのだった

…

く現在く

「あはは…私も手伝おうか? 同じ文化祭実行委員だし。」

「まじで!?!本当に!?!ガチで!?!」

思わず、カウンターに前屈みになり、聞き返してしまう。

「う、うん…!」

沙綾からのまさかの申し出に泣きそうになる。

「よかった…あの量のプリントを1人で片付けると思うとどれだけ時間がかかることやら…」

「ま、放課後は用事はないし私も手伝うよ。」

こうして、俺は沙綾と一緒に要望書を片付けることになったのだった。

↳放課後↳

「えーと、『文化祭で、キラキラドキドキのライブをしたいですっ！

1年A組 戸山香澄』…なんだ？香澄達もライブをするのか？」

要望書に目を通していると、見覚えのある名前を見つける。

「も〴〵って事は、ハロハピもっ…」

「ああ…こころがな「ソウヤ！あたし達ハロハピも文化祭でライブがしたいわ！」って言ってきてな…有無を言わさず宣言されたよ。」

「あはは、なんだかこころらしいね…」

「とりあえず、曲の内容は美咲に全部丸投げしたから大丈夫…まあ、腹パンされたけどね。」

まじでヤンデレ騒動の時といい、美咲の力が強くなってる気がする。

「えーと、バンドメンバーは『戸山香澄 花園たえ 牛込りみ 市ヶ谷

有咲 山吹沙綾』

「っ!？」

「なんだ？沙綾もライブやるのか？すげ「やらないよ」お、おう…？」

「香澄がなんかいつの間にか入れてたみたいだからさ…私は、バンドに参加できないよ。」

「……そっか…」

遮るように宣言される…ただ、その言葉は何処か言い訳のように感じた。

「ふい……なんとか終わった…」

時計を見ると、完全下校時刻を過ぎていて、作業用に用意してた山吹ベーカーリーのパンは完食していた。

「おつかれさま。」

沙綾が目の前にお茶を出してくる。

「お、わりい」

差し出されたお茶をゆっくりと飲み込む。

「ったく…8割はあの馬鹿野郎の要望だったぞ…」

「矢坂くんだけ？ 野外教室の出し物で手品を披露してた。」

「おう…俺にとっては苦い思い出だよ…」

まあ、勇人の要望の中にもまともな物も入ってたから、邪険にはできななんだよなあ…

「えーと、文化祭の全校に対する出し物は、『演劇、ライブ、手品、etc…』…ま、こんなところだろう。」

思ったよりもまともなのが残った。

「じゃあ、俺はこれを先生に届けてくるから、沙綾は先に帰宅しておいでくれ。」

「うん、わかった。」

こうして俺達は生徒会室を出るのだった。

くおまけく

創也「ただいまく」

ここあ「しゃあ!!!」

玄関を開けた瞬間、ここあが爪で引っ掻いてくる。

創也「痛っ!!?なにすんだよここあ!」

ここあ「みやあ!ふしゃあ!」 訳：今何時だと思ってるの!?!私のご飯の時間は!?

創也「あ、忘れてた!?!」

ここあ「にやん!!」 訳：もうゴキ○リの退治やらないよ?それでもいいの?

創也「ひっ!?!お願いします!それだけは!!」
ここあの機嫌を損ね、苦勞する創也であった。

第1話 弟子入り？

「リサ先輩！お願いします！俺に化粧を教えてください！」

「え、ちよつと待って、アタシ全然状況が飲み込めてないんだけど…」

コンビニバイトが終了し、俺はリサ先輩に土下座をしながら頼み込んでいた。

「そーくん、土下座してどーしたの？何かに目覚めちゃった？」

モカが面白そうに質問をしてくる。

「目覚めてねえよ。ただちよつと深刻な問題が出来ただけで…」

「？」

ゝ時は遡ること約3時間前

「ふいゝ、やっと学校終わった…さっさとバイト行くか…」

学校の授業が終わり、放課後となったので俺はバイトのためにコンビニへと向かっていた。

プルルルル…プルルルル

「電話？」

ふと、スマホに着信が届く。

「勇人から？」

スマホには、矢坂勇人と名前が表示されており、嫌な予感がしながらも俺は応答する。

「もしもし?」

『よう、ジュリ…じゃなかった…創也、文化祭の事でお前に頼みたいことがあるんだけど……』

「一瞬変な単語が聞こえたけど……それで、頼みたいことって?」

『あのさ、文化祭の全校の出し物にさ、演劇あるだろ?』

「ああ、そんなのあったな。監督がお前っていうのが滅茶苦茶不安だけど……それがどうした?」

『いやあ、実は文化祭で“ロミオとジュリエット”をやる予定だったんだよ……』

「だった?」

『……単刀直入に言わせてもらおう……創也、お前に演劇に出てジュリエット役をやって欲しい!』

「……………は?」

『その…文化祭に備えて練習してたジュリエット役の女子が「やっぱ文化祭は彼氏とデート行きたいからジュリエット役やめるね☆」って……あいつこの前まで彼氏いないって言ってたのにつ!!俺ら非リア軍を騙してやがった!!!』

憎悪にも似た声が電話の向こうから聞こえるが、それどころではない……

「ジュリエット役って何っ!?なんで俺が女役なんだよっ!?」

『弦卷さんは何かとんでもないアレンジしそうだし、奥沢さんはクラスの出し物、北沢さんはセリフ覚えられないし…OK?』

「いや納得だけど納得できねえよ!」

『あ、言い忘れてた、実はさっき演劇の内容とキャスト書いた紙をお前と同じ文化祭実行委員の弦卷さんに渡して最終決定をする校長に提出したからお前ジュリエット役決定な☆』

「……………!!!」

『ちなみに弦卷さんなら「面白そうだから良いわよ!ソウヤ!絶対に観に行くから頑張って!ハッピーラッキースマイルイェーイよ!」って言っただぞ。』

「だからって突然すぎるだろっ!」

『そんじゃ、頑張れよ、ジュリエット☆』

「あ、ちょまつ『ブチッ!』…切りやがった……」

く現在く

「えーと、つまり創也がジュリエット役をやる事になったから、見た目をどうにかしたくて、アタシに化粧を教えて欲しいって事?」

「はい……」

畜生……マジで勇人は許さん……絶対に復讐してやる……

「あはは、創也も大変だねえ……うんっ！アタシで良ければいくらでも教えるよー！」

「マジですかっ!?!」

おお……なんと頼もしい……

「ただし！」

「ただし？」

「アタシとモカにもその演劇見せてね☆」

「ふっふっふ……そーくんの晴れ姿をモカちゃんたちがバツチリとるからねー」

お互いに仲良く肩を組み、スマホをチラつかせるリサ先輩とモカ。

「oh……」

思わずネイティブな嘆きが出てしまう。

「あの……ロゼリアやアフターグロウの面々には黙っててもらえるとありがたいんですが……」

「大丈夫だよー」

「流石にそんなことしないって☆」

「どうやら見た目をどうにかする代わりに、それを2人に観られるというデメリットが発生したようだが、被害の拡大は防げそうだ……」

↳それから数時間後 羽丘学園↳

「という事があったので、俺に演劇を教えてください。」

「ああ、構わないとも。仲間が困ってるんだ…手助けするのは当たり前さ。シェイクスピア曰く、つまりそういう事さ。」

「なるほど。」

俺はコンビニのバイトを終え、羽丘学園にて、同じバンドのメンバーである、薫先輩に事情を説明して演劇の指導を頼み込んでいた。結果は、見ての通り成功だ。これにより、見た目と演技力の2つの問題をクリアする事ができた。

「ところで、羽丘にはちーちゃ……千聖がいるだろう？何故わざわざ私の方に？」

「ああ…その事ですか……」

いやね、実は一回頼みに千聖先輩の方に行っただよ？でもね……

『あら、ヤンデレの時といい、ずいぶんと私を頼ってくれるのね。恩返しを楽しみだわ♪』

って言われて……あの先輩、たまに怖いんだよなあ……

「まあ、なんにせよこれで準備はできたつと……」

化粧の方は何か大切なものを失う気がするが、これで本番までに俺がどれだけ演技力を鍛えられるかになってくる。

「あ、そうだ……監督勇人とロミオにも声かけとかないと……」

そんなことを考えながら、俺は勇人と事前に伝えられたロミオ役の人物に電話を掛け始めるのだった。

くおまけく

創也「あの…千聖先輩……」

千聖「あら、どうしたの？」

創也「文化祭で……ジュリエット役をやる事になったので…演劇を教えてもらえないでしょうか……？」

千聖「あら、ヤンデレの時といい、ずいぶんと私を頼ってくれるのね。恩返しが楽しみだわ♪」

創也「いえ……やっぱ何でもないっす……」

紗夜&隣子（創也さんが……ジュリエット？）

実はこの2人にこの会話を聞かれており、それによりリサ&モカだけでなく、ロゼリアの面々、あこ経由でアフターグロウの面々も文化祭に来る事になるのだが、それはまた別の話。

第2話 凶演!?!ロミオとジュリエット+α

「はあ……これください……」

俺はため息を尽きながら、カウンターに大量のパンを並べる。

「あはは……なんか凄いため息だね……はい、おつり500円。」

「どーも……ため息の一つもつきたくなるよ……」

俺は現在、山吹ベーカリーにいる。これから、演劇の話し合いをする予定なのだ。参加者は俺ジュリエット、ロミオ、監督勇人の3人。

一応、公園に集合の予定なのだが、小腹が空いた為、ここに寄ったのだ。

「そういうえば、創也、ジュリエット役をやるんだっけ?」

「はあ!?!なんでお前がそれ知ってるの!?!」

まだ、モカ&リサ先輩と薫先輩と千聖先輩にしか言っていないはずだぞ!?!

「昨日の放課後、矢坂くんが演劇の告知のプリントを1年生の階にバラ撒いてたよ?2・3年生にはまだ伝わってないみたいだけど。」

「あんのクソ野郎オオオ
!!!!!!!」

店内に俺の叫びが響く。一応、夕方ということもあってか、店内に人はいない。よって問題なし。

「野外教室で矢坂くんはあんな手品を披露してたし、創也は他のバン

ドに混じって何気にすごい演奏してたし、1年のみんなは注目してるみたいだよ?」

「うげえ…なにそれ意味分かんない…」

「あ、矢坂くんが配ってたプリントなら持つてるよ。」

そう言うと、沙綾はカウンターから一枚のプリントを取り出す。

「はあ……なんであいつは無駄にハードルを上げるのかな…」

沙綾に見せられたプリントには、これ以上ないほどウザいドヤ顔をする勇人が、まるで主演のように映っていた。

ちなみに、俺とロミオ役の奴の名前はプリントの左下の隅っこに小さく名前が載せられている。

「今からでも辞退したくなってきた……」

「お疲れ様。はい、これ。」

「さんきゅー」

俺は沙綾から袋に詰めてもらったパンを受け取り、出口に向かい始める。

「あ、そうだ……なあ沙綾、一つ聞いていいか?」

「ん、何?」

以前、沙綾と話した時に違和感を感じたのだ。

「沙綾がバンドをやらないのは、何か理由でもあるのか？」

「え!？」

予想外の質問が飛んできたせいか、驚いた顔をする沙綾。

「いや…なんていうかさ、紗綾がなんか無理してそんな気がしてさ…」

紗綾を見ていて思ったのだが、なんというか…何かをずっと気にしすぎている？そんな感じがするのだ。

「ま、あんまり無理すんなよ。いざとなったら頼ってもらってくれないからさ。」

とはいえ、俺が深く関わるのも良くないかもしれない。俺に出来ることといえば、軽く手助けをしてやることくらいだ。

「う、うん…ありがとう…」

「おう、それじゃあな」

俺は沙綾に一方的にそう伝え、店を後にした……

パンを買い終えてから俺は、マジで行きたくないが、公園へと足を進めていた。勇人とロミオ役には『今すぐ公園に來い。演劇について話がある。』とだけ送ってある。

「あ、いた。」

公園に入ると、ブランコで遊んでいた勇人が視界に入る。

「来たか…ジュリエットとおおっふ!？」

勇人が「ジュリエット」と言い終わる前に勇人に向かってジャンプし、ラ○ダーキックを喰らわせる。

「痛っ!?!いきなり何すんだよ!?!」

「何すんだよじゃねえよこのバカ!!」

俺にはこいつを蹴り飛ばす権利があるはずだ!!!

いきなりジュリエットやれなんて言い渡された俺の気持ち考えてみる!東京湾に沈めて無いだけまだマシだろうっ!

「はあ!?!ヤクザみたいな考えしてるテメエの方がバカだろバカ!」

「なんで今俺の考えたこと分かんだよ!!」

「ふっ、その程度の考えが俺に分からないとでも思っていたのか!」

「てめえ、ちよつと体育館裏に来やがれこの野郎!!」

「移動がめんどいからここでやってやろうかあ、あ、!?!」

創也 vs 勇人の喧嘩、勃発

数分後

「はあ……はあ……はあ……」

俺達は互いに体力を消耗し、息切れを起こしていた。

「て、てめえ……どんなスピードで攻撃してきやがる……はあ……」

「お、お前こそ……どんな肉体強度してやがる……ほとんどダメージ受けてねえじゃねえか……」

あれから、俺と勇人は殴り合いに発展したのだが……俺がどんなに殴ったり蹴ったりしても、勇人にダメージは0、逆に勇人の方も攻撃をするが、俺が完全に避けるため、ダメージ0……結果、勝負付かず。

「はあ……とりあえず、この件は後回しだ……」

「了解だ……とりあえず、アイツがここに来るのを待つぞ。」

「わかった……てめえ、マジで覚えてろよ……」

「けっ、てめえの攻撃が俺に効くとしても……?」

創也 vs 勇人の喧嘩、第2回戦以下略。

「っ、疲れた……」

そして約1時間にも及ぶ喧嘩が終わった。

「やつほー、って2人とも何してるの？」

2人揃って公園のすべり台でぶっ倒れていると、創也達の元へやってくる人物が1人……

「いや……こいつが原因で……あゝあゝ？」

喧嘩の影響で体力を使い果たすが、争う体力はまだまだ残っている2人である。

「まあまあ」

「てか……やけに来るのが遅いじゃねえか……幸^{こう}。」

「あはは……ちよつとロミオの台詞覚^{セリフ}えるのに時間かかつちやつて……」

勇人に幸^{こう}と呼ばれた男子生徒は、若干照れくさそうに頭を掻いた

……

「あははつ、2人共そんな事で争ってたの？」

現在、俺達の眼の前で大爆笑している奴は生咲幸^{きざきこう}……俺と勇人の親友だ。

「あははつーまあ、そんな事より何で僕は公園に呼ばれたの？いきなりLONEでそー君に呼び出されたけど。」

「ああ…単純にこのバカ企画の詳細を聞いておこうと思つてな…」

「へえ、ロミオとジュリエットってゆー君の発案だったんだ。」

「まあな…正直、非リア軍の女性参謀が裏切った時はどうなるかと思つたが、ジュリエット役が見つかつて良かったぜ！」

これ以上無いほど、満足げな笑みを浮かべる勇人。

「ねえ、そー君。」

「ん、なんだ？」

勇人がニヤニヤしているのをよそに、幸が俺の肩をたたいてくる。

「〃ロミオとジュリエット〃って何？」

「〃そこからかよっ!!」

こうして、俺と勇人は幸に「ロミオとジュリエット」とは何かという講座を夕方の公園で堂々と開くことになるのだった。

第3話 癒しの過剰摂取

「ははっ……今日もまた学校でパン生活か……まあ、パン好きだから良いんだけどさ……」

俺は学校に行く前に商店街に寄り、山吹ベーカリーに向かって歩みを進めていた。

「ライブの打ち合わせに演劇の練習……部活動演出の指示……やべえ、昨日沙綾にあんな事を言った手前、絶対に倒れない……」

そんな事を考えながらも山吹ベーカリーの店内に入る。

「あ、兄ちゃんだ！おはよう！」

「あ、お兄ちゃん、おはよう!!」

店内に入ると沙綾の弟と妹の純と紗奈が挨拶をしてくる。

「おーっす、ちびっ子1号2号、元気かー?」

「元気ー!」

実を言うと、文化祭関連の仕事で俺が学校に夜遅くまで残って作業をして、ここあに引っ掻かれる事が増え始めてからと言うもの、それに比例して山吹ベーカリーに来る回数も増えたのだ。それにより、純と紗奈の2人に顔を覚えられた。

ちなみに、運がいい日?に山吹ベーカリーに行くと、途中ではぐみに遭遇して食べきれない量のコロツケを渡される。まあ、美味いからいいんだけどさ……

「すっかり顔を覚えられてるね。」

しばらくするとカウンターの方から沙綾がやって来た。

「そりゃあ、毎日のようにここに来ればな……」

「あはは……そういえば、創也のクラスは何やるの？」

「……メイド&執事喫茶……」

「え？」

うん、まあ、驚く気持ちは分かるよ？だって発案したのあのバカだし。

「その……お疲れ様。」

「疲労で済めばいいけどな……」

……
そんな遠い目をしながら、俺はパンを買い、学校へ向かうのだった

「おはよー」

パンを抱えながら、教室に入る。

「創也は演劇でジュリエットをやるんだぞっ！だったらあいつに着せるのは執事服なんかじゃなくて、メイド服だろっ！異議のある奴はいるか!!」

『異議なしであります!!』

「……………」

教室に入った瞬間、勇人の叫び声と軍人のような返事をする男子達が視界に入った。

「美咲、説明求む。」

とりあえず、近くの席にいる美咲に尋ねる。

「なんか執事服の数が一着だけ少なくて、メイド服が1着多く届いたから男子の中で誰が女装するかって事で争ってる。」

「なるほど……………」

そして、今さっき解決したと…………

とりあえず一言。

「異議大アリだあああ
!!!!!!」

く昼休みく

「はあ……………」

昼休みとなり、ある程度の授業を終えた創也は机の上で完全に力尽きていた。

「メイド服…ジュリエット…実行委員…ライブ…」

ブツブツと呪いのように文化祭当日の役割を反芻する。

「はあ……疲れた……」

ここ数日、創也は家に帰るのが遅くなり、ここあに引っ掻かれる回数が増え、友希那先輩からのオシオキが増え、心身ともに疲労が溜まっていた。

「おーい、当日のメイド服と執事服を試着したい奴はいるかー？」

勇人の声が耳に入った気がするが、気のせいだろう…。

「はーいっ！あたし、着てみたいわ！」

こころの声が聞こえるが、気のせいだ…俺はこの貴重な睡眠時間を堪能するんだ……

「ソウヤー！メイド服を着てみたのだけれど、どうかしら？」

頭上からこころの声が聞こえ、いつもの事だがテンションが上がっているのか、創也が眠っている机を揺らしてくる。

「何だよこころ……俺今眠いん……だけ……ど……っ!?」

重い頭を上げ、こころを見る……そしてその瞬間、創也はフリーズした。

「こ、こころ…その服装は？」

創也の目の前には、黄色いネコミミを頭に装着して、ふりふりのメイド服を着こなすところがいたのだ。

「勇人に渡されたメイド服とネコミミを付けてみたの！……でも、ソウヤ、ちよつと疲れているの？」

そう言つて、こころは自分より低い位置にある創也の頭を撫でる。

（え、ちよつと待つて、なにこれ？ どういう状況？ え、ちよつと待つて、俺死んだの？ 死んじやつたの？ 高校生なのに過労死したのか？ え、じやあここは天国なのか？ なにこのネコミミメイドとかいう2次元にありそうなありきたりな設定。 え、ほんとに待つて、なにこの天使。癒しの究極系？ いや、そんな次元を軽く超越してね？ え、本当にどういふことなん？ え、天使とかじゃないよな？ だつて、天使なんて生ぬるい表現できねえだろこれ……女神だ……あ、そつか、これが今流行りの神様転生つてやつか？ ……今どきの女神つてメイド服にネコミミつけてんのか……）

こころに頭を撫でられている創也はどこか、魂ここにあらざうといった状態だつた。 あ、なんか白い創也の幽霊みたいな影が出てきてる。

「ふつ、どうだ俺がコーデイナートした弦巻さんは」

勇人が創也の近くに寄り、ニヤニヤしながら創也の反応を見ている。

「よくやつた。今日の昼は好きなもの奢つてやる。」

「よしっ！」

ネコミミメイドのこころからの癒しの過剰摂取により、尊死しかけ

た創也だが、なんとかあの世に行く前に現世に留まり、心身ともに完全回復した創也であった。なお、癒しの過剰摂取により、一部の記憶は吹っ飛んだ模様。

↳放課後↳

「はあ…にしても、なんか昼休みの記憶がかなり曖昧になってるような…」

何かこの世のものとは思えないほど、衝撃的な事と無性に勇人に昼飯を奢りたくなったのは覚えてるんだけどなあ…※癒しの過剰摂取の影響です。

「まあ、何故か分かんないけど身体が軽く感じるし、今の内にここに渡されたこれを配っておくか。」

俺の手元には、大量のハロハピのライブのポスターがある。一応、文化祭でやるから、ポスターを作りたいってところが言い出したから、花音先輩と美咲と俺の3人で作り上げたのだ。

「ヤーとと、これをさっさと配って………ってうわっ!？」

廊下の曲がり角が曲がった瞬間、誰かとぶつかり、持っていたチラシの何枚かが数枚だけ床に落ちる。

「あつ、ごめんっ!」

ぶつかったと思われる女子生徒は、短く謝罪をすると、そのままどこかへ走っていった…

「ん?あれって………紗綾か?」

聞き覚えのある声だったのと、覚えやすいポニーテールがめに一瞬だけ映ったことから今ぶつかった相手が、紗綾だと確信する。

「紗綾……………」

紗綾が走ってきた方向を見ると、香澄、有咲、りみなどの何人かの女子生徒が気まずそうな雰囲気での場所にいた。

「あ、なんだ創也か…」

顔をのぞかせていたことがバレたのか、有咲に見つかる。

「なんだってなんだよ……………それより、なんかあったのか？」

俺は、嫌な予感を感じつつも、先程の紗綾の様子や今の香澄たちの空気から、何があったのか、尋ねるのだった……………。

第4話 文化祭スタート!

「……………」

一度途絶えた意識が再び戻る。

「ちっ……………嫌な夢見た……………」

文化祭当日の朝から不機嫌な事この上ないが、そんな事は関係なく時間は過ぎる。嫌々ながらも俺は布団から起き上がり、学校へ向かう準備をする。

「母親…か……………」

数日前、B組の沙綾の友達であり、沙綾が元所属していたバンドメンバーの海野夏希から1年前に起きた出来事について聞いたのだ。

1年前、沙綾達が初ライブに挑もうとしたその日、沙綾の母親が倒れるという事件が起きた。それにより、沙綾達のバンドの初ライブは台無しとなった。夏希達は気にしていないらしいが、当の本人^{沙綾}からしたら責任を感じるだろう。それが、沙綾がバンドを組まない理由。

「はぁ……………どうしたもんかな……………」

そんな事を考えていたときだった。

バンツ!!

突然、玄関の扉が勢い良く開く音が聞こえ、それと同時にドタドタと俺がいるキッチンへと誰かが駆けてくる音が耳に届く。

「ソウヤ!今日は文化祭よっ!一緒に行きましょう!」

予想した通りと言うべきか、案の定俺の家に突入してきたのはころだった。

(ま、考えるのは後でいいか…)

完全に問題の先送りでしか無いのだが、こころが来た事もあり、考えることをやめる。

「ふみやあ〜」

あ、丁度ここあも起きてきた。

「あら、ここあじゃない。元気?」

「みやあ!」(訳:元気だよ!)

「そう、なら良かったわ!」

何故か、ここあと会話を始めるこころ……クツソどうでも良いけど「こころ」と「ここあ」って、響きが似てるよな。

「朝から元気だなあ…」

思わずそんな事が口から溢れる。

「だって今日は文化祭よ!とつつつても素敵なのがあるに違いないわっ!んくくっ!今すぐ行きましょう!ソウヤ!」

学校のイベントということもあってか、こころのテンションはいつもより高めだ。

「あはは…というか、楽しすぎて朝ご飯食べる前にここに来ただろ…」

だつて、今ちようど黒服さんからメールがきたし。『こころ様が卯月様の家を目指して朝ご飯を食べずに屋敷から抜け出したので、そちらで保護をお願いします。』ってメールが来たもん…

あれ？俺って黒服さんに連絡先教えただけ？

「あら、忘れていたわ！」

「なら、今から朝ご飯を作るところだから食つてくか？」

「あ、それなら、あたしも手伝いたいわ！」

「お、そうか？なら頼む。」

こうして、俺とこころで朝ご飯を作ることになったのだが、こころが炊飯器の使い方を知らなかったり、レンジの使い方を間違えたりなど、いつもより進行速度が遅くなったのは、言うまでもない。

（約1時間後）

「こころ、これを被つて後ろに乗ってくれ。」

そう言つて、俺はこころにヘルメットを手渡す。

「わかったわ！」

勢い良く返事をして、こころはヘルメットを被り、俺の背中に抱き

つくようにバイクの後ろに乗ってきた。

「……………なあ、こころろ？別に抱きつく必要はないんだぞ？腰に手を回す程度で良いんだけど……………」

「そうなの？でもこっちの方が暖かいから私はこのままでもいいわ！」

「……………変なところ触んなよ……………」

こころろがマジでゼロ距離で密着するから、俺の背中に大きなマシユマロのような柔らかい2つの感触がダイレクトに来てるんだよなあ……………」

(事故だけは起こさないようにしよう……………)

俺はそんな決意を抱きつつ、バイクのエンジンを掛け、文化祭へと向かうのだった……………」

「おはよー」

「おはよーっ!!」

俺とこころろが教室へと入る。

「その机の配置はそこっ！男子班はそのこの資材を運んでおけっ！女子班は執事服とメイド服の最終調整とアイロン頼むっ！分かったらさっさと行動！」

『おはよーっ!!』

教室に入ると、勇人が教卓の上に乗って現在クラスにいる生徒たち全体に指示を出していた。

「え……何やってんのアイツ？」

思わずそんな声が漏れる。

「それと竹田！お前昨日、料理の材料をつまみ食いしただろっ！A組の幸に土下座で頼み込んでいくつかのパンを貰ってこいっ！多分その内創也が来るから、あいつA組の山吹さんと仲が良いから創也が到着したら一緒に連れてけ！成功率が上がる!!」

普段のふざけた様子の勇人からはかけらも想像できない勇人がそこにはいた。

「あはは……信じられないかもしれないけど、あれ、矢坂さんだよ……」

美咲が俺達が抱いているであろう疑問に答えてくれる。

「それと、誰か教室で流すBGMのCDが届いたから、放送室まで行ってこいっ！たぶん教頭がいるから俺の鞆に入ってるエ○本持ってけ！それで多分いろいろうちのクラスにサービス発生するぞっ！」

「ここはあえて、言わせてもらおう。

「誰だアイツ。」

いやね？ほんと勇人の皮を被ったニセモノだと思いきやそうになっちゃうさ？そう言えるほど勇人の普段の態度からは想像できない仕事ぶりというか……

「おう、創也&弦卷さん、おはよう。悪いけど創也は竹田の後始末に付き合ってくれ。それと、弦卷さんは奥沢さんを護衛としてメイド服で今の内に客の呼び込みを頼む。最終手段でネコミミを使っても構わない。」

目の前の手に持った資料から目を話さず、まるで俺とこころの気配を感じ取ったかのように挨拶をしつつ、流れるように指示を飛ばしてくる勇人……ここまで来れば言うしかないだろう……

「勇人（の頭）が壊れたああああ!!!」

ぶっ飛んだはずの勇人の頭のネジが戻ってきたのか、それとも勇人の頭のネジがぶっ飛んで正常になったのか……俺の悲鳴は教室中に響くのだが、みんな今の勇人に気圧されているのか、反応してくれるものは一人も居なかった……

こうして、波乱万丈の文化祭が始まった。

第5話 走れ！創那ちゃん!!!

「紗綾の奴来てないのか!？」

「うん……なんかお母さんが倒れちゃったらしくて……」

幸が残念そうに答える。

「はあ…マジかよ…」

俺は現在同じクラスの竹田と言う奴が昨日、クラスの出し物の喫茶店の材料をつまみ食いしたらしく、その後始末でA組に来ていた。

「あ、パンのことなら安心して！紗綾ちゃんのお父さんがいろんなトラブルを予想して予定よりも多くパンの材料を届けてくれたから、少しくらいなら上げられるよっ！」

いくつかのパンを幸が用意してくれる。

「悪いな……ちなみに紗綾は今どこに?」

「えーと…たしかこの辺りの…えつと…」

「○○○総合病院ですよ！コウさん！」

「あ、ほんと？ありがとう！イヴちゃん！」

幸は白い髪の女子…えーと、若宮イヴだっけ？Pastel*Paletteの。まあ、その若宮イヴと話し込んでいた。

あんまりテレビ見ないから分からないんだよなあ…。

「まあ、教えてくれてありがとな。」

「……行くの?」

「まさか。行けたら行ってやろうかな程度だよ。」

「何?好きなの?紗綾ちゃんのこと。」

幸がニヤニヤしながら勇人みたいな質問をしてくる。

「それ以上言ったらその口に勇人の暗黒物質ブチ込むぞ。」

「ごめん、それだけは冗談抜きで止めて。」

引き攣った顔をする幸。実は以前、うちのクラスの料理の試食で、俺と幸が勇人の料理を休日に試食をしたのだが……

〜1週間前〜

『へえ、これがゆーくんの作った料理?』

『おう!俺の自信作だ!』

『こ、これが…料理?嘘だろ?だって何だよこの黒い物体…なんか変なオーラが出てるんだけど…なんかヤバイ異臭も出てるんだけど?!?』

『いただきます!』

俺が勇人が作った謎の物質に悲鳴を上げていても、そんな事はお構

いなしに、幸は実食をする……

バキツ！ゴリツ！グチャツ！パリツ！ゴキツ！

幸が勇人の作ったという物質を食べると、とても食べ物を食べているとは思えないような咀嚼音が鳴り響く。

『……………おえっ』

勇人の作った料理を飲み込んだかと思うと、幸はそのまま口から物質を吐き出し、気を失って倒れる。

『こ、幸………!!!』

その後、幸は偶然近場に居合わせた弦巻家が用意してくれた救急車によって病院に運ばれた。

『とりあえず、お前は料理禁止な。』

『あ、あはは……おつかしいなあ……』

〜現在〜

「結局、あの後お前普通に処方された薬じや治療が出来なくて、弦巻家が処方した特殊な薬でようやく意識が戻ったんだよな……」

「うう……お腹が痛く合ってきた……」

「大丈夫ですか、コウさん？」

「うう……アレはこの世の食べ物じゃない……魔王暗殺用の秘密兵器だよ

…」

お腹を擦り始めた幸をイヴが介抱する。

「はあ…別に嫌いって訳でもないけど、何ていうか…あんまり他人事とは思えないってだけ…だと思う…」

今のところ、俺が紗綾に対して思っているのはそんなところだと思う。

そんな会話を幸としていた時だった。

「ちつ、幸の奴までリア充の仲間入りか？こうなったら文化祭の全校発表で非リア軍団の底力を見せるしか…」

「いきなり後ろに立って呪詛を撒き散らしながら物騒なこと言ってるじゃねえよ。」

気がつくと、勇人のやつが俺の後ろに立って物騒なことを呟いていた。

「あれ？ゆー君何しに来たの？」

「いや、うちのクラスの準備が終わったから他のクラスの出し物とりア充を視察刺殺しに来た。」

「おい言葉。犯罪に走るんじゃないやねえよ。」

「まあ良い…創也、幸、『ロミオとジュリエット』の衣装が届いたのと、今井先輩が羽丘からわざわざ来てくれたから、さっさと体育館に行くぞ。」

「はーい！」

「コウさん！頑張ってくださいね！」

「うん！僕も頑張るから、イヴちゃんも頑張つてね！」

イヴが笑顔で幸を教室から送り出し、幸もそれに答えるように笑顔で手を振り、教室を後にする。

「なあ幸、お前若宮さんの事好きなの？」

「うん！僕はイヴちゃんの事好きだよっ！」

何一つやましい感情などなさそうに幸は純粋に答える。

「幸みたいな純粋なやつの方がモテるんだよ。」

「うぐっ…」

幸の純粋な心に思うところがあつたのか、狼狽える勇人を連れていきながら俺達は会場である体育館へ向かうのだった。

『それでは只今より、花咲川学園文化祭を開催いたしますっ！』

「あ、放送が鳴ってる……って事は客の入場も始まったか……」

それと同時に文化祭目的で来る客が、体育館に向かう途中で見え、改めて文化祭が始まったのだと理解するのだった……

〈試着室〉

「よしっ！我ながら今の創也は力作だよ☆」

「その…リサ先輩…：あんまりその事について言わないで貰えるとありがたいと言うか…：ってモカ、なんでお前はスマホを構えて連写してんだよ!!」

「いやあ、今のそーく…：そーちゃんがあんまりにも可愛くてつい〜」

「何で言い直すんだよっ!!!」

リサ先輩は満足げな笑みを浮かべ、モカはニヤニヤしながらスマホを構えている。

「今井せんぱーい、創也のジュリエット化は終わりました…：…：そこのお嬢さん、よろしければ僕と今から文化祭デートにぐべえ!?!?って、この蹴りの威力…：まさかっ!?!」

突然、勇人が試着室に入ってきたかと思えば、いきなり俺に対してナンパをしてきたので、蹴り飛ばして追い返す。

「てめえ、ナンパする相手を間違えんなよ?あゝ?全身ズタズタにされてえのか?東京湾どころか深海に沈めるぞ?あゝあゝ?」

「言ってることが完全にヤのつく怖い人…：…：って、その声やっぱり創也か!?!どうりで蹴りの威力に覚えがあると思っただよ…：」

さり気なく、自分を蹴ってきた相手の正体を威力で見破るこいつは、一体どれだけナンパを失敗したのだろう。

「はあ…俺だよ。文句あるか？」

「いや…ぶっちゃけ見た目的には女の子にしか見えないんだけど…」

「創也はもともと顔立ちが女の子寄りだったから、アタシもアレンジしやすかったよ☆」

「いやあ、これじゃあどっちが女の子かわかりませんなあ」

そう…俺は現在、文化祭の公演の『ロミオとジュリエット』のジュリエットの衣装を着るため、女装をしているのだ。

「おーい、ゆう君！台本がどっかいつちやったから見せて欲しいんだけど…え!?そー君なの!?女の子みたい!」

「幸は一発で分かるんだな。」

「うん！勘だけど!」

ちなみに、今の俺は、髪を普段の黒髪から金髪に染め、同じ色のカツラ?ウィッグ?だかをリサ先輩に付けてもらい、そのまま化粧などをしてもらった状態だ。

一応、動きやすいように制服から私服に着替えてはいるけれど。

「あ、そうだ…創也、うちのクラスがなんか揉め事発生したって連絡入ったからちよつと行って来て。演劇までは時間がまだあるし、最終調整が終わったら俺も行くから。」

「別に良いけど…揉め事って何？」

「なんかヤンキーが殴り込み来店して来たらしい。」

「一大事じゃねえかこの野郎!!!」

俺は慌てて女装をした状態で行為室の扉を開ける。

「行け！卯月創也！否、卯月創^{そうな}那ちゃん！」

勇人が調子に乗って煽ってくる。とりあえず、一言。

「勝手に名前つけんじゃねえ！そして勇人！絶対援軍に来いよこの野郎!!!」

そう言つて、俺は文化祭実行委員として走るのだった。

そして、俺はまだ知らない。この後、色々な事件が重なり続け、文化祭の殆どは全力疾走する事になるのだが……この時の俺は、まだ知る由もなかった。

くおまけく

モカ「ところでー、そーちゃんの名前の由来はなにー？」

勇人「適当」

リサ「あはは……適当なんだ……」

イヴ「あ、コウさん！演劇の準備はどうですか？」

幸「あ、イヴちゃん！うん！バッチリだよっ！」

イヴ「良かったです！」

勇人「ちっ」

リサ「舌打ちしないでさっさと出て行くよー」

勇人「離してください今井先輩！俺は……これ以上カップルがこの世に生まれるのを見ていられないんだアアアア!!!」

ちなみにこの後、文化祭ムードによって出来上がるカップル達に、
団長（勇者）の率いる非リア軍団が文化祭の公演でとんでもない事を
やらかすのだが、それはまだ先の話である。

第6話 究極人体破壊暗黒物質（アルティメットダークマター）

1年C組教室前の廊下は不穏な空気に包まれていた。

「あ？学生の店員が客に楯突いて言い訳？」

「ここは文化祭の場所ですし、こっちにだって客を選ぶ権利くらいあるんですけど？」

店の前では、明らかに柄の悪い男5人と、メイド服の美咲が対峙していた。流石に体格的にも不安があるのか、美咲の額には薄らと汗が滲んでいる。

「こっちはわざわざ金払ってこんな遠い教室まで来てやってんだぞ？偉そうにしてんじゃねえよ。」

「営業妨害するようなお客に出すような物がここにあるわけないでしょっ。」

「うるせえんだよっ！」

「きやつ!？」

男の1人が一喝すると、近くにあった看板を蹴り飛ばす。

「おい、作戦変更だ。内装ぶっ壊せ。」

看板を蹴り飛ばした男が物騒な事を言い始める。

「へへっ、1番乗りっつ！」

そう言って、男の1人が近くにあつた物を壊そうとした瞬間だった。

「必殺!! 勇人の究極^{アルティメット}暗黒物質^{ダークマター}アタック!!!!」

次の瞬間、明らかにヤバそうなオーラを放つ黒い物体を持った少女が、男の前に突然割り込み、右手に持っていた小さな黒い物体を物を壊そうとした男の口の中に無理やり張り手をするようにねじ込んだ。

「痛っ!! 何すんだこの…ア…マ…おえっ……」

反射的に黒い物体を飲み込んだ瞬間、最初は怒りに任せて目の前の少女を殴り飛ばそうとするが、突然、顔が青を通り越して白くなるどころか緑色になり、目の焦点がすぐに合わなくなり、さらにどんどん汗がダラダラ出て、ガクガクと震え始め、次の瞬間、白目を向いて気絶した。

男が黒い物質を飲み込んでから気絶するまでの所要時間。

約4秒。

「うげっ!! 暗黒物質^{ダークマター}入れてたビニール袋が溶け始めてる……あの変態…防御力だけじゃなくて料理の破壊力もチートかよ……軍手持ってきてなかったらどうなっただ……っ？」

そして、少女の姿からは想像できない程、聞き慣れた声が響く。

「もしかして……創也なのっ!？」

「もしかして……創也なのっ!？」

後ろを向くと、美咲が驚いた顔をしてこちらをみている。

「もしかしてってなんだよ。俺以外誰が……あ」

改めて自分の服装を思い出す。一応、自宅から持ってきた服を着ているとはいえ、あの女子力の塊を通り越して女子力の根源そのものとさえ言えるリサ先輩による女装メイクをしたままなのだ……。

「がっ……うっ……おえっ……かふっ……」

暗黒物質ダークマターを食ったヤンキーは、床に倒れたまま痙攣を起こしている……勇人にだけは料理をさせないようにしよう。

「て、テメエー!」

そんな様子を見たヤンキーの仲間の1人が、俺に殴りかかってくる。

「おっと」

放たれたパンチを俺はギリギリで避ける。

「これ以上は営業妨害で本当に訴えますよ？俺の仲間が来る前に帰る方が賢明かと思いますが？」

「舐めんなクソがつ!!!」

仲間をやられた事が相当頭にきているのか、話を聞く様子もなく複数人で殴りかかって来る……が

「クソつ！なんで当たんねえんだよ!!!」

「避けんじやねえ!!!」

「いや避けるって。」

まだまだ対応できる速度の為、ギリギリで避け続ける。今回の勝利条件はこれ以上被害を広めず、こいつらを追い出す事。多分そろそろ………あ、来た。

『こちらー！その少女（笑）を虐め“ビーツ”る柄の悪い男4に“ビーツ”今すぐ母国に帰“ビーツ”……おつかさんが泣いて“ビーツ”ノイズが多いんだよこの野郎!!!』

しばらく防戦していると、メガホンを持って勇人が現れる。手には大型のメガホンを持ち、ヤンキー達の注意を引くのだが、肝心なところでメガホンにノイズが発生し、かなりカッコ悪い登場となった。

あ、持ってた大型メガホン床に叩きつけやがった。

「メガホンマジ使えねえ……とりあえずそのヤンキー4人！ポリス

メンが来る前に自分の家にゴートウーハウスしな！証拠は上がってんだ！」

そう言うと、勇人の横で幸がカメラを持って立っていた。

「ねえゆー君、このボタン押せばいいの？」

「あ、バカ！それ録画停止ボタンだから押すな！録画はしてるからそのまま構えてろ！」

「うん！分かった！」

若干不安だが……幸がカメラを構えている以上、訴えられて負けるのは目に見えているだろう。

「デメエ！そいつを寄越しやがれ!!!」

ヤンキーの1人が幸に殴りかかる。だが、忘れてはならない。一人称が僕で、体格も俺らと大差ない幸だから忘れがちなのだが、筋力だけはヘビーボクサー級はあるのだ。無闇に突撃すれば……

「えいつ！」

「ぐがっ!？」

当然こうなる。幸が持つてるカメラを奪い取ろうとした男が、幸がカメラを握ってない方の左手で殴られる前に男の腹を思いつきり殴ったのだ。

次の瞬間、殴られた男は3メートル近く斜め上に吹っ飛び、床に叩きつけられ気絶した。

あれ？あいつの利き手って確か右手……うん、考えないようにしよ

う。

「あくあ、勇人に正面から突撃すれば誰だってそうなるっての……ま、いいや。そこの残った男3人。」

「「っ!？」」

今の幸の攻撃を見てビビったのか、勇人の発言に警戒する残りのヤンキー。

「そこの倒れてるお仲間2人を連れて帰れ。さもないとウチの幸がお前ら全員ぶっ飛ばすってよ。」

お前じゃねえのかよ

「ぶっ飛ばすのはちよつと酷いんじゃないの?」

「そういうことじゃなくて……とりあえずお前はおとなしくしてろ。」

「分かった!」

若干怪しいが、まあ問題はないだろう。だって、ヤンキーが残りの仲間担いで帰ってったし。

「ふい……援軍助かった。ありがとな、勇人、幸。」

「いや何気にすんなって。クラスのピンチなら援軍に来ないわけにも行かないだろ。」

「僕はゆー君にカメラもたされてこっち来いって言われたから来たけど、助けになったなら良かったよ!」

笑顔で応える2人。

「ね、ねえ…本当に創也なの？」

しばらくすると、美咲がこっちに寄って来て俺に訪ねてくる。

「まあ…こんな見た目だけど…一応俺だ。」

そうだった…勢い余って女装したまま来ちゃったんだ…

「嘘…女の子にしか見えない…」

「ちよっ…触んнатて…」

ペタペタと確認するように俺の顔や身体を確認するように触ってくる。

「本当に女の子みたい…」

「まあ、リサ先輩に女の子っぽくしてくれって頼む他なかったし…」

「これさ、見分けつく人いるの？」

「いるだろ。まあ、野生^幸児^幸だけど。」

美咲とそんな会話をしているときだった。

「ソウヤー!!!」

「わっふ!?」

背後から、こころが突撃してきた。

「あら？いつものソウヤと違ってなんだか女の子みたいね？とっても可愛いわ！」

即座に、正体が俺だと見破られる。

「ここにも居たよ。俺が誰か分かる人。」

「まあ……こころだから……」

先程のヤンキー騒動から一変して、クラス全体から驚きの声がかかる。

「ええ!?あれ本当に卯月くんなの!?!」

「マジで女にしか見えねえ……」

「あ、やばい……私あの娘タイプかも……」

とまあ、こんな感じの反応だ……ってオイ最後の台詞言った女子誰だ!?!

「ぶふっ……さっすが創也……じゃなくて創那ちゃん……早速クラスのアイドルになってるし……ぶふっ……」

おい勇人。てめえ、何笑い堪えてやがる。

「創那?」

「いや、こいつが勝手に命名してるだけだから。」

それに、今日以降女装する機会なんて訪れる訳ないんだから、命名するだけ無駄だろ（フラグ）

「ま、いいや：創那、俺は後始末してくるからこの後のクラス頼む。調べたいこともあるし。」

「わかった。頼んだぞ。」

「あ、じゃあ僕はA組のお手伝いしてくるね！」

こうして、ヤンキー襲撃を3人の手で無事に退けるのだった。

「お、おかえりなさいませ……ご主人さま……」

「笑顔が硬い!!もつと自然に笑って！」

俺は現在、クラスのメイド長（委員長）に接客の指導を受けていた。俺自身、実行委員の仕事や演劇の練習などでクラスの出し物の練習を疎かにしてしまった為、接客業はからつきしなのだ。

一応、提供する料理のレシピを考案するという形で貢献をしてメイド服は回避した：はずなのだが：俺は現在メイド服を来て委員長から接客の指導を受けることになっていた。

というか俺、裏方志望だったのになんでこんな事に……

「うくん……やっぱり声かな？いくら見た目が女の子でもなあ……」

「声なら………んー……こんな感じでもいいか？（女声）」

「あ、そっか。卯月君…じゃなくて創那ちゃんは声帯模写が得意だったっけ。」

「おい、なんでわざわざ名前を言い換えた。」

「まあ、後は笑顔だよね…」

「笑顔…」

うくん…笑顔……こっちに来てから笑う機会は増えたけど、やっぱり自分から自然に笑うっていうのはなあ…

「ソウヤー!」

そんな風に悩んでいると、後ろから声がかかる。

「ん?どうしたところ?」

「ホットケーキを作りたいのだけど、この道具ってどう使えば良いのかしら?」

「あ、ホットプレートか。よこにあるボタンを調節して…」

ところがホットプレートの使い方をよく理解してないようだったので、こころに教えている最中だった。

「それだ!!」

「な、なにっ!?!」

委員長が突然大きな声を出す。

「創那ちゃん！今すぐこころちゃんと文化祭デートに行つてきなさい！！」

「はい？」

文化祭デートお？何言つてんだこの委員長。

「文化祭デート？」

ほらあ、こころも訳が分からず聞き返してるじゃん！

「こころちゃんと一緒にいる創那ちゃんは自然な表情を保っているわ！なら2人でデートに行つて表情を解してきなさいっ！これは委員長命令ですっ！」

「なんだかとっても面白そうね！ソウヤ！今すぐ行きましよう！」

次の瞬間、こころは俺の手を掴み教室の出口へと駆け出す。

「えっ!?ちよつと待つてホットケーキの生地入れたばかりだから今行つたら焦げるんだけどおおおおお!!?」

こうして、俺はこころに無理やり連れて行かれる形で文化祭デートに行くことになったのだった。

くおまけく

創也「なあ、勇人。お前が作った暗黒物質ダークマターに関してだけど、あれもともと何作ろうとしたの？」

勇人「え？何つて……おにぎりだけど？」

創也「……………そうか」

C組『……………』

勇人「あれ!?みんな黙ってどうしたの!？」

こいつだけは何があっても厨房に立たせてはならないと、固く誓うことで、クラスの団結力が高まるのであった。

第7話 女の子同士のデートはもはや百合

「ソウナ！あっちに行ってみましょ！」

「ちよつ、こころ落ち着けて！」

楽しみすぎて待ちきれないっ！とでも言わんばかりにこころはある少女の手を引つ張り、廊下を駆け抜ける。

「あっちにお化け屋敷があるわっ！面白そうだから行ってみましょっ！」

「絶対嫌だっ!!」

瞳に涙を浮かべ、紅くなった頬で潤む少女の創那……もとい創也。その様子だけ見れば一見、可愛らしい女子が涙を浮かべ、こころにまるで「捨てないでっ！」とでも懇願しているかのように見えるだろう。まるでご主人様とその飼い犬である。

実際、そんな一種の百合のような光景に少なからず廊下にいる生徒たちが被害を受けている。一部の男子達は顔をハンカチで抑え、一部の女子達はスマホを構え、写真を連射している。

だが騙されてはならない。この涙目でこころに懇願している少女の正体は男……じゃなくて男の娘である。

「お、お願いこころ……お化け屋敷だけは……っ！」

「でも、お化けさんと触れ合えるなんて、とっても凄いことだと思うのっ！」

「違う！趣旨が違う！動物園の動物ふれあいコーナーとは訳が違うんだよ!」

そんな事を言いながらもこころは創那の手を引つ張るこころ。創那もそれに全力で抵抗するが悲しきかな、創那の腕力ではこころには敵わない。

なんやかんやで強制的にお化け屋敷へと連行される創那であった。

教室の装飾は不気味なほど完成度が高く、暗く淀んだ墓地特有の不気味さを再現していた。

「た、頼むこころ…今なら引き返せる…べ、別のクラスに行こう…」

そんな中、創那は生まれたての子鹿のような状態でこころの腕にしがみついていた。

「っ?!?!?、いいいい、今、俺の顔に何かにゆるにゆるした物がががががっ?!?!?!」

創那が悲鳴を上げてこころに抱きつく。最早完全な百合である。

「まあ…こんな所にこんなにやくがあるわ!みんな食べないのかしら?」

ちなみに、創那の顔に触れた物は、天井から吊るされたこんにやくである。

そして、そんな2人の様子を観察する人影が2つ…

「こころちゃんと一緒にいるあの子って…誰?花咲川の女子の制服を聞いているけど…あんな女の子いたかしら?」

涙をポロポロと零しながら怯えるその姿は、例え人にその気がなくても嗜虐心を高ぶらせるには十分。よってお化け役の人たちもノリノリで創那を怖がらせる。その事もあってか、これ以上どうすれば良いのか、2人は分からなくなっていた。

「えっと……とりあえずやるだけやってみる？」

「そうね……」

そして、2人は準備を始める。

2人が丁度準備を完了したところで、創那とこのころのペアが教室の出口に差し掛かる。

「ソウナ！もうすぐ出口よ！頑張りましょう！」

「うっぐ…ひっぐ…ほ、ほんとに……出口？う、嘘じゃないよね…？」

既にボロボロだが、こころにしがみつく形でなんとか出口に向かって歩いている2人が眼に入る。

「それじゃあちーちゃん、いくよっ！」

「ええ！」

そして、出口まで歩く2人に颯樹と千聖の2人がついに攻撃する。

「ひっ!?!ひ、人が倒れてる!?!」

2人の目の前には全身血だらけ（血糊）で床に倒れる男子生徒（颯

樹)がいる。倒れている生徒の背中には、包丁(偽物)が深々と突き刺さっている。

「な、なんで人が……っ!？」

創那がより怯えたタイミングで、男子生徒(颯樹)の背後から血だらけの白い服の包丁(偽物)を持った女性(千聖)が現れる。そして、手に持った包丁を創那とこのころに向け、言葉を絞り出す。

「次は……アナタの番よ……」

女性(千聖)から血濡れの包丁を向けられた創那。積み重ねられた演技力でありつたけの殺意を創那に向ける。当然精神的に耐えきれずもなく……

「……………かひゅ」

「あ、あら?……創也君?」

短い奇声を残して創那は白目をむいてその場に崩れ落ちたまま動かなくなった。

「千聖じゃない!こんなところで何をしているの?あたしも混ぜて欲しいわ!」

ちなみに、その隣でこのころは楽しそうに包丁を持った女性(千聖)に近づく。

「このころちゃん……せめて彼のようにとは言わないけど、もう少し反応してほしかったわ……」

その場には男2人の死体とはしゃぐ女子2人の声が響くのだった。

(てゆうか、僕はいつまで倒れてれば良いの……?)

「あれ……ここは……?」

目を覚ますと、まず耳に届いたのは周囲の騒ぐ声、そして後頭部にある妙に柔らかい感触。

「ソウヤ! やつと起きたのね!」

「……なにしてるの、こころ?」

閉じていた目を開けると視界に太陽の光よりも先に見覚えのある顔が映る。

「膝枕よ。千聖が好きの人にはこうすると良いって言ってたの!」

「……お前、俺のこと好きなの?」

「? あたし、なにか変なこと言ったかしら?」

何でも無いことのようにこころが聞き返す。

「……いや、何でも無い。」

どうせこころのことだから、友人としての“ライク”の感情だろうし、変に動揺するほうが馬鹿らしいか。

「それで、俺はどれくらい寝てた？」

「30分よ！ソウヤが寝てる間にご飯を持ってきたから、一緒に食べましょう！」

よく見ると俺達が今いる場所は中庭の真ん中の木陰の辺り。他の生徒もこの中庭で間食をしており、こころの手にはどこから取り出したのか、クレープやフランクフルトなどの売店で売っていた食べ物握られていた。

「……クラスに戻るまで後1時間……そうだな、せっかくだから食べるか。」

俺はこころからクレープを受け取り、口に含む。

「甘い……フルーツクレープか。」

「ええ！とつても美味しそうだから持ってきたの！」

生クリームの中に様々な種類のフルーツが口の中で程よく広がり、美味しい。

「やっぱりとつても美味しいわ！」

ふと、となりのこころを見ると俺よりも速いペースでクレープを食べている。というかよく見ると片方の頬にクリームが付いてるし。

「こころ、ほっぺにクリームが付いてるぞ。」

「そうなの？……はい、どうぞー！」

俺が頬にクリームが付いていることを指摘すると、こころは満面の笑みで頬を突き出してくる。

「……………なにしてんの？」

「うくん……………ほっぺにクリームが付いた時はこうやって相手に食べさせると良いって千聖が言ってたのよ！」

「……………こころ、悪いことは言わない、千聖先輩の話をまともに聞かないほうが良い。」

「？」

こいつ……………このままだと勇人とかそこら辺の男にもこういう事するんじゃない……………千聖先輩一体何してるんですか……………

（おかしいわね？ソウヤにこれをやれば笑顔になるって聞いたのだけど……………やっぱり全然笑顔にならないわ。）

ちなみに、こころは千聖先輩からこれは創也以外には絶対にやるなと注意しているらしいので、俺の心配は憂鬱に終わるのだが、この時の俺はまだ知る由もない。

「まあ、時間はまだ割とあるんだし、少しは落ち着いて食ったらどうだ？」

俺はポケットからハンカチを取り出し、頬に付いたクリームを取る。

「むう……………」

そして、何故か頬を膨らませる（ころ）。

「……これやるから機嫌直せって。」

俺は手に持ったクレープの口を付けていない部分をこころの口元に持っていく。

「ありがとうソウヤ！」

そしてこころはみるみる機嫌が良くなり、ぱくりと俺のクレープを食べた。

「とつても美味しいわ！」

「そうか。」

すぐにいつもの笑顔になり、こころと何気ない会話を続ける。

（にしても、文化祭か……）

ふと、中学時代の文化祭が脳裏をよぎる。

（……だめだ、売店で飯買って部活の手伝いしてから体育館倉庫で寝てた記憶しかねえ……）

はたから見ればどんな文化祭だよって思われるよな……

まあ、こんな風にあの人と過ごせたんだったら、少しは楽しいって思えた文化祭になったのかな？

「ソウヤ、おでこにシワが寄ってるわよ？」

「え？」

物思いにふけっていると、突然こころが声を掛ける。

「ソウヤってばたまーに悲しそうな顔で何かを考える時があるわ。そういう時はおでこにシワが寄ってるからすぐに分かるのよ！」

「バレてたか。」

「ソウヤー！今日は文化祭なのよ！楽しまなきや損だわ！」

「……だな。確かに、楽しまなきや損だよな。まだ時間はあるし、せつかくだからもうちょっと店を回るか？」

「そうね！あたし、もう一回お化け屋敷に行きたいわ！」

「それだけは駄目だっ!!」

中庭から移動するために、その場から移動を始めようとしたその時だった。

「あら？あれは何かしら？」

「ん？どうしたこころ？」

ふと、こころが止まり、指を刺した方向を見ると見覚えのある怪しい複数人の集団が中庭の隅に集まっていることに気がつく。

「あれは……勇人かしら？」

こころの言うとおり、その集団の中心には見覚えのある人物……勇人がいるのだ。

「よいか者共っ！作戦の決行は体育館の発表の時!!本作戦はいかに迅速に対象を排除するかが重要だ！」

『はいっ!!』

「中でも警戒すべきなのは風紀委員会の氷川先輩だ！もしも氷川先輩に遭遇したら命はないと思え!!」

『はいっ!!』

「我々の調べでは今回の排除対象のリア充は28組！確実に息の根を止めろっ！怨念の狼煙を上げるときだっ!!」

『おおおおお!!!』

……なんか勇人が学生服から着替えて軍服っぽいものを来てるのは別に良い。なぜかその勇人に追隨する連中も同じ様な軍服を着て軍人みたいな号令をしているのも100歩譲ってよしとしよう。

(あのバカ共に企んでるの!?)

それが俺の率直な気持ちだった。

体育館公演で軍人の演習なんてあったか!?紗夜先輩に命を狙われるような作戦!?正気か!?

「なんだか楽しそうだわ！ソウヤ！あたし達も行きましょう！」

「ダメ。と言うか見ちゃダメ、聞いちゃダメ、近づいちゃダメ。」

「?…ソウヤ、これじゃ何も見えないわ!」

俺はこころの目を両手で塞ぎ、出来る限り勇人達から離れ始める。
あんなのに関わってたら絶対に碌な目に合わない…：関わらない
でおこう…

こうして、俺達は不安を残しつつもその場を後にするのだった。

ちなみに、数時間後の文化祭公演の時、案の定、勇人率いるこの集
団がとんでもない事をやらかすのだが、それはまた次回。